
バカと恋愛と召喚獣

〇〇〇・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと恋愛と召喚獣

【Nコード】

N1719U

【作者名】

000・JANIKELU

【あらすじ】

いよいよバカ恋はサードステージへ！！

もう夫婦のような吉井明久と奏が更に甘さを増し送る学園物語！さまざまなイベントをクリアーして待っているものは天国か地獄か！

第一問！吉井奏の胸のカップを答えなさい

吉井明久の回答

ハナチガドマリバゼン！

吉井奏のコメント

明久！何を妄想したんですか！？／／

甘々なバカテスにご期待あれ？

プロローグ（前書き）

初めまして。バカテス小説第二弾です。もう一つの小説と上手く更
新して行くように頑張ります！

プロローグ

文月学園 ― 科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校

私がこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れました
学園にまで続く坂道の両脇には新入生を迎える為の美しい桜が咲き誇っています

「わあ…凄く綺麗です」

私、吉井奏はあまりの美しさに登校時間を奪われてしまいました

「吉井遅刻だぞ」

「あ、西村先生おはようございます」

私は遅刻してしまい去年からお世話になっている西村先生に注意されちゃいました

「おはよう。何か言うことは無いか？」

「あつ遅刻してしまい申し訳ありません」

「よし。ちゃんと反省してるな。ほらクラス分けの結果だ」

「ありがとうございます」

「吉井、残念だったな…ちゃんとテストを受けていればAクラスだったんだがな」

「仕方ないです。体調管理を怠った自分が悪いですから」

「そうか」

「ですが…次はちゃんと受けていい結果を出せるように頑張ります」

「そうか！先生も応援してるからな。頑張れよ」

「ありがとうございます！！」

私は西村先生の優しさを改めて心に刻み校舎へ向かって行きました
吉井 奏

『Fクラス』

そういえばあの人は…いえ必ずFクラスですねっ

数10分前

規則的なリズムで走りながら僕は文月学園を目指す

「始まり早々から遅刻しちゃったよ」

「遅いぞ吉井！」

「げっ鉄人」

僕の目の前には最強の敵、鉄人こと西村先生が立ちふさがる

「西村先生だ！全くお前は…ほらクラス分けの結果だ」

「あ…どーもです」

「吉井…俺は一年からお前を見てきてひよっとするとこいつは馬鹿なんかじゃないのかと疑いを抱いていたよ」

「それは大いなる間違いですね。そんなこと言っているとそのうち

『節穴』と言っ徒名がつかますよ？」

僕が馬鹿？そんなことあるわけないじゃないか

「ああ…先生が間違っていたよ。すまなかつたな」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

くっ…なかなか出せない。こうなったら上から破くか

「お前は疑いの余地もない真正正銘の馬鹿だ！」

取り出し広げた紙には

やっぱり…か

「けどな吉井…」

あれ？鉄人の声が急に優しくなった

「お前がやったことは男として胸を張っていいことだと先生は思ってるぞ」

「西村先生…」

僕は西村先生に珍しく褒められた

西村先生でこんなに優しくかつたっけ？

僕は明るい気分になりながら校舎へ入って行った

吉井 明久
『Fクラス』

「でもやっぱり悔しいなあ」

僕は結果を見ながら廊下を歩いていた
Aクラスの教室は凄かったなあ

「うわあ…」

ここはホテルですか？」

と言っちやうくらいに凄い教室だったよ

そう思いながら廊下を渡って行くと見覚えのある人が歩いていた

「吉井さんっ！」

僕は僕と同じ名字である彼女に声をかける

頭には相変わらずリボンのカチューシャを身に付けていてとても可愛
い

「あつ明久君！」

吉井さんは振り向くと同時に笑顔で振り向き僕の元へ掛けてくる
そんな姿もとても可愛い

「おはようございます明久君…あの時はありがとうございました」

「おはよう吉井さん。いや いいよ…結局分かって貰えなかったん
だから」

吉井さんは体調を崩し途中で倒れ退席扱いになったんだ

僕は教師にそれはおかしいと反発したんだけど…結局分かって貰え
なかつたんだ

「でも明久君と一緒にクラスならどんな教室でもへっちらです」

朝からこんないいことがあるなんて…幸せだよ

「明久君教室に行きましょ…って明久君！？鼻血が噴出してますよ
!？」

僕…死んでもいいかも…

キャラ設定（前書き）

キャラ紹介です。設定をいろいろていじってます

キャラ設定

吉井 奏 よしいかなで

身長：明久より5センチ低い

見た目：真・恋姫十無双の劉備

胸はFカップ

試験中倒れ退席になってしまいFクラスになった。明久と一緒に居れることがなによりの幸せらしい

明久とは小学校からの仲。頭にいつもつけているリボンのカチュー

チャは明久がくれたもの

性格はおしとやかかつとても優しいが天然。男女問わずモテる

FFF団曰わく理想の女性らしい

しかし怒るととても怖く、明久の前では何故か脱ぎ癖がある

召喚獣はセーラー服で本を持っている

教科はAクラス以上だが日本史だけは100。腕輪の能力は明久がないと使えない

吉井 明久（よしいあきひさ）

本作の主人公

設定は原作と同じだが日本史、世界史は400以上いける

吉井奏のことが好きだが、鈍感なので気づいていない

召喚獣は同じ

千原一麻 ちほいちかすま

身長173

見た目：髪は雄二より赤く三本の癖毛が

特徴

Fクラス

観察処分者

性格：クールかだが時々馬鹿になる

明久と奏とは小学校からの仲で優しい

仲間を傷つける奴を許さない

ヒーローマニア

召喚獣は仮面ライダーのような姿をしている

腕輪の能力は変身

ランダムで姿と点数が変化する

家庭科と古典においては250以上

後は全部50以下

さかもとゆうじ
坂本雄二

原作と変わらないが少し優しくなっている

得意な教科は数学で翔子に負けにくいぐらいだが後はいつもと同じ

明久、一麻と一緒に鉄人から逃げる時はかなりのコンビネーション

しじまじほ
静寂里穂

Aクラス

身長：奏と同じくらい

見た目：瞳は赤くとある魔術のインデックス

胸：Eカップ

性格：おしとやかで天然

一麻や明久、奏は小学校からの仲。一麻のことになると馬鹿になつてしまう

男子からかなりの人気

アイドルとして活躍している

召喚獣はアイドルのような姿で歌いだすと相手の点数を下げ始める

不思議な力がある

家庭科以外は300以上

アリス・ファン・クリスチーナ

Fクラス

身長：明久と同じくらい

胸：Eカップ

性格：おてんばでとても元気がある。クラスの元気の源的存在。恋愛に関してはかなり詳しい

見た目：青い髪でポニーテール。瞳は緑色

召喚獣は騎士の姿

青いマントとランスが特徴

教科はほぼ300以上だが数学、日本史は100以下

第一問：罵倒は許さない

「明久君大丈夫ですか？」

私は鼻にティッシュを詰めている明久君を心配しながら廊下を渡ります

「ふん（うん）。だいほうぶだよ（大丈夫だよ）」

明久君はニッコリと笑い鼻からティッシュを出しました

「それにしても吉井さん体は大丈夫？」

「ありがとうございます明久君！明久君のおかげで大丈夫ですよ」

「良かった」

「あと昔みたいに奏でいいですよ」

私はにっこりと微笑みかけました

「ッー」

えっちよっ

「明久君！鼻血が垂れていますよ！？」

私は急いでティッシュを明久君の鼻に詰め込みます

「奏…当たってるよ！」

なんのことが意味が分からず今は必死に明久君の鼻にティッシュを詰めます

その時プシューという音が明久君から聞こえてきたのでした…

「えっ？明久君！明久君！」

「奏…僕らは来る教室を間違えたのかな？」

「明久君。現実逃避しちゃ駄目ですよ…」

見るからにして教室ではなく山小屋がふさわしい場所でした…

明久君はがっくりと肩を落としています

私だって正直受け入れたくないものです

「あ…明久君。でも…きっと大丈夫ですよ…教室に入ったらクラス
のみんなが温かく迎えてくれるはずですよ…」

「うん…そうだよね」

明久君は気合いを入れ直しました。私も見習わないと…

「では私から入りますね」

ガラガラと開け

「すみません遅れてしま」早く座れこのうじ虫野る…なっ!?!?」え
「？」

温かく迎えられず、いきなりの罵倒でした

「ふえ…」

私はうじ虫野郎と言われ涙が流れ落ちます

「す…すまない!明久と間違えてしまっ」『美女を泣かせるとはい
い度胸だあ!』『ぐあああ!』

私にうじ虫野郎と言った赤毛の身長が高い人は謝ろうとした所を黒
いフードをかぶった集団に襲われました

「すみません。遅刻しちゃいましたーって奏!?!どうしたの!?!?」

私が入った後に明久君が入ってきて、私を見て驚きました

「…明久君!私ってうじ虫野郎ですか?」

「えっ!奏はうじ虫野郎なんかじゃないよ!?!一体誰が」

私は涙を拭いながら赤毛の人を指差します

「雄二いいいい！」

「明久！いい所に来た！助けてく…ぐああ！何しやがる明久ああ」

「くたばれええ！」

明久君達が暴れている中、一人の男子が私の所へ歩いてきました

私はその人を見ると笑顔になり話しかけました

「久しぶりです一麻

君！」

「おう。久しぶりだな奏」

そう言って微笑んだの彼の名前は千原一麻。私と明久君の小学校からの親友です

明久君が言っていたあの雄二って人より濃い赤髪。三本のピンと跳ね上がった癖毛、そしてクールな表情の顔

昔と変わってませんね…

「所で明久は？居るんだろ？」

「明久君なら雄二って言う人をボコボコにしていますよ？」

その光景を見た一麻君はフツと笑い

「相変わらずだな…あいつ」

と言いました。本当に明久君は相変わらずですね…

「良かったな…あいつがFクラスで…」

「はい…明久君なら何があってもFクラスになりますよ」

「そうだな…」

一麻 side

俺は明久と話し終えてから席に座った

しっかし席って決まってるじゃないのか？

まあ無理もないか…

ぼろぼろの畳、古い卓袱台、壊れている窓ガラス…

ここまで酷いとわな

「所でなんで雄二が教卓に立ってたの？」

「ん？ああ担任が来ないから変わり立ってみた」

「ということはあるあなたが代表ですね？」

「お…おう坂本雄二だ！雄二なり代表なり好きに呼んでくれ」

奏が問いかけた質問に坂本は頬を赤くしながら答えた

まあ無理もないか…奏は濃いピンク色の髪に綺麗な垂れた目、そして凄いプロポーションだからな

まあ俺は親友として見てるから興味ねえけどな

「酷かったなあありゃあ。チヨークすらなくてクズだけだった」

チヨークのクズだけってどんだけ酷いんだここ

「ねえ…雄二、一麻。」

そう俺らの名前を呼ぶ明久の声はかなり低い

「なんで僕。こんなに睨まれてるんだらう？」

明久の周りには殺気立ってる奴らがいる

席は俺は明久の前。奏は一番後ろの窓際、その隣に明久。そして明久と一つ離れて坂本が座っている

まあ、殺気立つのも仕方ないなと俺は苦笑した

第二問：自己紹介ってこんなに恥ずかしいですか！？（前書き）

管理人「あっ…明久！」

明久「どうしたの管理人？」

管理人：「主人公もう一人増やすから」

明久：「は？」

管理人：「奏も主人公になったから」

明久：「ちよつ管理人！？」

管理人：「始まりまーす」

第二問：自己紹介ってこんなに恥ずかしいですか！？

「えゝまずは廊下側の人からお願いします」

僕に殴りかかろうとしたFFF団は僕らの担任福原先生が来たこと
でしぶしぶと自分の席へ戻っていった

危なかった…危うく今日で命日になるところだったよ…

そんなことを思っていると廊下側にいる一人の生徒が立ち上がった

ん？あの人はまさか…

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

やっぱり美少女の中の美少女！秀吉だ！

ああやって男の制服を着ているけど絶対彼女は女の子なんだ！

「おい明久！なんで女子が男の制服着てんだ！？」

一麻が驚きながら僕に尋ねてくる。やっぱり一麻も女って言うてるから秀吉は美少女なんだ！

「お主ら！わしは男じゃぞ！！」

秀吉に聞こえてたらしく、秀吉は必死に叫んでる

そんな秀吉も

『『可愛い〜！！』』

見事にクラスのみんなとハモりました

「なっお主らまで！？」

「……………負けましたあ。」

隣で奏が困ったような顔をして何かを呟いてる

あっまた鼻血が…

「……………土屋康太」

この静かな声はムツツリーニ！

相変わらず無表情だなあ…

おっと後から写真貰わないと

「…ですよろしく」

次々と自己紹介が終わっていく

「次は俺か…」

そう言っで一麻が立ち上がった

「千原一麻だ。好きなことは喧嘩だ。不良10人相手をボコボコにしたことがある」

一麻の一言で周りが一斉に凍りついた。一麻は本当に喧嘩が強く問題を引き起こしたことがある

「後、筋金のヒーローマニアだ。仲間を募集中…あつ明久と奏に手を出したら容赦しないからな」

と一麻はFFF団を睨みながら言った。等のFFF団はガタガタと震えている

「まあとにかくよろし「私ヒーロー大好きだよお」「なにいい!?
本当か!?!」

一麻のテンションを上げ、さらに一麻に握手しながら青い髪をした女子が前に進みでる

「はい!アリス・ファン・クリスチーヌだよ!!アリスって呼んでねー!」

元気で何故かパワー与えてくれる人だ

『『アッリスうううううう!』』

「ありがとうねええ!」

『『最高!』』

僕はこの光景に苦笑しながら見ていた

ちなみに自己紹介の順番がバラバラになっているんだけどみんな気付いてない…

奏 side

私は早速一麻君の廊下側の隣にいたアリスちゃんと話していました

元気な人で早速友達になれました

「んでこいつ知ってる？」

「勿論だよ！仮面ライダーオースだよね？」

「すげえええ！お前本当にいい奴だ！」

「照れるよんっ」

「麻君のハイテンションな姿久しぶりに見た気がします」

「ーです。海外育ちなので日本語は会話以外苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので…趣味は」

「この声は女の子ですね…他にもいて良かったです」

「趣味は吉井明久をぶん殴ることです」

「へ？今明久君をぶん殴ると言っていましたよね？」

「言いましたよね!？」

「一体誰何でしょう？」

「はろはろ」

「あつ…島田さん」

島田さん…ああ島田美波って人でしたか…そう言えば去年明久君が誰かに背骨を折られている姿が見えたのですが…

「この人が原因だったんですね…」

「な…なに？」

美波ちゃんは震えたように私を見てきました

「いえ…何でもありませんよ」

はあ…明久君も苦労してるんですね…癒やしてあげないと

「次は僕だね」

そう言っつて明久君が立ち上がります

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでください！」

『ダアアアリイイン!』』

「えっと。ダ、ダ…リ。ダーリン! / /」

うっ…恥ずかしいですっ…

「すみません忘れてください!とにかくよろしく!」

その時明久君はあつと言いながら私を見て

「奏……良い…」

鼻血を出しながらグッド指を立てながら明久君は言いました

『『グハアア』』

明久君だけではなく一麻君を除いたクラスのみんなが鼻血を出し倒れていました

福原先生が血に染まった自己紹介をしていない人を飛ばし飛ばしていくと

あつ次は私ですね…

私はいつものように静かに歩き

「吉井奏です 趣味は読書や散歩です。明久君と一麻君とは小さい頃から知り合いです」

ガツ カッターナイフが明久君と一麻君に飛ぶ

パシッ 一麻君が受け止める

ボコボコ 投げた人達が殴られる

「質問いいかなカナナ？」

この声はアリスちゃんですね

「はい？なんですか？」

「カナナとアッキーはどういう関係かな」

ななな…いきなり何を！

「えっと…／／…」

私はモジモジしながら言葉に詰まっていた

友達どうしと言えはいんですが…

本音を言えば明久君と秘密な関係でありたいですよ…いえなりた
い
です

私はプシューと蒸気を上げわたわたとしていました

『『可愛い…』』

再びみんなが鼻血で血に染まりました

「なるほど…つまりそういう関係だねん？」

「えっ！違っ…いえ違わな…いえ違」

はうっ！このままじゃ進みません！

「とっとかくよろしく願います！」

私は頬を赤くしながら微笑みすぐに自分の席に帰りました

『グハアア！いい！』

木下君や土屋君、坂本君までもがひっくり返ってしまいました

「改めてよろしくねん！劉備ちゃん！」

「はい。よろしくお願いしますね … あれ？劉備ちゃん？」

なにかおかしいです…

「だって知ってる人は知ってる真・恋姫十無双の劉備にそっくりな
んだもんっ」

「えっ？私は吉井奏という名」確かにあの劉備は本当に可愛いよね
… 奏でが似てて凄い嬉しい」劉備でもいいです」

私は明久君が言った言葉に顔を真っ赤にしながらアリスちゃんにそ
う言いました

「はあ…」

— 麻君はため息をつきながら明久君を見ていて

「あれ？どうしたの奏？」
と言いながら俯いてる私の方を覗いてきて私は明久君があんなことを言ったのでつい腕に抱きついてしまい、アリスちゃんはその光景をニヤニヤと見、クラスの人達は明久君に向けて殺意のこもった目で睨んでいました

その時、ガラガラとドアが開く音が聞こえました

第三問：理由と戦争の始まり

教室のドアが開き、息を切らせた女子生徒が現れました。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

『えっ？』

まるで教室全体がマイケルジャクソンでも現れたのかと言う顔になりましたね

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなので、姫路さん、あなたもお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

恥ずかしげに自己紹介する瑞希ちゃん。彼女とは一年の頃お友達になりました

「はいっ！ 質問良いですか？」

「あ、はい。どうぞ」

いきなりの質問に、少し驚いているようです。

「なんでここにいるんですか？」

失礼極まりない質問です。ですが、瑞希ちゃんは、入学後に行われたテストで、学年二位を記録していて、その後も必ず上位一桁以内に名前が残るといふ才女なのです。

みんな彼女はAクラスに違いないと確信しているに違いないでしょう

「えっと、その、ですね……」
緊張した様子で、瑞希ちゃんが口を開きました。

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました……」

そうです…瑞希ちゃんは試験中に倒れてしまい…退席してしまったのです

退席になると強制的に0点扱いになります。ですから彼女がFクラスに入るのは当然のようになってしまいます

「吉井さんにも質問です！何で吉井さんもいるんですか？」

一人の生徒が質問してきたので、私は席を立ち教卓の近くまで行きました

「実は私も熱を出してしまったんです」

ちよつと恥ずかしいですね…

私は少し赤くなりながら話しました

瑞希ちゃんが退席した後、私は急に倒れその時明久君がお、お姫様だっここで保健室に連れて行ってくれました

瑞希ちゃんは近くにいた一麻君が連れ行ってくれました

『くはああ』』

あ、あれ？何故でしょう？みんなが鼻血を出して倒れています！

「で、では、一年間よろしくお願いしますっ！」

ピンクの髪が跳ねるほどの勢いでお辞儀すると、瑞希ちゃんはパタパタと恥ずかしそうに明久君と坂本君の間の、空いている卓袱台に着きました。

では私も戻るとしますか…

「質問です！」

「へっ？あっはい！」

また質問が来ました。今度は何でしょう？

「どうして劉備に似てるんですか？」

「へっ？」

また劉備に似てると言われましたね…

「私も正直わからないのですが…その、駄目…ですか？」

私は明久君に向けて涙目＋上目使いをしました

「グフツア…なんという破壊力…嬉しいけど…何で僕なの!？」

「駄目…ですか？」

今度はみんなに涙目で言いました

『劉備様最高ー！奏様結婚してー！』』

みんなが一斉に私に向けて告白してきました

「ふえ？えっ あっ…その…あっ…」

いきなり何ですか皆さん！つい言葉に詰まったしまいましたよお…

『グフツ…！！とてもいい！』

私は恥ずかしくなりそそくさと自分の席へ戻りました

「はあ、緊張しましたあ…」

瑞希ちゃんは、安堵の表情で卓袱台に突っ伏しました。

「あ、あの姫「姫路」」

私の隣にいる明久君が瑞希ちゃんに声を掛けようとする、それに被せるように、強い声で坂本君が声を掛けました

「明久君落ち込まないでください」

「うっ…馬鹿雄二め」

私は落ち込んでいる明久君をなだめます

「あ、はい。なんででしょうか？ えっと……」

人間はとっさの場合、より力強い言葉の方に反応するんですよね。この場合は坂本君ですね。瑞希ちゃんは丁寧な雄二の方に身体を向けました。流石ですね

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、はい。姫路です。よろしくお願いします」

そして、深々と頭を下げる。その所作ひとつひとつに、育ちの良さが表れています。

「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

「あ、それはほくも気になる」

「私も！」

私もそれが気になり明久君と同時に言いました

「あ、明久君！？！？奏ちゃん！」

瑞希ちゃんは私と明久君に驚き、まるでウサギがワニが現れ飛び上がるかのような顔をしました

むーそんな顔しなくてもいいと思いますが

「あー、姫路。明久がブサイクでスマン」

はい？

「そ、そんな！ 目も「坂本君。明久君はあなたと違って美少年なんだよ？」」

私は瑞希ちゃんが何か言う前に落ち着いた声で坂本君にそう言った

「な…あいつの方が不細工だろ！！それに口調変わってるぞ！？」

まるで彼女に振られたように坂本君がそう反発してきました

「そんな訳ありませんよ？明久君が龍なら坂本君はアリだね。そしてこの口調が本来の私だよ。ですよね明久君？」

「うん。奏は常に冷静でいるようにする為こうやって丁寧な口調で話すけど本来はまるで劉備のように天然で可愛い喋り方をするんだ」

ポヒュ 奏が真っ赤になった音

「明久…はあ…」

「麻君がやって来て明久君にため息をつきましたけどそんなことはどうでもいいの！」

か、可愛いつて…

一麻 side

あー奏がショートしてるから俺が変わりに

「確かに坂本じゃ明久には勝てないな」

「なんだと一麻！」

坂本が睨んでくるが気にしない。

「それより姫路。本当に大丈夫か？」

「おい！無視すんな！てめえ」

「はい ありがとうございます千原君」

そう言っ て姫路は俺に頭を下げた

姫路が倒れた時、隣にいた俺と一緒に保健室について行った

普通は誰か一緒にいるべきだからな

だが教師が教師だから俺が動くしかなかったんだ。困ってる人はほつとく訳にはいかねえからな

「ねえ！一麻！なんで奏はショートしてるの!？」

「自分に聞け!!!」

未だ理由がわからない明久だが、多分わからないままだな…
いや一生わからないな
たくっ本当に鈍感だな…

見るからにして姫路は明久に惚れてるな…島田の奴は…わからないな

さて…どうしたもんか…

「なるほど…たしかに見てくれは悪くないかもしれないな。俺の
知り合いにも、明久に興味を持っている奴がいたはずだし」

何かを思いついたように雄二が口を開く

「え？ それはだ『』それって誰ですかっ！？『』あう…」
嬉しそうに尋ねようとした明久を遮って、奏と姫路が身を乗り出す。

「確か、久保」

「『久保…』」

「利光だっ たかな」

久保利光 / 性別

おいおい！奏だけ赤くなってんだよ！このままだと倒れるぞ！？

「そつだよね…奏がそんなこと言うはずないもんね…フォローしてくれてありがとう」

「え？いや 本当ですよ？」

明久…お前…本当に鈍いな…

奏の奴声小さいから聞こえてないぞ…

まああいつはハイパー恥ずかしがり屋だからな

「天然だけど」

俺はつい呟いてしまった

「ホッ…」

姫路は姫路でホッとしているし…

『奏さああああん！俺達と結婚してくれえええ』

FFF団は奏でに求婚求めてやがる

「え？無理ですよ？」

あっさりと言い放った言葉にみんな愕然としている

まあ無理ないな。あいつは明久veryloveだから

「奏本当に可愛いのじゃ」

秀吉がそう呟いた。ちょっと待てお前は女だろ

「……ポッ」

ムツツリーニも頬を赤くしてやがる…

明久は落ち込んでるし坂本も落ち込んでやがる

というより教室全体が暗い雰囲気だ

流石は奏の天然パワー

「皆さん静かにしてください」

福原先生が静にさせようと教卓を叩いた瞬間

バキイ…バラバラ

「えー替えを取ってくるので皆さんは待っていてください」

と言って福原先生は教室を出て行った

と言うより教卓までモロすぎるだろ！

「あははは…」

「雄二、一麻ちよつと来て」

苦笑いする姫路を見ながら明久は坂本と俺を連れて教室の外に出た

「で、なんだ？」

「うん。この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そうだな。かなり酷いな…」

「でAクラスの設備は見た？」

「ああ、凄かったな。あんな教室は見たことがない。」

確かにあれは本当にありえない

明久は少し間を置いてから

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」
と言った

「……何が目的だ。」

坂本が警戒するように目を細め明久を見る。
確かに企んでるな

「企むなんて、人聞きの悪い。ぼくはただ、あまりの設備のひどい底の浅い嘘をつくな」うぐ」

やっぱり嘘か

「顔に出てるんだよ。勉強に興味がないお前がなんで設備を気にする訳ないだろ？」

「確かにFクラスの設備は酷すぎる。けどAクラスと交換できれば、学習環境としては最高だろうが、お前がAクラスを狙う理由にはならないな。むしろ、Dクラス、Eクラスあたりを狙うほうが説得力があるだろう」

俺と坂本は明久の嘘を簡単に見抜いた

「う………わかったよ」

明久は観念したように話し本当の理由を話し始めた

「奏と姫路さんの為なんだ」

「ほう。なるほどな」

「姫路さんや奏は本当はAクラスだったんだ。なのにあんな理由だけでFクラスになるなんておかしいよ」

「確かにな…こんな設備じゃ体に毒だ」俺は頷きながら明久の言葉を待つ

「けどさ 姫路さんはいいけど奏にはAクラスに行つて欲しくなかつたんだ」

「何？」

「奏は僕の一番の理解者でいつも僕のそばにいてくれた」

「……」

俺と坂本は黙つて聞いた

「だから正直Fクラスになってくれて嬉しかったんだ。奏といれることが本当に嬉しかった。けど…やっぱり奏はAクラスで伸び伸びと勉強するべきなんだ…奏に甘えてちゃ駄目なんだ」

明久は俯きながらも続ける

「だから…僕は二人をAクラスに行かせる為に召喚戦争をやるつもりだ」

はあ…

「「明久…お前本当に馬鹿だな」」

「なっ!？」

「そんなの方法はいくらでもあんだろっが」

「方法って？」

明久は坂本に聞いてきて俺が変わりに答えた

「Aクラスに勝てばそれなりの実力が証明できる。それならあのババアでも反発できないはずだ」

そのまま俺は続ける

「Aクラスの設備を貰えばあいつらはいいい環境で勉強できるし一緒にいられるだろ？」

「あ」

「そして…実力の高い教師を貰い、成績を格段に上げ召喚戦争で無敵になる」

「安心しろ明久」

坂本が明久の肩に手を置き

「俺らは最強だ」

と笑って言った

「だが、その為に明久 全力を出せ」

明久はえっと言いながら坂本を見る

「奏のことが好きなんだろう？ だったら惚れた女と一緒にいたきゃ全力をだせ」

「な、ななな!？」

明久は顔を真っ赤にした

「なに言ってる顔に出てるって言ってるんだろ？」

俺が言葉を遮り坂本と一緒にニヤリと笑った

「ぐっ」

「まあ それに俺もしかけてみようと思ってたからな」
「雄二も？」

「ああ この世の中学歴だけじゃ無いって証明したくてな」
「え？」

なるほどな…だが坂本も裏があるな

「福原先生戻って来たから教室戻るぞ」

「うん。」

「先行っててくれ明久」

俺は坂本を残し明久を先に行かせた

「で、なんだ千原」

俺は坂本の顔を見てから

「何が目的だ」

と言った

「…お前こそ何か企んでいるだろ」

ふっ。流石は代表って言った所か

「お前が普通あんなに優しいはずないだろ坂本。」

「バレバレか。あいつを見てると無性に腹立って応援したくなるんだよ」

「確かにな。お前も好きな奴いるんだろ」

「ああ だが条件がまだ揃ってない。」

「へえ」

やっぱりな…

「俺も明久と似たようなもんだ」
俺はそう言ってから廊下を見た

「Aクラスにちょっと忘れもんをしたんだ。それを取りに行くだけだ」

「……」

俺は続けて坂本に話す

「あと、奏の前で明久を馬鹿にすんなよ？」

坂本は少し言葉に詰まってから頷き

「ああ 好きな異性を馬鹿にされたらそりゃ怒るな……」

やっぱり坂本も奏の気持ちに気づいていたか

「安心しろ…明久を馬鹿にすることは言わねえ、ただし、あいつがいない前ではな」

「ふっ…お前…そんなキャラだったか？」

坂本は教室のドアを開けながら

「明久と奏を見てたら羨ましくなっただけだと苦笑しながら入っていった

「全く…本当に馬鹿ばかりだ」

俺も苦笑しながら教室へ入って行く

この時俺は奏は本当に人の心を変えることができるんだなと改めて実感した

昔の俺を変えたように…

「須川亮です。えー、趣味は……」

再び再開された自己紹介。あいつは確かFFF団のリーダーか…

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」
「了解」

答えて坂本は立ち上がり、ゆつくりと前に出た。

その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ」

そこで、あいつは少し……間を空けた。

どうやら始まるか…

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。」

そして再びみんなを見てから口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

すげえな…かなりうるさい

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

坂本は頷きながら同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』 『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

引き継ぐように坂本は口を開いた。

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本雄二は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い
「面白くなりそうだ」
と呟いた

第四問：問題は… 宣戦布告（前書き）

遅くなりました！続きを更新します！
バカテストは次回から行います

第四問：問題は… 宣戦布告

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんかいれば何もいらぬ』

『吉井さんと結婚したい』

『俺も！』

『あつ俺も！』

戦力の差から既に諦め悲鳴を上げる人や関係ないことを話す人が出始めました

「皆さん最初から諦めてちゃ駄目ですよ！後、さっき告白した片達は大嫌いです」

『『すいませんでしたああああ』』

全く困った人達です。

『確かに吉井さんが言うならいけるんじゃない…』

『いや、でもさあ…』

やる気ができる人がいればやはり諦めている人に別れました

すると坂本君がみんなの言葉を制しました

「確かにみんなの言うことはよくわかる。だから、俺たちがAクラスに勝てるという根拠となる要素を示そうと思う」

『要素？』

「まずは……おい康太。畳に顔つけて吉井奏のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「へっ？ひゃあああ」

雄二に呼ばれた土屋君は必死に顔と手を横に振って否定しています

「土屋君…見たん…ですよね？」

私は目を潤ませながら問いましたが土屋君は

「…俺は知らない」

と言って鼻血を吹き出しました

うつ…：…やっぱり見られました。恥ずかしい…

私はスカートを押さえながら明久君の後ろに隠れました。

土屋君は顔についた畳の跡をさするように隠しながら壇上に向かって行きました。

「あ…あの奏？」

「うう…／＼」

私は顔を真っ赤にしながら黙りました。

明久 side

奏が僕にしがみつき何も話さなくなった

運よくみんなはムツツリーニの方を見ていたから助かった…

「土屋康太。こいつがかの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニは全力で首を振る

『ムツツリーニ……だ……と？』

『ヤツがそうだというのか？バカな……』

『だが見る。未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ……まったくだ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

うん…ムツツリーニ…本当に君は本当に凄いよ…

僕は手鏡しか思いつかないのに

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「ふえっ！ わ、私がですかっ？」

うん。姫路さんはAクラスに匹敵するしね！

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいららないな』

さつきから誰だ。姫路さんに積極的にラブコールを送る奴は

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、木下優子の……』

『『秀吉好きだあああ』』

「ワシは男だと言っとるじゃろ！」

違う！秀吉は分かってないんだ！自分が女性だったことを！

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良なんかだったのか』

そういえば雄二も頭良かったんだよね
悔しいけど…

「そして吉井奏だっている！！」

まるで雄二がメインだと言うようにビシリと言ってみせた

『そつだ！俺らには吉井さんがいるんだ！』

『俺たちの劉備さん！』

『『大好きだああ』』

うわあ…姫路さん以上のラブコール…

僕はあえて言わないよ。だって嫌われたくないし、後ろに劉…奏が

しがみついているんだからね

奏はこの文月学園で全校生徒において上位三位に入る天才なんだ

『ところで吉井さんはどこだ!?!』

『あれ?吉井さん』

ヤバい…みんなが奏を探し始めた。僕の後ろに隠れているのがバレたら…

「あー奏ちゃん!何で吉井君にしがみついているんですかあ!」

姫路さんアウトオオオ

『何!吉井を殺せ!』

『消える吉井明久ああ!』

「うわああ!ちよつとみんなカッターナイフを投げないで!」

これは非常にマズい!

「一麻助けてよ!」

「はあ…わかつてる」

すると一麻が席を立ち1分で雄二や秀吉を除く男子生徒は積み重なるように倒れていた

「姫路、島田も落ち着け」

雄二が何故か僕を攻撃しよう構える二人を止めた

「あれ？どうしたんですか明久君？」

「あつ奏。いや…奏がしがみついていたからちよつと…ね」

すると奏は状況を理解したようでカアアアと真っ赤になり始めた

「あの…や…その…」 「大丈夫奏？顔が赤いよ？」

するとますます奏は真っ赤になり俯いて黙ってしまった

しまった！僕何か傷つけるようなことしたかな？

一麻と雄二はため息をついていたけど僕は気づかなかった

「みんな起きろ。話はまだあるぞ」

『そつだ！まだ話の途中だ』

『何だ！？まだ何か策が…』

みんな起きるのが非常に早いよ

「ああ…まだあるぞ」
雄二の言葉でみんなはゴクリと唾を飲む

「みんなは忘れてないか？」

『？』
『』

「なんだ？何だろ？」

「吉井明久と千原一麻だっている！」

シーンとクラスが静まり返った……って

「ちよっ?! 雄二っ!! どうして僕と一麻の名前がそこででてるのさ! ぜんぜんそんな必要なかったよね?!」

『……誰だ? 吉井明久って』

『いや、知らん』

『千原一麻? 食べるのか?』

『さあ? 不味そう』

「ほらせっかく、もり上がっていたのに、なんでテンション下げちゃうことするのさ!」

「ああ! 明久の言うとおりだ! 後、食いもん扱いにした奴らぶち飛ばす」

すると雄二は任せておけと言うようにこっちを見た後

「なんだ、みんな知らないのか? 知らないなら教えてやるこいつらは《観察処分者》だ」

馬鹿雄二! 余計なことを言うなああ

『まじかよ! 初めて見たぞ』

『それって、学園最低のバカの称号じゃなかったっけ？』

「ちがうよっ！ ちょっとおちゃめな十六歳につけられる愛称だよ
」

だが僕は分かっていた。雄二がさらに酷くすると

「確かに問題を起こした奴に与えられる称号だがそのかわり物に触れたりすることができない」

え？ 珍しく雄二がフォローに入ってくれた。何だあの雄二なんか怖いよ

『おおそれは確かに凄い！』

僕は苦笑しながら口を開いた

「でも、教師立ち会い下でしか召喚できないんだ」

そして一麻が続いて話す

「さらにフィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が受けてしまうのさ」

するとみんなは再び話し始めて

『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しいってことか』

えっ？

『おいおい、それじゃあ、あまり召喚できないヤツがふたりいるってことじゃないか』

しまった！何またテンション下げてるんだ僕！

一麻もしまった顔になり雄二も溜め息をついていた

「そんなことはないですよ。物に触れることができると言うことは雑用を多くすることになります但其分コントロールが上手くなるんです」

ここで奏がいつの間にか席に戻りすかさずフォローしてくれた

『おお！召喚獣対決ではほぼ最強じゃん！』

『確かに俺たちの戦力になってくれるな！』

再びクラスはテンションが上がっていった

良かったあ…

「ありがとう奏。」

「はい。明久君が馬鹿にされるのを黙って見ていられませんから」

にっこりと微笑む奏を見て今日三回目の鼻血が出てしまった

「まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

雄二はそう言う少し間をおいてから話し始めた

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ!!』

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

『おおーっ!!』

「お、おー……」

姫路さんが雰囲気におされて小さく腕を上げている

「頑張りましょうね明久君！」

奏がにつこりと微笑み僕は笑顔で頷いた

みんなやる気で満ち溢れている

「明久、お前にはDクラスへの宣戦布告の使者をやってもらおう。大役だ。任せるぞ」

「下位勢力の使者って、たいがいひどい目にあうよね？」

「大丈夫だ。たかが学生の戦争ごっこで本当に危害を加えるわけはない」

「ほんとうに？」

「もちろんだ。俺は友人をだますような真似はしない」

なんか怪しい…

「けど…」

「だったら私と行かないかいアッキー？」

今まで黙っていたアリスさんがにっこりと笑いながら僕らの所へやって来た

「アリスさん。いいの？」

「勿論だよ！アリスンって呼んでねアッキー」

いや…流石にアリスンは…馴れ馴れしいような

「じゃあアリスって呼ばせてもらつよ」「ちょっと残念だねえ」
何だろ？さっきから凄い視線が…

「あれ？カナナ行きたいのかい？」
「えっ？…う、うん」
奏がそう頷くと雄二が慌てて止める

「ちょっと待て。吉井は他のクラスに知られたらマズいから駄目だ」
そうなんだ…せつかく話せると思ったんだけど…

「じゃあ私と行こつかアッキー」
そう言つとアリスは僕の手を引っ張り教室から連れ出した

「おい坂本…」
「なんだ千原」
「宣戦布告つて確か…」
「ああ…下位からのクラスはたいがい酷い目に合う」
「おい。明久を行かせて大丈夫か？」
「ああ…アリスもいるから大丈夫だろ」

「まあ…明久は喧嘩が強いからな」

しばらくして僕とアリスは無傷で帰ってきた。殴りかかってきたから仕方なく返り討ちにしたけど…

何だろ。何でこんなに殺気がするんだろ

第五問：お弁当は愛こそが最高の…（前書き）

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と、マグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

吉井奏、姫路瑞希の答え

酸素と反応して危険であるという点。

合金の例……ジユラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、二人は引っかけられませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（ すごく強い ）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

千原一麻の答え

『合金の例……ウルトラマン！』

教師のコメント

合金でもありませんし、そんな威張って言われても返しようがありません

第五問：お弁当は愛こそが最高の…

「うし。今からミーティングを行うぞ」

坂本君が教室を出ながら僕らに声をかける。

(……サスサス)

隣でムツツリーニが頬を触っている
もしかして

「ムツツリーニ、畳の跡なら消えてるよ？」

「……！！(ブンブン!!)」

「いや、今更否定されてもバレてるよ？」

「……！！(ブンっ!!ブンっ!!)」

必死に否定するムツツリーニ
そんなに必死にならなくても…よし一つ質問を試みよう

「……何色だった？」

「ボソッ……」

ムツツリーニは僕の耳しか聞こえないように色を喋った

「土屋君らめええ！」
「ぐはっ」

真っ赤になりながら叫ぶ奏を見てムツツリーニがああ！
くそっ！こうなったら僕が！

「えっとね…「明久君！」ぐべらあっ」

言う前に奏がミサイルのように突っ込んで僕は教室から吹き飛ばされた

「痛てて…うわあ！」

起き上がる前に奏が乗っかってきたんですけど…

「あ、明久君！私の下着聞いたんですよね？聞いたんですよね！？
／／」

奏が真っ赤になりながら必死に叫ぶ姿に僕は鼻血を流しながら頷いた

「……責任とつて？（カアアアア）」
「えっ？……！？ちよっ」

『うおおお！（ブシャアアア）ボタン！』

みんなが鼻血を噴出したのも無理はない
奏は涙目になりながら服を脱ぎ始めた…って！

「何やってるの奏！ストップストップうう」

奏は顔を真っ赤っ赤にしどんどん脱いでいく
ネクタイを外しシャツとスカートだけになってしまった

「わ、私脱ぎ癖激しくて…それに、明久君に…下着の内容知られて
いるなら見られても私平気だよ？／／／」

な、何を言っているんだ！う、嬉しいけど駄目だよ！一時の感情に
流されちゃ！

「す、好きな人じゃない人の前でそんなこと…」明久君の馬鹿ああ
！」「ぐはああっ」

そこで僕の意識はなくなった

後で聞いてみたが一麻と奏以外はみんな気絶していたらしい

奏side

私は脱いでいた服を着ながら明久君を見る

「明久君の馬鹿あ。」

私が明久君のこと好きじゃないと思っているの？

私はずっと明久君のことが大好きだよ？

「はあ… 駄目だなあ私。」

「奏大丈夫か？」

溜め息をついていると一麻君が明久君を運び壁に寝かすような体制にしながらそう言った

「それにしても凄かったねん！カナナの下着」

「へっ…？」

アリスちゃんはニカッと笑うと私は再び真っ赤になった

「な、何で知ってるの?」

「ムツツンから教えてもらったのだ」

アリスちゃんはダブルピースをし、ますます私は真っ赤になる

「そのくらいにしとけアリス。いくら弄られ役の奏でも限界があるからな」

「私弄られ役なの!？」

「ん?ああ。それよりこれ飲んで落ち着け」

そう言うと一麻君は私に紅茶をくれた

「ありがとう!私紅茶大好きなんだあ!」

「ちなみにアリスお姉さんは砂糖多め」

「よく飲めるなアリス」

コクンと一口飲んで目がトロンとなりました

「おいしいです」

「ふう…ようやく自我を取り戻したか」

「お帰りカナナ」

へ?アリスちゃんに一麻君

「?他の皆さんはどうして倒れているんですか?」

確かミーティングをするはずだったんですが

「まあ…気にするな。そのうちみんな起きるさ」

「そうだよん カナナもアッキーと一緒にスリープしたらいいよお」

私は首を傾げて隣を見ると壁によたれかかっている明久君が目に入りました

「明久君？どうしたんですか？」

「気にするな。明久は今居眠り中だ」

そう言いながら一麻君は苦笑しながら私に明久君と寝ると言うように指で示しました

「いや…でも／＼」

「遠慮は駄目だよカナナ」

アリスちゃんはそう言うってから私から離れました。もう…わざとらしいですよ？

私はお言葉に甘えて明久君の肩に寄りかかり目をつぶりました。

「カナナ幸せそうだね！」

「あいつにとって一番幸せなのは明久と一緒にいることだからな」

「明久君：ムニヤムニヤ」

この後明久君の叫び声と同時に起き、美波ちゃんや瑞希ちゃんを止めるのが大変でした

「さて、明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応、今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

私達はミーティングをする為に屋上上がり、私は明久君の隣に座りながら春の風を感じていました
うーん気持ちいいです

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日ぐらいはまともな物を食べるよ?」

ほえっ?

「そう思うなら、パンでもおごって欲しいんだけど」

「えっ? 吉井君って、お昼食べない人なんですか?」

瑞希ちゃんが明久君に尋ねました。明久君: どうしたんでしょう?

「いや…。一応食べてるよ」

「明久…、あれは食べてるって言えるのか?」

「千原の言う通りだぞ、明久」

「な、何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って……」

「水と塩だよな?」

ええええ!?! 私初耳ですよ!?!?

「失礼な!!! 僕をバカにするにも程があるよ! きちんと砂糖も食べてるよ!」

「そ、それは食べてるとは言いませんよ…」

「『舐める』が正解じゃろつな」

『…………』

みんなの言う通りですよ…明久君…

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「お前…俺が遊びに行った時、先週発売したゲームあったらだろーが」

…。

「し、仕送りが少ないんだよ!」

わかりました!…

「良かったら私がお弁当作ってきましょうか明久君?」

「え? 奏がああ!?! / 本当に?」

「はい 明久君がいいなら」

明久君顔が赤いのですがどうしたのでしょうか？

「うん！勿論！奏の弁当が食べられるなんて…神様ありがとうございます」

ちよつ明久君…おおげさですよ

「「吉井（奏）は料理が上手いのか？」」

坂本君と一麻君が尋ねてきました

「そうか…一麻は知らなかったっけ。奏の料理は高級レストラン以上なんだ！」

「明久君恥ずかしいですよ／＼そんなレベルじゃないですからあ」

「それは凄いのう！」

「……プロレベル……」

皆さんまで…！

「あの…」

そこで瑞希ちゃんがたどたどしく口を開きました

「なんだ姫路？」

「わ、私も作ってきていいですか？…皆さんに」

「えっ姫路さんも！？勿論だよ！」

「ああ！楽しみだぜ」

明久君と一麻君がそう言うのと瑞希ちゃんは一ぱあつと明るくなり

「ありがとうございます」と言いました

私も瑞希ちゃんのお弁当楽しみです！

「へえ… 吉井奏さんは吉井だけに作ってくるんだ」

「えっ？…だって皆さんは瑞希ちゃんのお弁当があるじゃないですか？」

何を言ってるんですか美波ちゃんは…

「私なんか瑞希ちゃんよりレベルが低いですから皆さんの口に合いませんし」

「いや… そう言うことじゃなくて…」

美波ちゃんは手をワタワタと振りながら懸命に言葉を探します

「と、とにかくお手並み拝見ね」

「…楽しみ」

「そうじゃの」

「よし、その件はここまでだ。 試召戦争の話に戻ろう」

坂本君のその言葉で、みんなの雰囲気は切り替わりました。

「雄二。一つ、気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスじゃろう？」

木下君が疑問を提示しました。確かにAクラスを狙って方が早いですね

「そういえばそうだね」

明久君も不思議そうに首を傾げます。

「ああ。確かに理由はある」

坂本君は鷹揚にうなずきました

「どんな理由だ？」

「理由はいくつがあるが、Eクラスを攻めない理由は簡単。戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、クラスは僕らより上だよ？」

「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見る」

そう言われて明久君は改めて私達を見渡します

「女神が一人と美女が一人美少女が三人、バカ二人とムツツリが一人いるね」「女神って誰ですか明久君！！」

「誰が女神だと!?!」

「奏落ち着いて?! そして、何で雄二が女神に反応するのさ!?!」

「おりゃあ、アリスさんムツツリよばわりは傷つくなあ」

「……………(ポッ)」

「アリスにムツツリーニまで!?! どうしよう、ぼくのシッコニ能力じゃ対処しきれないよ!」

「俺が美女……」

「一麻までええ！」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

カオスになりかけた空気を、木下君が治めました。女神って誰でしょう…

「そうだな。ま、要するにだ。吉井奏、姫路に問題がない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、得るものは無い。だったらやる必要はないだろ？」

「なら、Dクラスとやり合うことには、意味があるってことだねん」

「アリスの言うとおり、Dクラス戦はAクラス打倒に必要な鍵だ。それに、派手にやって景気づけにしておきたいしな」

そう言って、坂本君が力強い笑みを浮かべました。

「Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」
と明久君は坂本君に問います

「負けるわけがない」
切って捨て、そして、その場にいるメンバーを見渡しました。

「おまえ等が俺に協力してくれれば、必ず勝てる」

力強い言葉。そして再び口を開き

「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」と言ったのでした

根拠のない言葉ですが、その言葉は確実に、私達に力を与えてくれました。

「いいわね……面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「下剋上か……面白れえ」

「うっし！頑張るよお」

「……………（グッ）」

「皆さんとならきつとAクラスに勝てます！」

「やろっ！ みんな！」

「が、頑張りますっ」

私達はそれぞれの決意を固めました
それを坂本君は笑いかけました。

「よし、作戦を説明する」

大丈夫です！私達は最強のクラスですから！

私はそう思いながら春の風を再び体で感じました

第五問：お弁当は愛こそが最高の…（後書き）

奏「ちよつと何ですかこれ！／＼」

何があ？

奏「私…皆さんの前で何やってたんでしょ…うっ、お嫁に行けま
せん」

明久「だ、大丈夫だよ！僕が貰うから！」

奏「冗談はよしてくださいよ」（笑）

明久「笑われた…うっ」

あらら…次回はいよいよDクラス戦です

第六問：居眠りと夢…そしてDクラスの敗北（前書き）

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

☐（1）得意なことでも失敗していしまうこと

☐（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

☐（1）弘法も筆の誤り

☐（2）泣きつ面に蜂

吉井奏の答え

☐（1）河童の川流れ

☐（1）踏んだり蹴ったり

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『猿も木から落ちる』、（2）なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

☐（1）弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

☐（2）泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

千原一麻の答え

『(2) 奴は危険』

教師のコメント

いったい誰でしょう？

第六問：居眠りと夢…そしてDクラスの敗北

……

「えい！」

……。

「吉…ん！」

何でしょう…声が聞こえる
まあ…気にしないでおこつかな

『あきひさ君！』
『なーにかなで？』
『私、将来あきひさ君のお嫁さんになっていいかな？／＼』
『うん！かなでなら大歓迎だよ』

『ありがとうあきひさ君!』

「っ!?!」

私はそこで起きました。顔は真っ赤になっています

「大丈夫ですか吉井さん?」

私は声がした方を向くと高橋先生が心配そうに見ていました

そして私は思い出したのです。今私は回復試験を受けていたのです!
た!

一緒にいた瑞希ちゃんはどうにいらなくなっていました

「大丈夫です先生。回復試験続けます!」

「わかりました」

先生が頷いたのを見て私は再びテストに取りかかりました

もう…なんで寝てしまったんですか私!

明久君…今頃一生懸命頑張っているのに…

「でも…さっきの夢は…」

私と明久君が交わした約束…って明久君が覚えているはずないですよね…私だって忘れていましたし

うつ…自分が哀れに思えてきました…

明久side

「島田さん…君の勇士は忘れないよ…」

清水さんに保健室に連れて行かれた島田さん…合掌！

「勝手に殺さないでよね…！」

という言葉は聞こえなかった。というよりは聞こえないふりをして

いた！

「吉井君！」柔らかな声がしたので振り向くと姫路さんがいた

「姫路さん！ということとは…」

「はい！私と奏ちゃんて代表の平賀君を倒しました」

最後まで聞いて僕は叫んだ

「みんな！Fクラスの勝利だああ！」

『うおおー！』

『姫路さん愛してる！』

『吉井さん結婚して！』

『坂本最高！』

などなど勝利の雄叫びが上がっている

「こんな時に…島田さん。君は本当に哀れだよ」

今頃どうなっているのだろうか…？僕？勿論止めに入ったさ！けど…

清水さんが殺すって…

『やったな吉井隊長！』

「あつ うん！次も頑張ろうね！」

ところで…奏は？

「あの姫路さん。奏は？」

「あつ奏ちゃんなら…教室にいますよ？」

「ありがとう姫路さん」

僕は頭を下げてから教室に向かって走り出した

再び奏 side

はあ〜疲れましたあ…

あの後急いで回復試験を受けダッシュで教室を飛び出し瑞希ちゃんに追いつきました

私は体力はある方なのですがやはり病み上がりの為、すぐに息切れをしてしまいました

走っている途中Dクラスの方から告白を受けて大変でしたよお…

「ふひい…流石に疲れました…」

私は卓袱台に突っ伏しながら息を整えます

平賀君を倒した後でも告白を受けてしまい…平賀君にまで告白を…

「はあ 何故か無性に明久君に会いたいです」

私はほろりと少し涙を流しながら目を瞑りました…

「明…久…くうん」

『では誓いのキスを』

へっ？あれ！？なんで私ウエディング姿に！？それより誓いのキス
って…／／

周りを見るといかにも結婚式場で隣には神父さんが…

『どっしたの奏？』

そして目の前には明久君（タキシード姿）…！？

『えっあの 何で私』

『いやだなあ奏。それは今日、僕らが結婚するからだよ？』

えええええっ！／／いやちよつと待つてください！

『私達まだ16、17歳ですよね！？』

『何言ってるの奏。愛には年の差なんて関係ないよ？』

格好いいです明久君！／／っじゃなくて

『何慌ててるの？奏が今日にしようと言ってたじゃないか』

えええええ…！？何で！？どうして！？

『奏…』

『はいいい／＼』

『大丈夫だよ奏。僕が必ず幸せにしてみせるから』

『明久君…』

今の言葉で私は覚悟を決めて頷きました

『じゃあ…行くよ？』

そう言うってから明久君は私に顔を近づけてきました

あと10センチ

5

4

3

2

1

「奏!?!」
「っ!?!」

私は突然響いた声により無理やり現実に引き戻されました

何故か複雑な気分です

「大丈夫奏?」

「はい 明…ノノ久君」

みるみる顔が真っ赤になり私は素早く卓袱台に突っ伏しました

「えっ!大丈夫奏!?!」

「はい 大丈夫ですノノ」

あう…まともに顔を見ることができません…

「いやでも…お腹が痛いのか?」
「いえ胸が苦しいですノノ」

あんな夢を見た後明久君の顔なんて見れるはずがありません！

「大変だ！早く保健室に行こう！」

「へっ？いや大丈夫です！大丈夫ですから！」

私は必死に明久君の顔を見ないようにしながら明久君を立たせないように一生懸命押さえます

「ちよっ…わかった！わかったから上から押さえないで！当たってる当たってるからあ！」

明久君の声が下から聞こえますが意味がよくわかりませんでした

しばらくすると坂本君達が戻ってきました。どうやらDクラスとその後について相談していたそうです

「雄二！つてことはこのボロ設備とはおさらばなんだね！？」

「はあ？明久。お前Dクラスの設備なんかがいいの？」

「うっ…」

「まあ…俺らが目指すのはAクラスの設備だ。こんなんじゃ満足で

きねえ。だよな坂本」

坂本君は頷いた後…フツと笑い

「もつと面白いことをしておいた。次のBクラスに備えてな」と言いました

次はBクラスですか…大丈夫ですよね。

「みんなお疲れくん。アリスさんが癒やしてあげるよー」

『うおおお！俺があー！』

『馬鹿言え俺だあ！』

『させるかああ』

「あはは…」

私は苦笑しながらアリスちゃんを巡って争っているクラスのみんなを見ていました

「吉井ー！」

「げっ島田さん！」

「よくも見捨てたわねー！」

「ごめんなさい！僕も死にたくなかった…あがが！右腕の関節がああ」

そして隣では美波ちゃんに関節技を決められる明久君が…

「一麻君！坂本君！明久君を助けてあげてください！」

「しゃーないな。おい島田！」

「わかったわかった。島田それ以上やったら明久が死ぬぞ」

「全く騒がしいのお」「……………（コクコク）」

私は二人の所へ行き

「ですけどそれがいいんですよ…」

と言って二人に微笑みかけました

「そ、そうじゃの／＼」「……………／＼（コクコク）」

「（これ以上は危険だ）奏帰るよ…！」

「へっ！？私もですか…きゃっ／＼」

明久君は私をお姫様だっこをして教室から飛び出しました

お姫様だっこをしたのは私に走らせないようにする為ですよ…ね？

「吉井いい！」

「奏ちゃんずるいです！吉井君にはお仕置きです！」

「二人共落ち着け…！」

「明久…流石に許せぬぞい」

「（コクコク）」と頷きながらカッターを持つ

『アリスさんもお姫様だっこして欲しいにゃ』

『俺だあああ』

『させるかああ』

『アリスさんは俺のものだあ』

「みんな違うよ！！誤解だあああ」

明久君はみんなから必死に逃げながら私を落とさないようにしつかりと支えてくれています

「（全く明久君たら…優しいのに鈍感なんですから）明久君…ムニヤムニヤ」

「ちよつと！奏！？」

「吉井！覚悟しなさい！」

「吉井君！逃げないでください！」

「明久羨ましいのじゃ！」

「……明久覚悟」

第六問：居眠りと夢…そしてDクラスの敗北（後書き）

その後

明久「はあはあ…。危なかった」

奏「…スー」

明久「あー奏寝ちゃってるなあ…仕方ない家まで送っていくか」

奏「ムニヤ…明久君」明久「はは…僕の名前を呼んでる…なんか嬉しいな／＼」

奏をお姫様だっこしながら明久は頬を赤くしながら夕焼け色に染まつた道を歩いた

第七問：悲劇と天国と宣戦布告

「ふっふっふーん」

朝：私はいつもより早起きをしてキッチンに立ってお料理をします

「明久君：喜んでくれるかな…」

そつ：私は昨日約束した明久君のお弁当を作っています…味大丈夫ですよ？

「やっぱり醍醐味は…卵焼き…かな？」

私結構料理には自信あるんです

「明久君甘い物が好きだったから甘い卵焼きにしようかな？」

そんなことを呟きながら私はせつせとお弁当を完成させていきました

「むっ…せつかくですから皆さんにも作りますか！」

皆さんには明久君がお世話になっていきますから…

「あれ？私…何げに明久君を夫のように見てた？」カアアアア
プスプス…

「きゃああ！ぼーとしすぎてて焦げてしまいましたああ！」

朝から大変ですう…グスン

明久side

「うあー……づがれだー」

僕は机に突っ伏す。

昨日のDクラス戦で失った点数を補充するためテストを受けてたんだ。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にか近くに来ていた秀吉が答える。

今日は髪をポニーテールにしている。

ううっ、男のくせに僕を惑わすなんて！

「……………（コクコク）」

いつも無口で存在が薄く思われがちなムツツリーニもいる。

「あーあ。頭使ったからお腹すいたよ」

「なら昼飯にするか。ほら…奏も準備してるし」

いつの間にか三本の癖が特徴な一麻が隣にいて奏の方を指差した

「明久君！お弁当食べましょう」

あのアニメの劉備と間違われる程の美人の奏は笑顔でこっちへ向かってきた

「そつだ！今日は奏が弁当を作ってくれる日だったね」

「おい明久！それを言ったらー」

何一麻と言おうとした所でクラスのみんなが刃物を投げつけてきたよ…

「貴様！吉井さんの弁当を食べれるとは！」
「死刑！死刑！死刑！」

デスコーラスが教室で鳴り響く

「待つてよみんな！僕には弁当がなくて『死刑！』」

言葉を遮りみんなが突撃してきたああ！？

「仕方ない…みんなごめんね」

「手を貸すぜ明久！」

珍しく雄二が助太刀に入ってくれた

「さて…屋上にも行くか」

雄二の言葉で僕らは教室から出て行った
教室にはさっき襲ってきた男子達が積み重ねられている

まあ…仕方ないよね！戦闘防衛だから

「あれ？島田さんと雄二は？」

「飲み物を買って行ったのう」

僕は秀吉と話ながら屋上へ上がった

今日はとても気持ちが良い風が吹いている

「じゃあ…お昼にしましょう。明久君こっちに来てください」
「うん。わかったよ」

奏に手招きされて僕は隣に座った。奏の手料理…久しぶりだよ

「では私も…」

そう言っつて姫路さんが弁当箱を開ける。

とても美味しそうだ…

「じゃっご馳走になるか！」

「うむ…美味しそうじゃ」

「……………コクコク」

「アリスさん感激だねん」

「そんな…恥ずかしいです／＼」

みんなの感想を聞いて俯く姫路さん。でも本当に美味しそうだ

「じゃっ僕もご馳走になるかな！」

「お口に合うといいのですが…」

奏はゆっくりと弁当箱を開く

「あの…明久君？よだれが…凄いですよ？」

これはトリコの虹の実以上だよ…

「だって美味しそうすぎるよ」

二段弁当で一段目はなんと僕の大好きなパエリア！

二段目には卵焼きやチーズハンバーグ、ポテトサラダなどが…

「ここはレストランですか？」

「明久君？」

感激のあまりに変な言葉が出たらしい…奏がこっちを覗き込んでい
る

「いや…なんで卵焼きがあるかな…と／＼」

「それは…明久君が昔良く食べてくれたから／＼」

奏はもじもじしながらチラチラとこちらを見ながらそう言った

『ブシャアアアア』

「明久君!?!」

あまりにも奏が可愛くて…あまりにも奏が可愛くて…

そんなことをリピートしながら僕は血の海へ沈んでいった

一麻 side

「明久ー！?!」

なんで明久は鼻血を出して倒れてんだ！そして俺最大のピンチ！

姫路が弁当を開け美味しそうだな思いながらいざ食べようとした時
事件が起きた

「ヒョイツ…パク」

「あつムツツリーニ抜け駆けか！」

「どれワシも頂くかの…パク」

「秀吉もか！」

先を越されたと思ひ俺も食べようとした時

『バタン！』

ムツツリーニが…倒れた

「ムツツリーニ！？」

アリスが心配してたのもつかの間

『バタン！』

「ひでんー！」

次は秀吉が倒れた

「おいアリス…」

「何かなカズン」

アリスは苦笑いしながら俺の方へやって来た

「あれって姫路の弁当のせいだよな？」

「だねん…あつユウ！」

雄二が…飲み物を持ってこっちへ来た

「わり。遅くなった…おっ美味そうだな」

「まて雄二！それは…」

『パクン…ボタン』

瞬殺つう！雄二が瞬殺された！

「皆さんどうしたんですか？」

姫路が心配そうに尋ねてきたよ…ここはフォローしねーと

「み、みんなミズキイのお弁当おいしかったってさ ねっカズン」

「あ、ああ！みんな幸せのあまり寝ちゃったんだよ…ハハハ」

「そうですか…良かったです！」

姫路は安心したように笑った

よし！なんとか乗り切れた！

『一麻…』

『なんだ雄二…』

『姫路は…破壊兵器を作ったのか…』

『ああ…現実だ』

俺が倒れた三人に飲み物を飲ませていると

「吉井君は食べないんですか？」

「あはは…アッキーにはカナナが作ってるからね…」

そう言われた姫路は明久の方を振り向き頭に怒りマークを浮かべていた…

何故なら

「明久君…あ、あーん／／／」

「あーん／／…パク」

「どう…ですか？」

「やっぱり奏の手料理は凄く美味しいよ！」

鼻にティッシュを詰めた明久と箸でパエリアかな？…パエリアを明久の口へ運ぶ奏…

「うん夫婦だねん」

「だな」

これが引き金になったのか姫路が明久の方へ近寄り

「明久君！」

「な、何姫路さん？何で怒ってるの…！」

「奏ちゃんだけなんです！私のも食べてください！」

と言つて会話が流れた

いや、ちょっと待て！明久が危な…

「いいの？じゃあ頂きまーす！」

姫路の弁当からおかずを取り口へ

『パク…バタン』

「きゃあああ明久君！？」

時既に遅し…

その後、みんな起き上がり奏が感謝の気持ちだと言って俺達分の弁当を作ってたらしくご馳走になった。

まるで地獄からまるで天国へ行く気分になるぐらい感激したぜ

「美味しいな！」

「生きてて良かったのじゃ！」

「……（涙）」

「こいつは最高だ！」「レストランだねん」「美味しいです奏ちゃん！」

「うちこんな美味しいもの始めて食べたわ！」

「……………」

可哀相なことに姫路の弁当を全部食べた明久は気絶していた

「…明久君の馬鹿」

奏は明久の隣で姫路の弁当を美味しそうに（本当は怯えていた）食べた明久を見て複雑な気分になっただけらしい

明久の弁当をパクパクと食べている…明久が口に入れた箸とも知らず

俺は弁当を食べながら

「女性の手作り弁当か…」
と一人呟いた

さあ…飯食ったらBクラス戦だ！

ちなみに宣戦布告は明久と雄二がジャンケンした

明久パー
雄二チヨキ

『くうあー負けたああ』
『よし俺の勝ちだな』

そう言った後、須川が立ち上がり

『吉井ー！覚えてるよー！』

と言って教室を出て行った

そんな時、明久は雄二と笑顔で話す姿を見てため息をついていた

はあ…相変わらず鈍感だな…

第八問：決戦Bクラス（苦手と得意）（前書き）

残念ながら今回は明久と奏の絡みが少ないです

バカテスト 化学

問 以下の問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、吉井奏の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていますか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

第八問：決戦Bクラス〜苦手と得意

今…僕達は…

『試獣召喚！（サモン）』

Fクラス 吉井奏 数学 480点

『な、なんだあの点数は！？』

『無理無理無理！絶対勝てないいい』

Bクラスのみんなが奏の点数を見て絶望していた。

そう、今はBクラスと試験召喚戦争をやっているんだ。

雄二曰わく渡り廊下で勝敗が決まるとか…今回は奏と姫路さんを中心に攻めていく戦法だ

「では、行きます！」

奏の召喚獣は本を開きの相手の召喚獣へ向かって呪文を唱えた

瞬殺と言う言葉がふさわしいだろう…一気に消し飛んじやったよ

さらに、後ろにいる数学の長谷川先生が戦闘の影響で離れてしまった。

…今僕らがいるのは日本史のフィールド。

Fクラス 吉井奏 日本史 10点

「みなさん退却うつうつ」

『『『『『なにいいいつつ!?!?』』』』』

奏は手をわたわたさせてみんなに知らせる

『いまだ！吉井さんを討ち取れーっ!』

そんな掛け声と共に、Bクラスは突進してくる

こっとなったら…

「僕が行くよ！」

『『吉井隊長！？』』

みんなが驚く中僕は奏を庇うように割って入る

「行くぞおお試獣召喚！（サモン）」

ボンと音を立てて現れた僕の召喚獣は学ランを着ている

Fクラス 吉井明久

日本史 430

『ちよつと待て！あいつFクラスの吉井明久だろ』

『なんだよあの点数！』

「明久君…格好いいです」

へへ…僕だつてやる時はやるよ！

「行くぞおおお」

合図と共に僕の召喚獣は木刀を相手に向けて投げつける

『うわああ』

『きゃああ』

木刀は回転しながら周りにいる人達の召喚獣を打ち消していく

僕はさらに回転している木刀だけをうまく操つる。

観察処分者だからできることだ

『すげえ！木刀だけで倒した！』

よし！あとちょっとだ！

『沢村が現国で勝負！試獣召喚（サモン！）』

ん？

いつの間にもいい

Fクラス 吉井明久

現国 20

『奏ペアアアス!』

すぐに奏に助けを求める

だって絶対勝てないよおお

「任せてください明久君! 試獣^{サモン}召喚!」

Fクラス 吉井奏

現国 320

『ぎゃあああ』

『無理無理無理無理無理』

やった!あとちょっとで勝てる

『竹原が日本史で勝負!』

またかああ!

『明久君!交代ですーっ!』

「了解!試獣召喚!(サモン)」

ということを僕らは二時間に渡ってくり広げていた

あれ?そういえば姫路さんがいない…

『み、みんな一旦撤退だあ』

Bクラスの一人がそう叫んだ瞬間みんな教室へ逃げて行った

「逃がすか！」

僕が走ろうとしたら奏に止められた

「明久君…気持ちは分かりますが…ここは私達も補充しに戻りましよう」

「大変だ吉井隊長！島田がBクラスの奴らに人質にとられた！」

「場所は！？」

「Bクラスの教室前だ」

「明久君！？」

僕は奏を抜き去り教室へ走って行った

—麻side

「何？明久が…」

「はい…どつしましよつ」

俺はしばらく考えた後口を開いた

「明久のことは俺に任せて奏は教室に戻っててくれ」

「……わかりました」

奏は渋々頷くとFクラスの方へ何人かの男子と戻って行った

「よし…みんな聞いてくれ！Bクラスの根本には彼女がいる！」

『『何iiiiiiii』』

根本…Bグラス代表のくせしてカンニング、暴力、盗みなど…平気で
行う人間のクズだ

そんな根本に彼女がいるだけで腹が立つ…

「相手はCクラス代表の小山だ！」

『『何iiiiiiii！』』

よし…フィニッシュだ

「しかも手作り弁当を作って貰ってやる」

『『根本才才…』』

理不尽な怒りが頂点に達した時奴らは現れる

『『我々は根本恭二を死ゲフンゲフン！鉄人送りにさせてやる！』』

「行くぞみんな！まずは島田と明久を助けるぞ！」

『『才才才才！』』

黒いフードを被った集団FFF団は鎌を持ちきBクラス教室へ向かった

「私も行くよん！」「アリス？お前は教室に戻ってるって」

アリスは溜め息をついた

「だって面白そうなんだもん」

「をつけても駄目だ。点数を補充しとけて」

「仕方ないねん」

アリスは諦めたように教室へかえって行った

「さて…明久と島田待ってるよ」

俺はそう呟きみんなの後を追って行った

「島田さん!」

「吉井!」

「おっと近づくなよ吉井明久」

「くっ下手したら島田さんの召喚獣が…」

「今だ!吉井を討ち取れ!」

「うっ…」

「おっと俺らを忘れるなよ!」

「一麻!」

やれやれやっと思いついた

「明久！もうちょっと考えてから行動しろよ！」
「ごめん…」

たくつ…さあみんな存分に暴れるんだ！

『根本才才』

「うわあなんだこいつら！」

「補習になるのが怖くないのか!？」

『お前らに独り身の俺達の気持ちができるのかああ!??』

そう言ってFFF団は突撃していく

すげえ…一人で五人も自爆させてるぜ

「島田さん！大丈夫!？」

「吉井…ありがとう」

明久は笑顔でお礼を言う島田に照れてる…

「そんなっ僕何もしてないし」

「そんなことないわアキ。ウチ嬉しかったわ！」

「そんな…！？アキ？」「そうよアキ！私のことは美波って呼んでね！」

明久は慌てながら口を開いた

「えっ…そんな急に島田さ」そんなに私の名前を呼びたくないのかしらあ？」わかったよ美波！」

「ちよっ島田！明久が死んじまうから首を絞めるなっ」

何やってんだ島田！暴力じゃ明久は振り向かないぞ！

『戦死者は補習ー！』

ふと見ると大量の学生を抱えた鉄人が…みんな、そして鉄人ご苦労様

『はあ…明久君…』

『どうした吉井？』

『あつ坂本君！明久君って島田さんが好きなのかな…』

『……さあな……。もしかしたらお前が勝ってるかもな（いや、100%勝ってる）』

『え？それってどういうことですか？』

『……………』

第九問：根本の罫、明久の怒り（前書き）

Bクラス戦完結です！明久が怒ります

バカテスト 数学

問 以下の問に答えなさい。

『(1) $4 \sin X + \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のうちどれか、
？？の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 『

姫路瑞希、吉井奏、坂本雄二の答え

『(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ? 『

教師のコメント

そうですね。角度を『』ではなく『』で書いてありますし、完璧です。ただ、吉井さんはこれ以外の教科もちゃんと答えられると嬉し

いです。坂本君には驚きました

土屋康太の答え

『 $X = \frac{\pi}{6}$ およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちは分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久のコメント

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

千原一麻の答え

『(1) 余り?』

教師のコメント

驚きました。余りをつける人はあなたが初めてです。

第九問：根本の罫、明久の怒り

「何ですか…これ？」

Fクラスに戻ってみると教室はさらにボロボロになっていました

「むっ…ペンが折られてるの…」

「…卓袱台までボロボロ」

「酷いです…一体誰が」

私はそう呟く瑞希ちゃんを見た後はっと思い出しました

「そういえばBクラスの代表は根本君…」

「それだ…」

坂本君は苦い顔をしながら口を開きました

「奴のことだ…きつとCクラスと手を組んで俺らの回復試験を邪魔しようとしたんだろな…」

そんな…BクラスとCクラスが…

ため息をついていると残りの皆さんが帰ってきました。

「だから美波って呼びなさいっていつてるでしょ！」

「ごめんなさい！島、美波！」

明久君は美波ちゃんに関節技を受けながら戻ってきました…

「うっ…美波ちゃんズルいです…いつの間にあんなに仲良く」

いえ、瑞希ちゃん…あれは仲良くとは言えませんよ？

「美波ちゃん！やめてください！明久君が」

私はすぐに明久君を助けるべく関節技を美波ちゃんにかけました

「痛い！っ、ごめんなさい奏！」

反省しているようですので離してあげました

「あれ？奏関節技使えるの？」

「あっ…はい。コブラツイストぐらいなら（もじもじ）」

「（か、可愛い／＼）」

『明久の奴デレ寸前だな…』
『ああコブラツイストを怖がらないなんてな…』
『俺も言葉には気をつけないと…』

明久 side

みんなの怒りを抑えとりあえず対策を僕らは考える…

「まさか…Cクラスと繋がっていたなんて」

美波は悔しそうに俯く

Bクラス代表の根本君は彼女がいる…Cクラス代表の小山さんだ。

「くっ早く気づいていれば…」

そんな時雄二がバンと教卓を叩いた

「みんな！落ち込んでいる場合じゃねえ！モタモタしてたらBクラ

スが優位に立つ恐れがあるんだぞ」

「でも雄二…どうやって根本君を倒すの？」

「心配するな島田。こっちにはクリスチーヌや姫路、吉井奏がいる」

「そうか！三人は300以上だもんね！」

「だが、吉井は日本史が苦手だと分かった以上うかつには出せない」

確かに…あの時の奏の点数は10。さらに相手に知られてるから余計に不利だ

「だから吉井には最後に根本を倒してもらおう…そのためにムツツリ
ー二！」

「……なんだ？」

「お前は鉄人を連れて待機してくれ」

「……分かった」

雄二はニヤリと笑って一言言った

「いいかみんな！俺らは必ず勝てる！だからお前らも本気をだせ！」

その言葉でFクラスは一つとなった

雄二「君は不細工で馬鹿な奴だけど…」

「いい代表だよ」

「いくぞみんな！Fクラスの力を見せてやるんだ！」

『オオオオオオ！』

「よし！頑張ろう奏！」

「は、はい…」

返事をした奏の声に力はなく鞆を見て辛い顔をしていた

「さあ！行くぜ野郎共！」

『オオオオオオ！』

雄二のかけ声と共にみんな教室から飛び出していく

うお…今にも喧嘩をふっかけられそうな雰囲気だ…

「よ、よし僕らも行こうよ奏！」

「へっ！？あつ…先に行つててください」

奏は苦笑いをしながら立ち上がった

奏がそう言うなら…仕方ないか

「じゃあ僕先に行くね！」

「はい…」

よおし根本君覚悟しろ！

と思つたけどDクラスの教室までUターン

「奏が心配になってきたよ」

Fクラスに戻るとしたらふと階段から声が聞こえた

聞き覚えがある…この声は…奏!?

『返してください』

『やだね』

『私の大切な物なんです…大事な人から貰った』

『へえ…だったらなおさら返さねえ』

『どうして!?!』

『憎いからだよ…その大切な奴がな!』

『へっ?』

『…へえ、お前の大切な奴はこんな可愛い物を送ったのか』

『……………!?!』

『そいつ女性じゃないのか?』

『違います!彼は私の好みを知ってたから……』

『ちっ……いいよ返してやるよ』

『本当ですか……?)(うるうる』

『あ、ああノその変わりこいつは貰った』

『それは!』

『へえ〜愛いなあお前!指輪が作れるなんてな!』

『返してください!それは……大切な人への……』

『……………俺が貰おうかな〜』

『そんな…!』

『あつ決めた…俺らがこの戦争に勝つたらお前を俺の彼女にする』

『!?!?…あなた彼女がいますよね?』

『ああ…あんな奴どうでもいい。今はお前が欲しい』

『いや…触らないで!』

『ちっ…まあいい。どうせ俺達が勝つんだからな!ハハハ!』

『…ひっく…わ、私…どうすれば』

「……………っ」

『明久君…助けて明久…君…』

「……………!!」

根本才才才才!

僕は殺気をむき出しにしてFクラスに向かった

ダアアアン!と思い切り開く

「なんだ明久戦線離脱か?それなら直でしは…!!!?」

「雄二…根本…僕が倒していいかな?」

「お、おう。だが必ず勝てよ……」

「問題ないよ雄二……」

雄二の了承を得たから……さあ……根本を殺ろうかな

「ふん……奴らもそろそろくたばってるかな？」

「根本！Fクラスの半分は倒した」

「そうか……これであいつは俺のもの……ハハハ」

ドゴオオオン

「な、なんだ！？……お前は！？」

僕は壁を破壊しBクラスの教室に入った

「やらせるか！」

「ここは通さない！」

Bクラスの二人が根本の守りに入る

邪魔だなあ…

「ハハハ！俺が警戒していないと思ったか吉井！お前達の作戦は失敗したんだよ」

それはどうかな？根本

「ムツツリーニ…！」

呼び声と共に土屋康太ことムツツリーニがガラスを割って鉄人と一緒に教室に着地する

「な、教師ごとだと!?!」

「…土屋康太がBクラスの二人に保健体育で勝負。試獣召喚（サモン！）」

邪魔な壁はムツツリーニが倒してくれる…

「くつ根」吉井明久がBクラス代表根本に世界史で勝負！試獣召喚
(サモン!)ぐ…」

Fクラス 土屋康太

保健体育 450

Bクラス 二人組

保健体育 120、140

Fクラス 吉井明久

世界史 420

Bクラス 根本恭二

世界史 250

差は圧倒的だ…

「バイバイ根本君」

僕は木刀で根本の召喚獣を切り裂いた

そう勝負は一瞬だった

「な、なに…」

「はあ…お前達また無茶を…勝者Fクラス!」

歓声が沸き起こり廊下にいたみんなが教室を入ってきた

けど…今の僕には…

「鉄人…根本君を殴っていいですか?」

「馬鹿か吉井!そんなの許す訳…」

「はあ…西村先生だと言ってるだろ。今日だけ許す」

「な、何いい!?!」

先生の許可が降りたことだし…

「根本君…くたばれええええええ」

「ぐえふつづ!がああ」

顔を思い切り根本を廊下まで殴り飛ばした

「……あ、あがが」

「お前なんて人間のクズだ……」

「誰か…誰か助けるよ！」

無駄だよ根本…誰も助ける訳ないじゃないか

「死ね……」

バガアアンともう一度根本を殴る

僕は怒りを思い切り根本の顔面に叩き込んだ

「あが……。。。」

根本はピクピクとしながら気絶した

……

「ごめんみんな！やりすぎちゃった！」

「……吉井いい！俺らの変わりにありがとうっつ」

えっ。な、何。何のこと？

とりあえず……Bクラスとの戦争は僕の怒りと本気でFクラスの勝利に終わった

第十問・甘えていいんだよ？（前書き）

今回は甘甘です（笑）

理性が崩壊しないことを祈ります

第十問：甘えていいんだよ？

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表
？」

「……………」

俺は床に座り込んでいる屑（根本）にそう言った

顔は明久に殴られ真っ赤になっている
くくっいい気味だ

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプ
レゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。まあ当然だな

「皆落ち着つけ。俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

まあ呑まないなら…無理やりな…

だがこの言葉で皆納得してくれたようだった

「……条件はなんだ」

力なく屑が問う

決まってるんだろ

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

あいつは俺らの女神に手を出した。さらには明久を怒らせたからな…当然周りもフォローしないし、それは本人もわかってるみたいだ

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、

「宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな」

「……………それだけでいいのか？」

「疑うような視線だな

…

「ああ。なあ明久？」

「うん。Bクラスお前がコレを着て、言った通りに行動したら見逃すよ」

「そうやって今だに必死に怒りをこらえている明久をが取り出したのは、先ほど木下に頼んで用意してもらった

「そう…

「丈が短いメイド服だ

「ば、馬鹿なこと言うな！この俺がそんなふざけたことを……………！」

「屑が慌てふためく

まあ、確かにわかる

。だが、こいつはそれ以上のことをしたんだ。だからこそ用意してもらったんだからな……

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう!』

『任せて!必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

ふっ決定だな。とりあえずBクラスの人に撮影会とCクラスに噂を流すことを伝えるか……

「それじゃ、決定だ。」

「くっ!よ、寄るな!変態ぐっふっ!」
気持ち悪い声を出してキノコが倒れる

「じゃっ明久頼むぞ」

「了解っ」

明久君がぐったりと倒れているキノコに近づいて、制服を脱がす
いい光景だ…。キノコの最後つて所か

「う、うう……」

うめき声をあげるキノコ

まだ生きてたか…

「ふんっ！」

「がふっ！」

明久が追加攻撃してキノコは完全にダウンした。死んだな…

「……あつたあつた」

明久は屑キノコの服のズボンのポケットから何かを取り出し

「すまないけど誰かこいつに服着せてくれないかな？」

何か急いでいるように明久は周りに呼びかけるとBクラスの女子達
が乗り出した

「明久：服の処理なら俺がやるぞー」
「じゃあ頼んだよ雄二」

明久は俺に屑キノコのズボンを渡すとすぐに教室から出て行った

「さて…どうするか…」
「……焼却炉でいいんじゃないか？」

一麻が笑いながらこっちに来てそう言った
なるほどいい考えだ

「そつだな…投げこんでおくか」

俺達も教室から出ようとすると姫路と島田が殺気立っていた

明久 s i d e

屑のズボン処理は雄二達に任せ僕はFクラスの教室に向かう

「いない…?」

その時僕は彼女がどこに居るのが何となくわかった

彼女は何かがあった時必ずあそこにいるんだよね…

やっぱりここにいたんだね奏…

僕の幼なじみであり…好意を寄せている彼女は歌を歌っていた

いつもならとても美しいのに今は悲しく聞こえる

「…明久君?」

僕に気づいたのか彼女は振り返って名を呼ぶ

悲しい顔だった…今にも泣きそうな

「奏…これ…」

僕は彼女に近寄りポケットから指輪を取り出した

「あ……………」

奏は指輪を受け取った後大事に大事に持っている

心が痛む…彼女はきつと好意を寄せている彼氏に渡すんだろつな

「ありがとう明久君…」

「え……………」

奏はそう言つと僕に指輪をつけた

「…？奏？」

「感謝の…気持ちだよ」

奏は涙を拭いながらいつもの笑顔を見せた

頬が泣いていたのか赤く僕はつい目を背けた

(なんで僕に指輪を？大切な人あげるんじゃないの？)

「明久君は本当に私のヒーローだね」

「え…？」

「苛められていた私を守ってくれた…振り分け試験の時だって…」

奏はそれでもまだ不安そうにしている

「私怖かった…もし負けたらと思うと…」

「大丈夫勝ったよ。勝ったから。」

また涙を流している奏をゆっくりと引き寄せ優しく抱きしめた

「……………！」

奏はビクツとしながらも遠慮をしているのか動かない

「奏…甘えていいんだよ？」

奏の体から力が抜けたかと思うと彼女は僕の背に手を回した

「明久…くん…ひぐつ…」

奏はいつもは見せない弱気な声で…泣いた

「明久君…」

僕は隣に座っている奏の方に顔を向けた

「あのですね…お願い聞いてもらえますか？」
「うん。いいよ」

お願いか…何だろう？

「うわっ…」

一瞬体が倒れたような感覚がした後何か暖かい感触がした…

「か、奏！？」

「えへへ…膝枕です」

奏は微笑みながら僕を見下ろす

いつもとは違って奏の顔を見上げている…

さらっと髪が揺れる仕草も可愛い…

って違うっ！

「奏…！ちょっと恥ずかしいよ／＼」

「お願い聞いてくれるって言ったじゃないですか」

奏はつるつるとした目でこっちを見る

「有り難く寝かせてもらいます女神様」

うん。前言撤回

奏の太股気持ちいいよ

あれ？何か…やばいこと言ったよな

「私…彼氏ができたらこうやって膝枕をしながら癒やしてあげたいんです／＼」

照れながら笑う奏も可愛いなちくしょう！

「決めました…私…」

奏は僕を見下ろしながらそう言った

「何を…？」

「私、Aクラスに勝ったら好きな人に告白します」

奏の顔には決意の表情が見える

「じゃあ…僕も…Aクラスに勝つたら告白しようかな」

奏は少し目を大きく開き口を開いた

「明久君…好きな人がいるんですね。」

「うん。その人は昔から大切な人で僕はその人がとてとてもとても大好きなんだ」

「その人は幸せですね」

複雑そうな顔で笑うけど…君のことなんだよ奏

馬鹿な僕が学園三位の奏に告白したら…きっと…

だからAクラスに勝った時…僕らだってできることを証明できた時…

どんな結果になっても伝えよう

「明久君…」

「ん？」

「／／／／っ…ちょっとこちょばしいです」

「ほえ？…うわああ」

いつの間にか奏のスカートがめくれて僕の髪が当たっていた

「いじ、いじ、ごめん！…？うわっ」

「ぎゃっ…！…」

慌てて起き上がるうとした瞬間何故か奏を押し倒したようになって
しまい僕の視線には真っ赤になっている奏が…

「えっと…その、明久君…で、手が／／」

何というラツキースケベなんだ僕は

奏の胸を僕の手がわし掴んでいた

「／／／！？」

僕は顔を真っ赤にしながら起き上がった
うわあ…嬉しいけど……なんか…空気が…

「明久君…私のし、し、」

しがどうしたんだろう？

「し、下着が見たいんですか？／／」カアアアア

P G M G ・ D G W A T G P G D M ! ? O P ・ D J D G P W K W
A W M ! ?

D A D J X M D G A G M W ・ D G ・ A G A ! / / / / / / /

A A A A A A A A A A A A A A A A / / /

『ぬれぬれ…』

K A N A D E E E E E ! / / /

N O O O O O O O

僕はシャツのボタンを外し終えた奏を必死に理性と戦いながら止めた

第十一問：一麻の家に合宿だ！（前書き）

最近更新率がいいので嬉しいですよ！

第十一問：一麻の家に合宿だ！

僕と奏は顔を真っ赤にしながらFクラスの教室に戻る

「……………」
「……………」

気まずい…凄く気まずい

さっきのことを思い出すだけで真っ赤っ赤だ

とりあえず何があったのかと言うと簡単に言えば奏に膝枕をしても
らいその後…ラッキーハプニングで胸を押し掴みしてしまい理性が
飛んだ奏は服を脱ぎだしてどうにかおさえて今に至る

「あのさ……………」

「はい…っ？」

「何でもない……………」
「そうですか……………」

気まずい…凄く気まずい

「明久君…」

何？と言おうとした瞬間奏が僕の腕にダキツイタ…

「ちよっ奏！？」

どういうことだ！何が起きているんだ！

「どうですか…？気分楽になりましたか？」

「え…？」

「だって明久君…何か凄く辛そうな顔をしていたので」

つまり奏はさっきのことで黙っていたのではなくて…僕が落ち込んだことを心配して黙ってたのか…

いやー心配してくれるのは嬉しいけどー何で奏はさっきのことで恥ずかしいと思ってるの！？

「奏ってやっぱり鈍感なんだね」

「明久君…？どうしたんですか？」

奏は首を傾げながら腕をしっかりとスイカのように大きい大きに押し付けている

「ノノノあつ…ほらFクラスに着いたよ！」

「ですね…」

馬鹿な！何故離さないんだ！？これ以上は僕が危ういのに！

「（仕方ない…みんな帰っていると思うし…大丈夫だよね？）」

ガラガラと控えめではなく

スパーンと思い切って開けた

「いやあ〜大変だった…「じゃあ解散！…おう明久」系…」

馬鹿…な 教室にはみんなが雄二から解散を受けている所だった

「あ…教室間違えました」

「え？明久…『ガラガラ』きゃっ」

奏が何かを言う前に入り口を閉めてから奏をお姫様だっこした

そしてそのままダッシュ

トドトド…

来る…！！

『『吉井を殺せえええ！』』

『明久君！』

『アーキーー！』

教室からクラスメイト達が一斉に僕の命を狙ってきたー

『アキ！今まで奏と一緒にいたのねえええ』

『……明久覚悟！』

『明久君！お仕置きが必要ですね！』

凄い殺気が僕を襲う…本当に恐ろしい

「FFFはアリスちゃんに任せてねん！」

救世主様が舞い降りた

「ありがとうアリス！」

「みんなーアッキーを殺さない人にはアリスちゃんからのプレゼントがあるよー」

『『撤退だあああ』』

FFF団達は一斉にFクラスの教室へUターンしていった

が…危険は収まらない

『明久君！秦ちゃんと何をしてたんですか！』

言える訳ない！

「うわっ！ムツツリーニやめるんだ！ノートは凶器じゃないよ！」

「（スプー）」

奏の寝顔可愛いなあ…って違う！

「奏起きて…！give me コブライスト！」

「んにゅ…了解です」

奏は目をこすつた後僕から降りて…

あれ？意識が…

ギギギギギギギ

何か嫌な音が…

ムニユツ

そして柔らかい…

意識が薄れていく…

一麻 s i d e

「痛てて…あれ？」

「気づいたか明久」

「一麻？ここは？」

俺は溜め息をつきながら口を開いた

「屋上。大変だったんだからなお前を運ぶの」

明久は奏にコブラツイストを受けて何故か鼻血を出しながら気絶したもんだからすぐに屋上に連れて逃げたんだ

「あはは…ごめんごめん。姫路さん達は？」

「ああ…まだ廊下うろうろしてる…」

隙を見て逃げるしかないか…

「明久君大丈夫ですか？」

「うん…何とかね」

「まだ体がふらついてます！」

「大丈夫だって…うわっ」

「少し休んでから出ましよう…」

「奏…だからって膝枕は…ほら一麻が居るから！」

「大丈夫ですよ…一麻君ですから」

「そうだね…じゃあお言葉に甘えて」

ザザザザザー

やべっ砂糖が…

なんだあの夫婦は…早くお互いに気づけよ

そっぴや明日Aクラス戦か…

「明久、奏！今日俺んちで勉強合宿しねーか？」

「え？いいの？」

明久は世界史や日本史が得意だったし…

奏はそれ以外ができるしな…

「ああ！雄二、秀吉とムツツリーニやアリスも呼んでるから二人共
来いよ！」

「じゃあ…お言葉に甘えて…ねっ明久君」

「うん…／＼」

そついや昭久の奴奏のお願いに弱かったな…

「じゃっ決定だな」

『『お邪魔しまーす』』

夕方の5時みんなが荷物を持って俺の家に来た

ちなみに俺の家は三階立てで両親は海外にいるから俺らだけなんだ

「おっ来た来た！」

『皆さんこんにちは。一麻の妻の静寂里穂しじまほです！普段はアイドルをしています』

あいつ！

「ちょっと待て里穂！何勝つてに妻になったんだああ」

「あら？だって同棲しているのですよ？」

いやいや…確かに確かにこいつの両親はかなりの仲だったから一緒に住んでんだけど…

「こいつらに言う必要はないし妻じゃないだろ！」

ほら！みんな固まって…

「よろしくねんりホホン！あたしはアリスって言うんだよん！」

「はい よろしくお願いしますアリスさん」

居た……ちょっと待て

「お前はとっくの前に来て挨拶したろーが」

「いやーん忘れてたん」

こいつ…里穂も天然だからしゃーないけど

「とりあえずみんな上がってくれ。あそこに階段あるから上がったらずぐ近くにある部屋に入ってくれ。あと奏、明久、悪いけど夕食作り手伝ってくれないか？」

「うん。わかった」

「了解です」

「奏！久しぶりですね！」

「あつ里穂ちゃん！本当だね」

さて…女子陣はあてにならないから明久と頑張るか…

さて…これから楽しいプチ合宿の始まりだな！

第十二問：ドキドキプチ合宿なり！（前書き）

すみません！更新が遅くなりました！

次回からはなるべく早くそして感想もちゃんと答えます！

第十二問：ドキドキプチ合宿なり！

俺達は今、料理ができたので二階の大広間へ運びみんなで食べる所だ
久しぶりに腕を振るっただぜ

「にしても明久…お前本当にパエリアがうまいな」

「ありがとう。僕の好物だからね！」

明久は照れながら笑った

「うまそうだな…」

Fクラスの代表雄二は並べられた料理に顔がはにかんだ

「じゃのう…」

「…（じくじく）」

美少女の秀吉とムッツリーニは頷きながら感心していた

「じゃ食べようん…」

アリスは手を合わせいただきますと叫んでいる

「だな」

「うん…おいしい!」

「上手くできて良かったです…ねっ奏」

「うん…おいしいね」

「美味じゃの〜」

「……プロレベル」

みんなで楽しく食事ができて何「明久君。食べないんですか?」

「それが…ちょっと腕をやっちゃって…はは」

「コンクリートに穴を開けたんだ…骨折してるんじゃないのか?」

「うん…そうかも…痛てて…」

大丈夫か明久…

「明久君…あーんしてください」

「えっ？あーん」

奏は何故か自分のパエリアをすくって明久の口に入れた

「わおっ！カナナ大胆だね！」

「（もぐもぐ）…おいしいね奏／／」

「そりゃそうですよ！明久君が作ったんですから／／」

次々に奏は明久に食べさせていった

「『ザザザザ』」

みんな砂糖を口から出たせいで料理が…

まっいつか…

「一麻…明日は赤飯ですね」

「ああ…あいつらの為にな」

「違いますよ」

「え？」

「私達…／＼のです」

「ちょっと待て！早すぎるし結婚なんかしねーぞ！」

「冗談はほどほどにしてくださいよ？／＼」

冗談じゃねええええ

「明久君これは私が作ったんですよ？はいあーん」

「あーん…（パクツ）うん…最高だよ…」

「そんな…最高だなんて／＼」

「アリスさんの料理はこれだよーん！はいムッツとヒデンあーん」

「ワシらもか！？」

「（ブシヤアアア）」

「…なんだこれ？」 雄二

「うしっ飯食ったし勉強すっか」

雄二の言葉でみんなやる気になった

「じゃあムッツとヒデンは私とやるっねー」

「よろしくなのじゃ」

「……（コクコク）」

「じゃあ雄二は俺と里穂が見てやる」

「ああよろしく頼むぜ」

俺達は自分が得意な教科を相手に教え苦手な教科は教えてもらった

「えと…僕らは？」

「……明久君…」

「何？奏…」

「私が教えましょうか？」

「（奏が僕と個人レッスン！？）是非」ブシャアアア

早くやれ！！…畜生二人共羨ましい

なんだこの状況は…？

ピンクの雰囲気を作りだしている吉井夫婦

何かな叩かれたようにこぶができているムツツリーニと秀吉

気絶をしている雄二

そしてハリセンを構えている里穂

何故こうなった！

「問題です…項羽の愛馬の名前は？」

「もらった！瞬名だ！」

「正解です では…アケネメス朝を滅ぼした王の名前は？」

わ、わからない！

「マグマ星人！」

「残念です…マグマ星人はウルトラマンレオの故郷を破壊したのですよ？答えはアレクサンドロス3世です」

「んなのわかるわけ！」

里穂は溜め息をつきながら俺に近づいた

「間違えた一麻にはお・し・お・きです」

「待て待て！このインデックスもどぐべらああ」

ふっ ナイスパンチだ…

「誰がインデックスもどきですか…失礼です…」

「カナナン！リホリン！お風呂へ行こう！」

「いいですね！行きましょう奏！」

「うん！じゃあ明久君ここは覚えてくださいね！」

「わかったよ…！行ってらっしゃい」

三人は楽しそうにお風呂…（銭湯なみのでかさ）に向かって行った

「よし明久…俺らも入るか…」

ムツツリーニや秀吉、雄二は気絶してるから後だな

「うん！そうだね。肩をほぐさなきゃ」

『カナナン！いい胸だね〜！それっ！』

『きゃあっ！アリスちゃんたら…／＼やめてよ〜』

『全くです…お風呂では静かにするべきです』

『またまた〜！それっ！』

『ひゃあ！ちよっいきなり何するんですか！』

『二人共いい感触だねん！さては夫に揉んで貰ってるのかな〜ん？』

『『ななななな！？／＼』』

『な、な、何を言っているんですか！／＼』

『そ、そ、そっだよ！それに夫って誰のことだか』

『アッキーとカズンに決まってるじゃんばーんばー!』

『ー!? / / /』

『もしかしたら来てたりして』

『な、な、そんな訳ないです!』

『そ、そうだよ…(明久君とお風呂)… / /』カアアアア

『まさか〜期待してるん?』

『『してないよ(ません)!!』』

ガチャ…

「あ…」

『へ?』

明久 s i d e

ちよつと待つて…落ち着け吉井明久…これはそう一麻の畏なんだ

僕は風呂に入る為に一階に下りて浴場に向かう

一麻曰わく暖簾が青い方は男湯らしい

さて肩の疲れをとろうかなと思ひながら暖簾をくぐつてささつと服を脱ぎ一麻と扉を開けた瞬間目に映つたのは…

体を洗っていた奏…

窓から景色を見るアリス

温泉に浸かろうとしていた里穂さんだった

「……「麻？」」

「ああ…ラッキーだったな俺ら」

しばらくみんな硬直している

大丈夫…タオルは巻いている…けど奏達はタオルを外している

F……あれ？ここは天国…

「いや〜んエツチ！」

アリスが頬を染めながらこちらを見て笑いながら恥ずかしかったこととで歯車は動き始めた

「「きゃああああ！／＼／＼／」」

「「えええええ！」」

ちよっと待ってよ！ここは男湯のはずじゃないの！？

「あ、あ、あき、あきひ、明久君ー！／＼／」

「はiiiiiiii」

奏が顔を真っ赤にしながらかっちに歩いてきた

「駄目駄目駄目駄目奏！駄目だつて！」

「明久君…」

あれ？泣いてる…ヤバいようしよう…可愛い…じゃなくて奏の裸がああ

「今日だけ…だからね？」

奏は怒るところか僕にくつつき上目使いで恥ずかしそうに言った

理性が…崩れるっつ！

胸があ！奏の柔らかくて大きな兵器がああ

「ぶけらしゃああ」

変な声を立てて僕は倒れた

『一麻…責任とってくださいノノ』

『な、な、』

『一麻が悪いんですからね…ノノ』

『ば、馬鹿くつつくなああ』

『二人共…シャイだね〜ん』

とはならず…

『『フェイクウウ!?』』

奏達は首を傾げこっちを見ていた。そしてにっこりと笑い

「明久君達も来たんですね…体流しますよ?」と爆弾発言

『グサツ』 明久と一麻が目を潰す音

ちょっと待て!こっちの方が危ないよ!?

「どうしたんですか一麻?」

「なんでお前らは俺らが風呂に入ってきて驚かない?」

「え…?だって別に家族風呂とかがあるんですから…」

「ですよね…」

「二人共早くおいでよん」

「ちよつと待ったああ！なんで下着を見られて恥ずかしがる奏が裸を見られて驚かないのさ！」

「恥ずかしいですよ！でも…」

奏は真つ赤にしながら爆弾発言をした

「昔…一緒にお風呂に入ったじゃないですか…」カアアアア

「理由にならないよ！昔と違って奏はむ、胸が素晴らしくなってるから！」

僕の理性が壊れるからああ

「え…でも昔は一緒に体を洗ったじゃないですか…」カアアアア
アアアア

「だから理由になってないよ！」

「おい里穂…まさかお前も」

「そうですよ…／＼」

アリスは急に僕らの横を通り過ぎ

「じゃあ私は上がるね〜ん」

と言った

ちなみにちゃんと目を閉じてるよ！

「じゃ…じゃあ僕らも出るね」

「あ、ああ…そうだな。場所間違えたしな」

ムニユッ

「！！？…え」

「明久君…久しぶり一緒に入ってくれませんか？」

ええええ！？／／

僕はパニック状態で何が何だかわからず…

気づいたら

「明久君気持ちいいですか？」

「う、うん／／」

奏に背中を洗って貰っていた…

ちゃんとタオル巻いてるよね奏！？

「ま、待て里穂…当たってるからあ…」

「気にしなければ大丈夫ですよ…」

駄目駄目駄目駄目！理性がああ

『奏！もう我慢できないよ！』

『えっ…明久君！？／／あ…』

『奏のせいだからね？』

『ぶらめえ〜』

「はっ！／／」

いつの間にか妄想の世界へダイブインしてたよ…

『シャワー』

奏が僕にシャワーをかけながら体を流している

「奏！自分でやるから！」

耐えきれず後ろを振り向くと

「
… / / ?」

きょとんとしながらこっちをみる奏と透けている奏の体が目に入った

「
ぐぐぐしゃらああー！」

鼻血を噴出して僕と一麻は倒れた

きつと一麻も同じことになってたんだろっつなあ…

ああ…楽園が見える

第十三問：お泊まりの夜は…（前書き）

バカテスト 化学

問 以下の問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、吉井奏の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよつに。

第十三問：お泊まりの夜は…

「大丈夫ですか明久君？」

「う、うん…」

私は明久君の頭に氷が入った袋を乗せながら体調を尋ねます

「一麻しっかりして下さい」

「あ、すまねえ…頭がくらくらしちまって」

あちらも同じことをやっています。

本当に仲が良いことで…

「う、F…奏はF…」

明久君は何を言っているのでしょうか

「じゃあ勉強はこれで終了だな」

後から温泉に入った坂本君、土屋君、木下君が背伸びをします

勿論私達も二人を教えていたので疲れました

「うん！みんなよく頑張ったねん！」

アリスちゃんという言葉でみんな頷きます

「明日はAクラスとの試験召喚戦争だ！必ず勝つぞ！」

「オオオオオ！」

必ず勝ちます！そして…

「んじゃお休みタイムだねん！」

夜の10時…丁度いい時間帯です

「じゃあユージ！ヒデン！ムツツ寝るよ〜ん！みんなお休みー」

そう言うとアリスちゃんは三人を連れて洋室へ消えていきました

『アリスちゃんと初夜を過ごしましょ』

という爆弾発言を投下して

「じゃ、じゃあ僕も寝るよ！お休み」

「んじゃ俺も…お休み」

明久君と一麻君はあくびをしながら寝室へ向かって行きました

「お休みなさい」

ちなみに私達は温泉に行くとき着るあれを着ています

何故か明久君が鼻血を出していました

明久side

夜中2時…僕は目が覚めた

何かベッド中にいると感じながらはぐっってみる

「………何もないか」

眠い…

僕は再び掛け布団をかけた

「……」

「……ん……」

眠れない

「ん……」

途端声が寝室に響いた

「…ん」

有り得ない声が響く

恐る恐る右に顔を向けると

「…うん」

大好きな幼なじみが隣で可愛い寝息をしていた

「…………PGDPGWJAWPPMPPWMDPDWA0!//」

な、何で奏がここにいるのおお!?

「ムニャ…//」

やばいよ…凄く可愛い…

じゃない！どうして奏が

「落ちて着け吉井明久。今は奏に理由を聞くのが大事なはずだ」

しかし次の罨が僕を襲った

「！？／／／」

温泉浴衣なので浴衣がかなりずれて肩は露出している

さらに下がめくれてギリギリまで肌が出ている

「色っぽい…／／」

ゴクリと唾をのみこみじつと奏を見つめる

「ん…明久君？」

奏がオキタ

「や、やあ奏！何で僕のベッドにいるのかな？」

奏は眠たげに目をこすり

「寝室が明久君と同じで…ベッドが一つしかなかったから／＼」

と恥ずかしそうにこつちを見た

「えっあっ…そうなんだ／＼」

「だから…」

奏は前越しになりながら僕に詰め寄る

「だ、駄目だよ奏！？危ないものが見えるからああ！」

ストーンと浴衣がずれ落ちた

「i p w j p p ! o / / / /」

！兵器がああ

「一緒に寝よう明久君」

涙目＋上目使い＋上半身完全露出

「ハイ…ワカリマシタ」

こんなの抗うことができない…

その後奏が寝ぼけながらくつついてきたのを必死に剥がした

「おはよう…みんな」

「ああ明久おはよう」

「おはようなのじゃ」

「…おはよう」

僕は昨日あったことを話しあった

まず僕はあのこととその後奏が暑いとか言って浴衣を脱ぐのを防いでいたことを話した

秀吉、ムツツリーニはアリスが服を脱がせはじめ必死に止めていてその後アリスがキスしようとしたのを防いでいたらしい

雄二は一人で寝ていたからスルーするね

一麻はエロ本を読んでいた所を里穂に見つかり凄いいことになったらしい

「お、おはようございます明久君／＼」

「う、うん／＼」

奏と普通に話せるようになったのは学校に行ってからだった

第十四問：Aクラスへの布告！

今僕らはAクラスとの試験召喚戦争についてFクラスの教室で話していた

どうやら今回は一騎打ちをするらしい

Aクラス代表はあの才色兼備と言われている一人の霧島さんだ

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「その、霧島さんとは……仲が良いんですか？」

姫路さんが尋ねた。

確かに僕も気になるかな

雄二は、なんだそんなことかという顔になると、

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

と、軽く答えた。

へえ…幼なじみかあ…

「総員！ ねらええっ！」

「うおっ！？ なぜ須川の号令でみんな上履きを構える！？つか、アリス！ 何でおまえまで楽しそうに構える！！」

「うん。のりだよーん」

アリスは笑いながら答えた。

「この男の敵めっ！ Aクラスをやる前に、おまえを血祭りにあげてやるー！」

「俺が何をした？！」

「問答無用！ まで、靴下はまだ早い。それは押さえつけたあとで口におしこむものだ」

「やるんだつたら鉄人のがいいよん」
「それだ！」

すでに大半の男子は臨戦態勢。それをアリスが面白そうにあおりまくる

はあ…助けてあげるかな…

「あ、明久君」

「ん？ なに、姫路さん」

姫路さんに声をかけられ、僕は笑顔で振り向いた。

「明久君は…霧島さんが好みなんですか？」

「へ？うーん…好みとはすこしちがうけど美人だしね…って、なんで姫路さんがぼくに攻撃態勢をつ？！そして美波は、なんで掃除用具いれをかついで、ぼくに近づいてくるの？！」

前語撤回。雄二、僕も命が危ないよ

最近…姫路さんまでFクラスに感染してる

「ひいつ?! どうしたの二人共!!」

「アキ覚悟しなさい!」

「明久君酷いです!」

「何で美人って言うだけで怒られないとまらないの!?!」

『坂本! 全男子の夢、幼なじみがいるのを味わうなんて、許せん!』

『姫路さん結婚して!』

『カナデサン、ハアハア』

気持ち悪い奴らが二人

「ちょっと待てお前ら!」

「うわあ！二人共危ないから！、たすけてよ奏！」

思わず奏に助けを求めてしまった。

女の子を殴るなんて僕にはできない！

けど、奏は僕を涙目で見つめるだけだ。

「、奏さん？」

様子がおかしい奏に恐る恐る声をかける。

「……そんなに霧島さんがいいんですね……」

奏は涙目でじつとみながら鋭い声でしゃべった

「え？あれ……」

「明久君なんか知らないです」

頬を膨らませ、プイツと横を向きながら涙を流す奏。

「ちよっ！奏！？何で泣いてるの！？」

「アキ最低！」

「酷いです明久君！」

二人はさらに怒り僕に卓袱台と掃除用具入れを振り下ろしてきた

それを片手ずつで受け止める

「待ってよ二人共！何で僕が怒られるの！？」

「明久君には乙女の気持ちなんてわからないんです！」

乙女の気持ち！？？どういうこと？

僕は卓袱台と掃除用具入れを押し返した

「「きゃっ!」「」

とにかく奏に何か言わなきゃ

「奏?」

「……………(ムス)」

「あのね奏…霧島さんはただ美人だけであって好みじゃないからね?」

「……………」

「僕の好みは奏のような性格の人だよ!」

「ふえ? / / /」

奏が顔を真っ赤にしながらかつちを振り向いた

か、可愛い…

じゃなくて！これで奏は大丈夫かな

周りを見ると一麻と雄二がみんなを成敗していた

あっムツツリーニまで

「一騎討ち？」

「そのとおりだ。Fクラスは、試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

宣戦布告は雄二、僕、奏、姫路さん、秀吉、ムツツリーニの六人で行きAクラスを訪問した。

「……何を企んでいるのかしら？」

そう訊ねるのは交渉役として出てきた木下優子さん。秀吉のお姉さ

んだ

「Fクラスの勝利。それ以外に狙うものなど無い」

「面倒な試召戦争を、簡単お手軽に済ませられるのはありがたいけどね」

木下さんは口を開きそして射るように雄二を見つめた。

「だからと言って、わざわざリスクを背負う必要はないかな」

緊張感あふれる言葉のやりとりだ。みんな唾液を飲み込む。

雄二も、木下さんの言葉を聞いて目を閉じる。

「ほお…負けるのが怖いのか？」

その言葉に木下さんの口端があがる。

雄二だいぶ挑発的だなあ…

雄二は腕を組み、アゴに手を当てた。

「ところで……Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

何でもないように訊ねる雄二。

そう、僕らはBクラスとの試験召喚戦争の時に秀吉に演技をやってもらいCクラスをAクラスにけしかけたんだ

「……時間を取られたけど、それだけね。問題ないわ」

さすがAクラス……余裕だね……

「だったら俺らも余裕だろ？」

「……ふう。わかったわ。何を企んでいるかはわからないけど、その提案、受けても良いわよ」

木下さんは観念したかのように溜め息をした

よし！まず一つ目はクリアーだね

「さらに提案だ」

「なに？」

新たな提案を出す雄二に木下さんは表情を曇らせた。

「代表同士ではなくて、お互い五人ずつ選んで一騎討ち五回。そのうち三回勝った方の勝ちつてのはどうだ？ただし、科目の選択件はもらっぞ」

「なっ！むちやくちゃじゃないかしら」

「…受けてもいい」

「うわあ！」

木下さんの後ろからAクラス代表の霧島さんがあらわれた
びっくりする登場だ

「…雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表いいの？」

「…その代わり条件がある」

「条件？」

「…うん」

霧島さんが軽く頷く…そして姫路さんを見ながら

「…負けたら何でも1つ言う事を聞く」

まさか…姫路さんを！？

「じゃこうしましょう。七回に変更して勝負内容は7つの内4つ決めさせてあげる。3つはうちで決めさせて」

「坂本君それでいいんじゃないかな？」

「七回か…ああ、そうだな。交渉成立だ」

「ゆッ雄二！！まだ姫路さんが了承してないのにそんな勝手な！」

そんなことしたら百合が誕生してしまう！

「心配すんな。絶対姫路に迷惑はかけない」

「…勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「…わかった」

霧島さんって本当に静かな雰囲気を持つ人だな。奏と似てるけど何か違うんだよね…

話し方だけならムツリーニと似ているし。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「うん…」

僕は教室を出た…

この勝負で全てが決まるんだ…姫路さんや奏、みんなの為に頑張らないと

第十五問：さらば秀吉！ムツツリーニ春が！？（前書き）

新キャラ登場！工藤さんの胸はくらいに設定してます！（笑）

第十五問：さらば秀吉！ムツツリー二に春が！？

「では、両名とも準備は良いですか？」

Aクラスの担任であり、学年主任でもある高橋教諭が立会人となり、Aクラス教室で、Aクラス対Fクラスの試召戦争の幕は上がりました。

声をかけられた両クラスの代表は、ふたりとも肯定の意志を告げました。

「それでは一人目の方、前へどうぞ」

高橋教諭にうながされ、Aクラスから一人歩みます。

「ワタシから行くわ」

出てきたのは木下さんですか…。

それを見たFクラスから、一人名乗り出る。

「ワシがやるっ」

演劇のホープ秀吉君です

木下さんと同じ顔でより温和そうな表情の男子が進み出ました。

確か優子さんとは双子の弟でしたよね。

いよいよ始まります

「とじろでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「……あ。す、すまぬ姉上。あれは正直やりすぎた思ったのじゃ」

あ、あれっ？始まらないのですか？

「ふーん。悪いとは思ってるんだ。じゃーいいや。その代わり、ちよつとこつち来てくれる？」

少し意外そうな顔をしながらも、木下さんは秀吉君の手を取って廊下へ出ました。

え…戦わないんですか？あれっ？

「なんじゃ？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

『姉上、勝負は……どうしてワシの腕をつかむ？』

『悪いと思ってるってことは、折檻される覚悟はできているのよね？秀吉い』

『あ、ああいや、次はもつと気をつけて演じるゆえ、今回はみのがだだだだだっ！　あ、姉上っ！　その間接はそつちには曲がらなっ……っ！』

『あんたが謝ったくらいで！　地に落ちたアタシの評判が回復することなんて無いのよっ！　どうしてくれんのよー！』

『ひ、人の噂も七十何とやらというあだだだっ?!!』

『んなに、むうあてえるうくあーっ!!!』

『んのおおうーっ!!!』

「えっ…あっ? 明久君? 秀吉君が…」

明久君は悲しみが混ざった顔でこちらを見ました

「秀吉の為にも勝たなくちゃね」

えっ!?

「先生秀吉は頭が痛いから帰るそうです」

教室に戻ってきた木下さんが手についている血を拭きながら笑顔で答えました

「では…棄権とみなして良いですか？」

「…ああ」

私達は何か複雑な気持ちのまま一回戦は負けました

「秀吉君…頭痛早く治るといいですね…」

明久side

「では次の方お願いします」

「じゃっ行ってくるねん！」

次に立ち上がったのはクラスの元気の源的存在で青い髪のポニーテールに瞳は綺麗な緑色のアリス・ファン・クリスチーヌだ

「ああ頼んだぜアリス」

一麻がそう言っているとアリスはニカッと笑い

「まっかせなさい」

と言ってフィールドに立つ

『頑張れアリスっつ』

『俺達のアイドルっ！』

凄い声援だね

「じゃあ…私が行くね！」

そう言つてAクラスから出てきたのは腰まである黒い髪のポニーテールに垂れ目が特徴な子だ

「種山歌穂です！よろしくね！」

「よろしくねカホン！科目はそっちにゆずよう！」

「ありがとうー！じゃあ行くよアリスちゃん」

「凄いよアリス…もう馴染んでる」

「フィールドは…科学に変わった」

「「サモン！」」

そして二人の召喚獣が現れた

アリスの召喚獣は青いマントとランスが特徴な騎士だね！

種山さんは巫女さんだ！けどバズーカを背負っている

「行くよん！」

アリスが先手を仕掛ける

「え？早い！」

素早くランスで肩を狙ったがギリギリの所をよけられた

Fクラス アリス

科学 470

Aクラス 種山歌穂

科学 468

わずか二点差だ

頑張れアリス！

「あらよっとな」

「上手い！種山さんのバズーカ砲を上手くかわしてる！」

「流石だね！ならこれならどう！」

バズーカ砲が変形してランスになった

「いいねん！ランス対決だね！」

「行くよ！はああ！」

「やあああ！」

お互いに突き刺さり点数が減る

Fクラス アリス

科学 28

Aクラス 歌穂

歌穂 24

「凄い！あれだけであんなに減ったの！？」

美波が驚いているが本当に凄いよ

一発に魂がこもってる

「じゃあ決めるよ！」

「行きます！」

「はあああ」

お互いに盾を捨てて突っ込む

ドオンと音をたて煙が舞い上がった

「勝敗は!?!」

「勝者Fクラス」

高橋先生の驚いた声が聞こえた

Fクラス アリス
科学 10

Aクラス 歌穂
科学 0

『『やったあああ！』』

まずは一勝だ！

『アリスさん愛してるっつ』

『凄いぞアリス様ああ』

『やったね！アリスちゃん！』

「たはは…恥ずかしいよ」

「いい勝負だったねアリスちゃん」

「ありがとうカホン！」

お互いに握手を交わす

いい戦いだったよ

「さて、先行しておいてさらにプレッシャーを与えておきたかったんだが……カードの切り時か？ ムツツリーニ」

雄二に呼ばれてムツツリーニが振り向く。

「頼めるか？」

「……………問題ない」答えて進み出るムツツリーニ。

「頑張れムツツリーニ！」

「…まかせろ」

「おっと、彼が出てきたみたい。ボクがやるよ」

そう言っつてAクラスから一人女性が出てきた

「準備はよろしいですか？ では、両者前へ」

高橋教諭に促されて進み出るムッツリーニとAクラスの女性。

「……2年Fクラス、土屋康太」

「一年の終わりに転校してきました、工藤愛子です　よろしくね
…久しぶりムッツリーニ君」

「……ああ」

薄緑のショートカットに、すっきりとしたボディラインのボーイッシュな少女だ。工藤さんて言うのか

「教科選択はどうしますか？」

とつうよりムッツリーニ知り合いだったの!?

KYな高橋先生がムッツリーニに訊ねる。

「……………保健体育」

「ムッツリーニ君…保健が得意なんだってね」

工藤さんは意味ありげに微笑みながらムッツリーニに話しかけた。

ぴくりと反応するムッツリーニ。

「まさか…」

「そつだよムッツリーニ君。ボクだってかなり得意なんだよ？
…君と違って」

工藤さんはニヤリと笑う。

「実技でね」
「ザッ！」

Fクラス男子ほぼ全員の動きが止まった。

「その君」

「僕!？」

工藤さんは視線を移し、僕に声をかける。

「勉強苦手そうだし、ボクが教えてあげようか？ 保健体育。もちろん……」

やっぱり…馬鹿に見られてるんだね

コケティッシュな笑みをしながら口を開いた

「実技だね」

ふ…面白い。そうゆうことか。

僕は前髪を払いながら前に一歩踏み出す。

「フツ。望むところ」

「アキにはそんな機会、永遠に来ないから必要ないわよ！ 保健体育の勉強なんて」「

美波に妨害された。

「そうです！ 明久君には一生必要ありません！」

姫路さんまで…

「大丈夫です…私が教えますから」

「！？」

「吉井君…君…幸せ者だね」

えっどういこと工藤さん！？

Aクラスから凄い殺気が！

「えっ？駄目なんですか？」

ほら奏も首を傾げてる

「ぐはああ！可愛い」

AクラスとFクラスの男子が一斉に倒れた

「…工藤…俺だけに教えてくれ」

「やだなあムツツリーニ君…本気にしてる？」

「……（コクコク）／／」

「い、いやあ…まいったねこりゃ／／」

何だあのピンク色の空間は!？

「早く始めてください」

高橋先生がその空間をぶち壊した…

「…サモン」

「はいはいサモンっと」

「加速」

「きゃああ」

Fクラス 土屋康太
保健体育 560

Aクラス 工藤愛子
保健体育 490

「勝者Fクラス」

「瞬すぎて全くわからなかったよ…」

「あはは…負けちゃった」

「…すまん工藤…俺もどうしても勝たなきゃならない」

「いいよムッツリーニ君…えい！」

「……／＼／＼！」

ムッツリーニは工藤さんに抱きつかれた

ムッツリーニ羨ましすぎるよ…！！

『『異端審問だ…』』

FFF団は黒いフードを着る

「…待て！これは訳が」

『『問答無用！』』

FFF団は一麻に片付けられた

「明久君！」

「何…奏！うわっ」

奏の柔らかい胸が当たってるよお！

「えへへ…／／」

悪っぽく笑みを浮かべる奏だけど…可愛いよ！

第十六問：代表対決！雄二の本気！（前書き）

明久「今回は雄二が主役かあ…」

まあまあ…雄二が好きな方には嬉しいことだよ

第十六問：代表対決！雄二の本気！

いろいろとハプニングがあったけど今は2ー1で僕らFクラスが勝っている

「次の方は誰ですか？」

高橋先生が尋ねてくる。こっちは勿論

「あ、は、はいっ。私ですっ」

姫路さんだ。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから歩みでたのは久保利光君だ…

「やはり来たか、学年次席。ここが一番の心配どころだ」

久保君と姫路さんはほぼ互角だからね…学年次席はやっぱり凄いなだね

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ちょっと待った！何を勝手にー」

「構いません」

「姫路さん？」

そんな…姫路さんは総合科目が低いはずだ…大丈夫なのかな？

「それでは…始めてください」

それぞれの召喚獣が喚び出されたが一瞬で決着がついた。

Aクラス 久保利光 総合科目3997点
VS
Fクラス 姫路瑞希 総合科目4409点

「す、すごいよ姫路さん!!」

「4000点オーバー!?!」

「ぐっ…! 姫路さん、いつの間に強くなっただんだ……?」

「…私、このクラスの皆が大好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

そう言って姫路さんは久保君の召喚獣を切り裂いた

「勝者Fクラス」

高橋先生は冷静に告げた

「「よっしゃあああ！」」

「姫路さん大好きだああ」

「姫路さん最高！」

湧き上がる歓声

みんなの為…か。素敵だよ姫路さん

「次の方」

高橋先生は直ぐに言い放つ

「おっし…俺の番だな」

「雄二…」

立ち上がったのは僕らの代表…坂本雄二だ

「雄二…負けてもいいから…頑張れよ」

「ぬかせ明久…負ける気なんかさらさらねーよ」

今は3ー1。雄二が負けても問題ないけど

そう真っ直ぐな目をされたら…認めるしかないじゃないか

「任したよ雄二」

「ああ…任された」

お互いにハイタッチをする

「教科は何にしますか？」

雄二の相手は…やっぱり霧島さんだ

「数学でお願いします」

「分かりました」

フィールドが数学に変わりお互いに見つめあう

「…雄二…負けない」

「ああ…全力で来いよ翔子」

「では始めてください」

いよいよだ…僕は隣にいる奏と真っ直ぐ見ている

「「サモン!」」

合い言葉により現れる召喚獣

霧島さんは鎧をまといサーベルを持っている

雄二は白い服にメリケンサックを装備している…僕と同じ不良装備だ

Fクラス坂本雄二
数学520

Aクラス霧島翔子

「凄い！わすが二十点差だよ！」

奏は驚きながら僕を見て僕は笑顔で頷いた

「行くぜ翔子おおー！」

雄二はメリケンサックで素早く叩きまくる

「オラオラオラ！」

「…くっ」

20、30と点数が減っていく

「くっくっええー！」

「…甘い」

霧島さんの召喚獣が雄二の拳を避けて左腕に剣を突き刺した

「ちっ！うおっ！」

さらにサーベルで突きまくる

「雄二……！」

「やるな翔子！なら」

サーベルをわざと肩に突き刺して拳を構える

「……！！く」

「オラアアア！」

重い一撃が霧島さんの召喚獣を吹き飛ばした

Fクラス 坂本雄二

数学 230

Aクラス 霧島翔子

数学 210

「よし雄二が優勢だ！」

「頑張れ代表ー！」

「いけええ代表ー！」

「愛子頑張ってー！」

「いけえ坂本！」

「Fクラスの力見せてやれええ」

「ファイトだよんユウジー！」

激しい攻防戦

「オラアアア！」

「…甘いわ雄二！」

霧島さんはサーベルで雄二の右腕を切り裂いた

「…よ！」

雄二の召喚獣が羽織っていた物を霧島さんの召喚獣に掛けた

「今じゃ坂本！」

「くらえええ！」

そして思い切り殴り飛ばし召喚獣のサーベルを破壊した

Fクラス 坂本雄二

数学 56

Aクラス 霧島翔子

数学 45

次で勝負が決まる！

「やるな翔子…お前…数学俺より低くかったよな？」

「…雄二に追いつきたい…私はその為に努力をした」

「そうか…でもな翔子…お前じゃ勝てねえ」

「…え？」

「俺はお前に勝つために努力をした。だが点数で負けた」

「……うん」

「けどな翔子…それがお前の限界だ…」

「え…?」

限界ってどういうことだろう?

「俺は数学が得意だ。だから今からでもどんどん伸びる。実は本気出してないんだよ俺」

「…そんな私は今これで精一杯…」

「ああ…だろうな…お前は数学が苦手だからな」

雄二はそう言った後召喚獣を構えさせた

なるほど。だから…雄二は数学で挑んだのか

「だがな翔子…俺は他の教科は全く駄目だ」

「……」

「だから……」

雄二は加速をして一気に霧島さんの前に来た

霧島さんはとつさにナイフを取り出す

「俺に教えてくれ」

「……え……」

雄二の召喚獣は思い切り拳を叩きつけ霧島さんの召喚獣はナイフで切り裂いた

「俺はお前に数学を教える。お前は他の教科を教えてくれ……」

「……雄二」

ドオオンと爆風が上がった

『『勝敗は！？』』

Fクラス 坂本雄二
数学 3

Aクラス 霧島翔子
数学 0

「翔子…俺はお前が必要だ…」

「…/ /!？」

「勝者Fクラス！」

「「やったあああああ」」

今の君は凄く格好いいよ雄二…

『…みんなごめんなさい。負けてしまった』

『『パチパチ』』

『凄いや代表…』

『苦手科目なのにあんな点数…私には取れない』

『…みんな……ありがとう』

『坂本君と幸せにね！』

『…愛子!! / /』

「まさか雄二がねえ…」

「悪いか明久…」

「ううん…全然…」

僕らはハイタッチをした

「霧島さん…いい彼氏がいて羨ましいです…」

奏は笑顔で霧島さんを見ていた

「これで僕らの勝利だね！」

「いや…高橋先生…こちらの方を一点引いてください」

「「はあああ!?!」」

何やってんだよ雄二!そんなことしたら逆転されてしまうだろう!

「せつかくFクラス勝利をを!」

「まあまあ…みんな落ち着いてん。きっとユージにも事情があるんだよん」

275

「ああ…納得が行かないんだ…すまないみんな」

「納得がいらない?…」

「ああ…ババアを納得させるにはあれを見せるしかねえ」

何を言ってるんだらう?

「「ともかく反対だ!」「

「皆さん…お願いします…必ず勝ちますから」「うるうる

「了解です姫!さあ!次も勝とうぜ!」「

切り替え早くない!?

「まあ…いいか…」

「では一点引いて只今3-1です。なお、引き分けの場合、無効試合とさせて頂きます」

さすが高橋先生…やっぱり冷静だ

「なめたまねをしてくれるわね…まあいいわ」

「引き分けにしてAクラスが勝つからね！」

「あと、タッグ戦にしてくれないか？」

「タッグ戦ですか…」

「ああ…その方が早いからな」

珍しくみんな頷き納得したようだ

「ではタッグ戦を始めますのでペアをお願いします」

雄二は僕の方を見て

ニヤリと笑った

「さあ明久行ってこい」

「僕!？」

「ああ…お前の勝利が大事な鍵だからな」

まさか僕が選ばれるなんて…

「やれやれ…結局最後は僕の出番か…」

「ああ…お前の本当の力みせてやれ」

仕方ない…いっちょやりますか!

「と…ころでペアは誰なの?」

「じゃあ私が！」

「姫路さんはもう出たよね」

「あつ…」

美波が笑顔で立ち上がった

「じゃあ私ね！」

「美波ちゃんずるいです！」

美波は笑いながら僕の所へ来た

「じゃあ行こア」「いやお前じゃ駄目だ」「ええ！？」

美波は雄二に食ってかかる

「何だよ坂本！」

姫路さんは安心したように息を吐く

「お前じゃ…明久の力を發揮できないからな」

「そ、そんな訳」

雄二は奏の方を見た

「まさか坂本あんた!？」

「頼めるか吉井奏？」

奏はゆっくりと頷いた

「じゃあ行こう奏」

「はい…明久君」

奏に手を差し伸べ起こしてあげ、そのまま進みでる

「ビュービュー！学園一のカップルだよん！」

「吉井明久ああ」

「…負けられない」

「代表！？」

僕は奏と手を握りフィールドまで歩いた

手を繋げば緊張や怖さがなくなる…奏が教えてくれたことだ

「…明久君？／／」

「頑張ろう奏！」

「...!」

第十七問：一麻が裏切り！？…大好きだから…（前書き）

今回は奏の腕輪の力が発動します！

奏「正直あの姿…は露出が多くて恥ずかしいです／＼」

第十七問：一麻が裏切り！？…大好きだから…

Aクラスに勝った僕らだが雄二のお願いにより一点を無くし本当の最後の戦いが始まるうとしていた

なんかラスボス戦！みたいで少しワクワクするよ！

「奏！頑張ろうね！」

ニコツとパートナーの劉：奏に微笑みかけると奏はこっちを見上げて頷いた

うっ…可愛い

「Aクラスの方は誰ですか？」

高橋先生は冷静に質問する

「私です！」

元気よくフィールドに上がったのは…

「里穂…！」

一麻や奏と同じ小学校からの仲の瞳が赤く…見た目はいかにもとあるシスターさんに似ているけど胸が大きい静寂里穂だ…

「まさか最後に来るとはね」

「ごめんなさい二人共…てへっ」

『つおお！あの子ってあの有名アイドル『BAKATESU』の静寂里穂か！？』

『サインしてください！』

『結婚してください！』

最後は無視しよう

「さすがアイドル…可…」
「ホン」さて！里穂さんのパートナーは
誰？」

危ない危ない…また奏に誤解されるところだったよ…

『俺だ明久』

Aクラスの方から一人の男子が出て来た

そう…馬鹿な親友でクールなあいつ

「一麻!？」

「…」

「よじゃねえ!何でてめーがそこにいんだ!」

雄二が怒鳴りつけるのも無理はない…だって朝からいなかった+ A
クラスの所に居たからね

『千原あ！てめえだけよくも女子の戯れに！』

『殺すよ吉井、坂本、土屋と一緒にまとめて殺しちゃうよ』

「「「！？」」」

ちょっと待って！雄二、ムツツリー二にわかるけどなんで僕まで！

「いい度胸だ」

一麻は首の骨を鳴らしながら睨みつけた

『『『頑張れ吉井ー！』』』

「切り替えはやつ！」

「でもどうして一麻君がAクラスにいるの？」

「すまないな奏…実は里穂に昨日のことで…責任とれと言われて」

一麻は拳を握りながら涙を流す

「だから明久に昨日やられた分を倍にして返してやるよ」

「ちょっと待ってよ！何で僕が殴られなきゃならないの！？」

「いやあ…お前が鈍感すぎるのがムカついてさ」

こいつ…僕を沈める気だ

「そうはいかないよ一麻！僕らだって負ける訳には行かないんだ！」

「俺だって応援してやりたいが… Aクラスだって必死なんだ…すまないが勝たせる訳にはいかねーよ」

「そうかい…なら…」

「馬鹿な一麻には負ける気しない！必ず勝つ！」

「やってみる明久」

「お互いに睨み合う」

「奏はオロオロしながら僕らを見ている」

「科目は何にしますか？」

「俺らに選択権はない…明久達が決める」

「わかったよ…じゃあ奏」

「何ですか？」

「僕に任せてくれないかな？」

奏は少し驚いた。奏は僕が何を選ぶかわかったようだ

奏が一番苦手な科目で僕が一番得意な科目

「大丈夫！必ず奏は守ってみせるから」

奏はみるみる笑顔になっていき

「はい…!! / /」

と言ってくれた。奏はいつも僕を信じてくれる
だから勝たなくちゃ

「日本史をお願いします」

「馬鹿な吉井が大丈夫か？」

「何かあいつ得意らしいぞ」

「それって100くらいだろ」

「おいおいたしか吉井さんが苦手な科目だよな」

「何考えてんだ吉井の奴」

周りが好き放題言うけどいきりたつ奏を抑え一麻達を見る

「承認します…では始めてください」

僕は奏を信じてる…そして僕の勉強の成果を見せる時だ！

「いくぜ明久！日本史を選んだこと後悔するんだな！」

「絶対に負けないよ一麻！」

「「サモン！」」

四人一斉に呼び出す

僕は学ランに木刀

奏はセーラー服に本を持っている

一麻は変身ベルトをつけヒーローみみたいだ

里穂はいかにもアイドルらしい格好でマイクを持っている

日本史

Fクラス 吉井奏

560

Aクラス 静寂里穂

420

Aクラス 千原一麻

1000

『何だあれ!』

『1000点!?!?』

『化け物かあいつ!?!?』

『そういえば聞いたことあるぞ…一年の頃…全教科が1000点才
ーバーだった奴がいたって』

『!?!?』

「一麻…馬鹿じゃなかったの?」

「ん?ああ…俺が観察処分者になったのは学力じゃねーのさ」

「流石一麻です…まさかここで本来の成績を見せるとは」

「へっ明久…お前達の負けだな」

「違つよ一麻…」

僕の召喚獣の点数が今頃になって表示された

Fクラス 吉井明久
1600

「僕らの勝ちだ…」

奏side

「明久君凄いよ！」

私はそう言っで明久君に抱きついた

だつて1600だよ!?

私だつて頑張つて500くらいなのに

『『『ええええええ!!』』』

周りからは驚きが絶えない…いえ…ほぼ全員が驚いている

私だつて驚いて口調が戻つちやつたよ…

「す、すごいな明久…まさかあんなことがあつたのにこんな点数を取れるとか」

「麻君は少しビビりながら誉めている

「…明久…凄いですね」

里穂も驚いてるし高橋先生だってあんぐり口を空けている

その時ポンと手が置かれた

「奏…凄いよ…500点もいくなんて…里穂は頼んだよ」

「／／／／」

この時の明久君がとてもカッコ良く見えただあ

「行くよ奏…！」

「…うん…！」

「面白れえ！いくぜ里穗！」

「全力で迎えつつのみ」

「ウオオオオ！」

明久君は木刀を投げ捨て一麻君も武器を投げ捨てた

「小細工無しだ明久！」

「望む所だああ！」

一麻君を明久君に任せて私は里穗ちゃんに攻撃を開始した

「いくよー!」

本から魔法陣が現れ魔法を唱える

「きゃああー!」

火の玉が里穂ちゃんの召喚獣を攻撃して100点減らした

「!メロディーボイス!」

里穂ちゃんの召喚獣が歌い始めた瞬間に私の召喚獣の点数が下がっていく

「えっ!?!何で!」

吉井奏 460

「私の召喚獣の攻撃は歌うことで相手の点数を減らしていくんですよ」

「ふええ!?!」

「じつしてる間にもどんどん点が消えていくよー!

「あらには…」

「きゃー!」

吉井 奏 254

里穗ちゃんの召喚獣に蹴られて点数が減る

「攻撃もできます」

っ、強いよう！

どンドン減らされて行く私の点数…

落ち着かなきゃ…

「…」

私は明久君の顔を見た

真剣な…格好いい顔…そうですよ…私は可愛い顔も困った顔もこんな真剣で凛々しい明久君も大好きなんです

だから告白しようって決めたんです

大好きな大好きな人に…

私を外の世界に連れだしてくれた人に

だから

「私は勝たなくちゃいけないんです!」

吉井奏 23

「トドメです奏!」

私の召喚獣は本からマスクを召喚して里穂ちゃんの召喚獣の口を狙って発射しました

『!』私の召喚獣は本からマスクを召喚して里穂ちゃんの召喚獣の口を狙って発射しました

『!?!』

「ああ!しまった:~!」

今だ!

『吉井さん頑張れええ』

『カナナン決めるんだよん!』

『我らの女神いい!』

「行きますよ!明久君!」

私はピンク色の腕輪をつけました

『純愛の腕輪:この腕輪は点数が400以上の時に好きな異性との

召喚獣と一緒にじゃなければ使えない』

私は明久君が大好きです！

腕輪が輝き私の召喚獣は天使の騎士へと変わりました

「まさか…腕輪があつたなんて」

『可愛いいい』

『女神様ああ！』

「行きますよ里穂ちゃん！はああ！」

私の召喚獣は空中に舞い上がり光輝いた

「!!!」

Aクラス 静寂里穂

日本史 0

Fクラス 吉井奏

日本史 0

引き分けですね…

あの腕輪は代償として2000持っていくんですよね…

明久君の助けに入りたかったのですが…

「後は任せましたよ明久君…」

第十八問：観察処分者対決！Aクラス戦決着！（前書き）

バカテスト 歴史

問 次の（ ）に正しい年号を入れなさい。

『 （ ）年 キリスト教伝来 』

霧島翔子の答え

『 1549年 』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに凍える君の手を握った1993 』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

土屋康太の答え

『 雪が振り続ける夜、ベッドの中で凍える君の00000を握った
0721 』

教師のコメント

卑猥な表現でも間違いは間違いです。

吉井明久の答え

『 1549年 』

教師のコメント

間違えて0点にした先生を許してください

吉井奏の答え

『ずっと…桜の下で待ち続けた1450』

教師のコメント

確か吉井さんは日本史や世界史は苦手でしたね

第十八問：観察処分者対決！Aクラス戦決着！

『みんなさんごめんなさい』

『気にするな吉井』

『格好良かったよん！さすがカナナンだね！』

『お疲れ様です奏ちゃん！』

『後はアキだけね…』

『1600もあるのだから大丈夫かの…』

『……どちらも観察処分者だから操作は上手い』

『それじゃあ明久君勝てるかわからないじゃないですか！？』

「きっと大丈夫だ姫路……」

「信じてますよ明久君……」

「オララララララ！」

僕は一麻と激しい殴り合いを繰り広げていた

今の所どちらも点数は減ってないけど……

「……」

一麻の拳を何度もガードしてきたから腕が痛い

「どうした明久！」

僕は一麻より喧嘩は強くはない

「そこだああ！」

「ぐおお！」

一瞬の間を見て一麻の召喚獣の腹に拳を決める

フィードバックにより一麻にもダメージの半分が返ってくる

「痛え…やるな明久」

吉井明久 1600

千原一麻 800

「じゃあああ…！」

「おっと…オラア！」

「うぐー！」

今度は僕が腹を殴られ僕はうずくまった

「けほ…！」

「さらに追い討ちだ！」

蹴りを放ってきたのでギリギリ避ける

「甘いんだよ！」

「ぐわっ」

吉井明久 1450

千原一麻 800

「くっ！」のおお

「ぐふっ！」

顔殴りつけ一麻の口から血が飛ぶ

「貰ったああ！」

ストレートパンチで顔を狙ったが一麻が両腕で防ぐ

「くらえ！」

「うわ！」

逆にアッパーを打ってきたのでなんとか避ける

「「「だああああ！」」」

拳と拳がぶつかり合う

「明久！本当の観察処分者のお前は俺より操作が上手い…けどな」

「じゃあああ！」

僕が放ったパンチをまともに受けて

一麻と召喚獣は吹き飛んだ

「ぐ…は…見せてやるよ明久」

すると一麻は腕を空へかざした

「まさか…！腕輪！？」

「ああ！変身の腕輪だ！」

腕輪が輝き一麻は目を輝かせた

「くぐりつづい…！こんなときを待ってたんだよ…！」

『変身の腕輪…相手の点数が1000以上の相手の時に使える…代償としてフィードバックが倍になる』

「行くぜ明久あ！発動言葉は…変身！！」

一麻の召喚獣の点数が光り始めた

「眩しい…な、何だ？」

「俺の腕輪の能力は…ランダムで点数が変身するのさ」「

千原一麻 2380

「ええええええ!?!」

いやいや…ランダムでも限度があるでしょ!!!

「おっラッキー!」

『2000!?!?』

『ヤバいだろあの腕輪!』

「行くぜ明久…」

えっ？

「ぐぐぐぐわー！は、早い！？」

パワーも上がってる

「…」

腹を殴られ嫌なものが込み上げてきたので吐き出した

「がはっしほっ」

口から赤い液体が流れる

『明久君！』

吉井明久 780

デタラメすぎるよ…あのパワー

「オラララララ！」

「う…がああ」

吉井明久 450

『アキ!』

『明久君!』

がは…このままじゃ

「くらえ!」

鳩尾に直撃して吹き飛ば

「うわあ!」

吉井明久 230

強いよ…こんな勝てる訳ない

このまま負けるのか…

「オラア！」

「うぐ！」

吉井明久 130

駄目だ…意識が…

「悪いな明久…止めだ」

く…ここまで頑張ってきたのに負けるのか…畜生

『明久君!! しっかりしてください!!』

「!?!」

大好きな人の声が聞こえた

「奏…そうだよ」

僕はAクラスに勝って姫路さんや奏を環境のいい設備にする為に頑張ってきたんだ

そして奏に告白する為に…

だから

「負けられない！」

「うおおお！」

突っ込んできた召喚獣を交わし殴りつける

「うぐぐ…がは…」

千原一麻 580

「一発で…こんなに…がは」

「はあああ…！」

何度も何度も殴りまくる力一杯全力で

「がああ！」

千原一麻 180

「はああ！」

「くっ！おらあ！」

お互いの拳が顔面に直撃した

吉井明久 5

千原一麻 5

『並んだ…』

『次が勝負だな』

『明久君…』

『一麻…』

「はああああ！」

お互いに全力でダッシュして拳を握る

「うおーじゃあああああああ」

「だあああああああああああ」

お互いの召喚獣の拳が直撃した

「……」

僕はその場につづくまり腹を押さえた

「…畜生…俺の負けかよ」

ボタンと一麻が倒れる

吉井明久 1

千原一麻 0

「勝者：Fクラス」

高橋先生の冷静な声が静かに響いた

『え…やった？』

『やったあああ！Fクラスの勝利だああ』

『よくやったぞ吉井！』

『いい戦いだっ！』

『アッキー格好良かったよん!』

そしてAクラスからも歓声が上がりみんなから拍手が送られた

「痛てて…おめでとう明久…お前の勝ちだ」

「うっん…僕だけの力じゃないよ…」

僕はそう言ってから奏を見る

「明久君—!」

「うわっ! / /」

奏は嬉しそうに抱きついた

「お疲れ様です明久君！」

「ありがとうございます／＼！」

この時ばかりはみんな空気を読んでくれたらしく二人を除いて笑顔で迎えてくれた

「明久君…お話を聞きましょうか」

「アキ…覚悟できてるわよね？」

「ちょっと…姫路さん…美波！フィードバックで疲れてるから勘弁してー！」

『お疲れ様です…』

『すまないな…負けちまったよ』

『いいんですよ…一麻は頑張りました…みんな満足してくれています』
『よ』

『…はは…かっこいいな俺…』

『一麻…』

『ん？……ん…… / / / 』

『……ぷはっ……自分を咎めなくていいんですからね』

『……ああ / / / 』

こうしてFクラスとAクラスの戦いは終わった…

第十九問：終結！ハッピーエンドではないの？（前書き）

バカテスト 保健体育

問 以下の問に答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

吉井奏の答え

『好きな人との絶頂』

教師のコメント

…… / /。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれてはじめての生理。医学用語では、生理

のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳しくすぎです。

第十九問：終結！ハッピーエンドではないの？

Aクラスとの激闘を終えて僕らは馬鹿じゃないと証明した

「じゃあ交渉と行こうか…」

Aクラスみんなはガツクリとうなだれている

そりゃあFクラスに負けたからショックだよな

「じゃあ…ババア…約束通り従ってもらおうぞ」

雄二はAクラスではなくいつの間にか来ていた文月学園の学園長
…ババア長を見た

「相変わらず言葉が汚いじゃないかクソジャリ…わかったよ。約束は約束だからね」

いや…あんたも十分汚いから

「雄二…約束って？」

雄二は頷くとみんなに聞こえるように言った

「俺はAクラスが目的でやってきたんじゃないんだ」

『どづいことだよ坂本！』

『設備交換するんじゃないのか？』

「いや…俺はそれより上のことを狙っていた」

その言葉でみんながざわついた

「それは…このFクラスがAクラスに勝った時が条件だ」

雄二は付け足すように言った

「そして…吉井明久の勝利…これが一番重要だ」

『何で明久君が重要なんですか？』

「姫路…こいつは観察処分者…つまり学園一の馬鹿だ」

その言葉にみんなが頷いた

「ちょっとお！僕は学園一の馬鹿なんかじゃないよ！」

『でもそれならアキだけじゃなくて…千原も良かったんじゃないの？』

「島田…あいつの本当の実力を見ただろ。あいつは観察処分者だが…本来は学園次席レベルだ」

『！？』

そう…一麻は全教科を1000点以上取ったことがある生徒だったんだ

「そこで俺はこの1000点以上の実力を出す生徒と戦って明久が勝ちなおかつAクラスに勝てばどんなことでも良いと約束した」

「そして明久は1600を叩き出した…」

「そして勝ち、Fクラスが勝ったね」

「まさか…観察処分者があんな点を取るなんて…正直びっくりしたさね…あんたが初めてだよ学園であんな点を出したのは」

妖怪ババア長は笑いながらパンパンと手を叩いた

「さあ…お話は終わりだよクソジャリ」

「だな…だがAクラスのみんなにはまだ残ってもらおうぜ」

雄二の言葉にみんな驚いたが霧島さんが頷きみんな残ってくれた

「俺らの要求は二つだ」

ババア長は少し眉を動かしたが動じない

「一つはFクラスの設備をAクラスと同じにしろ……」

「はあ……本来は設備は交換でしか変えられないさね……いいよ」

その言葉にFクラスは歓声を上げた

『『やったあああ!』』

『ついに俺らもあの設備に!』

「そして二つ目は…一麻、ムッツリーニ、明久、秀吉、来い…」

あっ出番のようだね…

僕らはAクラスの前に立つ

「お前達のクラスから何人が貰っていく」

雄二の言葉にみんな驚く

そりゃそうだよね…そんなことしたらAクラスは学力が低下する恐れがあるから

「みんな…従いましょう」

「木下さん!?!」

「私達はFクラスに負けたのよ…しかも一点まで取り消して貰ってまで」

木下さんにはっこり笑った

「吉井君…あなたの覚悟と努力の結果…素晴らしかったわ…それに吉井さんもね」

「わ、私も!?!」

木下さんはふつと笑うと雄二の方を見た

「それで誰を貰うのかしら？」

雄二はああと口を開くと僕らに目で合図をした

僕らはそれに頷く

「何、トレードだ…こちらからはFクラスのメンバーを何人か送る」

「いいわよ」

「じゃあ…種山さん」

「えっ私!？」

僕が口を開きみんながしゃべり始めた

「姉上…」

「…工藤」

「里穂…」

「そして翔子」

「」「Fクラスに来てください！」「」

「いいの吉井君！？」

「うん！だって一年の頃友達だったじゃないか！」

「秀吉…？」

「ワシは分かっているぞ姉上…姉上がFクラスに興味を持っていたことを」

「バレバレって訳ね」

「あの…ムッツリーニ君…本気？」

「……（コクコク）」

「あはは…参ったなあ」

「一麻…あなた」

「お…俺はただ…お前の膝枕が好きただけだ…／／」

「…雄…ひぐっ…」

「しよ、翔子！？すまん！まさか嫌だったか！？」

「…違う…雄二と一緒にクラスになれると思ったら嬉しくて」

「……………///?」

『では以上でFクラスとAクラスの試験召喚戦争を終了します…なお、Fクラスの転入生さんは遅れずにきてください』

高橋先生の言葉でみんな叫ぶ

『ようやく終わったんだな!』

『女子生徒が一気に増えたぞ!』

ババア長はあな要求も許可して去って行った

今回ばかりはババア長を誉めないかね

ちなみにFクラスからは武田君、長嶋君、岡崎君、佐川君、新田君
がAクラスに行ったんだ

高い成績を取って敵として出てきそうだ

『吉井さん！僕達と付き合ってください！』

『じめんなさい…』

『ぐはあああ』

Aクラスの人達が奏に告白したが…あっさりと断られていた

あれ？久保だよね？

久保君ですら断られたのか

『翔子…えーと、これからもよろしくな／＼』

『…雄二…それは告白と取っていいの？』

『（ああ…大好きだ翔子！）そ、そんな訳ないだろ！』

雄二…本心が伝わってないよ

『…私は雄二が大好き』

『!?!?!?!』

『…今からデートに行く』

『ちょっと待って翔子！心の準備が…』

ツカツカ…ガラッピシャン！

雄二の首根っこを掴み霧島さんは教室からいなくなった

『里穂…俺と…えーと…あー…そう！子供を作…ぐばらああ』

『一麻！！大胆すぎます！！／＼／＼／＼』

何言ってるんだよ一麻は…

『『千原をコロセエエエ！』』

まあ…FFF団がボコボコにされたのは時間の問題だった

『ムツツリー二君…話って何かな?』

『……俺と付き合ってくれノノ』

『えっ…あっ…うん。よろしくねムツツリー二君! (チラッ)]

『!?(ブシャアアア)』

凄いことになってる…

『彼氏…かあ…』

『『アリスさん付き合ってください!』』

『ごめんねん!アリスさん好きな人がいるの』

『『ぐああああ』』

「それにしてもみんな羨ましいなあ……」

僕は奏を見た……

すると奏はこちらに近づいてくる

今しかない！

「奏！」

「何ですか明久君？」

「あ、あのさ…桜の木の下で待ってて貰えないかな？」

そう言えば文月に咲き誇る桜はまだ春の明るさを告げているんだよね…

「えっ？あっ…はい」

奏はにこっと笑うと掛けていった

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

聞いたことのあるような声が…

そこには生活指導の西村先生（鉄人）が立っていた

「あれ？西村先生どうしたんですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようかと思
つてな」

「我がFクラス？」

何を言ってるんだこの人は

「ああ、今度から福原先生に変わって俺に担任が変わるそうだこ
れから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「「「「「何iiiiiiiiiiii!?!」「」「」「」

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがる

あのババアアア！

「いいか。確かにお前等はよくやった。まさかFクラスが勝った時は正直驚いた。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいものじゃない」

何も言い返せない。

「特に吉井、坂本、千原は念入りに監視してやる。なにせ、開校依頼初の観察処分者とA級戦犯だからな」

くっまさかこんな罫が！

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通り楽しい学園生活をenjoyしてみせますよ！」

「・・・お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

「こればかりは無い!!」

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間2時間設けてやるじ。

」

「なっ!!」

けど僕はこの時少しやる気が出た…

この先…Fクラスの新しい設備を狙ってくるクラスがいる…だから…
…今よりもできなくちゃ

「とりあえず…吉井…頑張ったな」

「え……」

西村先生はそう言うとフツと笑い教室を出て行った

「アキ！クレープ食べに行かない？」

え？

「美波ちゃんずるいです！明久君！私と映画に行きませんか？」

えええー！？

「ちょっと待ってよ二人共！！」

これから告白イベントなのがいい

「ちょっと用事があったて

「手伝いっわ（ます）「！

「いや！手伝うことじゃないよ！

「じゃあ何ですか？

ここはストレートに言っ飛ばさよう！

『綾君会いたいよん…』

『里穗待て！キスは今は危険だ！』

『ムツツリーニ君…大人のキスしない？』

『（ブシャアアア）』

周りが凄いいけど今は…この場を切り抜けることが大事だ！

「今から告白しに行くんだ！」

二人はえっ？と言う顔になり真っ赤になった

「えっ？何？」

「明久君…私は準備できてます！」

「アキ…どっちに言うの？」

「は？」

何を言ってるんだこの人達は…

「ごめん…急いだから」

そうやって僕は二人を抜き去り教室を出て行く

『明久君ー！？』

『アキーー！？』

僕はFクラスに戻り鞆を持ってから急いで桜の木へ向かった

第十九問：終結！ハッピーエンドではないの？（後書き）

次回でいよいよ第一期完結です！

第二十問：Fは無敵な合い言葉（前書き）

いつも感想ありがとうございます！

第一期完結です！

明久の恋の行方はいかに！

第二十問：Fは無敵な合い言葉

桜がまだ満開な文月学園…その道にある大きな桜の木に私…吉井奏は…見とれていました

「相変わらず美しいです…」

桜と言えば…前にテレビで見たのですが…

卒業式…桜の下で待つ女の子…そして送れてやってきた男の子が…告白…というのがありました

「告白…かあ」

私は桜を見ながら…決心を固めていました

そう…私は今日、大好きな人に告白をするのです

とても優しくて、明るく…馬鹿だけど大好きな人

「もう告白をしたのかなあ？」

彼もまた…今日、大好きな人に告白を言ったのです

『桜の木の下で待つてて！』は私の心をくすぐります

淡い期待を抱いてしまいます…もしかしたら明久君は…と

ですがそれは有り得ないです

だって…彼は私が好きはずないから…

「…今頃…彼女さんと…」

考えていて自分が哀れに思えます…

「もしかしたら…彼女さんと歩いているのかな？」

いえいえ！諦めては駄目ですね！例え低い可能性でも賭けてみる価値があります

桜がひらりと私の肩に落ちてきました

そうでした…明久君と私の出会いも桜が満開な頃でしたね

そんな時…今は引越した大事な友達の顔が浮かんできました

「あなたは…今の私にどう言ってますか？」

投げかけたって返って来ないのに…

「はあ…早く会いたいです…明久君」

私は口を開けいつものように歌い始めました

歌詞は無いのにいつも明久君が笑顔で耳を傾けて聞いてくれる歌を

『つてよー!』

誰かの叫ぶ声が聞こえたので私は歌を止めました

「あれは…明久君!？」

一緒にいるのは瑞希ちゃんと美波ちゃん…ですよね

そうでした…彼女達もまた明久君が好きなんですよね？

あれ？何故疑問になってしまったのでしょうか…

『——！！』

『きゃああ！』

あの方達は誰でしょう？瑞希ちゃんと美波ちゃんを捕まえてどこかへ連れて行きました

見たこと無い人達でしたが…一体

『あっ！奏〜！！』

明久君がこちらに気づき走ってきます…

女の子はいませんが…何故でしょう…心臓が…トクントクンと高鳴ります

『あ、明久君！／／／』

ああー顔も熱いし…声も裏返ってしまいましたあ！

あう…／／／

明久side

「誰だったんだ…」

見知らない人達だったけど助かった

校舎から出ようとしたら…

『『アキ（明久君）！！』』

『美波、姫路さん？』

『明久君は告白はもう終わっ たんですか!?!』

『え…いやまだだよ』

『焦らなくてもいいわよ瑞希…アキは告白なんてむいてないんだから(私達が必死にアピールして振り向かないし)…』

『それどういう意味さ!』

『そのままよ!アキが告白なんかできる訳ないじゃない!』

『そうです!明久君に告白なんか必要ないですしできる訳ありません!』

『失礼な!!僕だって本気になればそのくらい…はっ!』

『そのくらい何よ?』

『そのくらい何ですか?』

『…とりあえず！僕は用事があるから！』

『『逃がさないわよ（しません）！』』

『うわああ！凄いスピードで靴をはいて追いかけてきたアア！！』

これは捕まると覚悟した時…

『人の恋路を邪魔すんじゃねえよ』

救世主^{メシア}が現れた

『誰ですかあなたは！？』

『瑞希!?!』

『駄目だよ! 明久君を傷つけるなんて許さないからね!』

『くっ 誰よあんた達!』

『とにかくお前らはあっちでOHANASHIだ』

『離してください!』

『アキ! 覚えてなさい!』

二人のメシアは姫路さんと美波を捕まえてどこかへ連れて行った

『何なんだ…あの人達…とりあえず感謝しなきゃね!』

そんなことがあって今に至る

「…あつかな…」

僕は校舎から出て奏を見つけた

声を掛けようとした時…奏の姿が改めて目に入った

桜色の髪はとても美しく…昔とは違い大人びた表情にドキンときた

もし奏に彼氏がいたらと一瞬考えたがためらいを振り払い

「奏〜!!」

大好きなあの人所へ走って行く

僕に気づいた奏は顔を真っ赤にしながら僕の名前を呼んだ

「ごめん…待たせちゃったかな？」

「いいえ…全然大丈夫ですよ」

よし…覚悟を決めて

「あのね奏（明久君）！」

「か、奏から先でいいよ！／／」

「いえ…あ、明久君どうぞ！／／」

「…／／」

どろじよつ……凄く気まずい

「じゃ…じゃあ一緒に言わない？／／」

「い、いいですね！そうしましょう！／／」

「明久君（奏）…」

僕は同時に口を開く

「僕は（私）」

そして大きく息を吸って

「明久君のことが大好きです！ってあれ？」

え…今なんて…

「もう！明久君ずるいですよー！／／／自分だけ…逃げるなんて／」

奏は真っ赤になりながら必死に叫ぶ

でもそんなことはどうでもいいんだ

「奏！」

「ひゃあっ！／／」

僕は思わず奏を木に押し付けた

「あ、あき、明久君…顔がちか、近いです／／」

「奏…何て言ったのかももう一回言ってくれないかな？／／」

僕は真つ赤になりながら奏に問い詰める

「ひゃう…まさか明久君…聞き逃したんですか？／／／」

奏は涙目になりながらこちらを見つめてくる

「うん…だからもう一回／／…！？」

何か頼に柔らかい…

「ん…これがさっき言いたかったことです！／／／」

「……………！？／／／」

僕はようやく奏にキスされたことがわかった

「私は明久君が好き好き好き！大好きです！」

「！！／／／／／」

「…明久君は…私のこと…どう思っていますか？」

「え…僕は…」

ストレートに言って逆に伝わりにくい場合がある…ならここは何かと合わせて

「僕は奏の全部が好きだよ！！」

「／／／／／／／ふえ！？」

しまったああ！これじゃあまるで僕が奏の胸や体も好きだって言ってる変態野郎じゃないか！！

「明久君…」

「はい…」

駄目だ…終わった…さらば僕の青春

明日からどうやって生きていけばいいんだー

「明久君…本当に私でいいんですか？」

「え…？」

「私よりも素敵な方は沢山いますよ？」

「何言ってるんだよ奏！僕は奏と初めて会った時から…大好きだよ…だから僕の彼女になってください！／＼」

「ひぐ…明久…君」

「わああ！やっぱり僕なんか駄目だったかな？」

「そんなわけ…ないじゃないですか」

「え…？」

「こちらこそふつつか者ですがよろしくお願いしますね…明君 /
」

奏は涙を拭いにつこりと微笑んだ

「…うん。」「ちびっこそ／＼／」

「明君…」

そう言って奏は目を瞑る

「ほえ？」

「告白した後…カップルがすることはわかりますよね？／＼／」

「あっ…えっと…絶頂？」

「なっ！違いますよお！／＼／明君のえっち！」

奏は真っ赤な顔で叫んだ

か、可愛い／＼

「ごめん奏！違つよね！／＼」

「もっ／＼」

奏は再び目を瞑る…

なんだかんだで僕ら…両思いだったんだ…

もう少し早く告白してたら…もっと楽しく学園生活が送れたかもね

けど…どうでもいいや…僕は今で良かったと思ってるから…

奏の肩に手を置く

その時ピクリと動いたが奏は気にしないでと言った

そつとでも緊張しながら僕は目を瞑り唇を近づけた

「ん……／＼／＼」

唇がお互い重なり合い奏がゆっくり手を後ろに回した

初めてのキスは深くてお互いを求めるように

そして優しいキスだった

桜が乱れるがまるでその桜吹雪は

僕らを祝ってくれるようだった

第二十問：Fは無敵な合い言葉（後書き）

次回から明久と奏の出会い、アリスの恋人が登場します！お楽しみに！

第一問：アリスの彼氏って？思わぬ再会（前書き）

皆さんいつもありがとうございます！第二期のスタートです！

カトラス様から借りたオリキャラが登場します！

ちゃんとできるか不安です

第一問：アリスの彼氏って？思わぬ再会

春：それは沢山のことを変えた季節…

僕、吉井明久もその一人なわけで…

「ううん…」

眠たい目をこすりながらベッドから起きる

「時刻は6時…うんこれなら余裕だね！」

今日の僕はいつもと違い遅刻するわけには行かない

相変わらず塩、砂糖、油の朝ご飯を食べる

そして顔を洗い、歯を磨く

「初めて彼女と歩く登校だから遅刻するわけには行かないしね……」

着替えながらそう嬉しそうに呟いた

僕には彼女がいる

その子は昔からの親友で…学力は学園三位以上のレベル…

そして男女問わずモテるのだ

見た目はあのアニメの劉備にそっくりで何回間違えたことやら…

彼女の彼氏になったのはつい昨日のことだ

お互い今まですれ違っていたけど同じ両思いだった

「…………… / / いかんいかん」

昨日のキスを思い出し顔が真っ赤になる

深くて…激しい…

「そおおおい！駄目だろこんなこと考えてちゃー！！」

危ない…危ない…危つく妄想の世界へ旅立ってしまう所だった

「ち、ちあて…そろそろ行かなきゃね」

僕はリビングから出ようとした時、そばにあった写真立てにぶつか
った

「おわっ…っ」と

落ちる寸前になんとかキャッチした

「ふう危ない危ない…」

大切な思い出だから壊すわけには行かないよね

僕は笑いながら写真立てを戻そうとしたが…一人の男の子が目に入
った

「…元気にしてるかなあ」

中学校の頃…転校してしまった…大切な僕達の親友…

そしてアリスの…

「…あつ行けない行けない！早く行かなきゃね」

写真立てを置いてリビングを去り玄関から出た

そして鍵をかける

そして僕は彼女の家に向かった

アリス s i d e

「はあ…彼氏かあ…」

私…アリスは元気で転婆な高校一年生！

いつもは元気なアリスさんだけど今日は元気が無いんだよねん…

「約束覚えてくれてるのかな…」

ある男の子とした約束…

私のこんな性格を可愛いと言ってくれた人…

青い髪の私を可愛いと言ってくれた人

そして次会った時は

はじつじつ！／＼

「まさに私の王子様だよ！／＼」

うなだれてなんかいられない！私はみんなのキューピッドなのだ！

「今日もエンジェルアリスちゃんは学園へ行くっ！」

アリスと約束と僕らの親友！（ザブタイトル）

『おっはよ〜ん！』

『おはようございますアリスちゃん』

『おはようアリス』

私：アリス・ファン・クリスチー又は中学校一年生！

両親は母がアメリカ人！父が日本人なのだー！

日本名は川澄愛奈！
かわすみあいな

またの名を

『エンジェルア』言わねーよ『ぬっつー！？』

「このだるそうな声は…」

『出たな怪物ゴリラ!』

『誰がゴリラだ!』

『あはは!似合うよ雄二!』

『んだと馬鹿!』

『なにい?やるのか雄二!』

側で同級生坂本雄二とメンチの切りあいをしているのは、

『おっはよーアッキー!』

『どわあ!いきなり飛びつかないでよアリス!』

『なはは!アリスちゃんの癖なのだ!』

『朝から元気だな…アリス』

むう！この静かな声は…

『おっはよーカズン！きゃうん！』

かわされた！何という反射力！

『せっかく抱きついてあげようと思ったのに！』

『いらん…それよりあいつにしたらどつだ』

『おはよっぴい…ひゃああー！』

この胸の感度！いつ触っても最高だねん！

『おっはーカナナン!』

『おはようございます! って…違います! アリスちゃんいきなり何を
するの!?!』

『いいじゃないか〜水くさいこと言っちゃ駄目だよん』

『はあ…仕方ない…きゃああ! い、い、いきなりスカートボタン
を取ろうとしないでよおお! / /』

『『ぐ…百合が見え…』』

あ〜らら! みんな弱いんだから

『ちよっアリス! 何やってるのさ!』

おやおやアッキーたら嫉妬しちゃって

『アッキー！ほいさ！』

私はアッキーの後ろに回りドンと押した

『うわっ(ムニッ)』

『あららアッキー大胆だねん！』

『／／／！あ、あきひさくん！』

『(D…)ごめんなさいい／／』

『全く…明久…少しは自重してだな…』

『あっおっはーマイスイートダーリン綾人ー！』

私は教室に入ってきた一人のイケメンに抱きついた

『うおっ／／！ちょっと待てアリス！当たってるから／／』

『／／／／』

綾人に言われると恥ずかしいけど凄く嬉しい！

『はあ…綾人も人のこと言えないと思うけど…』

『マイスイートダーリン…／／』

『うん…べつしたの奏っ…』

『い、言えなんでも』

私…エンジェルアリスちゃんには何を隠そうダーリンがいたのだ！

『今日はダーリンの為に弁当を作ってきたよん！』

『ダーリンは早いぞ／＼……けどアリス。』

『何かなん？』

『中学校は給食だぞ？』

ガーン！しまった…おのれ給食ー！

『けど…ありがたく食べさせてもらっつよー！』

『ダーリン…／＼／』

『だからダーリンはまだ早いって！』

明久 s i d e

「あの頃は楽しかったよね奏」

僕は学園へ向けて歩きながら傍にいる奏に中学校の頃を話していた

「はい その後…アリスちゃんが綾人君のことをまたダーリンって
言っていましたよね」

奏は笑いながら楽しそうに話していた

「良かった…中学校の記憶全部思い出したんだね」

奏は少し困った顔をしながら頷いた

「はい…でも皆さんには悪いことしちゃいました…」

「仕方ないよ…みんなわかってくれてるし…悪いのはあいつなんだからさ」

僕は拳を握りしめ怒りを出さないように静かに喋る

今頃…あのクズはどうしているだろうか…

少年院に閉じ込められたままだろうか…

「明久君…終わったことですから…それに私…こうして思い出しませんでしたから」

奏はいつの間にか流れた僕の涙を拭ってくれた

それでもあの時の僕は本当に弱かったんだ

「奏……」

「はい……」

「綾人……どうしてるかな」

「……きっと彼なら今頃遠くの学校で楽しんでますよ」

「うん……そうだね」

僕は奏を見て微笑んだ

けど僕は綾人と会えるようなそんな気がしたんだ

「あー悪い！その君」

「僕達？」

「ああ…あのさ文月学園…てどこか…明久と奏か？」

僕と奏は驚きまさかだと思いながら尋ねてみた

この風格…そして口調

「まさか綾人？」

「ああ…やっぱり明久達だったか！」

「何で綾人が…遠くの学校に行ったはずじゃ」

隣では奏が涙を流していた

「久しぶりだな明久！奏！」

「綾人ー！」

「おわっ明久！いきなりどうした！？」

「ひぐ…綾人君」

「ちょっと奏までどうしたんだ！」

春…やっぱりいろんなことが変わる季節だ

第二問・秘密ってバレたら恐ろしいよね(前書き)

今回からシリアス展開になります…

第二問：秘密ってバレたら恐ろしいよね

「えーと…なんで綾人は帰って来たの？」

僕は隣にいる遠くに引越したはずの親友に尋ねた

「ああ…それはな……」

再会とデートと二人の悪魔

「文月に行くように命令された!？」

僕：吉井明久と彼女の吉井奏は綾人から事情を聞いて驚いた

「どうしてですか？」

「上がゴタゴタしてて…それで文月学園の学園長に力を借りたいとあっちの学園長が言ってな…」

「なるほど…だから綾人君が伝える役として選ばれたんですね」

「まっそういうことだ」

何だろ…二人の言っていることが全然わからない

「どうした明久？まさか理解できてなかったか」

「うん…」
「めん」

「つまりはですね…綾人君が行ってた岡上学園は…いろいろといざこざがあったらしく…それで文月学園のカヲル学園長に助けを求めている訳です」

「まあ…何かの学習システムについて求めててな…それでここが地元だった俺ならわかって貰えるはずだからってな」

綾人が取り出した紙には難しいことが書いてあった

「話はわかったけど…何で綾人が転入するの？」

綾人は少し苦笑しながら話始めた

「岡上学園は…毎年必ず誰かを辞めさせるんだ」

「え…」

「まあ…学力レベルが低い奴がな…それでまた一人決まった時にさつき言った問題が発生してな」

「それって…学力システムのことだよな？」

「ああ。そこで俺が文月に行けばそいつの退学を免除できたんだ」

「でもそれって…せっかく楽しんでいた学園生活を壊すようなものじゃないか」

綾人は空を見ながら歩く

「まあな…けど退学しそうになったあいつにはいろいろと世話になったし」

綾人はこっちを振り向き笑った

「それにお前らに会えるなら俺は大歓迎だ！」

「綾人君…」

「という訳でよろしくなっ！」

綾人の笑顔を見るだけで僕らは今までのことがどうでもよくなった
…そんな気がした

「じゃあ案内してくれないか？」

「わかったよ！こっちだよ！」

僕は笑いながら走った

『それにしても本当綾人君は何で文月に？』

『鴨川先生がな…進めてくれたんだ』

『ふふ…鴨川先生ならそう言いそうですね』

『鴨川先生は『あなたにこの学園は似合わない…あなたはみんながいる文月で学ぶべきです』ってな』

『鴨川先生…相変わらずですね…』

『ああ…本当に良い先生だったよ』

『綾人君…』

『何だ奏？』

『何故嘘をついたんですか？』

『やっぱりバレバレか』

『岡上は…二週間前…廃校になりましたよね』

『ああ……だからこそだ……だからこそ鴨川先生は俺を文月に行くように手配してくれたんだ』

『……………』

『文月にも教えなきゃ行けねえからな……本当のことを言えば明久が動かない訳がない……だから嘘をついた』

『……はい』

『俺だってあいつは絶対許さねえ……』

『綾人君……』

『あいつはお前とアリスを……』

Fクラス…そこはいつもならみんなで騒いだり勉強したりする

Aクラスに勝ったことで僕らはAクラスと同じ設備になった

ゆっくりと何か飲もうかなと考えながら教室に入る

「みんなおはよー！」

『ズオオオ』

高級なドアを閉める

そして全力でその場から逃げ出した

『アキ…お話聞かせなさい』

『一体誰に告白したんですか？』

二人の悪魔が教室から外へ放たれた

『『吉井明久に異端審問を！！』』

二人のせいでFFF団までも放たれた

『うわああ！何でこんなことに！』

『何何！アッキー誰かに告白したの！？』

『へえ…興味深いぜ(ニヤニヤ)』

『だな(ニヤニヤ)』

『『坂本と千原と土屋を殺せえええ!』』

『『何いい!?!』』

『そつだ! 奴らには彼女がいたはず!』

『吉井よりお前らが先だああ』

FFF団はFクラスへ殺気がヤバいくらい放出しながら向かって行
った

三人共頑張っ

「明久君…誰に告白したんですか？」

「そうよ。言いなさいよ」

「言えない…奏に告白して彼氏になったんだ！なんて言えない」

「…実は告白したのはアニメキャラなんだ」

「「「へ？」」」

よし…いい感じになってる

「ほらとある魔術の…」

「つまり里穂ちゃんですか？」

「違うよ姫路さん！絶対インデックスって認識してたよね？」

「じゃあ…誰よ」

「えっと…」

くっネタがなくなった…

「例えばオルソナとか！」

「あ、アキ？何を言ってるの？」

「オルソナさんですか？」

「そ、そうシスターオルソナだよ！」

…オルソナを思い出すなんて我ながら凄いね

「そついう訳だから彼女なんていないよ」

「そ、そつなの」

「そつなんですか」

二人は混乱したように落ち込んだように頷いた

はあ…助かった

流石はシスターさんだよね！

『今日は…』

鉄人のホームルームが始まり僕は耳を傾けながらシステムディスクに膝をつく

「シスター…か…」

自分で言った言葉なのに頭から離れない

「……………」

ちらつと奏を見る

奏はまじめに聞いている

奏にはごまかしてほしいと言ったはずだから大丈夫

『最近…』

シスター…何かが引っかかる…

何だろう…思い出せない…何か大切なこと

『今日…新しくFクラスに転入生が来た』

『なにいいい!?!?』

『一人は男で…』

『…チツ』

何だこいつら…テンションが上がったり下がったり

『もう一人は女だ』

『イヤッハアアア!』

『最高だああ!』

『神様ありがとう!』

何だかなあ…

『じゃあ入ってきてくれ』

ガチャンと開かれるドア

みんな息をのんでいる

「え…ああ、綾人!？」

一人はやはり綾人だ…アリスは頬を蒸気させている

良かったねアリス！

「「綾人！？」」

当然雄二や姫路さん達は驚く

僕と奏は静かに笑いあつた

そしてもう一人の女の子を見る…

そのは人僕に気づき
近寄つてきた

「吉井さんですよね！」

「え…？」

この時からだ…何かがズレ始めたのは

第三問：蘇る記憶……。文月オリエンテーリング！

「吉井さん！」

「君は……」

僕は新しく転入してきた女の子に話かけられている

「誰？」

こんな人知らないなあ……どこかで会ったのかな？

「お久しぶりー！」

「どわあー！」

その子は滑り込むように僕の方へずっこける

「わ、あたしを覚えていなんですか？」

「うん」

「う…」

いや知らない者は知らないよ！！僕の知り合いに緑色の長い髪に青い瞳…そして大きな胸

「「吉井…」」

まずい！なんか殺気がする！

「綾人ー！」

「うおっ…／＼久しぶりだなアリス」

「会いたかったよーマイダーリン！」

「相変わらずだな…／＼」

「「あいつ殺す」」

みんながナイフを持って襲いかかる前に一麻が叩きのめした

「全く騒がしいわね…」

「あはは！けど面白いねFクラス！」

『雄二…今日はどこへ行く？』

『あー…じゃあ駅前の喫茶店行くか』

『ムツツリー二君…私、今日スパッツじゃないんだあ』

『ブシャアアアア』

『一麻…今日はお弁当を作ってきました！』

『ああ…里穂…そろそろ敬語やめない？』

『は、はあ…一麻がそう言うなら仕方ないね！』

『早いなっ…お前はあれかツンデレキャラか』

『どっやったらそう決めれるの！』

『くばああっ』

『マイダーリン！／＼』

『おい…いろいろ当たってるから／＼』

『明君…この方は誰なんですか？』

『とりあえずオーラをしずめるんだ！この人ことなんて知らないよ
』！』

『酷い吉井さん！あたしのこと覚えてないんですか？』

『わああー！ややくしくしないでー！』

『そつですか…明君は…』

『ち、違うからね奏！』

「改めて凄いわねこのクラス」

「じゃの」

「うん…」

その後二人は鉄人に言われ自己紹介を始めた

「かななぎあやと神薙綾人だよろしくな」

「よろしくねマイダーリン！」

アリスも相変わらずデレデレだね…

「」「神薙…覚えてお」「」「」

こっちはこっちで大変だね…

「趣味は…一麻と同じ特撮だ…仲間に手を出したらぶちのめすからな」

うん…さすがは綾人。一麻と同じで怖いオーラ出すよね

綾人が席に戻るとみんなが口々に再会の言葉を言っている

「みんな嬉しそうだね」

「はい…」

奏にじゃっかんオーラが

「大丈夫だから奏…奏以上に素敵な彼女はいないよ」

「!?!?!」

あはは…混乱してる。可愛いなあ

ちなみに小声で言ったからね

『…よし(アリス)…俺もお前以上に魅力的な彼女はいないよ』

『はにゃああ!?!?!』

『あはは…可愛いぞアリス』

『ふにゅっ／＼／』

おっと…次はあの人の番か

「白鷺美代しらぎらみよです。よろしくお願ひします」

『『『ミヨオオ！』』』

思っていた通りの反応だ…

「あっ…昔はシスターをやっていた…中学の時は時折学園に通って
いました」

「シス…ター」

あれ…？

「特に吉井さんとは昔からの知り合いです（にこっ）」

「『『吉井いい…』』』」

「待てみんな…今手を出したら俺達は返り討ちにあつ

」「」「ぐっ…」「」

良かった 殺されなくてすむ

「みんな仲良くな」

この言葉でホームルームは終わった

「じゃあ会えるか…！」

ホームルームが終わり…システムディスクをくっつけみんなでちょっと早い昼飯を食べる

今日は文月オリエンテーリングがあるんだ…優勝商品に…食券やゲームなど…素晴らしい企画だ

僕の隣は奏と美代…抵抗はあるけど昔のように呼び捨てでいいと言われたから

奏の隣は仲良く弁当を食べている神薙夫婦…美代の隣には姫路さんと木下さん

「美味しそうじゃの〜」

「そんな…／／」

木下さんの隣で新鮮な会話をしているのは秀吉と種山さん

「…雄二あーん」

「いらね…ぐぶっ」

その隣は坂本夫婦…全く雄二も素直になれないんだから

「里穂…口開ける」

「むづ…私もあーんやってほしいよ!」

「俺だってやってもらいたいのにお前が食いしん坊だからだろうが
」!

「何よ!彼女に向かってそれは失礼だよ!」

「まあまあ…二人とも落ち着いて…」

「「落ち着けるか!」」

「…」

「二人共…」

「何だ（よ）」

「覚悟はいいよね？」

僕は笑顔で拳を握る

「ちょっと待て明久！落ち着くんだ！」

「わ、私女の子だよ!？」

「問答無用だああ！」

僕は立ち上がって二人に裁きの鉄槌を下した

「全く…夫婦喧嘩ならよそでやってくれよ」

「ムツツリーニ君…あーん」

「…いない」

「そつだよねえ…ムツツリーニ君は口移しがいいよね」

「（ブシャアアア）」

千原夫婦の隣にいたレベルが高い土屋夫婦の会話を聞きムツツリー
ニと一緒に倒れる

「アキ！？大丈夫？」

「う…ん…大丈夫」

こんな所で倒れては駄目だ…何故なら

「明君！今日はちょっと豪華にしてみました！ふふ／／」

奏の…彼女の手作り弁当が待っているんだ！

ちなみに体型は円になっているから中央があいているんだ

そして何故かシステムディスク…が置いてあつて…

そこには姫路さんが作った兵器が

「凄いわね姫路さん…デザートも作れるなんて」

「照れちゃいますよっ／＼」

何も知らない人はそう言うけどあれは殺人兵器なんだ！

『『食べたら命の保証はない！！』』

「翔子！じゃじゃん食べような！」

「雄…嬉しい／＼」

「ダーリン！あーん」

「上手いな！はは…は」

綾人に兵器について教えたら…珍しく顔が青くなってたよ

「里穂！腹一杯になるまで食べよう！な、なっ…！」

「うん！／＼」

「ムッツリーニ君。はいあーん」

「…肉は好物！」

「種山ワシらも食べようぞ！」

「えっ…！！そうだね／＼」

上手い…みんな回避している…僕も！

「奏！今日は何かな？」

「今日は…よいしょ」

出てきたのは弁当ではなく…プレート

「お好み焼きです！」

「ちょっと待ったあ！それならプレートに入れなくてもいいはずだよね！？」

「あら ですが…できたての方が美味しいですよ？」

しまった！奏が天然なのを忘れてた！

前は

『今日はチャーハンです！』

『あの…奏、なんでフライパンがあるの』

『それは明久君にできたてを食べて欲しくてノノ』

『有り難く頂きます！』

こんな感じだったんだっけ

「もしかして…!」

「わかってくれたの!?!」

「パエリアが良かったですか?」

「ずー!」

違うよ! やっぱり天然だこの人

でもそれも可愛いところなんだけどね

「ふう…有り難く頂くよ!」

「…はい! / /」

この笑みが…凄く可愛い

まるでシスターさんみたいだ…

あれ？シスター…奏？美代？

「あぐっ」

急激な頭痛が僕を襲った

視界が消え何かが見えてきた

「大丈夫ですか明君！？」

そんな奏の言葉すら今は耳に入らない

「……」

何なのこれ？

『明久君いらっしやい』

『こんにちはシスターさん！奏はどうしてますか？』

『ああ…彼女ならいつも神に祈ってます』

『そつですか…ごめんなさい…』

『いえ…謝らなくて良いのですよ。辛いのはあなたでしょうに』

「いっつ…」

「大丈夫ですか吉井さん!？」

「美代…?」

どつやら僕は意識が少し跳んでたらしい

『ウオオ!』

『俺が先だあ!』

『違う俺だ!』

『もらった!』

『させるかああ!』

数分後

FFF団のメンバーはみんな瀕死状態になったのは言うまでもない

第四問：うなれストライカーシグマファイブウ！

『まさかこんなことになってるとわね…』

『はい…教師側で必死に捜査にあたってますが…いつ現れるのかわかりません』

『そっかい…ならちょっと馬鹿の力を借りようじゃないか』

馬鹿とチケットとストライカーシグマファイブ！

『これより文月学園オリエンテーリングを始めます』

僕は音声の流れ文月学園の校舎が映っているでかいモニターを見る

『なお、組み合わせについては西村教諭が決めています』

そう言った後ルールと組み合わせが表示された

「な…問題を解かなきゃ駄目なの…か」

不利だ…

「さらには召喚獣対決で奪い取ってよしってますます不利だああ」

「勝てば問題ないじゃない！」

「そうです！勝てばいいんです！」

凄いやる気だよ姫路さんと美波

「（景品に…如月グランドパークの券が…）」

「さて…組み合わせは…」

アリス、奏、種山さん

霧島さん、木下さん、工藤さん

ムッツリーニ、姫路さん、美波

秀吉、綾人、雄二

僕、一麻、美代

以下

『問題児は一緒にしておいた！これは授業の一環だ！みんな真面目に取り組むように』

「ふざけるな鉄人！美代はわかるけどなんで馬鹿な一麻と一緒になんですか！」

モニターに向かって叫ぶ

「明久！お前に言われたくねえよ！」

「観察処分者くせにいい」

「そっくりそのまま返してやるよー」

久しぶりだ…血祭りにするのは…

「だらっしやあああ」

結局、奏と里穂に止められて終わった

あと少しだったのに

「…んんんんん」

僕は屋上で話して

「とりあえず…解くか…明久は日本史、世界史を頼む。俺は古典や家庭科…でお前は」

「あたしは英語が得意だから英語分野やる！」

「そうか。じゃあ頼んだ」

僕らは自分達の得意分野を解き始めた

日本史や世界史なんて1600もいけた僕にかかれば…

楽勝だ！

それにしてもあの時の映像は何だろう…過去？

奏がどうか

「吉井さん吉井さん」

小声で囁かれ…振り向くと

「どうしたの美代？」

シスターさんがいた

「ちょっとお話いいですか？」

「うん。構わないよ」

美代は嬉しそうに階段へ引っ張り連れ出す

「吉井さん…奏ちゃんとはどこまで進みましたか？」

「ほえ…？」

何を言ってるんだ…

「だってイチャイチャしてましたから」

美代は頬を赤らめた

ちょっと待ってよ！

みんなにバレないように我慢してるんだけど

何故だ…

「僕らはイチャイチャなんか」

「してますよ。だって〜シスターがシスターのことを知らないはずがないからだよ」

「え…？今なんて」

美代はにっこり笑いながら呟く

「やっぱり覚えてないんですね…まあ辛い過去は忘れた方が良かったですからね」

「どういうこと？奏がシスターって…」

美代はにっこり笑いながら詰め寄る

「吉井さん…奏ちゃんに飽きてませんよね？」

何を言ってるんだ本当に

「僕は奏に飽き足りなんかしないよ」

「そうですね〜！流石吉井さんだね」

「そんなの常識さ」

「けど欲求不満な吉井さんに奏ちゃん一人では大変ですよね」

今、危ないこと言ったよね？

「だから…あたしと先にやる？」

「はあああ！？」

何をやるんだよ！？危ないこと連発じゃないかこの人

「ねえ…私愛人になっていいかな？」

「は？」

愛人？

「狙いは？」

あれ何でこんな言葉をしゃべってるの

「狙いなんか無いよ。ただ…吉井さんとや」「わああ！」「ごめん！」「」

無理やり遮り屋上へ戻る

「やっぱり駄目かあ…けど諦めないからね」

「はあ…はあ…」

「どうした明久…」

「いや…ちょっと恐ろしいものを…はは」

何でこのクラスにはまともな人がいないんだ…

「吉井さん」

「!?!」

美代が掛けてくる…何故だろう、寒気が

「まいったな」

「どじつたの…麻」

「この問題わからねえ」

そう言っつて数学の問題用紙を見せた

「なんだ全部選択問題じゃないか」

「吉井さん解けるんですか？」

解ける？馬鹿なことを言っっちゃいけないよ

「僕の得意分野を知らないのかい？いいよ見せてあげる」

カランと鉛筆を転がした

「一瞬でも期待した俺が馬鹿だった」

「数学はこのストライカーシグマファイブ！英語はプロブレムブレイカー！古典はシャイニングアンサーだ！正解率高いんだ！」

決まったとポーズを決めていると一麻がため息をした

「お前の人生はサイコロで回ってるのか」

「馬鹿にするな！うなれストライカーシグマファイブウウ！」

ストライカーシグマファイブを上空へ投げる

カラン

「わかった！X座標652！Y座標237！Z座標5！」

つまりは

「お宝はあそこだああ！」

果てしない上空にある！

「お前取ってこい」

「あ、あれ？おかしいな…問題が間違ってるのかな」

「吉井さんのストライカーさんが間違ってるかと」

そんな訳で…僕らの波乱な宝探しが幕を開けた

第五問：こんなの認めるかああ！

「あつたあつた！」

女子の声が聞こえて僕らは屋上から見下ろす

『わあ〜学食の券一年分だつて』

『やったね！』

上空の下にお宝はあつたのか

「どうだ！ストライカーシグマファイブは凄いだろ！」

「信用しているお前が凄いと思うぞ」

「吉井さん……」

宝と脱走とシャイニングアンサー

「さくさくと探すぜい」

「元気ですねアリスちゃん」

「次はここだね」

私達が次に訪れたのはFクラスの教室でした

アリスちゃんはニヤリと笑い、歌穂ちゃんは新しい問題解いています

「ここですかね？」

とりあえずシステムディスクを探してみますか

「カナナン〜お宝はアッキーの机の中だよん（ニヤニヤ）」

「ほえ？」

明君の机…の中ですか

どうでしょう…

「いえ…明君は彼氏ですし…少しくらいは見ても…」

「解けたよ！またここだった」

私が考えている間に歌穂ちゃんは解き終わりアリスちゃんに見せました

「ノノダーリンのシステムディスク！？」

ふふ…可愛い。珍しくアリスちゃんがテンパってます

「気になる…ああ！気になるよん！」

そう言ってアリスちゃんは思い切って中を覗きました

「はにゃ／＼／＼」

「アリスちゃん!？」

アリスちゃんは湯気を出しながら倒れてしまいました

何がどうなって…まさか

「……机の中に」

私は思わず明君の机を見ました

「だ、大丈夫です…」

机の引き出し取っ手に手をかけ…深呼吸

「…え、えいつ!」

そして勢い良く引きました

「こ、これって…」

カプセルを見つけ出したのいいのですが…私が気になっているのは

「…!?!?!」

な、何で明君の机の中に私の写真が…

他にはこの小説を読んでくださる他の作者様から頂いた者などがありました

「どうして私の写真が… / /」

写真の内容は…スカートを押さえている私、教室で寝ている私、自己紹介をしていた時など…とにかく沢山

「… / /」

これは捨てるべきでしょうか…ですが彼女の写真くらい一枚、二枚
どうってことは…

「……………これは」

『保健体育の教科書』

「（ボン！）」

一瞬で私の顔は真っ赤になりました

あ…もう駄目ですじ…

「ふにゃ…／＼」

「きゃああ二人共どうしたの!？」

明久side

「砕け！プロブレムブレイカー！」

勢い良くなげた鉛筆は地面を砕かず転がった

「地図によると…ここだね」

そこはFクラスの教室だった

「あっ！あつたよ」

「マジか」

ちあて中身は…

「如月グランドパーク…ウエディング体験」

へえ…ウエディング体験かあ…

『明君…』

「どうした明久？そんなアホみたいな顔して」

「はっ！！いかん…つい邪念が…って雄二？」

「お前らもここに来たのか」

綾人は笑いながら探し始めた

「悪いが早い者勝ちじゃ明久」

「うんわかってるよ」

僕らも探し始める

ちなみにチケットは綾人にあげたよ

僕にはまだ早いからね

「と言うより何でFクラスに答えが集中してんだ……」

一麻はため息をしながらも探し始める

「「「あつたー！」」」

僕らは同時に声をあげた

「まさかみんな見つけたとはな…じゃっ開けるぞ」

雄二の合図でカポンと開ける

「みんな何がでた？」

『『如月グランドパーク…ウェディング体験』』

「…へえ…」

「まさか…」

「同じとはね」

『『納得が行くかあああああああああああああ！？』』

ふざけるなババア長！

「明久！お前にやる」

「何言ってるんだ雄二。雄二こそこれを受け取るべきだよ」

「二枚も意味がないだろ？」

「大丈夫さ。この体験期限一週間までだから」

「ならお前と奏で行ってこい」

「恋人同士でもないのに何故行かなきゃならないのさ」 みんなに隠してます

雄二は本当に地獄に行きたいのかな？

「「一麻やるよー！」」

「いるか！絶対本番になっちまう！」

「とにかくそんなおぞましいもんを俺に見せるな！お前らだけで行ってきやがれ！」

雄二が指をさしたのは僕と秀吉

「仕方ないね…じゃあ一緒に行こう秀吉」

「いや…無理じゃ」

これはかつてないシヨクだよ！

「そんな…秀吉は僕のこと嫌いになったの？」

「ワシは男じゃ」

「ふられた！僕は何て不幸な人間なんだ…こうなったら」

そう言っつて僕は秀吉の方へダイブ

「好きじゃあ〜」

「うわああー！」

とっさに避けられそのまま僕は前にいる人に抱きつく形になった

「あ…」

「明君…だ、大胆ですよ…／＼」

抱きついたのは僕の彼女…いや嬉しいけど…

嬉しいけど

『アキイイ』

『明久君？』

こんな事態で素直に喜べる訳がない

「ふ、二人共いたんだ」

二人は禍々しいオーラを出しながら迫ってきた

『アキ…如月グランドパークのチケット持ってるわよねっ。』

何故だ…かつてない死亡フラグが

「な、何のことかな？僕には全く」

『明久君。嘘は駄目ですよ？』

ま、マズい…誰かに助けを

「…雄二…チケット持ってた」

「ちょっと待て翔子！結婚なんてまだ早いだろ？」

「…私は今すぐでも」

「待て翔子！死亡フラグが…ぐああ」

「ダーリン！」

「如月グランドパーク…行くか？」

「アリスちゃんはOKだぜい！」

「初夜が楽しみだ…」

「かーずま！」

「り、里穂…」

「如月…」

「嫌だ」

「まだ言い切っていないじゃない！」

「じゃあ…お前初夜できるのか？」

「／／／一麻の変態！！」

「ぐああああ」

助けなどこの状況でいるはずなかった

「瑞希ちゃんと美波は如月グランドパークに行きたいの？」

「そ、そうよ！（アキと）」

「は、はい！（明久君と）」

奏はにっこり微笑んで二人にチケットを渡した

「さっき見つけました…お二人で行ってきたらどうですか？」

「お二人ですか？」

「はい。瑞希ちゃんと美波ちゃんで行ってくるといいですよ」

「「え…？」」

すかさずフォローに入る僕

「そうだね…楽しんでくるといいよ二人で」

あれ？何で二人は悲しい顔してるの？

「酷いです明久君」

「本当に鈍感よね」

「解けたぞ明久」

「早いね」

里穂に殴られた一麻は頬を押さえながら問題用紙を渡す

「えーと…」

僕は地図を見ながら教室を歩く

というか本当にFクラスに集中してる

「ここだね…さてと」

ぐいっと引き出しを引っ張り出すと

「きゃあああ！あき、明君！私の机の中ですよ！／＼」

真っ赤になった奏がこっちに突っ込んできた

「ちよっ…危な…くべらああ」

久しぶりに奏のロケットアタックを受けた

「痛たた…」

「プライバシーの侵害ですよ明君！／＼／」

涙目になりながら僕を見つめる奏

けど

「余計気になる！！」

「おせし」

ぐいっと奏を抱きかかえて机に近づいた

「ちよつあつ、明君ー！／＼」

奏は小動物のように僕の懷でわたたと手を振る

ああ！もう可愛いな！

「あつあつたあつた」

カプセルを取り出しすぐにしまう

「あ…あれ？明君見ないの？」

「何言ってるんだ奏。そりゃあ気になるけど僕が見る訳ないでしょ」

「あ、明君…／＼」「うるうる

「（ああ…可愛い…）」

本当に奏が彼女で良かったよ

「アキ…何奏を泣かしてるの」

「~~え~~」

「そうですよ…それにどうして奏ちゃんを抱いてるんですか!?!」

「そりゃあ彼女だからだよ姫路さん」

「「「え…?」「」」

「あ、あ、明君?」

みんなは口を開け奏は驚いた顔でこっちを見上げている

「あ、しまった…」

「ア〜キ〜！」

「明久〜君〜？」

「「ええええ…!!？」」

しまったああ！みんなが凄く驚き、二人は凄い殺気だああ

「ダツシュ!!！」

奏を抱きかかえたまま全力で教室から逃げ出す

「アキイイ！覚悟しなさい！」

「明久君！お話を聞かせてください！」

畜生！シャレにならない状況だああ

第六問：シークレットアイテム！記憶と苦しみ（前書き）

サイレント様。腕輪ありがとうございます！

今回はシリアスです

第六問：シークレットアイテム！記憶と苦しみ

「ぜえ…ぜえ…」

「大丈夫ですか明君？」

僕は屋上へ向かって走り悪魔さん達から逃げ切った

「うん…それにしてもお宝探しできなくなったね」

教室に戻れば確実に殺られる

「仕方ないですよ それにしても…バレちゃいましたね」

う…そうだ…僕のミスで奏と付き合っていることがみんなにバレてしまったんだよね

特に二人にはバレたくなかったなあ…

何故かあの二人…僕が異性と話していると暴力を振るうからね

「とりあえずゆっくりしましよ明君…ほら寝転がってください」

僕は奏が誘導した場所を見て頬を染めた

「どうしたんですか明君？」

いやだって…太股…／／／

「膝枕ですよ？前にもしたじゃないですか」

これは…お言葉に甘えるべきだよな

「じゃ、じゃあ…／／」

「はい。どひぞ」

僕は奏の太股に横になった

「明君？頬が熱いですよ？」

そりゃそつだ…彼女に膝枕してもらっなんて…全国男子の夢！

それに奏の太股が柔らかくて…

「気持ちいいからかな…」

そう言っ僕は目を瞑った

「おやすみなさいませ…明君」

腕輪と脱獄と僕の記憶

『ここが文月学園か…』

『ちよつとそこの君…』

『ああん？』

『君…学園崩壊事件の脱獄犯だろ』

『だったら？』

『君を捕まえるよう指示が…』

『死んどけ馬鹿が』

『竹崎先生！？』

『さあて…吉井明久と吉井奏はどこかな？』

「それがシークレットアイテム？」

教室に帰える前に偶然見つけたカプセルを持って帰り僕と奏は中身を見ていた

ちなみに姫路さんと美波は綾人にしごかれている

「そうみたいだね」

「何て書いてあるんだ？」

雄二の質問に僕は紙を取って読んだ

「『えーとサイレント様のアイデア。シークレットアイテム…守護の腕輪と…癒やしの腕輪だっ』」

「凄そうな腕輪だな」

「麻は興味深そうに言う」

「奏はこれでね二つ目だね」

奏は純愛の腕輪が既にあり二つ目、僕は初めてだ

「楽しみだなあ…」

「どんな力なんだろう？」

「……騒がしい」

「どうしたのムツツリーニ？」

ムツツリーニは外を見ながら呟いた

「そう言えばさっきから何か慌ただしいねん」

アリスはいつもと違い真面目な顔をしている

何かあったのだろうか？

「お前達！」

「「うわあ鉄人！？」」

なんでいきなり鉄人が…

「どつちやら無事のようだな…」

「はい…二名を除いて」

木下さんはそう言つと隅を見た

「綾人は何をやってるんだ…」

「ちよつとした調教ですよ鉄村先生」

「お前まで間違えるか…何故姫路と島田は吊されている」

「まずい！」

「そ、それより鉄人何かあったのか？」

ナイス雄二！

「ああ…今、この文月学園に学園崩壊事件の犯人が逃げ込んでいる」

学園崩壊事件…？

「何！？あいつが」

綾人は急に調教を止めて鉄人の方を見た

「そつだ綾人…あいつだ」

「あの野郎……」

綾人は教室から飛び出そうとしたが鉄人に止められた

「先生…学園崩壊事件って何ですか？」

「それは私が説明します」

奏が鉄人の前に立ち僕を見る

「すまないな明久…」

綾人の声がぼつりと響いた

「みんな…けして教室からでないように」

「他のみんなは？」

「あいつらは違う所で待機させているから大丈夫だ」

そう言って鉄人は教室から出て行った

綾人の転校してきた本当の理由を聞いた僕はふかふかの椅子に座った

「まさか…綾人の転校した理由が学園崩壊だったとはな」

雄二は静かに歩き外を見る

「明久…俺は後悔していないからな」

綾人の言葉を聞き僕は頷いた

「わかってるよ。僕だって綾人と一緒になれて良かったと思ってるから」

綾人はふっと笑った

「それにみんなお前のせいだと思ってないからな」

一麻の言葉にみんなは頷いた

「じつとしても暇だし人生ゲームやるか」

「僕は抜けていいかな？」

雄二は無言で頷いた

きつと僕を気づかってくれたんだろう

「ありがとう雄二」

「明君……」

奏は側にきてそっと手を握ってくれた

あの時僕が強かったら…きっと

『いらっしゃい明久君』

『あの奏は…』

『奏ちゃんならあそこで祈っているわ』

『そうですね…』

『可哀想に…でも明久君のせいじゃないからね』

シスターさんに言われたけど僕は俯く

『元気だして吉井さん』

この教会で知り合った友達的美代は僕を慰めてくれた

『神様…明久君を…助けて…』

奏の顔は辛そうで…苦しそうで…

『本当に可哀想に…今の彼女には明久君が大怪我をした時の記憶しかないのだから』

第七問・過去…全ての原因（前書き）

シリアスです…後悔はしてません！

第七問：過去…全ての原因

冬…寒い季節だけど…綺麗な雪は…辺り一面に広がる

そして僕ら三年D組は…

『『消える明久あああ！』』

『何故に僕だけー！』

雪合戦をしていた

『何やってんだ明久。ほら反撃するぞ』

『あ、うん！』

雪を握り固い固い玉にして…

『くたばれえええ』

雄二に向けて思い切り投げつけた

『がふっ！』

顔面に直撃して雄二はノックダウンだ

『ハハハハ…ぶ』

馬鹿…な…顔面に雪？だと

『残念だったな明久』

玉をぶつけたのは…一麻、ムッツリーニ、秀吉

『ってなんで僕だけ三人！？』

『……ぐふ』

『ぐふ…』

ムッツリーニと秀吉が倒れた

『何やってんだよ明久！』

『アッキーしつかりして欲しいねん！』

『アリス、綾人…』

二人のカップルが雪玉を持っていた

『ありがとう！お返しだー麻！』

『危なっ！逆に喰らえライダーシュート！』

『ぐふ！』

『ダーリン！？ひゃあ！』

馬鹿な…二人がやられた…

『吉井…覚悟しなさい！』

『げっ…島田さん』

ここで切り札登場か…

『皆さん頑張ってくださいね』

ベンチに腰を下ろし制服姿でマフラーと手袋を着けている奏は、
にこと手を振る

ああ…癒やされる…

『勝ったチームには…手作りクッキーをあげますよ』

『『『くたばれええ』』』

みんなが一齐に起き上がり再び戦闘開始！

チーム構成は僕、アリス、綾人、里穂、姫路さんチームと雄二、一
麻、ムッツリーニ、秀吉、島田さんチームだ

『『『オラオラオラ!』』』

『『あいつら強!』』

里穂と姫路さんが作った固い雪玉で瀕死を狙う

クッキーは渡さない!

『『あ』』

げっ…この声は

『鴨川先生だみんな逃げろ!』

雄二の声で一斉に逃走する僕ら

『あつ ちよつと明久君待ちなさいー！』

『何で僕！？』

その後、みんなは保健体育の品川先生に捕まりホームルームが始まった

日直の号令で始まるホームルーム

僕らの担任は三年間鴨川先生だ

鴨川先生はなんとまだ24歳

ここ如月中学校で一番人気がある先生だ

黄色い腰まである長い髪、スタイル抜群の体、そして天使のような
微笑み

鴨川先生は優しく、心温かい先生だ

『こほん…明久君…。紹介は嬉しいけど集中しよね〜』

にっこりと微笑む先生…けど何故だろう汗が止まらない

『最近…如月中学校の評判が悪いと言われています』
『そんなー鴨川先生がいるのに？』

隣にいた奏が苦笑しながらこっそりと耳打ちをする

『それは関係ないと思いますが…』

『だよね〜おつちよこちよいで天然の先生が評判がいいわけないよね〜』

『あんなに可愛いのに彼氏いかならなあ』

『全くだ…俺らより自分のことを心配した方がいいぞ先生』

『アリス、教科書貸してくれない？』

僕、一麻、雄二、綾人の順で口々に言っていく

『うつうつ…あなた達は先生が嫌いですかあ？』

鴨川先生は怒るのではなくうつうつと泣いていた

みんなからの視線が…デジャブ…

『そ、そんな訳ないじゃないですか先生！先生とは小学校からの付き合いじゃないですか！』

そう鴨川先生は僕が小学校4年生から担任していたのだ

鴨川先生は卒業後すぐに教師になった程の実力者だ

『ぐす…いつもいつも…先生をからかって…』

この後…僕らはクラスのみんなに成敗された

『…鴨川先生、秀吉の一枚300円』

『買ったああ！』

崩壊後…

僕はいつものようにムツツリー二に写真を買った

『…こっちは超レア物…吉井奏の…』

『買ったあああ！』

これは絶対に買いだよ！

『えーと…明久君と康太君』

このオーラは

『『鴨川先生!?!』』

『また…ですか?』

にこにここと微笑む先生…

『『ダッシュ!』』

『あ!また逃げるのですか!?!ちよつとー』

『あー酷い目にあつたよ』

鴨川先生に捕まり6時まで説教されていた僕とムツツリーニ

ムツツリーニは説教中に先生を撮って逃走…僕だけ説教されていた
んだけど

『鴨川先生の説教って怖くはないんだよね』

だいぶ遅くなつてしまつた…

早く帰らなきゃ…

『ああーそつだ夕食の材料買わなきゃ』

ん？誰だろつ…

『離してくださいー』

『え！？』

『離してよー』

奏とアリス！？

『そつは行かねーんだよ！お前らにゃあ鴨川を呼ぶ餌になってもら
うからよお』

人数は4、5人…制服から見て僕らと同じ学校の人

奏とアリスは仲間の二人に押さえられている…

見過ごすわけには行かない！

『君達なにやってるんだ！』

『あん？お前は…吉井明久！？』

『君は…加島武君』

角刈りに鋭い目…間違いない…クラスメイトだ

『何やってるんだよ加島君…』

『ああ？はん鴨川を呼ぶ為にこいつらに餌になってもらうんだよ！』

ガツンと奏を蹴る

『やめてよ！わざわざ蹴る必要なんかないだろ！』

『うるせえな…吉井の癖によ！』

『かつ…』

アリスが殴られる…

『明久君…来たら駄目です…』

『うるせえなあ！』

『…』

奏も殴られ…僕は拳を握りしめた

『いい加減にしるおお!』

『がふう!』

加島君を殴り飛ばした

『ふざけるな!何女の子に暴力振るってるのさ!』

『痛てて…お前には関係ないだろ?』

『そんな訳あるか…何を考えてるか知らないけど…鴨川先生も奏もアリスも僕の大切な人なんだぞ!?』

しかも集団で…

『ヒーロー気取りですか吉井君ー？』

こいつ…

『前から腹立ってたんだよお前はなあ！』

『が…』

加島君が殴り飛ばし

それを合図にみんなが二人に蹴りを入れる

『うぐ…』

『うあっ』

二人から赤い液体が飛び散る

『やめろおお!』

二人を庇うように覆った

『邪魔すんじゃないやねえ吉井!』

ガツンガツンと周りから一斉に蹴りを受ける

それでも守らなきゃ

『う…がは、ぐ』

顔や足、背中を蹴られたり踏まれたりする…

大丈夫…二人には見えない

こんな光景見せられる訳ないよ

『ちっ…しびと』

蹴られる音が消えて変わりに何かを取り出す音がした

『ほじ…守ってみるよローローさんよ！』

『づがぁー！』

ザクザクとナイフで背中を突き刺された

『…しび…』

髪を掴まれ顔を無理やり向かされる

『吉井：鴨川を呼ぼうと思ったけどやめてやるよ…だって』

ニヤリと笑いパチンと音が聞こえた

『本当の狙いお前だったんだからよ』

『ぐあっ…』

ナイフが抜かれ再び突き刺された

『痛いよな！？痛いだろ！？あははは』

僕は弱い人間だ…守られやしない…停学を恐れてるんだ僕は

文月学園に受験できないと思うと…殴れない

殴ったはしたけど…余計に被害を招いた

僕が怨みをつくったせいで二人にも

『明久！？』

綾人の声が聞こえて僕は意識を失った

それは…奏の誕生日の日だったんだ

第八問：蘇った記憶…立ち上がる明久（前書き）

次回で記憶編は終わりです！

守護の腕輪を少しチートぽくしました！

第八問：蘇った記憶…立ち上がる明久

ゆっくりと瞼を開ける

『JJJ…は？』

『明久君…良かった』

鴨川先生が泣きながら僕に抱きついた

『ちよっ先生！？』

え何…このラッキーハプニングは…

『あなたのご家族も心配してたんですからね』

そう言いながら先生は窓を指差した

『姉さん…母さん…父さん』

うなだれながら車に乗り込んでいた

きつと…心配してたんだろっな…

『明久君…よく耐えたね』

『……………』

そして…崩れ始めていったんだ

綾人が殴り…転入

加島君は警察に捕まり少年院に

アリスは大丈夫だったけど奏はショックで記憶が僕の怪我したところ
としか覚えてない状態になったんだ

奏の記憶が全部戻ったのが僕への告白の時だ

僕は弱かったんだ…

みんなに迷惑をかけてしまった…

それに比べれば背中の中の傷なんて

医者によると最悪死に至る所だったんだ

僕と記憶と覚悟

「よし…上がりだな」

雄二のそんな声が聞こえ…みんなは楽しく遊んでいた

「ん…明君…？」

隣にいた奏はゆっくりと目を覚まして僕を見た

「奏…思い出したよ…みんなのことも…あいつも」

「そう…ですか…」

あいつの狙いは間違いなく僕

学校を崩壊させたのも文月にも仕掛けてやると言う脅しだろう

なら僕のやるべきことは

「奏…必ず帰るから」

守護の腕輪をはめてみんなを見た

僕が決着をつけるんだ

例えどんな結果になろうとも

「明君…まさか」

そんな悲しい目で見ないでよ…

もう奏を独りにしないから…

「やだなあ…トイレに行くだけだよ」

「そうなん…ですか？」

「そつだよ奏！トイレに行って無事に帰ってくるだけだから」

奏は少し微笑んだ

「行ってらっしやい…」

「うん…」

ガチャリとドアを開ける

「おい明久！何してるんだ？」

「やだなあ雄二…トイレだよ」

「そうか…気を付けろよ」

「うん…」

「ありがとう雄二…」

「えーとトイレはあっちだったね！」

「明久！そっちは校門じゃ！」

「ヤバイ！」

「まさか…あいつ」

急いで廊下を走る

「明久君ー！」

姫路さんの声が聞こえたけど無視をする…みんなに迷惑をかけてはいけない

「どこだ…加島」

『本当に明君は…お馬鹿さんです…』

『とりあえず後を追いかけた方が…』

『やめとけ姫路。今俺らが明久のトイレを邪魔する訳にはいかない
だろ？』

『（あいつに任せろしかないんだ）』

とりあえず校門に来てみたはいいけど……加島の姿が見つからない

注意を払いながら……辺りを見回す

「吉井君ー？」

この気持ち悪い声は…

「加島…」

「おっと…怖い怖い」

こいつ…

「いやあ…大変だったよ…お前の学校聞き出すのはな」

「それで…関係のない学校を？」

加島はニヤリと笑う。坊主頭だから余計に不気味だ

「別に…学校つぶして困る奴いないだろう？勉強しなくてすむしさ」

「ふざけるな…確かに勉強は嫌いさ…けど学校は未来への道を繋げる為のものなんだぞ？」

「未来…ね」

「君は未来を奪ったんだよ？夢や希望を」

許せない…こんなゲス野郎の為に

「未来？夢？んなもなくていいんだよ！ここも同じだ！」

「…ここには大切な仲間が…人が沢山いる」

僕は文月学園に入学して本当に沢山の出会いがあった…

どれもこれも掛け替えのない時間

「だったらお前殺してそいつらも殺してやるよ！」

バチンとナイフを出す加島

後ろから不良が10人

「加島…前の僕だと思わない方がいいよ」

恐れるものなんかない

奏…待つててすぐ帰るから

「へえ…そりゃあ楽しみだな!!」

加島がナイフを振り下ろし不良も一斉に振り下ろす

(守護の腕輪…)

僕が今必要なのは

「加速…」

呟いた瞬間に僕は不良の後ろに回っていた

「この腕輪は召喚獣に関係なく…使える」

その場合は痛みが倍増するんだけどね

「っしゃあああ！」

バキイと不良を二人殴る

『『っ』』

回転しながら不良は倒れた

「な…なんだこいつ…化」

拳を避け鳩尾を仕留めた

『ぶ…』

「あああ！」

ヒュンとかわして腹を殴る

『が…』

バキイバキイと不良の顔、腹、鳩尾を殴り

「…加島…覚悟しろ」

残るは加島だけになった

第九問：怒りは限度を知らない

「加島……」

僕の記憶を奪ったあいつを睨みつけた

「吉井君遊びましょう！……」

腕輪を投げて拳を握る

「あーやだやだ……早く殺さないかね」

ナイフをバチンバチンと開いたり閉じたりしながら近づく

「ようやく記憶思い出して聞きたいことがあったんだ」

わざと微笑みかけながら続ける

「あの事件の時…何で…奏のカチューシャがなかったのかな？」

ベンチの上に座っていた奏はカチューシャを着けていなかったんだ

「ああー決まってるだろ？」

その言葉にピクリと反応する

「俺はあいつが大嫌いなんだよ。お嬢様のくせしてなんだあの貧相のなぞ」

プツンと何かが切れる

「しかも…桃色の髪ってキモいじゃん」

「もしかしてだと思っけど…それを彼女の前で言った？」

加島はへらへらと笑いながら頷いた

「うん。警察に捕まった時な。そしてお前の悪口言ったら泣きぢが
ったし」

僕は拳を握りしめ

「ふざけんなよ糞ゲス野郎」

静かに目の前にきて殴り飛ばした

「ぐえらあ」

加島は頭を思い切り打った

「僕の彼女によくもまあそんなことを……」

加島の襟を掴む。加島は怯えながらナイフを肩に刺した

痛くも痒くもない

「してくれたなあああ!!」

顔を力の限り殴った

「がふ…」

赤い液体を吐いたがお構いなしに殴る

「ふざけんなあああ」

バキイバキイバキイバキイバキイバキイバキイと何発も何発も何発も殴る

「お前に奏の気持ちかわかるかああ！」

地面にヒビがはいる程なぐり続けた

「…君何してる！？」

警察がようやく駆けつけ僕を止めようとすが力強くで引き離れた

「邪魔だ！警察に何ができるんだ！こいつなんか」

僕は涙を流しながら加島を殴る

殴りたい衝動に任せて…暴れる

「吉井！やめんか馬鹿者！」

鉄人が駆けつけ僕を加島から引き離す

「やめろ！教師なんか信用できるかああ」

「ぐふ…」

鉄人の腹を殴り気絶させた

「わあああああああああああああああああああああああ！」

殴っている拳は腫れ上がり血がなれる

「やめる明久！」

「雄二…？君も邪魔をするの？」

ゆらりと立ち上がり雄二を殴ろうとした時…

「…落ち着け明久」

ムツツリーニスタンガンを当てられ意識が遠のいていった

side 奏

あれから一週間後…加島君は再び逮捕されました。警察の方達も次は逃がさないようにすると言ってくれましたし安心です

西村先生は流石と言うべきでしょうか…わずか二日間休みまた私達に授業を教えてくださいます

いつもありがとうございます西村先生

『翔子…ちょっとま…ぎゃあああ』

『…浮気は許さない』

『おはようムッツリーニ君っ』

『…いきなり抱きつくなノノ』

『里穂は今日は休みか…?』

『ああーアイドルの仕事があるしな』

『二人共知ってるん？GREEで仮面ライダーのゲームが…』

『よし！アリス入会の仕方教えてくれ！』

『しゃあ！クウガクウガ！』

『秀吉君…私と如月グランドパークに』

『勿論じゃ。こっちからも誘うつもりだったからの』

『ありがとう！／＼』

『優子ちゃん何読んでるんですか？』

『あっ島田さんに姫路さん…これはえっと』

『…／＼これ確かに凄いわね』

『はわわ／＼』

『ムツツリーニ、坂本、須川が逃げ出したぞー！』

いつもと変わらないクラス…

けど寂しいです…

「…どつしたの奏？」

「翔子ちゃん…やっぱりあの人がいなきや寂しいです」

「…だからといって落ち込んでちゃ駄目」

翔子ちゃんは私の頭を撫でながら窓から外を見ました

「私だって雄二に会えないのは寂しい…けどそんな気持ちのまま会っても雄二は嬉しくないと思う」

私は俯きながら外で追いかけて回されている坂本君達を見ました

「…それは吉井も同じ…」

「はい…」

「…会えない分貯めればいい…そして会った時に思い切り甘えればいいと思う」

「翔子ちゃん…」

翔子ちゃんは微笑みながら続ける

「多分…少し強引でも吉井なら大丈夫だから」

「ありがとう翔子ちゃん…」

今の言葉で元気が出てきました！強引なことかあ…

私は守護の腕輪を握りしめながらこれからのことを考えました

side 明久

僕はゆっくりと目を覚ました

現在 12時…

今の僕は一週間2日の停学処分を受けていた

仕方ないよね…つい我を失ったとはいえあんなに殴れば…

「はあ…あと二日か…」

奏に会いたいなあ…

「おはようございます吉井さん」

おかしいな……ついに僕は本当に馬鹿になったのかな？

「無視しないでよー吉井さん！」

もぞもぞと誰かが出てきた

しかも僕のベッドから

「み、美代？」

「はい…そうですよー」

わからない…何故彼女が

「何で君がここにいるのさ」

美代は首を傾げた後

「実の妹にそれは失礼ですよー」

と言った！

いやちょっと待て

「ちっちなんで」

「おはよございませす吉井さん…いえ明兄」

「はあああああ！？」

また新たな事件を抱え…僕の因縁の過去は幕を閉じた

僕と過去と因縁と…終わり

第十問：（前書き）

今回は砂糖が出る…かもしれないです（笑）

覚悟して読んでください！

第十問：

停学処分期間が終わり、僕は心を改めて学校に向かっていた

「明兄早いですー」

美代と言う双子の妹と一緒に

美代：僕の妹：彼女はよく神父さんの所へ習いに行ってたらしい

僕は記憶が曖昧だった為か妹を友達と勘違いしてしまった

雄二にメールしてみたらみんな知ってたらしい

美代は何故偽名を名乗ったのかと言っと

「明兄に迷惑をかけるわけには行かなかったんです」

と涙目で教えてくれた。つまり記憶が曖昧だった僕を気づかって影で支えてくれていたのだ

そつえば最近妙に食費が増えていたのも彼女のおかげだろう

本当に可愛くて僕の為に必死に敬語をやめて、影で支えてくれて…
いい妹だよ

「今まで迷惑をかけてごめんね美代」

「いいんです！今は記憶を取り戻してくれただけで嬉しいです」

美代は僕だけに敬語を使う。理由は兄だからだ

タメ口でいいんだよと言ったら全力で否定された

やっぱり不思議な所は誰にでもあるんだね…

何故か僕のベッドに侵入してたし

「そつだ！今日は美代の好きな物を作るよ！」

「本当ですかあ！？じゃあ明兄で」

「み、美代僕は食べ物じゃない…よ」

美代はよだれを少し出ししながら顔を真っ赤にしていた

「いえ、ここは私が明兄の夕食に…」

なんかヤバい状態だ。美代だから可愛いんだけど

「早く学校行こう！」

聞こえないふりをしてダッシュで学校へ向かった

「おはよう吉井」

着いたと思ったら災いが降りかかった

「おはようございます…て、鉄人」

「おはようございます！西村先生」

「おはよう吉井妹。それと吉井兄」

「は、はい！」

確か雄二からのメールによると…僕は鉄人を気絶させたらしい…

なんかデジャブ…

僕は鉄人の拳を覚悟する

「お前は停学処分を受けた。だが、その理由も我々教師にも責任がある…すまなかつたな」

「西村先生…」

予想以上の展開に僕は黙るしかなかった

「だが本当は殴りたい所だが吉井奏に免じて許してやる」

殴る気だっただー

「お前を心配してたぞ。お礼を言っておけ」

「はい…」

僕と美代はFクラスを目指した

奏 s i d e

はわわ…はわわ

「どづしたのじゃ奏？そんなにそわそわして」

Fクラスの教室…今いるのは私と秀吉君、坂本君と翔子ちゃんです

「秀吉…吉井はな…可愛い妹に明久が犯されないか心配なんだ」

坂本君の言った言葉がグサリとささりました

「何を言ってるのですか坂本君！！美代ちゃんがそんなことする訳…ないじゃないですか」

「だったら何故泣くのじゃ」

ほえ…？私泣いてるんですか？

「…雄二は乙女の心がわかってない」

「し…翔子！？ぐああああ」

坂本君は翔子ちゃんにアイアンクローを受けました

「…奏は吉井に会えるのが楽しみで仕方ないから…」

「翔子ちゃん！？／／な、何を…」

翔子ちゃんは首を傾げながら喋りました

「…違う?」

「いえ、確かに明君に会いたいです…というより会いたくてたまりません！／／」

はう…恥ずかしいです…

「…奏は素直な人」

「お前は恐ろし…ぐあああ」

再びアイアンクローを受ける坂本君…自業自得ですよ

「そうだったの…奏は明久の彼女だったのをすっかり忘れておったわい」

秀吉君：それはちょっと悲しいです

「勘違いするなよ吉井」

「奏でいいですよ坂本君」

にっこりと微笑むと坂本君は照れくさそうにしていました

「そ、そうか。ちなみに秀吉はお前がとても可愛いから馬鹿な明久と付き合ってるとは思えないと思っ「明君は馬鹿じゃないです!!」
「すまない」

私はいいですが明君が馬鹿にされるのだけは我慢できません…

「…雄二はやっぱり乙女の心を理解していない」

「ま、待て翔子！悪かった…俺が悪かったから」

翔子ちゃんは攻撃はせずに俯きながら喋りました

「私だって雄二が馬鹿にされるのを黙ってられないから」

「翔子…／＼」

やっぱりお似合いです…末長くお幸せにね翔子ちゃん

そういえば如月グランドパークについてですがよくよく見るとまだオープンされてないんです…

でもオープンそうそうに行くことができるなんてラッキーです

いろいろと考え事をしているとガチャリと扉が開かれました

「おはよう…」

「おはようございます！」

「「おう明久と妹か（…おはよう吉井、美代）」」

「二人共おはようなのじゃ」

「おはようございます美代ちゃん」

入ってきたのは明君の妹の美代ちゃんでした

「あ、あれ？奏、僕のこと忘れてる？」

前言撤回です…私の彼氏も来てまし…

「明君！？」

私は涙目になりながら顔を真っ赤にして

「おはようございます…明君」

と言いました

「うん。おはよう奏ー」

「（ポ…）」

「いかん明久！お主を見て奏が硬直しておる」

「えええっ！？大丈夫？奏！」

「ふえ？あっ／＼／」

「熱は無いみたいだね？」

「いや…あの明君…おでこがくっついていてるんですが」

「さてと明兄、私はちよつとBクラスに行つてきます」

美代ちゃんはニヤリと笑いながら教室から出て行きますし…

「…雄二、屋上に行こう」

「そつだな」

「ワシも用事があったのじゃ」

三人も教室から出て行き…

「…二人きりになっちゃったね」

教室には私と明君だけになりました

「明君…お、お帰りなさい／＼」

「えっ？…うんただいま！」

にっこりと笑う明君に私は釘付けです

「奏……」

「は、はい」

え、何でしょう？明君が近寄って来るのですが

「実は唇が寂しくなってます…」

明君は照れくさそうに頬をかきながら私を見ました

「ふええええええ！？あ、明君？それは…えっと…//」

「うん…キスしたいかなあ…って」

こゝこれはやっぱりされるがままに…いえ、明君は迷惑をかけたの
ですから少しお仕置きが必要です

「駄目ですよ…」

「えっ…やっぱり」

困ってますね…ここはちょっと辛かつちやいましょう

「そんなことして…明君は私を抱いてくれますか？」

「はいいい！？／／何を言っているんだよ奏！」

「度胸がありませんよ明君。そんなのじゃキスなんて早いですよ」

「いや…一度してるし…キスが抱くに繋がる訳じゃ…」

「私を抱けないんですか？」

上目使いと涙目で明君に迫りました

「……いや…でも…／／／」

ふふ…そろそろ許してあげましょ…

「ふふ…冗談ですよ明君」

「へ？」

「ぶははっ！…半分ですけどね」

「残り半分は！？」

私は笑いながら明君を見ました

あれ？まさか怒ってますか？

「明君？」

「……………」

やっぱり怒らせちゃいましたか…

「ごめんなさい明君…」

「ふん…」

うっ…流石にやりすぎました…

「明君…機嫌直してくださいよ」

明君は何かを狙ってたかのようにフフと笑いました

「じゃあ…キスしていいよね？」

あっ…

「……私的にはお風呂に一緒に入るの方が」

「それはアウトだよ！！（やっぱり奏は脱衣に関してはためらいがない）」

駄目ですか…

そう言えば愛子ちゃんが…「いついつ時は男が喜ぶようなことをすればいいと言っていましたね…」

「じゃあ…一日メイドといつのは…」

「ほえ…？奏…ごめん強引すぎた…無理しないでいいよ」

しまったー！これじゃあ私がるまで変態じゃないですか

しばらく沈黙が流れた後…

「明君…」

「何…どうし」

明君が喋り終わる前に口を塞ぎました

「ぶは…え、どうし」

再び口を塞ぎました

「ん…」

「…んちゅ」

今度は長めのディープ…

「っは！奏いきなりどつしたのさ！？／＼」

「これが私からのお仕置きです明君…」

「え…？」

「無理しないでくださいね明君…」

「じゅめんね奏…」

「なら態度でしめてください…」

明久 s i d e

ゆっくりと奏を隅にあるソファーへ押し倒す

あの一週間と二日…僕は奏に会えないからイライラしていた

自分で招いたことだから自業自得だけどね…

僕だってお年頃の男だ…キス一つじゃ満足できない場合がある

奏の場合はなおさらだ…

実は奏は学園生徒で彼女にしたいランキング一位だったんだ

正直いつも理性を維持していた自分がつくづく凄いと感じた今日の頃

「明…君…／／／」

奏はうつろとした目で僕を見つめる

ゴクリと唾を飲む

正直に言おう…今とてもヤバい状態だ

「明…君」

色っばい…

いいのだろうか？いや駄目駄目駄目

「ん……」

奏とのキスはこれで三回目だ…

「んちゅ」

本当に理性が壊れかねないくらい…奏のキスは心地いい

『危険描写の為…観覧禁止』

「明君… / /」

奏は頬を染めながら明久を撫でた

「綾と〜」

「…アリス」

いつの間にかいた二人に驚きながらも膝の上で寝ている明久をそつと撫でた

窓から通った風はとても奏には心地よかった

『ねえ…アキ。なんで奏の膝の上で寝てたのかしら？』

『そうです！明久君には早すぎます！』

『『異端者には死をー！』』

『なんで結局こうなるのー！』

吉井明久の悲鳴は学園中に響いた

再び明久 side

「はあ…疲れたあ…」

「大丈夫ですか明兄？」

あれから拷問を受け… 奏が保健室でつきつきりできてくれて… 帰ったらまた繰り返し

流石に疲れたよ…

「さてと…帰ったらパエリアを作ってあげるね美代」

「本当ですか!？」

美代はうるうるさせながら僕に抱きついた

明日は休日か〜雄二でも呼ぶかな…

「明兄!明日弁当お願いします!」

「そついえば美代は陸上部だったよね。わかった」

明日は早起きしなきゃね

今日奏とあったことを思いだしてしまい顔を真っ赤に染めてしまっ

たのは家に帰ってからだ
た

キャラ紹介2 + 腕輪紹介（前書き）

明久の腕輪とキャラ紹介です

キャラ紹介2 + 腕輪紹介

かんなきあやと
神薙綾人

男性 17歳

登場作品：カトラス様のバカと少年の異世界道中記

外見：スパ ボFの主人公の一人のレナンジエス・スターロード

成績はCクラスレベル

アニメ・特撮オタク

鈍感ではないが相手の好意をどう受け取ったらいいかわからないでいる。

・好きという気持ちはとてもかけがえの無いもので恥ずかしくて隠すものではないと思っている。

可愛い動物を見たら愛でずにはいられない。

一途に相手アリスのことを想っている。

友達を大切にするため、友を傷つける外敵にはOHANASIを決行。特に仲睦ましい吉井夫婦に害を与える者やアリスを泣かせるものは絶対に許さない。

明久、奏とは中学校で出会い、今はみんなととても仲良くしている

召喚獣：カトラス様の作品に登場するヒーロー：ナイトブレイザー

吉井美代よしいみよ

身長：162

体重：（美代に殴られた為回答不可能）

外見：緑色の肩までとどくくらいの髪に黄色い瞳

性格：基本的柔らかく敬語は常に使う。明久の場合は特に

明久の双子の妹でブラコン。早く奏と結婚しないかと一番待ち望んでいる

朝起こす時、なかなか起きない場合は童貞を奪おうとする

召喚獣：不明

鴨川愛理

教師 24歳

明久達の副担任になる。明久達とは小学校からの付き合いで、よき理解者

かなりの美人なので教師、生徒問わず人気である

鉄人と同じ全教科担当できる

吉井明久

主人公：観察処分者

身長176

得意科目：日本史や世界史：最大で1600までいったことがある

一度過去を失い、蘇ると同時に激しい怒りを覚え一度停学になった

本気で怒らせると鉄人すら沈めてしまう

基本的優しく、勇敢で馬鹿である

召喚獣：変化なし

吉井奏

主人公：学園三位

身長165 変更しました

学園で一番彼女にしたいランキング一位

同性からも告白されたことがある

見た目：変わらず劉備

召喚獣：変化なし

得意科目：家庭科：2000を叩き出した

吉井当夜

見た目：キダムの主人公

奏の兄で明久の姉玲と幼なじみ

性格は優しく明久に似ている

玲が好きだが…玲が鈍感だから気づいてもらえない

職業…文月学園の教師

腕輪紹介

『明久の腕輪』

・守護の腕輪…召喚獣関係なく使用できる。自分が願った武器が現れるが武力には使えない者がある

召喚獣の場合…点数を100必要とする

フィードバックが数十倍になる

第十一問：水着は色気を倍増できるアイテムです（前書き）

連続投稿です

第十一問：水着は色気を倍増できるアイテムです。

服を脱ぎ捨て露わになった体はゆっくりと風呂場に向かう
シャワーに切り替え体中に雨を感じる

「あー雄二ー」

「あん？」

冷たいシャワーが肌に降り注いだ

「ぬぎゃああああ！」

坂本雄二の声は家中に響いた

僕とプールと水着の楽園と

「今、ガス止められてるからお湯でない」

僕はゲームをしながら風呂場にいる雄二に一声掛けた

「先に言えアホ！」

雄二は裸のままリビングにやってきた

何かおかしかったかな？あっーそうか

「じゅめんじゅめん。まずは手と足に浴びさせて徐々に心臓へと…」

「誰が冷水シャワーの浴びかたを聞きたいと言った！」

ますます怒る雄二

「何暑くなってんだよ。そうだ冷水でも浴びて」

「浴びたから暑くなってんだボケエ！」

「ルンルン」

ピンク色の髪をした美少女…吉井奏は軽い足取りでとある家に向かっていった

「えと…ここですよね…」

私はピタリと扉の前で止まりました

「全く…お父さんもお母さんも勝手すぎますよ…」

私は高校生になった時、一人暮らしを始めました

最初はなれないことばかりで実家に帰ることが多かったんですね…

「いえ…お父さんが帰ってこいと何回も言ってきたんですけど…」

私はお父さん、お母さん、兄、妹の四人暮らしをしていました

お母さんは彼氏はまだかと…いえ、明君とまだ付き合わないのしつこかったんですね

明君の両親と私の両親はとても仲かが良かったです

何故ならお母さんは明君のお父さんの双子の妹でしたから…

今日は明君の家に届けて欲しいものがあるとされたねです…

「ところで、なんで…そこまで私を一人暮らしさせるのを嫌がるの
でしょっ…」

親馬鹿と言っ奴ですかね？

私は深呼吸してからチャイムを鳴らしました

「明君？いますか…」

『がああああ！』

「ひゃあ！」

私は扉の向こうから聞こえた叫び声に飛び上がりました

「え…えとこの悲鳴は…明君と坂本君！？」

ついガチャリと扉を開けて中へ入りました

散乱した食べ物…飲み物

そしてリビングには食べ物を投げ合う二人が…

とにかく止めなくては！

「何やってるの二人共！危ないからや…」

「あー」

私の顔にはべっとりとした麵が張り付き、ゆっくりと流れ落ちる

二人はその光景に青ざめている

「二人…共…」

食べ物を粗末にするとは…いくら明君や坂本君でも許せない

「食べ物を粗末にするなあああ！…そして何で…あつ！逃げるな二人共！」

二人は叫びながら全力でダッシュし、私が出た時にはかなり奥まで逃げていました

「はあ…ぶじするの…」ね」

とにかく掃除しなきゃ…明君にはたっぷりとお説教しなきゃ

明久side

僕と雄二はその後、喧嘩をし、部屋中を汚してしまった

だって雄二が悪いんだよ！？カロリー0しか買ってこないなんて…
油と砂糖しか食べてない僕にどうしてカロリーの心配があるのさ！

決着がつかずにやりあっていて、雄二が投げた麺を避けた時…

奏がいた…

何故と思うより恐怖が僕らを襲った

奏を本気で怒らせると大変なことになってしまう

僕と雄二は急いで逃げ出した。捕まったらお説教…

とりあえずベトベトした体を洗う為に僕らは温水プールへ向かった

「それで…温水シャワーを浴びたついでにパンツ一丁で泳いでたのか!？」

19時…僕らは鉄人に見つかり捕まった

「はい」

雄二と一緒にパンツ一丁で正座している…とても惨めだ

「雄二がまともな差し入れを持ってこないからだろ！」

「お前がガス代払ってないせいだろ！」

「水が出るだけましだろ！」

「水がでない時もあるのかよ！」

二人でいがみ合っているいと鉄人に止められた。

わかつたくれたんだね鉄人！

「ぐべらあ！」

鉄人に片手で顔をわしづかみされ空中に上げられた

何故だ

「お前達が底抜けの馬鹿だと言ったことがわかった！罰として来週の日曜日はプール掃除だ！」

「はい……」

「全く酷い目にあつたよ……あれ？靴？」

ああ…美代のか…家に帰ってたのか

「ただいま」

軽い気分でリビングに入ると

「「お帰りなさい」「」

美代はソファーに座りながら

奏は料理をしながら僕に挨拶をした

ん？ちょっと待てよ

「何で奏がいるの!？」

「せつかくですから夕食を作って行くかと」

先程とは違い笑顔の奏…

「そ、そうなの…ところで家で？」

「明君に渡してと両親から頼まれたんです」

そう言ってテーブルに置いてある物を奏は指差した

「あはは…ありがとう…」

「さあ出来ましたよ。美代ちゃんも沢山食べてくださいね」

「わあ！ありがとうございます奏さん！」

テーブルには豪華な料理が沢山だ

あ…ちなみに雄二にガスがでないと言ったのは嘘だよ

無駄な光熱費は防ぎたかったしね

「「いただきます！」」

楽しい夕食…だったけど…

「明君…お説教の時間ですよ」

「はい…」

10時まで説教された後、僕は奏を家まで送っていった

いや…本当に奏の説教は怖いよ

「それは大変じゃのう」

翌日…秀吉達と昨日のことを話していた

「あーあんな広いプールを掃除だなんて気がめいるよ」

僕はシステムデスクに顔を突っ伏しながら呟く

「まあそう言うな…そのかわりプールを使い放題なんだ」

確かにね…そう考えると少しはやる気であるかな

「綾人、一麻は誘ってるし…ムッツリーニも来るか？」

いつも無口なムッツリーニはすぐに断った

「パス」

「ちなみに奏達も呼ぶつもりだ」

「ブラシと洗剤を用意しておけ」

親指を立てキラんと歯を光らせるムツツリーニ…流石と言つべきか

「ワシもいいかの？」

「うん！勿論だよ秀吉！」

…木下さんは用事、美代は部活か…工藤さんには声を掛けてあるから大丈夫だ

「何の話をしているんですか？」

姫路さん達が紅茶を飲みながら尋ねてくる

「ああ…来週の日曜日…プールに行くんだ。姫路や島田も来るか？ちなみに奏は来るぞ」

そう雄二が言った後二人は勢い良く頷いた

「勿論です！いろいろ準備して行きます！」

「そうよね！いろいろ準備しなきゃね！」

何を準備する気何だろ？

「よし後は翔子に声を掛ければ終わりだな。」

「あれ？アリスと里穂と種山さんは？」

「三人は奏が誘ってくれてるから大丈夫だ」

なら安心だね。日曜日が楽しみに思えてきたよ

そして日曜日…

僕は奏と合流してから学園に向かった

「今日はいい天気で良かったですね」

「うん。僕は早く泳ぎたいかな」

廊下を渡って行くと姫路さん達がいた

「おはようございます明久君、奏ちゃん。」

「おはようなのじゃ明久に奏」

「…おはよう」

「おっはよー吉井君！奏ちゃん」

「おはよう明久君！奏ちゃん」

「みんなおはよう！」

「おはようございます」

みんなに挨拶していくと、一人の女の子が僕に抱きついた

「おはようです馬鹿なお兄ちゃん！」

「おはよう葉月ちゃん」

この可愛いツインテールの子は島田葉月

美波の妹なんだ

何故僕のことを知っているかは後ほど

「あつ！美人なお姉ちゃん」

葉月ちゃんは奏にも抱きついた

「はい、おはよう葉月ちゃん」

「ごめんね…ついて行きたいって聞かなくて」

「大丈夫だよ美波！」

別に一人や二人変わらいしね

「歌のお姉ちゃん！おはようです！」

葉月ちゃんが抱きついた先に里穂がいた

後ろからは溜め息をする一麻と綾人カップル

「おはよう葉月ちゃん」

大人数でワイワイやっているとな雄一と霧島さんが鍵を持ってやって来た

「よし。みんな揃ったな。じゃあ水着に着替えてプールサイドに集合だ」

「はいです!」

僕らは後ろを向くと更衣室に向かって歩きだした

ん?二人性別が違う人が…

「こらこら葉月ちゃん。こっちは男子更衣室だよ。葉月ちゃんと秀吉はあっち」

「えへへ。冗談です」

「ワシは冗談ではないのじゃが」

何言ってるんだ秀吉は

「ほら、葉月、木下行くわよ」

ほら島田さんだって呼んでるよ

「お主もか！ワシだけ女子更衣室は嫌じゃー！」

「…雄二の前で脱いだら」

霧島さんのオーラが秀吉を襲う

「何故じゃ！」

「大丈夫だ。秀吉、ほら」

綾人が示した場所は

秀吉更衣室

「秀吉って性別なんだ…」

第十二問：水着は色気を倍増できるアイテムです〜2

暑い日差しがさすなか僕はプールサイドにいる

「ふっふ…」

軽く体をほぐしながら僕は女子達を待っていた

「それにしてもお前ら筋肉が凄いな」

「…それは雄二にも言える」

そうかな…普通だと思っただけど

「まあ…俺は武術、一麻はボクシング、明久は柔道や剣道やってたからな」

そう言いながら綾人は屈伸をしていた

「そついや…明久が一番強いけど…次は誰なんだろうな」

一麻はムツツリーニの輸血パックの取り付けを手伝っていた

「さあ…綾人じゃないかな？」

僕は腕立てをしながら呟く

そつこつやっていると同ころから誰かがやってきた

「お兄ちゃん達お待たせです！」

「あつ葉月ちゃ…つおー！」

ブシャアアアと鼻血を出して僕ら男子は全員鼻を抑える

ば、馬鹿な

「あれは新手の兵器か…」

「…く…卑怯な」

「「なんつう破壊力」」

「雄二…意外と弱いんだね…」

「馬鹿言え…これはトマトだ」

スクール水着で胸がでかい葉月ちゃん…破壊力抜群だ

「葉月い〜!」

葉月ちゃんを追って美波が出てきた

「返しなさい！それがないと胸が〜！」

くっどじいじいと

「あっずれちゃいました」

葉月ちゃんはそう言って何かを取り出す

「遊びに使っちゃ駄目！」

パシッと葉月ちゃんからそれを奪い返し僕を見た

「それって…パ」

「忘れなさい！」

「露骨が当たって…ぎいやああ」

何で！何でいきなり関節技？

「お、おい明久大丈夫か！？」

「やめる島田！」

二人が僕を助けに入った

「もう葉月の馬鹿……」

美波はスポーツタイプの水着を着ている

胸さえあれなら美波は完璧だね……

「あんたの目潰すわ」

な、何故美波はチヨキの構えなんだ!?

「待たせたのみんな!」

「あつ秀吉!」

秀吉はトランク스에男の髪型とどこから見ても美少年だ

「おつ来たか!」

「感謝するぞい綾人」

「いって…お前は髪型で女に思われてたからな」

確かに…秀吉だって女の子なんて嫌だろう…綾人に昨日言われたか
らなあ

「…少し残念」

ムツツリーニは意外と悔しそうだ

「これで女の子に間違えなすすむね一麻」

「ああ…」

「おっまた誰か来たぞ」

「」「おお…」「」

次は霧島さんだ黒いビキニにスカートだ

「うわあ…モデルさんみたいだ」

「…えい」プス

「にぎちゃあああ」

「凄いわ…そのまま綺麗に坂本の目を潰すなんて」

雄二はと言うと目を抑えて必死に我慢している。

「頑張れ雄二」

「…雄二他の子は見ないように」

霧島さん…君はなんて言い妻なんだ

「お姉ちゃん綺麗です!」

「…そう言ってもらえると嬉しい」

霧島さんは照れながら頬を染めた

「雄二はいい妻を持って幸せだな」

「うん…羨ましいよ」

「大丈夫かムッツリー…」

上から綾人、僕、一麻の順番で喋っていく

「ちょっと待った それはどついうことだあ」

この声は…ムードメーカーで綾人の妻…

「そう！ラブリンエンジェルアリス様だあ」

そう言ってアリスはプールから現れた

僕の心読まれてた!?

「何でプールにいるんだよ!」

「アリス様はどこからでも登場するのだ!」

そしてVサインをするアリス

「バタン」

「…えい」

「ぎゃあああ」

僕らは倒れた…ふっよく我慢できたものだよ

アリスの水着は…

「スリングショットだと…」

最も露出が高い水着だ…

「綾人…どうかな？」

「…みんな…先に逝く」

字が間違ってるよ綾人…

「綾人…！」

アリスに抱きつかれた綾人は立っただまま気絶した

「あれ？ダーリン？」

「早く蘇生だ明久！」

「うん！」

必死に二人で胸を押す

生き返れ綾人ー！

「…先に逝く」

「ムツツリーニー!?」

大量の鼻血を噴射しムツツリーニまで倒れた

「くそっ！誰が…ムツツリーニにこんなことを…」

綾人は息を吹き返し一麻はアリスにタオルを巻き、僕はムツツリーニを蘇生させている

「すみませ〜ん！紐を結ぶのに時間がかかっちゃいました」

巨大な実を持った姫路さんが犯人だった

「Worauf für einem Standard hat
Gott jene unterschieden, die
haben, und jene, die nicht haben
en!? Was war für mich ungenügen
d!（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの！
？ウチに何が足りないっていうのよ!）」

「美波ちゃんどうしたんですか？」

「お姉ちゃんはショックを受けるとドイツ語を話すんです」

「明久君…どうですか？」

「うん。似合ってるよ」

僕は笑顔で答えたら姫路さんは嬉しそうだった

ちなみに姫路さんの水着は赤で黄色いスカートを巻いている

「秀吉君どうかな？」

「似合ってるぞい／＼」

種山さんは緑色のビキニで秀吉に感想を聞いていた

うん。やっぱり髪だけで…印象がこつも違つとはね

前は百合だと勘違いしてたよ

「一麻ー！」

「うわあ！いきなり抱きつくなあ／＼」

里穂はピンクのビキニに短パンで一麻に抱きついた

「みんな羨ましいよ…」

一人のぞいて巨大な実を持った女の子に戯れるなんて

「あれ？そう言えば奏がまだだね」

「だな…期待してんのか？」

「うん…どんな水着かな…って」

綾人の質問に僕は苦笑しながら答えた

「なんか心配になってきた」

僕は立ち上がって更衣室に向かった

「ちょっと待て明久！」

「アツキーも大胆だねえ」

「「させないわ（ません）！」」

「へ？うわあ！」

二人に関節技をかけられ僕は動きを封じられた

「二人共…それ以上やったら…本当に折れる…」

僕はただ…みんなの為に作った弁当が心配だから取りに行こうとしただけなのがいい

「アリス…」

「ほいさ！了解だよん」

「何よ綾人…きゃあああ！腕が」

「美波ちゃん！きゃああ！」

二人が綾人とアリスによって逆に関節技を決められていた

まあ仕方ないよね

「今のうちに行け明久！」

「ありがとう二人共！」

僕は男子更衣室に向かって行った

あれ？また心読まれた？

「ふう…大丈夫だね…」

腐ってなくて安心したよ…さてと弁当を守る為のクーラーボックスとみんなの為にパラソルもって行かなきゃ

ガチャリと更衣室から出た後、僕はプールサイドに戻って行く

「ん？あれ二人共どうしたの？」

最初に美波と姫路さんが這いつくばっていて…アリスは綾人と夕オ
ルを引つ張り合い、一麻は里穂に噛みつかれ雄二は霧島さんに目を
やられ、秀吉は楽しく種山さんと会話、ムッツリー二は気絶していた

「うっ…どうせウチらは負け組なのよ」

「絶対勝てないんです」

「何を言ってるの二人共？」

「お待たせしました」

振り向くと…そこには

「奏…」

女神様がいた

「どうかな明君… / /」

やっぱり肌を見せるのは恥ずかしいんだろう… パーカーを羽織って
いるけどそんなのは関係ない

ピンク色の髪を束ねたポニーテール… 綺麗な青い瞳… その髪に合う
ようなスカートを巻いた少し露出が高い赤いピンク色のリボンをつ
けた水色のビキニ… そして透き通るような白い肌… 綺麗に曲線を描
くくびね…

「…う、うん… 綺麗だよ / /」

想像絶する破壊力に理性が消えかけていた

「嬉しいです／＼」

ぐ…この照れながら笑う表情も…

「一麻…懲役何年かな？」

「落ち着け…まずは落ち着け」

そつだ…落ち着け僕…

「明君…えいつ」

「……！？」

「…シャッターチャンス」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「やるわよ！（やりましよう）」」

抱きつく奏、鼻血を噴射した僕、シャッターを切るムツリニ

そして攻撃体制をとっている二人

「むづ…明君…無視しないでください」

奏はそう言いながら頬に口付けをした

「J M A G D . W G W . ! ?」

「アーキー！（明久君ー！）」

ちよっ何これええ！？

第十三問：水着は色気を倍増できるアイテムです。3（前書き）

F O O L様とサイレント様のリクエストで三人のキャラを登場させて頂きます！

第十三問：水着は色気を倍増できるアイテムです！3

「で、あんな状態になってたんだね…」

さっき僕が更衣室に行っている間にいろんなことが起きたんだ

まずは雄二…わかると思うけど…他の子をみないようにと目潰し

秀吉と種山さんは別に普通だからよし

ムツリ二と姫路さん、美波は僕が出てきた後に奏が出てきたので鼻血とシヨックを受けていた

いやはや…なんといいですか

綾人はアリスが巻いていたタオルを外そうとしたから理性が危うくなった綾人は必死に取らせないようにと

一麻は里穂の水着の感想を言った後、余計なことを言ってしまい殴

られた…これは自業自得だね

葉月ちゃんは奏に抱きついてる…羨まげフンゲフン

「ところで明久…そいつは誰だ？」

「誰だとは失礼だなあ雄二」

僕の隣にいる子を指差す雄二と首を傾げている奏以外のみんな

「紹介するよサイレント様とFOOL様から出させてもらった静久ちゃん、優人と秋穂ちゃんさ！」

「よろしくお願いします！」

「よろしく！」

「可愛いの〜」

「…ブシヤアア」

「「ちら「そよろしく!」」

「じゃあ遊ぼうか!」

「「「オオー!」」」

「じゃあ静久ちゃん、秋穂ちゃん、葉月ちゃん遊ぼう!」

「「はい」」

雄二、霧島、綾人、アリス、優人は競争し、

ムッツリーニは撮影を始めた

姫路さんと美波が一麻に説教された後

一麻、秀吉、里穂、種山さんは僕と奏と一緒に三人の子と遊ぶこと
にした

「じゃあ…とりあえずバレーやらない？」

僕の提案にみんな頷いた

「はい」

「よしチームは僕、秋穂ちゃん、静久ちゃん、葉月ちゃんチーム、里穂、種山、一麻、秀吉チームでこう！」

すると葉月ちゃんが近寄ってきた

「葉月は審判がいいです」

審判って凄いな葉月ちゃん

「わかった。じゃあ奏お願いできる？」

「かしこまりました」

よし！！じゃあバレーの始まりだ！

「頑張ろうアキ君！」

にっこりと微笑んだ後、秋穂ちゃんは和服を脱いで水着に…

「ブシャアア！」

馬鹿な…紐水着だと？

「どうしたのアキ君？」

秋穂ちゃんは心配そうにこっちへかけてきたって…

「くべほらあ！」

楽園が…見え…る

「明君!？」

「輸血パツク！」

何だろ…みんなの声が聞こえたような…

息を吹き返してバレーを始めた僕ら

「アキ君凄いな！」

「なんといいですか…」

「入り込む余地がないような気が」

「うおりゃあああああ！」

僕と一麻は攻防戦を繰り返していた

「くたばれ明久！」

バチンと打たれたスパイクを綺麗にレシーブ

「甘いよ一麻！」

よし！！ボールを上げて

「静久ちゃん！」

「うん！」

スーパーレシーブからの…

「次は秋穂ちゃん！」

「よいしょ！」

スーパースパイク！

「秀吉任せた！」

「承知！」

くっ 流石秀吉…

「いけ里穂！」

「了解だよ！」

里穂がトスをして

「やっぱ…！」

「くらえ明久！」

凄いスパイクがキタアア！

「みんな下がってて」

素早く腕を出し受け止める

「ぬおお…おりゃあー！」

そのまま上へ上げ

「今だ奏！」

「よいしょー！」

奏を腕に乗せて思い切り上空に上げた

「やあああ！」

スパアアアンと奏が打った球は回転を加えて、隕石のように落下した

「え、無理だろおお！」

一麻に直撃して爆発を起こす…

いや〜美しいね

「25対23でバカなお兄ちゃんのチームの勝ちです！」

「「やったああ！」」

嬉しそうに喜ぶ静久ちゃんと秋穂ちゃん

良かった良かった。

「痛たた…ちょっとやりすぎちゃいました」

尻餅をついてる奏は舌を出しててへっと笑った

「お疲れ様！／／／」

奏の着ていたパーカーが濡れて肌が透けている

早くも理性が消えそうだ

「どうしたんですか明君？」

「いや…えつと…」

「キスが物足りませんでしたか？」

いきなりの爆弾発言に頭が爆発した
いや本当にいきなりすぎる！

「な、何を言ってるのさ…別に僕は…って何で悲しそうにしている
!?!」

「…私じゃ不満ですか？」

「不満もこうもないからね！ただ僕は…みんなの前で大胆すぎるん
じゃないかなって」

奏は首を傾げた後、向こうを指差した

あれは!?!水中でキスをしている綾人とアリス!?!さらに胸におさ
つけられている雄二!?!

いつのまにかきた工藤さんに抱きつかれているムッツリーニ！？

「何だこじは…」

恐る恐る奏を見ると案の定目をつぶっていた

これはキスをしろと言っ奴か！？

いや、でも秋穂ちゃんや静久ちゃんがいるし…優人だっている訳だから

「明君？」

「えっ、あつめんめん」

そう言って唇を重ねる僕…奏のお願いにはやっぱり勝てないなあ

」「甘いね。」「」

「ああ…結婚しろよと思いたくなる」

そう言えば姫路さんや美波はどこにいったんだろ？

」お母にしゅが

僕はそう言っって重箱を持ってきた

「アキ君のお弁当美味いんだよね？」

「はい 舌がとろけますよ」

「楽しみです！」

「ははっ…じゃあ開けるね」

今日は奮発して三段弁当…喜んでくれるといいけど

「うわあ…美味しそうだねん！」

「明久にこんな特技があったとわな」

「明君の料理は自信をなくす程、美味しいんですよ」

みんな、箸を持ってワクワクしていた

こんなに喜んでもらえる作りがあるよ

「へえ…アキ本当に料理できたんだ」

「正直以外です」

「その言葉は正直悲しいよ…」

「とにかく食おうぜ！」

雄二の言葉にみんな頷く

「」「」「」「」「頂きます！」「」

一人ずつ口へ運ぶ

「美味しいい〜ん！」

「涙が止まらねえ！」

「おお！美味しいな！」

「「美味しいです」」

「……………流石明久」

「おお！美味しいのじゃ！」

「美味しいよアキ君！」

「奏は幸せだね〜ん」

「ふえっ！？／／／…」

「奏…ご飯粒ついてるよ」

「あっ…有り難う明君…／／／」

「…吉井…今度このサラダの作り方教えてほしい」

「あつ僕も教えてほしいな」

「私も教えてほしいなあ」

「勿論大歓迎だよ。三人共夫想いだね！」

「…／／／」

頬を染める霧島さん、工藤さん、里穂

「…ぶふ！」「」

盛大にふく夫三人

照れなくてもいいのになあ

「うっ…本当に自信無くすわ…」

「明久君がこんなに上手かったなんて」

姫路さんと美波は落ち込んでいた

そんなにまずかったのかな？

「明久…一応言つとあいつらはお前の料理があまりにも上手かったから悔しがっているのさ」

綾人はそう言いながらハンバーグを口に運ぶ

姫路さんはともかく美波は上手いと思うけどなあ

ちなみに僕らは大きなパラソルの中で食べているから腐る心配はない

食べた後、僕らはまた遊んだ後、掃除を始めた

第十四問：温泉…それは楽園（前書き）

ちよつと過激かもしれません（笑）

第十四問：温泉…それは楽園

プール掃除を終えた僕らは三人と別れ学校から出た

「あーくたくただよ〜」

僕は肩をがっくりさせながら歩く

「……疲れた」

ムツツリーニも同じ状態だ

「お主の場合は貧血じゃろっ」

「明久は奏…ムツツリーニは工藤に抱きつかれて気絶したからな」

一麻は里穂の頭をグリグリしながら呆れていた

「えへへ〜／＼」

「スキンシップだよ」

二人は笑いながら工藤さんはムツツリーニに抱きつき

奏は舌を出して小悪魔のように笑った

「「ブシャアアア」」

「おい明久！ムツツリーニ！」

「綾人…奏が凄く可愛いんだ」

「アキ！しっかりしなさい！」

「明久君大丈夫ですか！？」

「二人がとても優しく見え…」

ガクンと僕とムツツリーニは気絶した

「明君ッ！」

綺麗な花が沢山咲く中…一人の美女が手を振る

「奏…」

今、そっちに行く…からね

「あれ？ここは」

「大丈夫か明久？」

「綾人？」

「心配したぜい。アッキーとムッツンもう少して戻らない所だったよん」

アリスと綾人が苦笑しながら僕らを覗き込んだ

「ここは？」

「えへへ〜間違えたです」

「ほら行くわよ葉月、木下」

「またか！ワシだけ女湯は嫌じゃあ！」

困ったなあ…男湯へ行こうとしたら止められるし

「大丈夫だ秀吉。ほら」

雄二が指した場所は…

「秀吉って性別なんだ」

秀吉は仕方無く頷いてくれた

奏 s i d e

私たちは女湯に入り…私は体を洗っています

「それにしても…奏ちゃんスタイル抜群ですね」

「そうですか？」

私ってスタイルいいのでしょうか？明君はそう言ってくれましたけど…

「胸だって大きいわよね…」

美波ちゃんは羨ましそうに私の胸を眺めてきました

「そ、そんなことないですよっ／＼」

これは流石に恥ずかしいです！

「カナナくん！」

「ひゃああっ！」

顔を赤くしながら体を洗っているときいきなりアリスちゃんが抱きついてきました

「んーこの胸を揉めるなんて…アッキーは幸せ者だねん」

明君の言葉が出た瞬間…私は耳まで真っ赤になりました

「んあっ…な、何を言ってるんですか！／＼」

「またまた」

もうなんなんですかああ！／＼

「私も！」

「ウチも！」

「奏いいよね？」

「わ、私だって」

「……私も」

「奏ちゃんは恥ずかしがり屋さんなのかな？」

「ひゃあああ！いっぺんに抱きつかないでええ／＼」

「大丈夫ですか？美人のお姉ちゃん…」

あつ救いの手が／＼

「は、葉月ちゃん…明君を呼んで…くだひゃい／＼」

「わかったです！」

葉月ちゃんはどことことと壁の方へ行きました

「みなさん…ん！いつまで揉んでるんですかああ！／＼」

そんなことは知らない男子湯では

「明久シャンプー」

「はい」

「それは俺が買った石鹸だ」

「でも泡は出るよ」

「はあ…一麻」

「ああ…ほら石鹸」

「お前もか!」

「雄二…わがママは駄目だぞ」

「俺が悪いのかよ！綾人」

「……………」

「どうしたのムッリーニ？」

「この先女湯」

「「「何!?!」」」

「何やってんだお前ら」

「何って…?」

「壁を登るつもりだな」

『バカなお兄ちゃん』

この声は…葉月ちゃん?

「どっしたのー?」

返ってきた言葉は意外な者だった

「美人のお姉ちゃんが胸を揉みしだかれています！」

「ブシャアアア！」

「明久！ムツツリーニ！」

「ど、どういうことだ？奏が胸を揉まれてる？」

「私達がレッスンしてあげるよん」

「優しく…しててください」

「わかってるわよ。まずはウチから」

「ああっ…刺激が…」

「わあああ／／」

僕は妄想を振り払い全力で起き上がる

「大丈夫か明久ー？」

「鼻息荒い…ぞ」

雄二と綾人は僕を見ながら苦笑した

ムツツリーニに至っては

「起きろおお！」

一麻に心臓マッサージをされている

『お姉ちゃんがみんなに抱きつかれているです』

「ぐはあー！」

「ぐほ…」

「ぬっー！」

一麻、綾人、雄二はパタリと倒れた

みんなよく頑張ったね…

『バカなお兄ちゃん。お姉ちゃんが助けを求めています！』

な、何！これは男して行くべき…けど向こうには姫路さんや霧島さん達が…

『明君！早くきてええ！』

か、奏の悲鳴？が！

迷うな僕、僕は奏を助ける為に行くんだ！

「吉井明久！馬鹿！行きます！」

ガンダムのように地面を滑り

「とりゃああ！」

思い切り跳躍

「「きゃああ！」」

「ぐぐらはまああ」

お約束のパターン…盥を投げつけられた僕は落下した

「フアイヤアアア！」

ぎゃあああ熱いいい！

熱湯だああ

「じ、地獄だ…！」

再び僕は意識が飛んだ

『やっぱり……気絶してる……』

『私は秀君の所にいった』

『回収だねん』

第十五問：男達の危機！？そして…二人は（前書き）

今回は危ないです…皆さんコーヒーの準備を…

第十五問：男達の危機！？そして…二人は

「う…うん？」

俺はゆっくりと目を開いた

確か…気絶して…

「おはよう一麻」

「ああ…おはよう里穂…」

この時、俺は状況判断が遅れた

「ここは銭湯だよな？」

「う…うん。ここは家族風呂だよ」

「はあああ!?!」

ザバアと湯の中から立ち上がる

ちょっと待て!何で家族風呂なんがあるんだ!

「どづいうこと…だ…!?!?!」

「どづしたの…麻?」

は、裸、

「何でお前が一緒に入ってたあ!」

目の前には大きな胸を見せ銀色の髪を結んでいる里穂がいる

「え…？だって家族風呂だから」

「おかしいだろうが！と言うよりここは何処だ！」

里穂はにっこりと笑い

あ…可愛い

「えっとね…ここは奏のお父さんが建てた有名な温泉だよ！」

「有名…吉井…あっ「文月温泉！？」」

「うん」

馬鹿な…いつの間にこんな有名な所に来てたんだ

「一麻達が気絶して…瑞希さんと美波さんを帰らせてから翔子さんの車できたんだよ！」

流石は霧島…きっとリムジンだろう

ちなみに奏の父親は有名な人で文月学園にも援助してるとか…あつ
母親は主婦らしい

霧島も奏も凄いな…

「ああ〜気持ち良いね!」

しまった…こいつの裸…記憶しちまったぞ!?

「どうしたの…麻?」

「他のみんなはどうしたんだ…!」

「え…?あそこにいるけど…」

里穂が指を指した先には

「ダ〜リン！」

「ちよっ待て…／／／」

綾人はアリスに抱きつかれていた

いやあれはまずいだろ

「お前！タオルはどうしたんだ！」

「そんなのあったらダーリンの体温感じれないよ〜ん／／」

綾人は俺の方を見てお手上げの顔をしていた

「ムツツリーニ君…僕と温泉の中で実技する？」

「…実技…（ダバタバ）」

あぶねえ…湯船の中だったらアウトだったな

「つか…他の客来るんじゃないか？」

「大丈夫！奏のお父さんが貸切にしてくれたから」

叔父さーん！何やってんだああ

「…凄いなあ翔子さん」

「え…？」

まさかあの二人も…

「…雄二…気持ち良い？」

「待て翔子！俺の理性が…」

「…理性なんて壊れてしまえばいい／＼」

胸を押し付ける霧島…必死に抗う雄二

うわあ…羨まげフンゲフン…

「一麻」

「何だよ？」

「一麻もあれされたい？」

「ぶふっ！」

危な…鼻血が出るところだった

「ねえ…されたい？」

うわ…上目使いに涙目

「お、お前が言うなら仕方ないな／＼／」

「うわあああ…」

「一麻〜!〜!」

「飛びつくなああ／＼／」

「な、なあアリス」

「なあにダーリン」

「よ、吉井夫婦は…／＼／」

「あの二人なら別風呂でアンアンやってるよん」

「いや待て、発言がヤバいだろ／＼」

「反抗してくる綾人にはお仕置きなのだ」

「ま、待て！お前もか！お前もあれをやるつもりか！／＼」

「覚悟！」

「ちよっ」

『みんな遅いのじゃ』

『きつと楽しんでるんだよ』

『そっじゃの…歌穂よ買い物しよっぞ』

「はい」

「……あの奏？」

「……」

「……」

「……」

明久
s i d e

『ぶん！』

返ってきた言葉に緊張しながら続ける

「何で…こんなことになってるの？／＼」

今の状況…背中合わせで僕らは露天風呂に入っていた

「それは…明君を見るのが恥ずかしくて」

顔だけ振り向いと見ると奏は真っ赤になっていた

叔父さんは何を考えてるんだ…

あの後、気絶したと思ったら文月温泉に来ていたなんて

そして違和感があったから振り返ってみたら奏と背中合わせをしていた

「奏…」

「はい」

「体制変えない？」

「ふえ！？／／」

奏はぐるんと体ごとこつちを向いた

「ちよっ！いきなり崩されたら！」

くっ何とか背中への衝撃を防がなきゃ！

ぐるんと一回転するも倒れることには変わりなかった

『ムニユン』

ほえ？何この柔らかい音

「ん……………あ、明君？／／／」

ちょっと待って！何で奏は色っぽい声で囁いでるの？

「……………あ」

状況を説明すると今僕の顔は奏の谷間に収まっている

「……明君…やっぱり…／／我慢してるんですか？」

「！？／／／／／」

うわああ！ちよっ！見えない何も見えないのに柔らかい感触があ…

「あっ…明君！顔動かさないで…／／」

さらなる喘ぎ声で理性が消えかけていた

「しめんね奏…／／」

再び僕は背中合わせ状態になっている

「いいよ…私が悪いんだから」

奏は真つ赤にしながら呟いた

心臓が張り裂けそうだ……

「あはは…僕は嬉しかったけどね」

「ふえ！？／＼」

「奏！いきなり振り向かないで！」

ヤバ…また同じことに…

「だりゃああ！」

今度は勢い良く振り向き足で踏ん張る

「あ…無理だ」

「きゃああー！」

ドバアンと湯が飛び散りそのまま押し倒す形になってしまった

幸い湯船に顔は浸かってなかったけど

目の前には濡れた髪をした奏の顔とタオルが透けて見えている奏の
体…

「……明、明君？／／」

「……」これは…その」

あれ？唇に感触が…

「んー！？／／／」

ガツチリと固定されている腕

胸でも掴まなにかぎり逃げられない状態になってしまった

いや、胸なんか掴んだら通報されかねないからね

「――／／」

密着する肌と肌

僕は幸せの渦に沈んで行った

しかしまさか…これだけで終わらないとは

第十六問：まさかのお泊まり！？王様ゲーム！

「明君！大丈夫ですか！」

パタパタと団扇に扇がれながら頭から湯気をだす

「全く…一体何があったのじゃ…」

こればかりは話せないよ

「…えっと…ちょっとのぼせてしまったんだ」

じゅじゅ…暑い

「明君？生きてますか？」

パタパタと扇きながら原因の張本人が覗きこんできた

「(ツー)」

「明君！？鼻血が…」

しまった…奏を見たらさっきのことを…

「大丈夫…夫…」

体温が一気に上がり顔が真っ赤になる

「明君！？と、とりあえず氷を」

「わかったのじゃー！」

秀吉はパタパタと氷を取りに大広間から出た

「熱は…ないですね」

ピタと額に奏の手がのる

「…大…丈夫。これはただのぼせただけだから」

くっ…奏がつるつるした瞳で見つめる…

いかん鼻血があ…

「奏！取ってきたのじゃ！」

「ありがとうございます秀吉君」

奏は秀吉から氷を受け取り袋に入れてキュツと結ぶ

「どつですか？」

「心地いいよ…」

ひんやりとした氷が置かれ…体温が下がっていく

「そつだ！…えつと…」

奏は何かを思いついたように氷を口に含んだ

シヤリシヤリと音が聞こえ、奏はそのまま僕の口へ近寄る

「…ん」

「……!!!?」

ええええ!?

「なんと!」

秀吉は真っ赤にしながら、僕は鼻血を吹き出しながら驚いた

「奏!何やってるのさ!／＼／」

ガバツと起き上がると奏はニコツと笑った

「良かったです…体調は良くなりましたね。この方法は治療としては最適ですね」

おかしい…どこから突っ込めばいいんだ

「良くないから！あんな口に含んだ氷を相手に移すのは良くないからあ！」

「でも明君…良くなった」
「違うから！これは恥ずかしくて起きただけだから！」

「あつじ…」

「あれ？奏」

秀吉は溜め息をつくともみんなの所へ行つた

みんなは未だにのぼせている

「明君…私は明君が心配で」

奏は泣きそうな顔で俯いていた

「わああー!…!」めんなさい!」

急いで謝る。おかしい…奏が原因なはずのに

「…ぐす…明君」

くっ…まさか僕は奏に弱愛してるのか?

奏ならつい許してしまえる!

ん?

「わああ!奏なんでいきなり顔を近づけてるの!?!」

目の前には目をつぶった奏がいかにもキスしてくださいのような状態
態で僕に詰め寄っている

「明…君」

「（ゴクリ）」

ヤバい…色っばいし…なにより温泉浴衣がはだけて肌が…

「えっと…奏あれ何？」

「はい？」

奏は僕が指した方首を傾げながら振り向いた

「あれ？明君ー？」

「はあ 危ない危ない」

自販機まで逃げて一息つく

全く奏はたまに大胆すぎるよ

「なんだ明久…せっかくの口付け逃げ出したのか？」

「そうなんだよ。本当は凄くしてほしかったけどって…雄二ー！？」

馬鹿な！こいつさっきまで気絶してたはずじゃ

「じゃあ奥さんに伝えとくか」

「卑怯だぞ雄二！自分だけ」

雄二はこっちに近づくと肩に手を置いた

「明久…俺が何もされてないと思うか？」

頬にはキスマークがあった

「うめん…」

「美味しい」

女性陣がフルコースを食べている間、僕らは話し合いを始める

「……このままじゃ危険」

「ああ…里穂もかなりやりたそうだ」

「俺達の童貞が危ういな」

「奏も危ないよ」

「」「」「お前は別にいい」「」

「何だよ!」

こいつら…仲間を見捨てる気が

「何でそんなに慌ててんだ。大人の階段に上れるからいいだろ」

たまに綾人が凄い奴に見えてくる

一番まともな性格なのに

雄二 ゴリラ

ムツリーニ エロ

一麻 馬鹿の代名詞

綾人 普通 + 怖いものしらず

「うん。こんな感じだ」

「おい。喧嘩売ってんのか？」

「やだなあ…まさか本気でやる気？」

僕は殺人才オーラを出しながら笑う

「ほら、飯食うぞ」

綾人に止められ、奏の隣に座った

やれやれ…おあずけか

「明君…この海老美味しいですよ。はいあ〜ん」

「本当？じゃあ…あ〜ん…ん」

新鮮な海老は本当に美味しいよね

「うん！美味しい」

『明久…たまに天然出しまくりなんだよな』

『……妻にベタぼれ』

「ようしゃっ！王様ゲームだあ」

アリスの言葉と共に突如始まった王様ゲーム

「……いえーい！」「」

みんなノリノリだね

「明久ルール説明を頼む！」

雄二に促され頷く

「OK。ここに1から11と王と書かれたくじがあります。王を取った人は1から11を持っていく人に命令ができます」

例えば1が4にしつぺ、3と8がキスなど

「そして…王様の命令は」

「絶対！」

「いくぞ…お前ら覚悟はいいか」

みんな雄二の言葉で頷く

「せーのん!」

「王様だーれだあ!？」

最初の王は…

「俺だ」

「ぐあああ!」

僕と一麻は畳を叩きつけ、綾人とムツツリーニはうなだれる

「じゃあ命令だ…そうだな」と

矢印が一麻を突き刺した

「なにい！」

「8が」

矢印は里穂を示す

「18禁なことしろ」

ニヤリと笑う雄二

「ふざけんなあああ！あいつただでさえたまってるだぞ？」

ああ…一麻合掌

「かーずまー！」

「いや里穂さん…お願いですから勘弁！」

「王様の命令は絶対！」

「畜生があああ！」

多分…今日の夜…一麻は初めてを過ごしたと思う

第十七問：王様ゲーム！狙いは…（前書き）

やっちまった…やっちまったよ

明久『…今回は覚悟ある人だけどうぞ』

第十七問：王様ゲーム！狙いは…

一麻が冷や汗を流す中、王様ゲームが再開された

「畜生…みんなエデン行きだああ！」

「気合い入ってるの一麻」

「……………／／／」

隣で奏が顔を真っ赤にしていた

まあ…奏のようなおとなしい人にはあれは辛いからね

「いくぞー！せーのおおおー！」

『『王様だーれだー！』』

「斉にみんながくじを引く

「はっはっは！何で俺じゃねーんだああ！」

ガンと机を叩きつける一麻

「僕だね」

「工藤さんだっ たかあー」

残念だ…

「……………ブンブン」

「あれムツツリーニ何で首を振ってるの？」

工藤さんの隣にいたムツツリーニが震えている

「……………（カタカタカタ）」

そうか…ムツツリーニにも大人の階段に登るんだね

「じゃあ…6番があ」

工藤さんの色っぽい声でムツツリーニが反応した

「僕と初夜を過ごしてもらおうかな」

『ダッ!』 ムツツリーニが逃げ出す

『ガシッ』 綾人に捕まる

『ダアアン!』 一麻がムツツリーニを気絶させる音

「ふっ…ムツツリーニもこれで終わりだな」

雄二は余裕の笑みを浮かべた

こいつだけは…必ず

「じゃあ行くぞ…せーのお！」

みんなが一斉にくじを引く

『『王様だーれだ!』』

「ちなみに最後まで王様を引けなかった人は罰ゲームだよん」

『『何!?!』』

そんな…今王様を引いてないのは…

僕、奏、霧島さん、秀吉、歌穂さん、里穂、ムッツリーニ（気絶
してるからノーカウント）、アリス、綾人、一麻

「ぐ…王様は…」

「ワッじゃの」

『『畜生！』』

秀吉だったかあ！

「では…11と9が…キスというのはどうじゃ？」

その言葉で反応するアリス

「はいはい！11は私だよん」

とらじいじやばのば...

あっ...

「。ば...くへ」

ぐふ...頸動脈が...

「空気を読め馬鹿」

「流石は馬鹿だな...」

「明久...すまないな」

そんな綾人まで...!

「明君!?!大丈夫ですか明君!」

奏が倒れた僕を必死に看病してくれていた

「で、9は誰かな？」

「…俺だ」

「やっぱりダーリンだねん！」

アリスは綾人に飛びつくと

（危険描写の為伏せます）

『明久には悪いことしちゃったな』

『まあ仕方ないだろ』

僕が持っていたくじは6…逆に読んでしまっただけなのに

「酷いよみんな」

「よしよし…明君は悪くないですよ」

奏の膝で涙を流しながら撫でてもらった

「はあ…あいつらはほつといて次だ次」

幸せオーラを出している綾人とアリス

あの二人…今にもって感じだね

「じゃあ行くぞせーの!」

『『王様だーれだ!』』

よっしやああ!

「僕だあ!」

『なん…だと!』

『ちい…明久か!』

『明君凄いです!』

ふっふっふ…さあて命令の時間だ！

「じゃあ…2と7は…18禁だ！」

『明君…／／』

『ちきしょお！やられた！』

様子を見ると雄二のようだね

「雄二覚悟するんだ！」

雄二は焦るようにくじの番号を何度も見ている

「畜生…俺は7…」

2は…誰だろう？

「…2は私」

「しよ、翔子！？／＼」

『ダッ』 逃げ出す雄二

『ガシッ』 僕が捕まえる

『ガツン！』 一麻が気絶させる

「…雄二…嬉しい」

霧島さんが気絶した雄二を大事に抱く

雄二羨ましいなあ…

「良かったね霧島さん！」

「…ありがとう吉井」

坂本夫婦幸せオーラに包まれ脱落

「さて…といつの間にか秀吉や種山がいなくなったし次がラストだな」

残っているのは僕、奏、一麻、里穂だ

「絶対お前には渡さない！」

互いに睨み合う僕ら

こいつにくじがいけば全てが終わる

「行くぞ…せーの」

『『王様だーれだ!』』

王様は!?

「私です…」

奏がおずおずと手を挙げる

「ぐああああ…」

一麻が撃沈した

この様子から見ていつもクールな一麻が珍しく酔っていることがわかった

「やったああ」

ふうこれで安心だよ

「じゃあ…3番が」

あつ僕だけど…大丈夫だよね

「このお酒飲んでください」

奏はお酒の瓶を取り出した

「僕だけど…それでいいの？」

「はい」

奏は頬を赤くしながら頷いた

「どうせなら私が飲ませてあげますよ？」

奏はニコニコと笑いながら瓶の蓋をあける

本当に大丈夫だよね？

「か〜じゅ〜まあ」

「ん…？なんだ里穂／＼」

里穂はぐでぐでに酔いながら同じく酔っている一麻に抱きついた

「明君もお酒飲みましょう?」

奏は浴衣を少しだけ脱ぎ詰め寄る

「ねっ明君ノノ」

「奏酔ってるの?」

奏は笑いながら頷き

「私…案外お酒強いんですよ」

と言いながらお酒をお椀についだ

「さっ明君…飲んでください。王様の命令は絶対ですよ」

「う…わかってるよ」

ぐびっと奏に渡された酒を飲み干す

あれ？体が熱い…

「奏…もっと」

やばい…頭が…酔ってきた

「へ？もっとですか？」

奏はワタワタと慌てるように酒をつぐ

「可愛いなあ〜／＼」

「ふえ？／＼／」

ぐびっと瓶の酒も飲んでしまう

「あ、明君！瓶ごとは…」

あゝ頭がふらふらする

「明君ー大丈夫ですか？」

ああ…奏可愛いなあ／＼

「奏〜！」

「ひゃあ！」

奏を押し倒す。奏は真っ赤になりながら慌てている

「ちよつどいいいや…いつものヘタレの僕じゃ無理だったし」

「明君 何を言ってるのか…／／」

読者の皆様も待ってるはずだ…

大丈夫だよ

「いや…むしろやりたい！」

「あ、あき、あきく、明君／／！？ふやああ！なんで帯をとっているんですかあ／／」

「奏……」

「は、はい／／／」

「待たせちゃって…悪かったね」

キラリと歯を光らせる

「…格好いい／＼／」

奏を抱き上げ寝室へ向かう

「かゝずま／＼」

「里穂…可愛い／＼」

「ムツツリーニ君 僕らも行こうか？」

「ボタボタ
初夜」

「んちゆ 綾人」

『 / / 大好きだアリス 』

『 雄二…愛してる 』

『 翔子… / / / 』

みんな幸せにね…

僕は真っ赤になり硬直している奏を連れて歩き始める

『 ちてフシはそろそろ寝るかの 』

『ひ、秀吉君！』

『なんじゃ？』

『おやすみなさん／＼』

『しむ…おやすみのじゃ』
『

この日…寝室からは甘い声が響いた

ってこれは本当にまずいよねー!?!?

第十八問：みんなは大人の階段へ…そして清涼祭の始まり

「……………」

「……………」

無言な状態が続く…

僕らは今、旅館から出て学校へ向かっている

けど誰一人喋らない…

よし昨日を振り返ってみよう

僕はお酒を飲み、危ない王様ゲームをして…そのまま奏と寝室へダ
イブイン…

へ？奏と？

『明君…子供は何人欲しいですか？／／』

鮮明に蘇ってきた昨日の夜…

『明君…優しく…してくださいね？／／』

『『わあああああああ！』』

いや思い出したのは僕だけじゃない！

他の男も記憶が蘇ったんだ！

「…雄二と…ひとつに／／」

「ムツツリーニ君 意外と上手いんだね」

「一麻が私の胸を一麻が私の胸を…／／」

「えへへ〜名前は〜綾香とかいいかな〜ん」

「…明君…と／／／」

いかん！18禁に近くなってきてるよ！

「何慌ててんだ？逆に好きな奴とできて良かったじゃないか」

綾人が僕の肩にポンと手を置きニカッと笑っている

「…プラスに考えればそうだよね…」

「ああ…ウルトラマンだって子供作ってんだぞ？」

「なる程…ウルトラマンで考えれば納得できる」

「麻は顎に手を当てて頷いた」

「ムツツリーニだって子供が女の子だったら嬉しいだろ？」

「別に嬉しくない（ダバダバ）」

「いやムツツリーニ…鼻血が本音を語ってるよ」

「お前達も本当は嬉しいんだろ」

「そ、そんな訳ないよ！ねえ雄二！（ダバダバ）」

「当たり前だ。俺達があんなので興奮する訳」
ダバダバ

「はあ…俺も名前考えるか」

大丈夫だよな？退任してるよね？

考えている内に文月学園に到着した

僕らは21F…教室はAの中へ入る

「おはようみんな！」

あれ？何で僕らは捕まってるのかな？

『『吉井達をコロセエエエ』』

朝から響くデスポイス

僕らは捕まえた人を殴り倒して逃げる

「畜生！あいつら知ってたのか！」

「でもなんで？」

「大方：誰かに見られたんだろうな」

上から雄二、僕、一麻の順番で言っていく

『あいつら絶対殺す!』

『ヤツチャウヨ〜! ミンナコロシチャウヨ〜』

『殺殺殺殺殺殺殺』

『J M W N P J A M P M P M G P D A M P N J』

今までにない殺気が!

「二手に別れるぞ! 明久は強いからそのまま残れ!」

綾人の指示で僕は迫ってくるFFF団と戦うことになってしまった

「よし! ムツツリーニは俺と、雄二は綾人とだ!」

「了解! 死ぬなよ明久!」

みんなが押し付けたんだろ!?

『吉井だああ!あいつを潰すぞ!』

『いやあいつなんか20人で十分だ!他の奴らは坂本達を追え!』

全く嘗められたもんだね…

『覚悟しろ吉井!』

『ヤツチャウヨ〜!』

『あはははははは』

迫ってくる奴らに拳を構え一言

「みんな忘れてないかい?」

『シネヤアアア』

横溝君が放ったバットを掴み腹に一発入れる

『グフウ!』

横溝君はパタリと倒れる

「僕が停学処分を受けた理由知ってるよね?」

その一言でみんなが固まる

さて…ストレス解消させてもらっつよ!

積み上げられたクラスメイトを見ながら僕はみんなを助けようか考
えていた

あいつら普通にナイフ持ってたからなあ

綾人や一麻がいるし大丈夫だよな

『明久く君』

え？何この恐ろしい殺気は

『アキ〜。昨日奏達と何してたの？』

『い、いやだなあ…勉強だよ。それより何で二人は帰ったの？』

『決まってるじゃないですか…』

『みんなに伝える為よ』

恐る恐る振り返るとラスボスが舞い降りていた

「ひ、姫路さん…み、美波」

最悪だ…まさか二人が再び敵になるとわ

「明久君覚悟出来てますよね？」

姫路さんは完全にFクラス色に染まってしまっている！

「明久君…お仕置きの間ですよ」

ゴゴゴゴゴとオーラを出しながら迫る二人

こうなったら…

「逃げるが勝ちだああ」

素早く廊下を走り出す

「逃げられると思っているのかしら？」

くっやはり美波からは逃げれないか

「ならば…」

僕は携帯電話を取り出した

そして簡単な会話をして切る

「しまった行き止まり!？」

「さあ…覚悟しなさいアキ」

じりじりと迫ってくる美波…大丈夫

だって…

『お姉様——!』

この人を呼んだから!

「み、美春!？」

「酷いですお姉様。二人の愛を邪魔するなんて」

「な、なんのことよ!」

清水さんは美波に抱きつきながら一枚のチケットを渡した

「これをあげます。二人で行ってけるといいです。美春も応援します!」

「ありがとう清水さん。奏も喜ぶよ」

清水さんって同性愛が好きなのに…案外…恋愛にも興味あるみたい

「そつだ清水さん。これあげるから美波と行ってくるといいよ」

僕は清水さんに如月グランドパークのチケットを渡した

「有り難く受け取っておきます！お姉様ー私と愛の巣を作りましょ
う！」

「嫌ああああ」

今のうちに逃げ出す

美波には悪いけど…僕だって死にたくないから

その後、鉄人に捕まり…清涼祭の準備がそろそろ始まることを聞か
された

第十九問：明久を求めて三千キロ

学園に続く坂道から、桜色の其れが姿を消し、新緑芽吹くこの季節、文月学園では、新学年最初の学校行事でもある『清涼祭』が始まった。

生徒達は気合い十分である

その頃一二年Fクラスでは

「蘇れ！蘇るんだムツツリーー！」

「（ガクガクガク）」

蘇生をしていた

僕とFクラスと清涼祭

奏 s i d e

時はさかのぼり数日前

清涼祭が近くなり全校生徒は準備を出し物を決めています…

素晴らしい清涼祭に…なりそうです…

そして私達Fクラスでは…

『プレイボール!』

野球をしていました…

『さあ来い！横溝！』

『行くぞ須川！』

教室には私達女子と明君、雄二君、秀吉君、康太君、一麻君、綾人君だけです

「全く…本当に飽きないわよね」

優子ちゃんが腕を組みながら溜め息をついています

全くです…西村先生も苦労しますよ…

「…雄二は行っちゃ駄目」

「わ、わかったから！そのおぞましいもんをしまえ！」

翔子ちゃんスタンガンは危ないですよ

「うーん…アリスちゃんは疲れたたのだあ」

「どづしたんですか?」

アリスちゃんは綾人君に抱きつきながら溜め息をしていました

「およよ…子供の名前が難しいのよーん」

「」「!?!?//」「」

私達は一斉に真っ赤になりました…

わ、私達も考えた方がいいのでしょうか？

「あ、明君」

私は隣にいる声をかけました

返事がない…です

「明君？」

隣を見ると明君が消えていました

明君がいない…

「明君…明君」

ワタワタと慌てながら辺りを探してみます

いない…

「冷蔵庫の中…いない…です」

パタパタと歩き回りながら探しますが…

「いないです…」

「…どうしたの奏？」

翔子ちゃんは私を心配したのかこっちへ来ました

うっ…

「翔子ちゃん…明君が…ひぐ」

思わず涙を流し翔子ちゃんに抱きつきました

「…大丈夫…吉井は帰ってくるから」

翔子ちゃん！

「吉井君…こんな可愛い彼女をおいてどこへ行ったのかな？」

愛子ちゃんが困った顔をしていると

ガチャリと扉が開きました

「やっぱりみんな戻ってないんだね…」

この声…は

「明君？」

私は明君に飛びつきました

だって寂しかったんですよ？明君が隣にいないから心配で心配で

「ど、どうしたの奏！？って何でみんなは睨みつけてるの！？」

「全く…吉井君…彼女に心配かけたら駄目だよ」

「奏は寂しがりやでもあるからね…」

「きっと彼氏がないから不安になったのじゃろ」

私は明君の胸に顔を押し付けながら真っ赤になりました

も、勿論泣いてるからですよ！

「そ、そうなの？」

「明久…トイレに行く時は十秒で帰ってこい」

「いや、奏の場合は十秒でも耐えられないな」

「恐らく、いないだけで泣くぞ……どんだけ愛されてんだ明久」

「……羨ましい」

「言いたい放題言っていないで助けてよ！」

「あれ？明君？」

さっきまで抱きついていた明君がいない…

「ひぐ…」

「やばい！姫路、島田！早く明久を離してやれ！」

「く、苦しい…」

「駄目よアキは今からお仕置きしなきゃならないから」

「そうです！明久君は拷問されるんです！」

「…ひっく」

「全く…よしよし奏」

優子ちゃんと愛子ちゃんに撫でて貰う一方で瑞希ちゃんと美波ちゃんは綾人君にパイルドライバーを受けていました

それより明君…明君

「…」

明君は気絶していました…

「ひぐ…」

あつまた涙が…

「…シャッターチャンス」

「ムツツリーニ君？」

「…工藤…俺の腕はそっちに曲がら…」

悲鳴をあげる康太君…

「じゃあ私はアイドルの仕事があるから行くね」

「里穂ちゃん行っちゃうの？」

私は気絶している明君を抱きながら顔を歪めました

寂しいですね…

「うん…清涼祭にまでには戻るから…指揮は頼んだよ雄二君」

「ああ…」

里穂ちゃんはみんなに別れをつけながら荷物を背負いました

大丈夫ですよ…少しだけ海外に行くだけですから

「じゃあ一麻行ってくるね…」

里穂ちゃんは寂しそうな顔をしながら一麻君に言いました

「ああ…ちよと行っていい」

ちよっと酷いです…

「うん」

みんなに見送られながら里穗ちゃんは教室を出て行きました

「……………」

「おいー麻？」

「坂本君…今はそっとしておこっ」

歌穂ちゃんに止められ雄二君は翔子ちゃんの入所へ行きました

「一麻大丈夫かな？」

いつの間にか復活した明君が心配そうに見ていました

一麻君はかなり落ち込みながらもノートパソコンを打っていました

「大丈夫ですよ…いつもああじゃないですか」

「そっだね」

第二十問：悲劇再び！出し物はー（前書き）

バカテスト 清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他（ ）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

吉井明久、坂本雄二、千原一麻、神薙綾人、土屋康太の答え

『【？その他】 候補（初夜の相手）……吉井奏、霧島翔子、静寂里穂、アリス・ファン・クリスチーヌ、工藤愛子』

教師のコメント

奥さん方とお幸せに

第二十問：悲劇再び！出し物はー

野球をしていたみんなは鉄人に捕まり今は教室に帰ってきている

「じゃあ出し物決めるからやりたいことあれば挙手してくれ」

雄二の隣に座りノートパソコンで

『2ーF 清涼祭 出し物』

と打ちながら奏を見ていた

「明君ー！」

じたばたと暴れる奏を抑える霧島さんと工藤さん

『諸君こころはど…ぐは』

須川君が何か言う前に綾人になぎ倒された

まあ自業自得だよな

「じゃあ改めて聞くぞ」

仕切りなおして雄二がもう一度尋ねた

「明君 … / /」

奏がいつの間にか大胆になってるなあ…

そついう所も可愛いけどな

奏は幸せそうな顔しながら僕に抱きついている

うー困った…嬉しいけど…少し離れただけで心配かけちゃうし…

「よしムツツリーニ」

いつの間にか雄ニが進めムツツリーニが拳手していた

「…写真館」

ムツツリーニのことだ…きっとレア物ばかりだろう

「明久…入力しとけ」

「了解」

『写真館』

ん？何か腕に当たって…

「写真館ってどんななのでしょうね？」

奏の大きな胸が当たっていた

やば…鼻血が

「よし姫路」

おっと…集中集中

「えっとウエディング喫茶なんてどうですか？ウエイトレスが本当にウエディングドレスを着るんです」

「…わかった。吉井よろしく」

「うん。了解」

『ウェディング喫茶』

「って翔子なんている!？」

「私も雄二と一緒にいたい」

「は…雄二良かったじゃないか」

「勝手にしろ／＼」

その後、次々と意見が上がり

僕だけでは無理なのでもう一台用意して奏と打っていく

ちなみに妹の美代は用事があつて休んでるんだ

「だいぶ意見が上がつたな」

「…決めるのが大変」

うーんと背伸びをしていたらガチャリと扉が開いた

「進んでいるか？」

鉄人だ…

「はい！大丈夫ですよ」

『ウエディング喫茶』

『巫女喫茶』

『メイド喫茶』

『写真館』

『お化け屋敷』

『コスプレ喫茶』

『中華喫茶』

『屋台』

e t c
…

「そうか。ちゃんと取り組めよ」

鉄人はそう言うとすぐに出て行った

確認しに来ただけかな？

「よし！みんなやりたい物にに票を入れておいてくれ…最大二つまでOKだ」

雄二の言葉でひとまず出し物決めは終了した

あとは結果を待つだけだね

「じゃあ昼飯の時間だね…」

僕は弁当を取り出して奏に渡した

「はい。約束通り弁当作ってきたよ」

にこつと笑うと奏は赤くしながら弁当を受け取った

「ありがとうございます明君」

にこつと微笑む奏

僕はこの笑顔が大好きなんだ

「じゃあいつも通りに机くつつけるぞ」

雄二の指示でみんな机を動かした

「姉上どこへ行くのじゃ？」

秀吉の声が聞こえて見ている方に振り向くと木下さんが教室から出ようとしていた

ランチバッグを持ちながら

「ちょ、ちょっと渡し物があるだけよ」

木下さんは顔を赤くしながら教室を出て行った

どうしたんだろう？

「あつ…飲み物買いに行かなきゃ」

席を立った瞬間に奏と目があつた

「私も行きます」

「大丈夫だよ。すぐだから…」

奏が廊下に出たらたちまち告白されちゃうしね

彼氏としてそれは防ぎたいところだ

「でも…」

みんなに目で合図をする

みんなも奏の魅力を了解してるしね

「明久…五秒だ」

「早いよ綾人！」

それは流石に無理がある

「とにかく行け！」

「わかってるよー!」

頷いた後すぐにダッシュ!

十秒以内だ十秒以内に帰らなきゃ

「明君…」

「奏ちゃん我慢だよ」

「はい…」

「買ってきたよおお!」

出かいボトルとコップを持って僕は教室に帰った

「おお…十秒ジャスト」

「頑張ったな明久」

全くだよ…購買でボトルジュースとコップを買うのに五秒かかったよ

「明君！」

奏は僕に飛びついた

「ごめんなさい明君…私のわがままで…」

奏は悲しい顔をしながら僕の汗を拭ってくれた

「大丈夫だよ。僕だって奏といたいし　と言うよりいてほしい！」

「アッキー大胆だね」

「あれ？みんなどうしたの」

「明君／＼／」

奏は真つ赤になりながら硬直していた

「まつ明久だしな」

みんなは何故か雄二の言葉で納得していた

あっ…ペン買つとかなきゃ

購買は安いからまた行くかな

「…／／／…はっ！明君？」

「やば！アツキーまた消えちゃったねん」

「ちょっと秀吉君やばいんじゃない」

「うっ、うむ…」

「…明君？…」 オロオロ

第二十一問：突然の出来事！（前書き）

明久「これはかつてない甘甘フラグ……」

甘甘フラグってなんだよ

とりあえず始まります

第二十一問：突然の出来事！

放課後：僕は学園祭に向けて準備をしていた

と言っても、ほとんど建築業の人達に任せているけどね

「はい。これについては…」

奏は作業員の人達と話し合っている

どのようにするかを決めているんだ

奏はなるべく我慢すると言うことで今は僕から離れている

「…それはどうしてください」

霧島さんも奏と一緒に指示を出している

二人共本当にコンビネーションいいよね〜

「というか…あれって奏と霧島さんのお父さんの会社の人達だよね」

二人はいろいろと相性がいいね

「明久これ手伝ってくれ」

「わかった」

僕は雄二と一緒に作業の手伝いをしてるんだ

結構こつこつこの自信があるんだよね

「」「ありがとうついでにました」「」

代表で僕と雄二が建築業の人達にお礼を言った

「かなり変化したよな」

「…豪華な喫茶店」

「うーん素晴らしいん！」

上から綾人、ムッツリーニ、アリスの順番で感想を言っていた

「よし…後は俺らが準備するぞ」

「オオオー！」

うんうんFクラス団結だね

「じゃあ衣装合わせするから女の子達は私に男の子達は私に男の子達はアッキーのところへ行ってねん」

アリスは気合い十分な顔をしていた

僕も頑張らなくちゃね

男子ホール班には僕と綾人

厨房班にはムツツリーニと一麻がリーダーを担当している

「あ、あの」

男子の衣装合わせが終わりみんなで準備をしていると姫路さんが近づいてきた

「どづしたの？」

「えっと…私厨房班に行つていいですか？」

『駄目！』

「女子はみんなホール班なんだよヒメリン！」

その通りだよ！姫路さんのバイオ兵器なんか作らせる訳には行かない！

「ほ、ほら姫路さん可愛いから」

「そ、そうだ！厨房班は野郎ばかりだしな」

僕と綾人が必死に説得する

「二人がそう言うなら…」

良かった納得したようだ…

「試食だけでも」

『『駄目!』』

何を考えてるんだ!そんなことしたらみんなが楽園に送られて準備所じゃなくなるよ!

「そんなあ…」

姫路さんはすっかりしているけど仕方ないよね

「いいじゃないかヒメリン…それよりほら衣装合わせしなきゃね」

アリスが姫路さんを連れて行った

「こんなもんかな」

看板を作り上げて準備はこれで終りだ

「明日は沢山来るといいな」

「うん！そうだね」

ガチャリと扉が開いた

「皆さんお疲れ様です」

姫路さんとムッツリーニが何かを持って入ってきた

「……………ケーキ作ってみた」

ムッツリーニが置いた皿には美味しそうなケーキが

「おお…モンブランか」

「凄いなムッツリーニ」

「……………紳士の嗜み」

料理ができることが…紳士の嗜みって訳じゃあ

「まっとにかく食べようぜ」

この場にいるのは僕、雄二、秀吉、綾人、一麻だ

みんなモンブランに手を伸ばしパクリと食べる

「おお…美味しいな！」

「ああ…しかも甘すぎない所もいい」

「美味しいのじゃ」

綾人と一麻は幸せな顔をし、秀吉はお茶が欲しくなったと言った

「じゃあ私が入れてきますね」

姫路さんがスクツと立ち上がり教室から出て行った

「そんなに美味しいんだ。じゃあ僕も」

「俺も食べるか」

僕と雄二はパクリと口に入れた

あれ？意識が

「「「ばあー！」」」

僕と雄二は同時に吹き出して倒れた

「えっ？おい明久！」

「雄二しっかりするのじゃ！」

「おいムツツリーニ…本当に人数分作ったのか！？」

「……！？俺が作った数は三つ……何故増えている」

「あつぶね……二分の一のロシアンルーレットかよ……」

あはは……雄二が手招きしてるや

今逝くよ

二人はこの後、奏と翔子の人口呼吸により息を吹き返しました

帰り道…

僕と奏はゆっくり歩いていた

奏は一人暮らしをしているからマンションに住んでるらしい

前までは親がいたんだけど海外へ行ったらしいし

うーん清涼祭二日目は試召喚大会だよ

勉強しようかな…

僕らが参加する理由は…今の所は…Fクラスを見直してもらおうことかな

「明君…」

隣を歩いていた奏がキュッと制服の袖を掴んできた

「どろしたの奏？」

悩み事かな…？

「えっと…その」

奏は顔を赤くしながらこっちを見た

「あ、明君が避ければ…その／＼」

さらに真っ赤にする奏

よっぽど大事なことなんだね…

「明君の家に泊めてください！／＼」

え？今…なんて

「駄目…ですか？」

ちょっと待って！いきなりのごことで処理がおいつかない

「ちょっと待って。今美代に連絡を」

わああ何言ってるんだ僕は！

駄目だ…体が勝手に

『はい…吉井です…明兄どうしたんですか？』

『えっと…奏が』

『わかりました。じゃあ私は友達の家泊まります』

『わかったよって！待ってまだ何も言っただけ…』

プツンと切れて

沈黙がしばらく続いた

「い、行こうか奏」

「ありがとうございます明君ノノとりあえず着替え持って着ますね」

「あつ僕も着いて行くよ」

「ふえ！？／＼…わかりました」

こうして二人の同棲が始まった

第二十二問：二人の愛は銀河を超えて（前書き）

甘を目指したんですが

上手くできなかつた…

次回こそは！

第二十二問：二人の愛は銀河を超えて

夕方…僕と奏は奏の家…マンションの部屋の前にいた

「じゃ、じゃあ私着替え取ってきますね！」

奏はパタパタと慌てるように家の中へ入っていった

やっぱり…自分の部屋を見られたくないよね

それに服や下着だってあるんだし…もしかしたら干してるとか

「…////」

ポタポタと鼻血が流れた

何を考えているんだ僕は!?

「きゃああー！」

ん？何か奏の悲鳴が…

しばらく静かになりガチャリと扉が開いてボロボロになった奏が
出てきた

「ええ！？か、奏大丈夫！？」

「は、はい…行きましょう明君…」

ちょっと待って！何があったのか凄く気になる！

「いじめん奏ー！」

「ふえ！？」

ガチャリと扉を開ける

そしてゆっくりと閉めた

なる程…

「明君…？」

「行こうか奏」

何故…何故姉さんが

僕は目の前の現実が理解できなかった

『おや…アキ君の声が…』

やばい…部屋の奥から…

「は、早く行こう奏！」

「へ？ふやああ！」

奏の手を掴み全力で逃げ出した

「はあ はあ 着いた」

全力で僕は自分のマンションの前まで走った

「明君…早いよ」

奏は目を回しながら僕に寄りかかっていた

「ごめん…あまりにも驚いていたから」

本当に何故姉さんがいたんだ？そりゃあ奏は姉さんを姉のように尊敬してるけど

悪い所まで似なきやいいけどね

「じゃあ入ろうか」

「は、はい／＼」

鍵を開けガチャリと扉を開ける

「お、お邪魔します／＼」

リビングはガラリと静かだ

「相変わらず広いですね …」

「まあね…とりあえず荷物はリビングでいいとして」

僕は奏を持ち上げる

「ひゃあ／＼」

まずは夕食だよな

「じゃあ部屋に行こうか奏」

「あき、あ、あ、明君…／＼／」

なーんてね

僕はゆっくりと奏を下ろした

「冗談だよ。夕食作っておくから奏は風呂にでも入ってて」

「そうです…：か」

奏は残念そうな顔しながら制服のボタンに手をかけた

へ？

「じわああー…ちょっと何やってるの奏！」

「何って…脱衣ですよ？」

「何でここで脱ぐのさ！」

奏は首を傾げながら

「駄目ですか？／＼」

と上目使い

あつ無理だ…早くも理性が

「とにかく！風呂場はあっち！」

「いえ、やっぱり私が夕食を作りますよ」

「あっ。」

奏はにっこりと笑いながら

「だって…押し掛けときながら何もしないなんて…失礼じゃないですか」

と言ってくれた

「それに私達…もうふ、夫婦レベル…ですから／＼」

さらに爆弾投下までしてくれた

まず言っただけ否定ができない！いやしたくない！

「そ、そりゃ…そうだけど」

奏はいつの間にか詰め寄っていた

「私はいつでも大丈夫ですからね／＼」

ああ…彼女はなんて優しいんだ…僕がヘタレでも待っていてくれるな

んて

って違う！とにかく今は話を逸らさなきゃ

「と、とりあえず夕食にしようか！ほら一緒に作ろう」

「はい / /」

僕はパエリアを…奏はグラタンやシーザーサラダを作った

「さ、さあ食べようか」

奏は僕の隣に座り頷いた

「」「頂きます」「」

シーザーサラダを口に入れる

うん！美味しい

流石奏だ…このグラタンも最高だよ

奏を見ると奏はこっちを見ていた

「明君は…あーんと口移しどっちがいいですか？／＼」

「ぶっ！」

盛大に吹き出してしまった

「な、何言ってるのさ？」

「え…だって綾人君が」

あいっつう

席を立ち携帯を開く

ん？一件のメール？

『退妊しろよ。後、奏はお前の為にやってんだからな』

何だこのメールは！？一体誰…

『by綾人』

綾人かあああ

「どうしたんですか明君？」

「な、何でもないよ」

はあ まあ僕だって嬉しくない訳ないし

ということはあれか？

襲っているのか…！？

ちらりと奏を見る

奏は首を傾げている

奏が今日必死に僕に甘えてきた理由がなんとなく理解できたよ

「愛おしい…んだ」

「へ？」

「あつ何でもないよ。それより食べようか」

再び席に戻る

そつだ…僕も奏に会えないといらいらする時がある

奏もきつとそつだろう

奏は僕が守るって…あの時から決めたのに

奏と結婚の約束までしたのに

自分になさけない…

理性がなんだ！奏はこんな馬鹿な僕を一生懸命愛してくれてるんだ！

僕が受け入れないでどうするんだ！

立ち上がれ吉井明久！

奏と一度はやったじゃないか！

恐れる物なんかはないはずだ！

「奏…」

「はい…」

行け僕！

「奏を食べたいかな？」

しまったああああ

奏Side

「：／／／／／」

「明君：？大丈夫？／／」

どうでしょうか…明君が動かなくなってしまいました

明君が私と言った時は心臓が跳ね上がる所でしたよ

結局…あーんで終わりました…

あう…緊張します

「お風呂入るっか？」

「／／／／ふえ？」

ちょっと待ってください！

今凄いいこと言いましたよね！？

お、お風呂…明君と

「い、行きましょ…」

私が言う前に明君が何かを取り出して笑っていました

「いや、これ使ってみたかったんだよね、一緒に入ろうかアヒルさ

ん！」

へ？

明君が持っていたのはアヒルのおもちゃでした

普通のおもちゃではなく、お花の優しい香りを出し体にもいいです

私も使ったことがありますがお風呂が赤くなり薔薇風呂ができるんですよね

「これって良い匂いがするから奏と入ってるみたいを感じるんだよね」

ふえ！？／／／

「あ、明君？」

「あつ奏…先入る？」

「あつ…私は後で良いですよ」

明君は頷いたように手を顎にあてました

「確かに薔薇風呂って後の方が香りがいいよね。わかったよ」

明君はアヒルさんを持ってお風呂場へ向かって行きました

明君が…私と一緒に…

つまり…誘っているのでしょうか？／＼

「せっかくだから…久しぶりに入りましょう」

私は衣服を持ってお風呂場へ向かって行きました

第二十三問・甘い時間は夜に…（危険）（前書き）

明久「君はどこまで目指してるの」

うーん18になるギリギリ前

明久「そう言えばもっと危ない描写の小説あったよね」

うん。書いてやるのか？

明久「やめてええ！せめて雄二に」

雄二「てめええ」

第二十三問：甘い時間は夜に…（危険）

…赤くて綺麗な風呂…

そこから漂う優しい香り

「本当…至福の一時だよね」

僕は今、薔薇の花びらが浮く薔薇風呂に入っている

本当…気持ちいいや

「そう言えば一麻が泡風呂もあるって言ってたっけ」

明日にでも試してみるかな…

奏はどう言っただろうか

「泡風呂ですか…ふふ…私と入りますか？明君さん良ければ／／／」

わああ！駄目だろ！？

何妄想してんの僕！

「まず奏と風呂に入ったことなんて…」

チャプンと顔を沈めた

「あつた…」

あの時…文月温泉の時…

「ブクブク」

顔からは湯気が立ち昇り湯に顔を沈めていった

『ガチャ』

あれ何か音が…

ザバアと湯から出てドアをみた

「え？あ…う」

ちょっと待て…何故？いや本当に

「来ちゃいました」

何故奏があああ！？

「いやいやいや！何で／＼！？」

僕入ったばかりだよ？

そんなことよりもどうして？

「／／／／」

「え？」

奏が黙り込みじっと見ている

な、何かな？

「奏？」

気になり奏の見ている方向を僕も見ただ

「あああ……」

タオルを巻くことを忘れていた……

「明君……／＼／」

奏が真っ赤になりながらこっちへ歩いてくる

「か、奏！？／＼／」

「私大丈夫ですよ？」

「わあああ！見えない！奏がタオルを取ったとこなんか見えないからね！！／＼／」

「明君……」

ピトッと密着する肌肌

奏はいつの間にか風呂へ入っていた

「温かい…／＼」

駄目だ理性が…理性がああ

「奏…／＼」

お湯から見える肩はほんのり赤い

ゴク…

「久しぶりですよ…ね／＼」

「え？／＼／」

髪をまとめあげている奏も色っぽい

「明君と…お風呂に入るの…」

た、確かにそうだ…奏と初めて入ったのは初めて奏の家に泊まった時だ

あの時の奏も可愛かったなあ

『ムニユン』

柔らかい音が響く

まさか…

「明君…／／」

「!?!? . m p g w」

奏が密着し…胸が当たっている

尋常じゃない柔らかさ…

理性がああ

「奏…」

奏が振り向いたことをいいことに僕は

「ん…／／」

奏の首もとに口付けした

「あ、明君?／／」

奏は目を潤ませながらこっちを見ている

が、すぐに目を瞑り顔を近づける

僕は本能のままに奏の顔を引き寄せて

深いキスをした

「あ、危なかった」

風呂から上がり奏はのぼせていた

「きゅっ...／＼」

奏は裸のままだからバスタオルをかけている

ギリギリ見えない程度だ

「危つく…奏を襲ってしまつところだつたよ…」

次なにか来たら確実にアウトだろう…

奏が復帰することを考えて僕は服をおいておいた

「確かこれで良かったんだよね」

ちらつと時計を見た…9時

「うん…明日の清涼祭に備えて早めに寝るかな！」

未だにぐったりしている奏に苦笑しながら僕は自分の部屋に向かって行った

…みんなには同棲していることをバレないようにしなきゃ

「大丈夫…明日は忙しいから大丈夫だよね」

自分にそう言い聞かせてゆっくりと目蓋を閉じた…

「明君!」

いや閉じれなかった…

「奏!?!…ええ! / /」

状況を説明すると…

寝ようとした時、奏が入ってきた

しかも裸で　これ重要

さらにこっちへ向かって突っ込んでくる

「明君ー」

「ぶいっ」

奏に抱きつかれ動きを封じられさらには顔を胸に押し付けられている

かなり幸せなゲフンゲフン

きつい状況だ

裸で抱きつく奏…何故か奏の頭を撫でる僕…

どこのエロゲーだあああ！

「明君…私と寝てください！／／／」

キスをされ口を塞がれる

いや本当に理性が崩れそうだ

「…んっ…明君…／／」

奏は何度も口付けをする

気づけば僕は奏を押し倒していた

うん仕方ないよ…こんな美人に…しかも裸で

「奏…食べていいかな？」

「しっかり味わってくださいね」

僕も奏も頬を赤くしながら再び口付けをする

理性なぞも僕らには存在すらしていない

清涼祭前日…僕の中では既にお祭り気分だ…

第二十四問：始まる清涼祭！

清涼祭当日…学園には沢山の屋台や出し物があり、教室もまた今までは違う部屋になっていた

その頃Fクラスでは…

『メイド喫茶ご主人様とお呼び！』 明久作

教室には絶世の美女達がメイド服をまとっている

「お帰りなさいませご主人様！」

「(ブシャアアア)」

「誰か誰かムツツリーニを助けて！」

鼻血を出した土屋君を抱えて僕は叫ぶ

くそっ！なんて破壊力だ！

「ムツツリーニ君も照れ屋さんだね〜」

「うぬぼれるな工藤…（ポタポタ）」

うん…本当にムツツリーニは体が素直だよ

「お待たせしました明君」

パタパタとメイド服に着替えた奏が出てきた

「…どうですか？／／／」

「…君を」指名するよ」

何を言ってるんだ僕はあああ

「へ？…かしこまりました／＼」

シユルとリボンを解こうとする奏

「（ブシャアアア）」

駄目だ…鼻血が

「あ、明君！？」

「相変わらずねあの二人」

「そうですね…相変わらず甘いですよね明兄と奏さんノノ」

「お帰りなさいませご主人様〜！」

「良かったらここに一番良かったメイドさんにチェックして行って
くださいーい」

うっん？…やばいお客さん来てるよ

仕事しなきゃ

「三番テーブルに持っていきー！」

「…ふわふわシフォンケーキですねかしこまりました」

「お待ちせしまた〜。さくさくりんごパイです」

みんな手際良くやっているおかげでお客さんはみな満足している

「お待たせしました！熱々ホットケーキになります」

カチャンとテーブルに置いていく

「格好いい！」

「はい？」

「どうした明久」

綾人が運び終えて女子に捕まった僕を助けにきた

「いやそれが…」

「君も格好いいね！私達と写真撮って！」

僕は綾人と顔を見合わせた後、頷いた

「…………じゃあ撮る」

ムツリニがいつの間にか現れてカシヤリと撮った

「ありがとう！」

二人の女子は満足そうにテーブルへ戻って行った

「ふう…次は」

持つて行く物を確認していると奏が眺めていた

「あれ？仕事は」

「……………あ！そうでした！」

奏は料理を持って急いで戻って行った

どうしたんだろ？

「アキ大丈夫？」

いきなり美波が横から覗いてきた

「え？」

「ちょっと元気ないわよ」

そうなのか…

「奏と何かあったの？」

虚をつかれ、僕は驚いた

「やっぱりね…仲良くしなさいよ」

美波はそう言ってから料理を持って行った

今日…あまり奏と話してなかったな

昨日のこともあってか余計に話しずらくて…

そんなことを考えながら料理を運んでいた所を雄二が見ていたなんて気づきもなかった

868

「お帰りなさいませご主人様」

「君をご指名したい！」

「チエストオオ！」

奏をナンパしようとした奴に蹴りを喰らわせようとしたけどその前

に一麻に蹴り飛ばされた

「ぐふあ！」

そのまま厨房に連れて行かれ

「何考えてんだお前！」

叱られた…

「だってあいつ…」

「だからといって蹴り飛ばそうとするな」

「しめん…」

一麻は溜め息をついて里穂を見ていた

「お帰りなさいませご主人様！」

「ただいまインデックスさん！」

元気だなあ…流石はアイドル

客何言ってるの？

「嫉妬してるのはお前だけじゃないってことだ」

「…お帰りなさいませご主人様」

「えへへ…」

あれ？雄二が拳を握っている

「おつかえりなさいませーご主人様」

アリスを見て綾人が複雑そうな顔を…

「お帰りなさいませご主人様」

ムツツリーニ！？いくら工藤さんがナンパされたからと言ってナイ
フは

「お帰りなさいませご主人様」

ひ、秀吉：なんでメニューを潰してるの！？

「わかっただろ明久」

「あひ」

そう言うことなんだね…奏にお帰りなさいませを言ってもらうには

あれしかない！

第二十五問：変装？そんなもの（前書き）

という事でバカ恋再開です！

第二十五問：変装？そんなもの

今、私たちのクラスは大忙しです

「ご注文を繰り返します…」

「お帰りなさいませご主人様！」

人がいっぱいです。次々にやることがあり重労働です…

「お帰りなさいませご主人様」

私は入って来たお客様を席へご案内した後すぐにオーダーに取りかかります

「それにしても凄い人気だな」

「あつ…雄二君！」

雄二君は食器を持ちながら運んだり片付けたりしています

「確かに大変ですけど…これならいい売り上げになりますね」

「おう…ところで奏。」

「はい」

雄二君は苦い顔しながら尋ねてきました

「明久知らないか？」

「明君ですか？」

うーん明君とは話していませんし…そう言えば姿が見えないですよね

「トイレじゃないでしょうか？」

「あー案外そうかもな。悪いな忙しい所を」

「いえいえ全く大丈夫です」

私にはっこりと笑うと雄二君はそうかと頷き再び厨房へ戻って行き
ました

それにしても明君本当にどこへ行ったんでしょ

『ガチャン』

扉が開かれたので私はパタパタと入り口へ行きました

「お帰りなさいませ」主人さ……」

私は途中で言葉が途切れました

だって…目の前にいる人が

「明君ですよね？」

サングラスに帽子をしています。が明君だということがすぐにわかりました。

「ナンノコトかな？ボクはヨシイアキヒサでは無いヨ」

嘘ですね

私は変装している明君を掴み優子ちゃんに一声かけてから教室から出ました

「明君…何をやっているんですか？」

「だからボクはヨシイアキヒサじゃ」「膝枕しませんよ？」「スミマセンでした」

明君はすぐに帽子とサングラスを取り土下座をしました

って明君！

「な、何やってるんですか…恥ずかしいじゃないですか／＼」

皆さんが見てるのにい…

「と、とにかく何であんなことをしたんですか？」

明君を立てさせて理由を尋ねました

明君はムツとした顔になりながら

「だって奏がナンパされて」

「まさか…次ナンパされたら退治しようと…さらに一般人だから大丈夫だと」

「いや…逆に僕がナンパして…連れ去ろうかと」

明君は笑いながら手を振っています…きつと冗談と言いたいのではないか

嬉しいような…寂しいような

「まあ…いつか…休憩時間に…甘えればいいし」

ほえ？

「あ、あき君！何をい、い、言ってるんですか！」

ポーと湯気が頭から出て…ふえ…力が

「え？うわ奏大丈夫！奏！」

「ふにゃ…／＼」

「やばい…と、とにかく教室に戻らなきゃ（冗談で言ったんだけどなあ）」

とりあえず奏を教室に連れて帰りソファに寝かした

そこを雄二が通ったのが悲劇の引き金

「明久！お前：奏と」

馬鹿雄二！そんなこと言ったら

『『貴様：我らが女神吉井さんと』』

『明久君覚悟してくださいね？』

「ちょっと待ってみんな！接客！」

『『OHANASHIDAI！』』

「嫌ああああ」

僕はFクラスだけじゃなく来ていた男子と戦う羽目になった

その中にまさかの妨害コンビ…常夏が居たとはね

『ふむふむアッキーも溜まってるんだね』

『まあ…ほっといても大丈夫だろ明久だしな』

『そつだな…変わりに妨害コンビを退治しとくか…アリス』

『了解だよご主人様あん！』

『…ブシャアア!』

『ムツツリーニ!?!?』

『明君?』オロオロ

『一麻の馬鹿!』

『なんだと!』

『帰ってきたのに言葉が少ないなんてええ』

『ちょっとみんな!接客!』

第二十六問・働いた後に休憩は甘い時間（前書き）

間違えました！皆様訂正ありがとうございます！

第二十六問：働いた後に休憩は甘い時間

常夏コンビを追い払ってからも仕事は続いた

「お待たせしました。クリームソーダです」

みんな迅速的にバタバタと動きお客も満足している

「お帰りなさいませご主人様っ」

女子達はノリノリで完全に慣れていた

「明久！13番テーブルに」

「了解！」

料理を次々と持っていきながらオーダーを尋ねたりやることは沢山だ

「ふう…ひとまず落ち着いたね」

静かになった教室を見渡し息をついた

「そうですね…ほとんどの方がいらっしやいましたし」

奏はそう言いながら僕の膝に座りながら紅茶を飲んでいた

「だが…このまましばらくしても来ないってのも御免だな」

一麻は今日ツインテールにしている里穂の髪をいじっていた

うわ…夫婦空気全開だね

「ん？アリスと綾人はどうした？」

「そう言えば見かけないよね」

後から綾人に聞いてみたけど厨房でキスをしていたらしい

いやあ…本当になんと言っか…甘いなあ

「……………雄二」

「駄目だ…」

霧島さんが雄二に何かをねだろうとしていたけど雄二は簡単に断った

何て奴だ

「私も…雄二に甘えたい」

「／／／！？」

あはは…素直じゃないなあ雄二も

「一麻！髪弄りやめてよね！」

「嫌だ」

「恥ずかしいよ…／／」

「お前が海外行くからだ」

「だからと言って…リボンまでとらなくても」

「俺はいつもの髪が好きなの」

「ふえ！？／＼／」

新鮮に加えて…甘！

「明君大丈夫ですか？」

奏がこちらを見上げてくる

うるうるした目は精神を破壊しかけた

「ちょっとこっち来て」

奏を抱えたまま厨房裏に連れて行った

「明君？」

ポカーンとする奏…可愛いなあちくしょう！

軽く奏の唇に触れる

びくりと動いたけど奏はいつものように微笑んだ

えっ？いつの間になんなスキルをだって？

まあ綾人やムツツリーニだね…うん

「ふふ…栄養補給には早すぎますよ明君…」

「そんなことないさ。かなり働いたしね」

ふっと笑い飛ばし唇を徐々に近づけていく

奏の頬はほんのりと赤く熱かった

「……ん……」

温かい……そして気持ち良いキスだ

やばい……歯止めが……

「……ん／＼……あき……くん」

色っぽい奏の声は欲望をかき立てる

「……っは／／」

唇を離すと銀色の「伏せます」

「…はあ…はあ…」

やばっ強引すぎたかな？

「大丈夫奏？／／」

「はい…／／」

奏はそう言った後僕に抱きついた

「……………」

静かに頭を撫でる

奏は気持ちよさそうに顔をうずめた

本当…奏って可愛いなあ…

「しばらく人来ないし…ゆっくり休んでね奏」

いつもは僕が奏に膝枕をしてもらってるんだ…たまにはいいよね

きゅっと服を掴みながら奏は静かに僕の胸で寝息を立てる

「お休み奏」

そっと乱れた髪を直し彼女の寝顔を見つめた

この後、ムツツリー二にバレて美波や姫路さんにアッパーを受けたのは言うまでもない

そして理性が消えかけ寝ている奏の服を取ろうとリボンを解いたのは内緒だ

「ほにゆ？リボンが解けてる」

「アーキー！」

「明久君！」

「あふあふ」

第二十七問：消えた客：消えた明久！

「来ないね……」

静かになった教室を見渡しながらポツリと明君がつぶやきました

「はい……さつきまでは凄く忙しかったのですが」

私は明君の膝に座りながら紅茶を一口飲みました

なんででしょう？何か問題があったのでしょうか

カチャリとテーブルの上に乗った皿に置きながらみんなを見渡しました

「おおよよ……アリスちゃんショックだよん」

「確かにこのままだとヤバいな」

アリスちゃんを抱きしめながら綾人君はメニューを見ていました

「…熱々メイドの愛情ケーキ？誰が作ったんだ？」

綾人君の突然の質問に一人手を挙げました

「はいはい。私だよ」

愛子ちゃんでしたか…斬新な料理ですね

「そう言えば…確かメイド達は姫路を抜かしてそれぞれ料理を作ったんだよね」

明君が皿に置いておいた紅茶を飲みながら尋ねました

「そうですね…その専門の料理がオーダーされたらその子を作るんです」

「へえ〜」

カチャリと紅茶を置きながら明君は倒れてきました

「疲れた〜」

「あっ…明君その体制だと飲めないのですが」

明君はやめることなく腰に手を回してさらに倒れてきました

ちよっ…さすがに恥ずかしいですよ！

「よいしょ…」

明君の体を無理やり起こし再び膝に座りました

「何で奏はまた座るの？」

「何でって気持ち良いからですよ」

里穂ちゃんはしばらく停止した後口を開きました

「奏ってM？」

「どつやったらそんなことになるんですか！」

明君の膝に乗りながらバタバタと暴れました

何で膝に乗ること＝Mなんですか

「誰か僕の料理指名してくれないかな？」

愛子さんが口に手を当てながら咳くと厨房からバヒュンと音を立て
誰が椅子に座りました

あつ康太君ですね

椅子のバランスを上手く取りながらこつちを振り向きました

「……………愛情ケーキ！至急百二万前！」

「自分で作れ」

雄二君が呆れながら膝に乗っている翔子ちゃんを見ていました

「あはは〜ムツツリーニ君たら。すぐに作るよ」

愛子ちゃんはその言つと厨房へ消えて行きました

「明君も何かいらいますか？」

あれ？返事が無いです…：そう言えば妙に腰が軽いような

振り返ってみると思った通り明君がいませんでした

「明君」

さっきまで沢山甘えていたので急に悲しくなってきました…

「うっ…明君」

「……雄二…どっ？」

探していると同じように雄二君を探す翔子ちゃんがいきました

「どっしたんですか翔子ちゃん」

「…雄二が消えた」

「翔子ちゃんもですか…」

私は涙を拭いながら俯きました

「…奏もいなくなったの？」

「はい…」

こうして私と翔子ちゃんによる恋人探しが始まりました

「とりあえず…教室外を探してみましょう」

「……うん」

綾人君達に一言告げてから私達は教室を出ました

「明君」

「…雄二」

とりあえずEクラスから探してみますが見つからず

「明君……」

「……雄」

私達は不安になり必死に探します

Dクラスにはいない……Cクラスもあいにくです

しかし何故でしょう……さっきから告白ばかり受けるんですが

第二十八問：アキちゃん爆誕だよ！

「明君」

「…雄二」

私と翔子ちゃんは教室を見て周りました

しかし明君と雄二君は見つからず

「それにしても何でこんな格好に…」

「…恥ずかしい」

教室をまわっている時、いつの間にか捕まってメイド服からウエディングドレスに変えさせられたんですね…

「全く…清水さんは何を考えているのでしょうか…」

呆れながらもパタパタと急ぎます

だって

『吉井さん俺と結婚してええ』

『霧島さん！俺の花嫁に！』

さっきよりヒートアップしてるんですよ

「ふえ〜早く明君達を探さないよ」

「…さすがに困った」

Aクラスにさしかかった所で何かドタドタと聞こえます

「どげどげどげ〜!」

「きゃああ!変態!」

走ってきたのは頭にぶ、ブラをつけたハゲの人でした

この人って…まさかあの時営業妨害してた人…ですよ?

確か…夏川先輩と常村先輩でしたよね

「どげどげどげ!おわっ!」

「邪魔だ!」

「「きゃっ!」」

常夏先輩は私達にぶつかりながらも逃げて行きました

私達はバランスが崩れ転倒しかけてしまいました…

「危ない！」

近くにいた人が助けに来ますが間に合わ…

ガシッ

「ほえ…？」

気づくと温かいぬくもりと優しい手の中に抱き止められていました

「大丈夫奏？」

頬を染めながら上を見ると…そこには見知らない女性がいました

「…あいつら…大丈夫か翔子？」

「…雄…二／＼」

へっ雄二君！？と言っことは…

「全くだよ…」

この人は…

「明君？」

私は恐る恐る髪を触ると案の定カツラでした

「うわっ！奏何するの」

「無理ないぞ明久…今のお前はアキちゃんだからな」

雄二君の言葉にショックを受ける明君…

でもこの胸の膨らみ…まさか

「明君…女の子になったんですか？」

「なわけないでしょ！」

でも…可愛い

「アキちゃん…」

私はアキちゃんを押し倒しました

「はいいい!?!ストップ!何やってるの!」

「はわ…すみません…つい」

危ないです…つい可愛いから

「まあ泣くな明久…」

「僕…もうお婿にいけない!」

私達は一旦教室に戻りました

明君は作業服に着替えました

残念な気もしますがやっぱり明君は男の方がいいですね

でも…まあさっきのことがあって明君は深く傷つきました

「明君ごめんなさい！」

「……………」

厨房裏で私は謝っていました

ショックですよね…

彼女に女の子として見られたら

「きゃーっー」

変な声と共に私は押し倒されていたことに気がつきました

目の前には黒く笑っている明君が…

「奏…何で僕は女の子扱いにされたのかな？」

「そ、それは明君が可愛いからじゃないですか？」

「ふ〜ん」

明君はそのまま起き上がり私を膝に乗せました

「せっかくウエディングドレス似合ってるって言おうと思ったのになあ」

「ふえ？／＼」

残念です…やっぱり私じゃ似合っていないのでしょうか

「なんてね…奏なら別に女装しても平気だし…ごめんねいなくなっ
て」

明君はそう言いながら私の頭を撫でながら微笑みかけてくれました

「明…君」

気づけば私は明君に頬ずりをしていました

明君に腕の中は温かくて優しいです

「ちよっ…小動物じゃないんだからさ」

明君はそう言いながらくすぐったそうに笑いました

私はメイド服に戻っていましたが何故かネコミミと尻尾が付けてあ
りました

それはみんな同じでした…うう恥ずかしい

「雄二…」

「待て翔子…そんな姿で接近するな！」

「…雄二は素直じゃない」

「うわっ！待て翔子…！」

「あはは…雄二も素直じゃないね…」

明君は笑いながら私の頭についている猫耳と尻尾をいじっていました

「にゃう…／＼」

思わず出た声に明君は流石に驚きました

この耳と尻尾…何故かいじられたら…痺れちゃうんですよ…？

「か、奏？／＼」

土屋君に尋ねる必要があります…って明君強く握りすぎですよ！

「ふにゃあっ！／＼」

「（ブシャアアアア）」

「明君！？」

厨房裏…皆さんには聞こえない会話と出来事がありました

でも…それもいいかもしれませんね

第二十九問：親子？生まれ変わったあいつ

「ちとと…」

再び客が増え葉月ちゃんも来てくれた

ふう…これで安心だね

『『宇宙キタアアア！』』

いきなり聞こえた声にびっくりしながらも立ち上がった

「二人共…何やってるのさ」

綾人と一麻…二人が絡んでいると言っことは

「いや、新しい仮面ライダーのセリフをさ…！」

「仮面ライダーフォーゼ！怠慢はらせてもらっぜ！てな！」

一麻は雑誌を見せ綾人は台詞をマネしていた

何というか…この二人は本当にライダーになれそうな気がする…

僕？僕はオーズだからね…あつ違う世界のことだからね

「お前らライダーのマネすんのもいいが働け」

「雄二！お前は何かわかっていない！」

「そつだ！何でお前と明久だけ仮面ライダーに変身できるんだよ！
！」

「知るか！作者に聞けや！」

雄二が二人につっこんだ瞬間

「「Wライダーキック！」」

「ぐべー！」

雄二は二人のライダーキックにより成敗された…まあ二人のお陰で
お客さんも喜んでるし…

「明君！7番テーブルをお願いします！」

「了解ー！」

僕は何も見なかったように奏の料理を受け取りにいった

そつえば…奏は指名すると何を作ってくれるんだろう

「明君？」

「ああ！ごめんごめん！」

僕は急いで奏の所へ駆けていった

「だいぶ…楽になったな」

雄二の言葉に頷きながら周りを見る

さっきまで大忙しだったけど随分楽になったよ…

「売り上げもかなりのものね…」

木下さんは計算しながら笑っていた

「これならゆっくりできるの…」

「……………（コクコク）」

少しは休憩したいよね…

「馬鹿なお兄ちゃん！葉月とどこか行こうです！」

「そうだね…休憩しても大丈夫そうだし…行こうか葉月ちゃん」

「はいです…」

僕は葉月ちゃんの手を取り雄二やみんなに一言告げて行くとした

が、やっぱりこうなるよね

『罪人…吉井明久は小さい少女を連れどこかへ連れさり…あげくの果てに』

『結論だけ述べたまえ』

『少女に誘ってもらって羨ましいであります！…！』

『うむ！実にわかりやすい！判決』

わかってるよ…みんな優しいからハイキックで済みそうだ

『会員全員からのパイルドライバー！』

全然安全じゃない！ハイキックより辛いよ…！

「はあ…相変わらずだなFFF団は…」

綾人はそう言いながら首の骨をならした

うん…バイバイみんな

「お前らな…そんなに羨ましいなら…」

『怯むな！敵は一人だ！』

「自分達で彼女を見つける努力しやがれ！」

『ぎゃあああ』

綾人によりみんなは地に埋められた…

合掌…

「ダーリン素敵っ！」

アリスが抱きついているのも構わず綾人は僕に何かを渡した

「Bクラスの奴から引換券もらったんだ…楽しんでこいよ」

「綾人…」

君はなんて優しい奴なんだ

「あつ…屋台とかは有料な…」

わかってるよ…けど何故か残念だ

「馬鹿なお兄ちゃん！行こうです！」

葉月ちゃんは片方の手で僕の服を掴み

「お姉ちゃんも行こうです！」

もう片方の手で奏の服を掴んだ

「私も…ですか？」

「そつだね…奏もいてくれたら葉月ちゃん喜ぶよ」

「はいです…！」

奏は戸惑いの顔をしていたけど直に笑顔になった

やっぱり奏はこの顔が似合ってるよ…

「じゃあ行きましょう葉月ちゃん」

「はい…！」

僕と奏は葉月ちゃんの手を優しく握り教室から出て行った

『和むねえ…』

『まるで親子みたいだよね…吉井君達』

『羨ましいなあ…』

廊下を歩いている時…一部の人がから温かい目で見られたんだけど

どじつと…

『Bクラス…コスプレ七変化』

「凄い…ネームだね」

「そうですね…インパクトあっていいんじゃないですか?」

僕と奏は若干汗を垂らしながら教室を見ていた

Bクラスか…根本君…いるよね

奏のこともあるし…大丈夫だろうか?

「お兄ちゃん達入ろうです!」

「そ、そうだね入ってみようか」

「え、ええ…大丈夫ですよね」

「??？」

大丈夫…大丈夫だ

落ち着け僕…

「よし…入ろう」

ガラリと開けるとそこには

『…』

知らない女の子と

『コスプレ喫茶へようこそ!』

RPGのコスプレをしている根本君がいた

「根本君…?」

不気味だ…あの根本君がにこにここと笑っている

「おお…久しぶりだな吉井」

根本君はまだにこにここと話しかける

「根本君…ですよね?」

僕の後ろに隠れていた奏は恐る恐る顔を出し尋ねた

「吉井か…あの時は悪かった」

「へ？」

根本君は表情を変えずに話す

怖い…不気味すぎるよこの根本君

「根本君…君に一体何があったんだ」

「俺は生まれ変わった！あんな卑怯くさいこと二度とやらねえ…」

根本君はキラキラと光っていた

本当に君に一体何があったんだ根本君！

第三十問：彼女を誘拐しては駄目ですよ（前書き）

この小説が大好きと言って貰えて凄く嬉しいです！

駄文小説ですがこれからも継続します！

第三十問：彼女を誘拐しては駄目ですよ

「まずはこの試着室に入ってコスプレしてください」

女の子に押されながら僕は男用…奏は女用の試着室に入れられた

それにしても根本一君の奴…何があつたんだ本当に

キノコモとい根本君は彼女から振られ…仲間から外され…学校に来
なくなっていた程なのに

「まあいいや…」

気持ち悪いけどどちらかと言えば今の根本君の方がいいし

「えっと…服は」

『吉井明久様専用』

え？何コレ

とりあえずそちらを覗いてみた

『お好きなベルトをお選びください』

「はい？」

ちょっと待ってほしい…何だコレ

何なんだコレ…明らかに狙われてるだろ

いや…いくら僕が別小説で仮面ライダーであっても…さ

「流石に抵抗が…」

あれ？紙が…

『なお…お選び頂けない場合はメイド服になります』

何だこれはああ！

「何故…こつも僕を女装させようとするんだ！根本は何を考えているんだよ…」

女装は嫌だからベルトが入ってあるだろうボックスに手を突っ込んだ

「よいしょ…」

ガチャリと引っ張り出した…

『吉井明久はフォーゼドライバーとアストロスイッチを手に入れた』

「よりによってこれ…」

綾人や一麻が見たら…まず何か言われそうだ

「オーズドライバーは無いのかな？」

ボックスに手を突っ込むがスカスカだ

まさか…また狙われた？

カーテンを開け更衣室から出た

「明君？」

「お待たせ…奏」

あれ？奏は学生服か…

青い学ランにチェックの入ったスカート…そしてニーソックス

「確か…フォーゼに出てたヒロインの姿…だよね」

まさか奏も狙われてたのか

「明君…似合ってます…よ」

奏は若干笑いをこらえていた

無理もないよ…僕の格好は明らかに不良だよ…腰にはフォーゼドラ
イバー…

アストロスイッチは制服にしまってます！

「馬鹿なお兄ちゃん！お姉ちゃん！お待たせです！」

葉月ちゃんはチェックのスカートに黒い学ランがあ

可愛いなあ…

「ふふ…じゃあ何か食べましょう」

「はいです…」

僕はウェイトレスに案内されテーブルに座った

「へえ〜美味しそうだなあ」

メニューを眺めながら僕は根本君を見ていた

「お疲れ様根本君」

「ああ…ありがとう」

さっきの女の子か…なんかいい雰囲気だなあ

僕はカルボナーラを選び三人仲良く食べた

美味しかったなあ…途中葉月ちゃんの口元を拭く姿は大人に見えたのは内緒だ

「ん？明久？」

突然後ろから声が響き振り返ると上条…じゃなく一麻とインデツ…
里穂がいた

「「あははは！」」

「明久！何だよその姿！」

「一麻こそ髪を染めちゃって」

「「（睨み合い）」」

良く見たら一麻もベルトをつけていた

確かこれはファイズだっけ？

「喧嘩しないの」

彼女に引つ張られ睨み合いが中断された

おのれ一麻…

「喧嘩すんなよ明久、一麻」

「…綾人？」

まあわかってた…一麻がいるから…綾人とアリスが居ることは想像
ついてたさ

「えつと綾人…その格好は？」

綾人の格好は赤いマフラーをつけてセーターとジーンズだ

「ああ…これは電王第二話の姿だな」

「細かいね…」

それよりこのクラスに居る仮面ライダーを知っているマニアックな人に会いたい

綾人にもベルトがつけられていた

「アッキー似合ってるよん…ぷぷ」

「うっ…やっぱり変なのかな」

アリスの姿はあれだ…どこそこの侵略娘だ

胸は違うけど

「へえ…お前はフォーゼかあ…なるほど…」

「二人共笑わないで…！これ以上笑わないでええ」

チンピラの姿はもうご免だと思った僕であった

「あつ…電話が…明君ちよつと外出ますね」

「うん」

「私もだ…一麻…ちよつとごめんね」

「あ…ああ」

「おりよ？私もかい…留守にするからカルボナーラ守ってねダーリン」

「了解だ…」

「なんか妙だなあ…一斉に電話がかかるなんて」

僕はハンバーガーを食べながら呟いた

「もしかしたら…怪人に誘拐されたとか」

「まさか…な」

怪人って仮面ライダーじゃあるまいし…

そんなことを思っていたら葉月ちゃんが居ないことに気づいた

「あれ？葉月ちゃ　「明久…奏達が誘拐された」…え？」

どういふこと？

「ちっ…やられたっ…電話は誘い出す為かよ」

誘拐…奏達が…

綾人から聞いた話ではムッツリーニから電話があってFクラスのウ
イトレスは全員誘拐されたらしい

しかも人間ではないらしい

本当に怪人？いやそんなことより

「見つけしだい…叩くよ二人共？」

彼女をさらうとはいい度胸じゃないか…

「吉井どうかしたか？」

根本君がこちらへ歩いてきたから一万を渡した

「釣りはいらぬよ…服借りるね！」

「お、おう」

「「明久…スイッチが入ったか」」

説明しよう

吉井明久は彼女に何かがあると怒りが頂点にたすのだ

さらに十分以内に会えなければ明久は鬼神になってしまうのだ

「ちよつどいいや…今の僕は不良だし…存分にやっつけてやる」

第三十一問・そう！変身っ！だああ（前書き）

仮面ライダーがわからない人はごめんなさい！

今回は常夏コンビ成敗の巻です

第三十一問：そう！変身っ！だああ

「ムツツリーニ…カメラを切り替えてくれ」

「……了解」

僕は今、男子更衣室のロッカーにあるムツツリーニ専用防犯カメラ操作のパソコンの前にいる

奏…泣いてるかな…

落ち着け…こついつ時こそ冷静になるんだ

「…音声に切り替えた」

パソコンからは沢山の声が聞こえる

何が何だかわからない…

「よく耳をすませ」

雄二がみんなにそう言いながら真剣に聞いている

ちなみに

雄二にはディケイドベルト

ムッツリーニはキバのベルト

秀吉には何故か仮面ライダーGが巻かれている

とにかく！僕らはかなりストレスがたまってる

『…あああ』

「……………!?!」

ムッツリーニが何かを察知したのか素早くパソコンを打つ

そして画面はとある場所が映し出された

「……じふは……」

「常夏じゃな」

あいつら……

ムッツリーニはさらに打ち込み音声が流れてきた

『ははっ！あいつら今頃どっしてんだろっな！』

『さあな…ひひ…。まあ発見されたとしても俺らにはたどり着けないけどな！』

『ハハハハハ！』

「……………常夏う……………」

ヤバい…何かが切れそうだ

「なるほどな…あいつらどこまでゲスなんだ」

「だが…たどり着けないってどっしりいうことだ」

みんなが疑問やイライラを口にするが関係ない

タイムリミットが過ぎ…僕の怒りは限界だ!!

「常夏…許さない…ムツツリー…場所は？」

ムツツリーニは何故か怯えながらパソコンを打った

「……い、一階の地下倉庫」

そうかそうか…地下倉庫かあ

「落ち着けよ明久…怒ったお前をみたらあいつが悲しむぞ」

「う…」

確かにもし先生に見つかったら良くて停学

そしたらまた奏を悲しませる結果になってしまう

落ち着け…冷静に対処した方が後が楽だ

「よし…とりあえず地下倉庫へ向かう…」

雄二の言葉にみんな頷く

「だが、あいつらのことだ…仲間でも呼んでそうだな」

「ああ…下手したら刃物を持つてるやつもいる…そこだ」

雄二はベルトを指差した

「これは感謝記念だと言いついで装着させたらしい」

いやいや…それならバカテスライダーでやるつよ

「でも雄二…本当に起動するの？」

「大丈夫だ明久！」

「正義の心を持つものなら変身できるわ」

一麻と綾人はノリノリのようだ

う…やっぱりバカテスライダーでやった方が

「まあ…いいか」

「そつと決まればさっそく変身だ！」

「おっ！」「」

ちょっと待って！この空気についていけないの僕だけ！？

わわ…みんな変身準備してる…

「早くしろ明久！」

仕方ない…ここは乗り気で頑張るか！

奏の為だしね！

えっと…ベルトにあるスイッチを入れて

『3』

うわっ！いきなりカウントダウン！？

『2』

『1』

『『変身！』』

レバーを入れ腕を上にかかげた

煙に包まれ気づけば変身していた

「宇宙キタアアア！」

「俺参上！」

「……………」

「じゃあ！つてファイズから龍騎になってやがる！」

「何故ワシは女ライダーに変わってるのじゃ？」

秀吉はファムになりました

「「よっしゃああ！ライダーキタアア！」」

二人は大きく叫ぶ中僕はスイッチをいじった

「何これ？」

『ロケットオン』

へっ！？何ロケットがロケットがついたんだけど！？

「うわあああ！何これ勝手に動くよおおお」

途端空へ飛び上がりそのままどこかへってえええ！？

「明久！」

「ぎゃああああ」

「見えなくなつたのじゃ……」

「あの馬鹿……とりあえず俺達で行くぞー！」

「「「おじ……」」」

奏 side

「ーあなた達最低です」

私は常夏コンビを睨みつけました

隣ではみんなが倒れています

周りには不良さんと仮面ライダーでいうショッカー軍団がいました

ちなみに仮面ライダーは一麻君から聞かされました

「最低？言ってる言ってる」

「俺らがやってるのは戦闘防衛なんだよ」

「こんなに多いのが戦闘防衛と言っんですか？」

「やかましいわー！」

夏川と言う方の先輩が私を蹴り飛ばしました

「う…」

痛い…体に響く痺れで顔をしかめました

本当に最低…です

「ひひっ…俺あのウサギみたいな娘ね」

「じゃあ俺はあの青髪かな」

「いいね！俺は銀髪だ！！」

不良さん達は私の友達をどうしようかと話していました

「心配すんなお嬢さんよお」

夏川先輩が私の顎をくいつと持ち上げました

嫌…

「お前は俺が遊んでやるからよ！」

離っっ…

「じゃあ俺はこの霧島を貰ってやる!」

モヒカン頭の常村先輩は翔子ちゃんに近づきました

「翔子ちゃんに触らないで!」

「ああん?」

どうしたら…

「生意気言っじゃねえ!」

「あ…」

上から踏みつけられ激しい痛みが襲いました

嫌…誰か

「生意気なんだよ！」

「少し黙ってる！」

二人に容赦なく踏みつけられ殴られ

腕や足は縛られてどうしようもできない

「…う…あ」

苦しい…助けて…

私の脳裏に浮かんだのは大切な人の顔

「助けて…！明君！」

私が思い切り叫んだ途端…天井が

「わああああ！」

「な、なんだ！？」

「うお！誰だあいつ！」

天井から宇宙飛行士さんが落ちてきました

「ぐふっ…」

着地が失敗したようです…

「痛たた…奏？」

「その声は…明君？」

「奏…その傷…」

明君がこっちに近づいてきました

…明君

今まで我慢していた恐怖が私を襲いました…

「明君…」

「か、奏!？」

涙が…止まらないです

怖くて…本当に怖くて

「こいつまさか吉井か!？」

「なんで天井から!？」

明君は私に近づいて縄を解きそのまま立ち上がりました

私は怖くてその場にうずくまりました

「……………ひぐっ」

涙が……………体中が痛いです

「お前ら……………よくも僕の彼女を」

「びびるな！みんなあいつを殺せ！」

明久 s i d e

夏川先輩がそう言った時一人の怪人が飛んできた

「イー……」

どつやら殴られた後のようだ

「たくつ勝手行動すんなよ明久！」

「雄二！？」

「気持ちはわかるが落ち着けよ明久」

「綾人！？」

みんなはどんどん雑魚を倒していく

どちらかと言えば…勝手じゃなくてたまたまだけどね

「「「うおおお！」」」

不良達がいきなり姿を変えた

一人は仮面ライダーに

一人はファンガイアに

一人はイマジンに

「ちょうどいい…それぞれの敵が」

「なら俺と秀吉はあの仮面ライダー王蛇だな」

「…ファンガイアは任せろ」

「見るからにしてデスイマジンか…最高の敵だな」

だからバカテスライダーでやるっよ

「おいモヒカン頭…翔子に手を出すとはいいい度胸だな」

「うるせえピンク仮面が！アポロチェンジ！」

モヒカンはアポロガイストに姿を変えハゲは謎のスイッチを押した

「お前の相手はこの俺だ！」

ゾディアーツか…

「これなら殴っても心配はないよね」

けど一言言わせて貰おう

「仮面ライダーについていけない人がいるのを理解しろおお！」

僕は目を光らせ突撃していった

「「「「だっしゅあああああ「「「「

「ぐわあああ」

殴り飛ばし壁に叩きつけた

『『ファイナルベント!』』

『フルチャージ』

『ウエイクアップ!』

『ファイナルアタックライド』

『リミットブレイク』

仮面ライダーとは違い僕らの拳が光る

『バカテスバージョンだああ!』

加速をし敵に向かって思い切りなぐりつけた

「おりゃああああ」

「ぐべらあああ」

そのまま壁を破壊し不良達は爆発、常夏コンビは吹き飛んでいった

人の彼女に手を出すことがどんなに危険か思い知ったか！！

「ひとまず…一件落着だな」

僕は変身を解いた途端に服が前に着ていた服に戻りベルトが消えた

本当にどうなってるんだこれ

ちなみに一麻と綾人は何故か悔しい顔をしていた

第三十二問：悔しさは人を強くするんだ！

「明君！」

「おっ…と」

奏がガバツと抱きついてきた服は何故かメイド服に戻っているけど…
…やっぱり胸が当たって

「私…怖がっただです…」

震えながら顔を押し付ける

「奏…」

よく見たらあちこち傷だらけ…だ

鋭い針が刺さったような痛みがした…

守れなかった…また

「…くっ…」

奏を優しく包むように抱いた

瞳からは涙が伝う

「お前らいくぞ…」

「よいのか雄二？」

「ああ…今は二人きりにしてやれ」

「えっ？明兄が？」

「ああ…だいぶ落ち込んでやがる」

「そうですか…けど明兄と奏さんの問題ですから…」

「そっ…だな」

「明君…？」

「良かった気がついたんだね」

彼女が起きるのを手助けした

彼女は辺りを見回しながら僕をみた

「保健室…ですか？」

「うん…手当てしてあげないといけなかったしね」

奏は俯いたが僕はそれにムツとして顎を持ち上げた

「明君？」

「僕は…俯いた奏は嫌いだなあ…」

そう言ってゆっくりと引き寄せた

奏は少し驚いていたけどすぐに目を瞑った

しばらくしてからすっと離す

奏は僕の胸に頬をくっつけた

正直緊張している…いやだって彼女だけど奏は可愛すぎるから慣れないんだよね

「明君…明君」

奏の瞳は下ロンとしていた

「ど、どうしたの？」

「……………大好きです……………」

気づけば奏はスヤスヤと眠っていた

はは……………恥ずかしい……………な

「ごめんね……………本来なら僕が言わなきゃいけないのに……………」

そっと頭を撫で僕は今日のことを考えていた

常夏コンビがあれで諦めたとは考えられない

「やっぱり明日の…大会か」

そうだったらパートナーを選ばなきゃ

「奏……………」

ずっと彼女を見る

スウスウと静かに寝息を立てる彼女を撫でながら明日のことを考える

雄二のことだからたぶん…霧島さんが出るだろう

綾人とアリス…一麻と里穂かな

「強敵だらけだなあ……」

常夏コンビとは必ず誰かが当たる

なら決勝戦は確実にFクラスの誰か

「明日の大会に勝とう……そして奏に」

窓を眺めながら……Fクラスのことを考える

みんなまだ頑張ってるのかな？

「なんか…ちょっと悪い気がするかな」

みんな頑張ってる中僕は彼女と添い寝だもんね

はは…見つかったら何を言われるやら

「見つければ死刑は免れないな」

「うん…そうだね…雄二!？」

扉の近くに悪友がいい笑顔で笑っていた

「貴様!いつからそこに!？」

「俺だけだと思ってんのか？」

「え？うわああ」

天井や隣のベッド…さらにベッドの下や窓からみんなが入ってきた

「ごめんね〜吉井君。折角の時間邪魔しちゃって」

「く、工藤さん！？」

「…明久は場所は考えてするべき」

「む、ムッシリーニまで…とていひし何をするして言ひのねー」

「決まってるよん…ギシギシアンアンだぜい！」

あ、アリスは何恥ずかしいことを平気で

「まさかお前やってないのか？」

「やってないのかってまさかみんな…」

「馬鹿一麻！！何ミスってんだ！」

みんな顔を赤くしながら顔を背けた

「その様子だとみんな…初夜過ごしたんだ」

一番危険なのは綾人とアリスだね…子供ができてるんじゃないだろ

うか

「……吉井は満足させてる？」

「き、霧島さんまで何を……」

ヤバい…なんかヤバいよ

ここにいたらいずれ美波や姫路さん達にまで

「さよなら…!」

「おっ!」

ガシッと雄二に腕を捕まれた

こいつ！まさか僕を殺すきか！？

「そんなことしたら奏が落ちるだろ？」

「今日は学園に泊まれよ明久」

「大丈夫！私達も泊まるからん！」

はい？いきなりみんなは何を言い出すんだ

「明久：覚悟決めろよ」

「え？」

何が何だかわからずに僕は学園に泊まることになってしまった

第三十三問：学園にお泊まり…大丈夫だよね？（前書き）

遅くなりました！続き更新です！

第三十三問・学園にお泊まり…大丈夫だよな？

一日目が終了し…お客や生徒達が帰る中僕らは教室にいた…というよりは物を動かし

どこから持ってきた布団を布いて寝床の準備をしていた

雄二の提案により今日は学園に泊まることになったらしい

「雄二。やっぱりやばいんじゃないかな？」

「何がだ？…まさかびびってんのか？」

こいついつの間にか読心術を…

「お前の顔はわかりやすいんだよ」

「ぐ…」

僕ってそんなに思ったことが表情に出るのかな…

「大丈夫だ…明久。後から許可取るから」

「許可？許可って泊まることだよ綾人？」

綾人はみんなの寝巻きを布団に置きながらこつちを見た

「それもあるが…もう一つは学園設備をいじらせてもらう許可だ」

学園設備をいじる！？一体みんな何しようとしているの？

「今日の出来事からすれば…そういうことですか」

奏は納得しながら頼ずりをしてくる

「えっ…また僕だけ置いてけぼり？」

「「ああ」」

雄二と一麻はニヤリと笑いながら二人の嫁に抱きつかれていた

正直格好わる！！

「……………明久。こっち」

「何？ムツツリーニ…うわっ」

何！！いきなりフラッシュだと！？

「…………メイドとご主人」

ムツツリーニは何故か赤い液体を流しながらシャッターを切る

「ちょっと待ってムツツリーニ！僕らはそんな関係じゃ」

「明君」

「うわあっ！」

奏が抱きつきながらそのまま押し倒した

むしろ執事とお嬢様だよ……

「(ブシャアアア!)…工藤貴様」

「ごめんねムッツリーニ君…」

「…キスは反…」

「…雄二」

「何だ…○ ○\$¥!?!」

「凄いな…桃色空間があちこち出来てるな…」

「まったくじゃ あやつらには勝てんの…」

「ダーりん」

「この感触は動物の…!？」

「露出ウサギの着ぐるみだよ…ん」

「ちょっと待て…あれは見せれないよな秀吉」

「う、うむ…あれは…過激すぎるのじゃ」

「「「とりあえず」」」

「目を瞑れ里穂！」

「歌穂！お主もじゃー！！」

「……／／／」

「「orz……」」

「明君」

奏っておしとやかで美しいけど……こつやって甘えてくる時は小動物
みたくて可愛いなあ……

「……ぐもおー！」

胸が顔にー！

「…ひゃ！／＼」

奏も流石にわかったのか離れてくれた…嬉しいような悲しみのような

「じめんなさい…」

「だいぼうぶ（大丈夫）だよ」

気づけば鼻血が流れていた…くっさすがはメタロイド級のバスト…

「吉井君も素直じゃねいね」

「くっ工藤さん！？」

しまった！一番厄介な人に見られてしまった！

「せっかく甘えてきてるんだから受け入れてあげなきゃ…こんな感じだね」

工藤さんはそう言った後、ムッツリーニ近づいて押し倒した

「(ブシャーアアア)」

「ムッツリーニ！」

ムッツリーニは震える手でピースサインを作った

「……明久…もっと素直に…」ガクッ

ムッツリーニ！君の体は素直すぎるよ！

「しょうがないなあムツツリーニ君…」

工藤さん？ちよっ…まさか人口呼吸！？

「／／／／！？」

「、これは見ていいものなのか…！」

過激すぎるよ工藤さん！

と、とにかく…奏には見せないように

「か、奏…夕ご飯の準備を…」

「……はわわ／／」

「ぎゃあああ！奏！そっちの方向は駄目だ！」

急いで奏の目を塞ぐけど熱い！奏の顔が真っ赤だよ

「綾人…アリス…やるなら違う所でやってよ」

「明久…モフモフの邪魔をするな！！」

「うわっ！」

いきなり拳が飛んできたけどなんとか避けた

しまった…綾人はああいうモフモフした小動物とかが好きだったんだ

「はあ…とりあえず一麻がババアに交渉しているからしばらく待つ

かな〜」

真っ赤になっっている奏を抱えて綾人とアリスの周りを布を使って隠す

「はわわ／＼」

…奏可愛いなあ…

はっ！いかんいかん！

「／＼／＼明君…」

「ん…何？」

腕の中にいる奏を見ると顔を近づけてきた

「…………… / /」

いやいや！駄目だよ僕！いくら奏が可愛くてもみんなの前で

「明君……………」

何でだろう…理性が剥がれかけている

「だ、駄目だよ！…こういうのは後か」

「……………」

な、なんだ頬擦りか…

でも何故か涙が…止まらない

「……?……」

あれ?頬に何か柔らかい……

「……ふふ」

気づけば奏が満足そうに微笑んでいた

「……//」

奏が何をしたのか気づき、僕はにかつと笑った

side
—
麻

なんとか許可は取れたが…何だこの教室は

甘い空間すぎて…酔っちまいそうだ

俺はとりあえずあそこにいる馬鹿を呼んだ

「おい明久」

「……！？。ごめん…何？」

ぐ…こいつ奏に頬擦りしてもらいながら俺の話無視しやがったか

「許可取れたから夕飯手伝ってくれ」

「うん。わかった…」

明久が起き上がったと同時に奏が滑り落ちた

当然明久は血相かいて奏を心配していた

何というか…何であいつら結婚しないんだと疑問に思っつくらいだ

「一麻！」

「はいはい…」

里穂が近づいてきたから俺はいつものように抱き上げた

「相変わらず軽」

あれ？頭に激痛が

「痛ええええ」

「女の子が気にしてること言わない!」

ぷくつと頬を膨らませながら里穂は拳を握っていた

「わ、わかったわかった!」

はあ…俺は綾人と違ってヘタレだからなあ

まあ里穂も抱きつかれたらきつと殴るし

我慢だ我慢

「夕飯作るか…明ひ」

改めて明久を見ると明久は奏を抱えたまま厨房へ向かった

「どつやって作るんだか…」

あ…厨房片付けなきゃな

「今日は朝まで勉強だな」

そう思いながら俺は里穂を抱えたまま厨房へ入った

第三十四問：雄二の考え…勉強の前に

「「「ちそうさまでした…」」

食器を片付けてくれる嫁た…ゲフンゲフンみんなの嫁と奏を見送りながら僕はこれからのことを相談していた

「さてと…飯も食ったし早速システムいじらせてもらうか」

雄二はそう言いながら首をコキコキと鳴らしていた

いじらせてもらう…つまりは支配するに何故か繋がってしまう

「でも廊下は真っ暗だし…鍵だつて」

明かりがついているのはこの教室だけ

当然…学園全体に鍵がかかっているからシステムがある部屋にも入

れないはずだ

「明久…俺らが何の為にババアの所へ行ったかわかるか？」

「え…システムを破壊する為…」

「馬鹿か！何で破壊しないといけないんだ！」

何かスイッチが入った

「雄二が鍵をもらったから何か変なことするに決まってるじゃないか！」

「てめえ！俺を何だと思っていやがる！」

「決まってるじゃないか！侵略ゴリラだよ！」

僕らは睨み合いながら拳を握る

こいつには一度お仕置きが必要だ！

「「ぶるっしやああ！」」

走り出しお互いに拳を繰り出す…前に

「……雄二…喧嘩は駄目」

「し、翔子!?!」

雄二は霧島さんに止められ

「明君…駄目ですよ？喧嘩なんて危ないことは」

僕は悲しい顔をしている奏に止められた

何でだろう…普通なら反省するべきなのに

「か、可愛いじゃないか！（ねえか）」

むっ…雄二とシンクロしたような

「はあ…とりあえず…綾人は…駄目か。ムツツリーニ！秀吉！廊下に電気つけたらシステムがある部屋に行くぞ」

「心得た！」

「…承知」

そう言つて三人は嫁さんと一緒に教室から出て行つた

「あつ！僕もいか「明君は反省しましょう」「あ…あれは雄二が」

奏は上目使いで見つめてきた

「私も居ますから…ね？」

「う…うん／＼わかつたよ劉備さん」

あつ間違えた…

「やっぱり劉備に見えるんですね…」

怒られると思つてたけど奏はぶつぶつと何かを呟いていた

その後：考え事をしている奏を置いてソファーに座ったら奏が慌てて膝に座ったきたんだけど…何で？

「翔子！待て！接吻は！」

「……いつもしている」

「あはは…雄二…率直になりなよ」

ん？奏の様子が…

「明君………私我慢の限界です！」

あっ？何！唇に柔らかい感触がああ！

「ぶぐ…むじっ」

「はっざまあ見る明ひ…ぶぐっ」

何だこれは…何故僕らは接吻されているんだ！

この教室に残っているのは僕と雄二、綾人、綾人嫁、雄二嫁、雄二嫁、ムッ
ツリーニ、一麻、秀吉の嫁は…ついていったんだ…良かった

姫路さんや美波を誘わなくて正解だったよ…

ちなみに妹はどうしたって？

僕の可愛い妹は今日も友達の家泊まるらしい

ちょっと気になるなあ

え…？お前はブラコンかって？

そんな訳ないよ！多分

「ふむっつっ！(僕はカナ(奏)コンだから！)」

と言っより長い！長いって！

やばい…心地いい

いかん…理性が…

はあ…ようやく俺の番か

いえ…あなたの出番はありませんよ一麻

「なにいい」

みんながシステム管理室へ行っている間僕らは…

「雄…どうするのね」

「知るか…俺だって考えてんだよ」

僕と雄二の膝には奏と霧島さんがちょこんと座っている

「……雄二が率直にならない」

「翔子ちゃんもですか…実は明君も」

僕らの声が聞こえてないのか二人は相談話をしている

「ちょうどいいな…明久ちょっといいか？」

「うん？何雄二？」

雄二から話って珍しいなあ…変なことじゃなければいいけど

「お前…姫路と島田をどう思っている」

い、いきなり変な質問だな

「うーん…姫路さんは綺麗で美波は「そうじゃない」「え…」

雄二は真面目な顔で続ける

「お前があいつらを好きだったか聞いてんだよ」

「あっ……そういつことね。でも何でまた？」

「…あいつらはお前が好きだよ」

え……？いやいやこれは雄二の罠だ

「そんな訳ないよ。あの二人が僕を好きになる訳ないよ」

「…はあ…なら今はいいがあいつらにちゃんとした気持ち伝えとけ」

あれ？雄二は何で呆れてるの？

ちゃんとした気持ちって…

「さてお喋りタイムは終わりだ。翔子…降りてくれ」

「…嫌」

「駄目だ」

「…嫌」

「駄目だ」

「……雄二は本当に素直じゃない」

「ちょっと待て！？何でいきなり脱いでんだ！」

「…夫を満足させるのは妻の役目」

「違つぞ翔子！…ぬああっ！胸を押し付けるなあ！」

雄二…素直になりなよ…霧島さんはあんなに雄二を求めてるのに

「じゃあ僕は…」

雄二と同じ考えじゃ必ず失敗する

「よいしょ」

奏を抱き上げて近くの布団に置いた

「…ほえ？」

奏は首を傾げながらこっちを見ていた

僕はそのまま階段を昇り二階の部屋へ移動した

ちなみにこれは準備の時に改造してもらったんだ

「僕はここで勉強でもやるかな」

システムデスクに教科書や参考書を置いた

横にはさっき入れた紅茶を置く

「いかにもって感じだよね」

こういうのやって見たかったんだよね

『明君』

下から奏の音が聞こえた

ちなみに雄二達にも毛布をかけて隠した

奏は何か用でもあるのかな？

「どうしたの奏？」

二階から下を見下ろしながら奏を呼んだ

「……！！」

奏は僕に気づくと素早く階段を上がってきた

え！え……！！何？何？

「明君！明君！」

奏は僕に抱きつくと同時に頬擦りをしながら胸を押し付けてくる

うぐ…理性がピンチだ

「…一人にしないで…」

奏は泣きそうな顔で見つめてきた

「うめん…」

うづ…また奏を悲しませちゃったよ

「勉強…やるの？」

「うん…そろそろ始めなきゃね」

奏はにっこりと笑いながら頬擦りをする

うづ…気持ちいい…

「じゃあ…私達とは敵になりますね」

あ？

ちょっと待った

「まさか…奏…」

「はい 翔子ちゃんと一緒に参加しますよ」

何かが崩れかけた…ま、まあいいさ…霧島さんと奏は似た面がある
し…仲いいし

じゃ、じゃあ僕は綾人と出ようかな

「頑張つてね明君…坂本君と一緒にね」

「え…？」

何かが崩れた

「雄二いいいい!!」

「明久あああ!!」

僕は二階から飛び降り、雄二は上半身が裸の姿で毛布から飛び出た

「何でお前となんじゃあああ!!」

拳と拳がぶつかり合いお互いに吹き飛ばされた

いつの間にこんな力を…

「ふざけるな糞雄二!!絶対負け確定じゃないか!!」

「それはこっちのセリフだボケエ！」

互いに睨み合い再び拳を構える

最悪だ…よりもよってこいつなんかと!!

「くたばれえええ！」

この後…僕は奏に捕まりどうなったのかは想像に任せるよ

第三十五問：夜が明けたら二日目の始まり！

吉井明久は家に帰って勉強していた

「はあ…あんな所にいたら真面目に勉強できないよ」

今は21時…学園には僕、奏と雄二、霧島さん以外が泊まっている

「明日は…試験召喚大会…絶対勝たなきゃ」

とりあえず…一番得意な日本史から始めるかな

なんて感じで勉強を始めていたら…

「明君…タオルどこですか？」

「のあああ！」

風呂の方からでてきた奏を見て僕は驚いた

いや…だ、だ、だっては、裸だし

「？。どうしました？」

ああ！鈍感だなあ！

「た、タオルならあっちにあるから…早く服着てよ！」

「へ？」

奏はじっと自分を見ていた

僕は顔を隠すけど隙間から覗いている

し、仕方ないじゃないか！僕だって年頃なんだし

「ひあああ！」

奏は真っ赤になりながらどたどたと走って行った

はは…全く…

「さてと集中集中…」

奏の胸…大きいなあ

「!?!?何考えてるんだ僕は!」

真っ赤になりながらも教科書に向かう

こうして僕らの夜は更けていくのだった

そして二日目…

僕らは今、Aクラス…おっとFクラスの教室に居る

「試験大会は点数補充しとかなきゃ話しにならないわよ」

僕らは教卓の周りに集まり話していた

「わかってるよ美波」

「確かにな…で、ちゃんとやってきたのか明久」

「勿論だよ綾人！日本史を重点的にやってきたさ！」

その言葉にみんなが笑った

「頑張ったな明久…」

雄二の言葉と同時に紙を貰った

「何これ？」

「今日の大会じゃが…日本史はでないぞい」

ええええ！

「残念だったな明久」

「努力は誉めてあげるねん！」

「マジでええ…？聞いてないよおおおおおおい…」

Fクラス参加ペア

坂本、吉井

千原、綾人

e t c…

こうして…試験召喚大会の幕が開けた

『これより試験召喚大会を始める』

『清涼祭二日目…メインイベントが始まりました…高橋先生いかがですか？』

「実に見応えがあります…生徒達が勉強してきた成果が問われる時ですね」

「試験召喚大会一回戦！」

西村先生のアナウンスと共に会場は湧き上がる

「青コーナー！二年Fクラス！坂本雄二、吉井明久！」

「よっしゃあ！しまっていくぜ！」

ステージに立ち雄二は気合い満々だ

けど僕は

「うん…」

やる気が消えかけてるよ

「なんだ明久！当てがはずれたくらいで落ちむな！」

そりゃそうだけど…補充試験…正直手応えが

『赤コーナー！！』

対戦相手はEクラスか…

「最初の相手はEクラスの連中だ。油断しなければ楽勝だ」

「うん。彼女達とは一度やりあってるしね」

よし!!頑張るぞ!

気合いを入れていたら対戦相手がいきなり変わった

『二年Bクラス!本多律子、湖野原真由美!』

うええ!?

「ちょっと待ってよ!いきなりBクラス?」

Eクラスだったはずなのに

「ええ…すぐに終わらせるわよ律子」

くっ…まさかBクラスとか…苦しいな

「ちっ…とんだハプニングだな」

「どっつする雄二？」

あいつはニヤリと笑って足をドカッと置いた

「勿論！受けて立つ！」

『高橋先生…この試合はいかがですか？』

『FクラスとBクラスとでは戦力が違います…まあ最初ですしカー
ドも悪いでしょう』

うっ…僕らが負けるのって確実なんだ

『一回戦始め！』

第三十六問：女子には優しくね！

『対戦科目：数学！始め！』

いよいよ始まりました：私は客席から二人を見守っています

『『サモン！』』

相手の：律子さんと真由美さんの召喚獣はいかにもかわいらしいです

Bクラス 本多律子

数学 175

Bクラス 湖野原真由美

数学 165

流石Bクラスです…明君達がどう戦つか楽しみですね

『流石Bクラス…だがな!』

雄二君はニヤリと笑うとキーワードを叫びました

『サモン!』

フィールドの下から魔法陣が現れ雄二君の召喚獣が現れました

こちらもかわいらしいです

Fクラス 坂本雄二

数学 342

『ゆ、雄二！？いつの間にこんな点数を！？』

これは凄いです…

「…流石雄二」

「はわっ！翔子ちゃん！」

い、いつの間に…

「嘘っ…本当にFクラスなの？」

相手が驚く中二人は会話をしていました

『驚くことはないぞ明久。俺は元々数学が得意だからな』

『そうだったね…でも何で泣いてるのさ』

『…気にするな。世の中知らなくていいことがあるんだよ』

『…雄二…』

明君が呆れたような顔をしながら雄二君を見ていました

何があったのでしょうか

『とりあえず一蓮托生だ。無様な姿見せんよ明久！』

『わかってる！僕だって一生懸命頑張ったんだ…』

明君はバツと手を挙げてキーワードを言いました

『サモン！』

ポンという音と共に明君の可愛い召喚獣が現れました

明君の勉強成果は…どれほどでしょうか

楽しみです

Fクラス 吉井明久

数学 63

「え…えと…あれ？」

『相変わらず変わらねえなあ』

『仕方ないだろ！』

明君…ドンマイです

「うっ…私まで恥ずかしいです…」

翔子ちゃんがそっと頭を撫でてくれました

『律子！』

『真由美！』

『『いくわよ!』』

ぼーとしていたらいつのまにか始まっていた

『へえ…息はあつてるみたいだね』

『女の仲良じいっことしては良くできてやがる』

『…!』』

今の言葉は流石に酷いですよ明君

『じゃあ僕らは本当のコンビネーションを見せてあげるよ!』

『そうだな!』

何か…嫌な予感が

『雄二！』

『明久！』

『『後は任せた！』』

やっぱりですか…息がピッタリですね…

『同時に避けたら意味がないだろ！！』

『こっちのセリフだボケ！』

あつ…争ってる場合じゃ

対戦相手の方も呆れてますよ

私は見るのが恥ずかしくなってしまうらう…さらに最悪な事態になっていました

『 …… 』

そこには二人の召喚獣をリンチする明君と雄二君の召喚獣が…

もはや悪魔です…

『 あまり好ましくくないですね…教師側としては二人には負けてほしいです』

ああ…福原先生まで

女子の皆さんから赤いオーラが…見えるのは気のせいではないです
よね

「……………流石に私も恥ずかしい」

「翔子ちゃん……………」

『ゆ、雄……………なんかみんな怒ってない？』

『……………』

二人の召喚獣はボカスカと相手の召喚獣をまるでいたぶるかのよう
に点数を少しずつ減らしていきます

『『つづ……』』

…対戦相手の方が可愛そうです

『ちよっ！違うんだ！』

『……………ぐ』

ボンという音と共に召喚獣が消えて勝負がつきました

Fクラス 坂本雄二

数学 270

Fクラス 吉井明久
数学 53

Bクラス 本多律子
数学 0

Bクラス 湖野原真由美

数学 0

『…ああ…』

『……………』

『勝者！坂本、吉井ペア！』

『あんなのに負けた…』

『悔しい！』

その言葉と共に女子の方が全員立ち上がって罵倒を始めました

「明君…流石に私も…」

「……………雄二…」

『『…』』

第三十七問：VS須川？メインは根本戦！

次々と一回戦が行われ敗れたチームは消えていった

『…へっ。俺らの勝ちだな』

『見たか一麻？俺の召喚獣かつこいいだろ！』

綾人、一麻チームも一回戦を余裕で通過したのだった

対戦科目は数学

一麻は250、綾人は280

相手はCクラスのテニス部のペアだったが余裕で勝ったのだった

Fクラスのメンバーは5名出ている

勿論みんな一回戦は突破したのだった

『赤コーナー！坂本雄二！吉井明久！』

『青コーナー！二年Fクラス！須川亮！中川俊平！』

「ええ！？須川君と中川君！」

僕らの目の前には黒いオーラを纏う二人がいた

「面倒な奴らと当たってしまったか」

雄二は苦い顔をしながら二人を睨んだ

「吉井…坂本…許さねえ」

「お前らだけ…」

二人は一体何に対して怒っているのだろう

まさか！僕らが大会に出ることが許せなかったとか

「お前らだけ吉井さんに甘えて貰いやがって」

「え…」

「許さねえ…霧島に膝枕だと…？」

「…ぐ」

尋常ではない程の殺気が…まさか…いつら僕らを

「吉井…坂本…ここで貴様らを潰してやる」

「ひひひひ…」

うわあ…もう気持ち悪いとしかいいようがない

「しょうがねえ…やるぞ明久」

「そつだね」

前から思ってたけどそんなに羨ましいならさ...

『『サモン!』』

キーワードにより僕らの召喚獣が現れた

そして後から点数が表示された

対戦科目は化学!

Fクラス 吉井明久
化学 98

Fクラス 坂本雄二
化学 116

Fクラス 須川亮

化学 5
4

Fクラス 中川俊平
化学 3
4

そんなに羨ましいなら……まずはその性格から

「直せやああ!」「」

瞬間、僕は須川君の召喚獣を真っ二つに

雄二は中川君の召喚獣に右ストレートを決めた

「「え」「」

二人はいきなりのもので呆気にとられていた

Fクラス 吉井明久
化学 98

Fクラス 坂本雄二
化学 116

Fクラス 二人組
化学 0

『勝者！坂本、吉井ペア！』

「嘘だああああ！？」

「せっかくのチャンスがああ」

二人は崩れ落ちていった

まあ自業自得だしね

「たくっ…勝手な連中だ」

「おかげでみんなからの視線が…」

『 …… / / 』

何はともあれ二回戦もクリアだね！

一麻 s i d e

「さて…次はお前らか」

相手は根本に見知らない女性か

「一麻に綾人か…面白い」

気安く名前で呼ぶな

明久の言った通りなんか気持ち悪い

「なあ…根本って昔は酷い奴だったんだよな？」

「ああ…カンニグやら人を騙すやら、学園のルールを守らないやらいろいろだ」

「なるほどな…原因はあの女の子か」

綾人はニヤリと笑いながら何かを考えていた

「どうした綾人？」

「別に…何でもないさ」

『対戦科目古典！始め！』

相変わらず鉄人のボイスは恐ろしいな

『『サモン!』』

キーワードを唱え召喚獣が現れた

Fクラス 神薙綾人

古典 234

Fクラス 千原一麻

古典 260

Bクラス 根本恭二

古典 290

Bクラス 稲嶺真穂

古典 280

点数的には五分五分か

綾人のことも考えると…

「よし！綾人！根本は任せろ！」

「ああ。わかった」

稲嶺って人の召喚獣はククリ刀が武器か

面白いな！

『よっしゃー！変身ー！』

腕輪をかざしキーワードを唱える

さあ…頼むぞ！

Fクラス 千原一麻

古典 680

「よっしゃああ！」

「な、何！？」

「…凄い…！？恭二君！」

俺は灼熱パンチで根本を仕留めようとしたが稲嶺の召喚獣に防がれた

けど…

「あ…しまった」

灼熱パンチはククリ刀を破壊して稲嶺の召喚獣を撃破した

「綾人…後頼んだ」

「は！？って何落ち込んでんだ！」

「やばい…里穂に…」

「大丈夫か真穂」

「ごめんなさい恭二君。負けちゃった」

「大丈夫だ。俺に任せろ！」

振り返ってみると激しい殴り合いをしている二人の召喚獣

「すげえな綾人…操作慣れてないだろ？」

「ああ。けど怪人にイメージすれば楽勝さ」

「ぐ…強いな神薙」

「そりゃどうも！」

綾人の召喚獣…ナイトブレイザーが根本の召喚獣を切り裂いた

かつこいいい！

Fクラス 神薙綾人

古典 65

Bクラス 根本恭二

古典 0

『勝者！神薙、千原ペア！』

よっしゃ！二回戦突破！

根本は俯いていたが稲嶺つて奴が何かを話しすぐに笑顔になった

俺はあの根本の方がいいかな…

欲を言えば髪をどうにかしてくれたら最高なんだけどなあ

「神薙！千原！次は負けないからな！」

何故か…その言葉が嬉しくて

「ああ！」

「勿論だ！」

俺達は根本に笑い返していた

『一麻…』

『はい…』

『女の子には優しくしてって言ったよね？』

『はい…』

『…もう…今回は許してあげるけど…』

『ああ…なるほど…お前俺と出れなかったのが悔し…』

『あれ？一麻…どうしたのさ。頬が赤いよ』

『痛てて…気にするな明久。ちょっと転けただけだ』

おまけ

『明君お疲れ様です』

『ありがとうございます。奏はどじっ?』

『はい。順調ですよ』

『それは良かったね。あれ?奏…髪形変えた?』

『変えたというよりはおろしただけですよ…』

『へ、へえ…//』

『明君?』

『(目を逸らす) //』

『……』

『ふう……あれ？奏は何で僕の膝の上に！？』

『……（ムス）』

『あれ？奏？奏』

『明兄……頑張ってください』

第三十八問：強敵は馬鹿？

「順調に勝ち進んでるね」

「ああ…だが次はわからねえ」

雄二は眉を寄せながら呟いた

次って誰なんだろう…

「俺達も順調だぜ…けどなんか不自然だ」

一麻は何か考えた後に雄二のところへ歩いて行った

「確かに…対戦カードがなんか変だよね」

「ああ…俺達は根本と当たった」

綾人はアリスを撫でながら考えごとをしている

「姫路さん、美波は順調？」

「はい！」

「楽勝よ！」

僕は応援に来てくれた葉月ちゃんを撫でながら笑った

おっと二人にあの話を話さないよ

「姫路さん、美波…ちょっと話「明久行くぞ」」

見事に雄二に遮られた

わざとでは無いと思うけど何故だか釈然としない

「明久君。」

「話して…?」

二人はずいっと詰め寄ってくる! ちょっと…怖いよ!

「あ、後で話すから!」

そう言って僕は逃げ出すように教室から出て雄二を追いかけた

「明君…」

場所は変わって大会の会場

三回戦ということもあり盛り上がってきている

『青コーナー！二年Fクラス坂本雄二！吉井明久！』

相変わらずドスのきいた鉄人のボイスが響き渡る

『赤コーナー！』

おっと対戦者発表だ！一体誰かなあ？

『二年Fクラス！吉井美代！二年Aクラスすずむらひなみ鈴村直也！』

え…ええ!?

「やっぱりな」

「やっぱりなじやないよ雄二!初耳だよ!」

というよりあの男の人誰!?

「あつ…明兄…」

美代はニコツと笑っているけど…

「君…まさか美代の」

「美代の友達の鈴村だ！よろしくな明久、雄二！」

友達…か。なんだ良かった良かった…

鈴村君は遊○王の十代（四期）に似ていて…性格も明るくすぐに馴染めそうだ

『対戦科目…保健体育！始め！』

「おっしゃ！いくぜ！サモン！」

鈴村君はキーワードを唱える

姿は…いかにもマスクドヒーローだ

「キタアアアア！かつこいいだろ！？」

鈴村君は自分の召喚獣に見惚れていた

「ほお…面白そうな奴だ。」

雄二は珍しく人を見下すような目じゃなかった

「直也君…相変わらずなんですから…サモン！」

美代は微笑みながらキーワードを唱える

召喚獣が現れ…その姿は東方の早苗に鎧が武装されている

Fクラス 吉井美代
保健体育 260

Aクラス 鈴村直也
保健体育 98

「え…？」

「なんだあの点数」

僕は鈴村君の点を見て啞然とした

いやだってAクラスだよな？

それなのになんであの点数

「いや、またやっちゃったぜ…。だからテストは苦手なんだよなあ」

「もう。直也君…また模擬試験ばかりですか？」

「悪い悪い…だって楽しくてさ！」

美代は困った顔になりながらも鈴村君と楽しそうに話していた

何だろう…この複雑な気持ちは

「お前…本当にAクラスか？」

「ん？俺さ…本当はFクラスが良かったんだけど誉められちゃって」

鈴村君はハハハと笑いながらすぐに表情を変えた

「さあ！ここからは真剣勝負だ！」

「…そうだね」

「いくぞ明久」

『『サモン！』』

僕らはキーワードを叫び召喚獣を呼び出した

「おお！かつこいいな！お前らの召喚獣！」

「はは……そうかな？」

「チンピラ装備だけだな」

Fクラス 吉井明久
保健体育 130

Fクラス 坂本雄二
保健体育 168

「相変わらずだな明久…」

「うるさい！雄二こそ頑張ったんじゃないの？」

雄二は真面目にそして真っ直ぐとこう言い放った

「いっぺんに全部は無理だ！」

「この馬鹿ああ！」

そんなくだらないやりとりを見ていた鈴村君が口を開いた

「おいおい…点数つてのただの結果だろ？結局は楽しむか楽しまな
いかで勝負がつくんだぜ！」

ニカツと笑う鈴村君…そうだよな

点数だけが全てじゃないよね！

「いいこと言っじゃねえか！」

「へへっ！じゃあそろそろいくぜ！」

鈴村君は美代に合図をすると召喚獣を構えさせた

「足引っ張るなよ明久」

「雄二こそ。すぐに消えないでよねっ？」

お互いにニツと笑い召喚獣を動かす

「いくぜ！勝負だ！」

鈴村君の召喚獣は僕の方へ向かってくる

「雄二！美代は頼んだ！」

「了解だ！」

雄二は美代の召喚獣に素早く攻撃を仕掛けた

「行くぞ鈴村君！」

電光石火のように素早く召喚獣を操作する

「おお…すげえ！なら俺も！」

「そこだあ！」

木刀で背中を狙ったはずなのに交わされた

「いくぜ！くらえ！」

「やばっ！」

真横からいきなり蹴りが飛んできたのをギリギリで交わした

「次はこっちの番だ！」

木刀で足をなぎはらい上から突き刺す

「おっ！やべえ！」

なっ！交わされた！？

「そこだ！」

「ぐわ！」

横腹を殴られフィードバックが伝わった

早い！？

「大丈夫か！？」

鈴村君は心配そうに声を掛けてくれた

なんて優しい人なんだ

「大丈夫！つさ！」

スキありだ！左足を木刀で叩いた

「うおっ！」

また避けられた！？

「へへ…やるなあ 流石は学園一の操作能力を持つ生徒。」

僕の攻撃は全て避けられた

嘘！？確実に仕留められるはずなのに

「じゃあ行くぜ！」

「うわあ！」

まともに殴られ、後ずさる

強い…

Fクラス 吉井明久
保健体育 65

Aクラス 鈴木直也
保健体育 98

「うーん…やっぱりバトルは公平だよなあ」

鈴木君は腕に何かをつけた

まさか腕輪？

『行くぜ！デステイニー！（運命！）』

キーワードを唱えた瞬間に鈴村君の召喚獣が消えた

「え…？」

「うおっ！マジか！！2000も消費すんのかよ！」

鈴村君はわざとらしく残念な顔をしていた

「鈴村君…なんで？」

「ん？そりゃフィードバックある奴とやっても楽しくねーからな」

ニカッと笑いながら鈴村君は美代を応援していた

わざと…負けてくれたんだ

彼の優しさが嬉しい反面悔しい

確実にあの勝負負けていたんだ…

鈴村君…操作能力がとんでもないよ

彼は試験召喚戦争を楽しんでいるんだ

僕らと違って…

「喰らえ!!」

「きゃああ!!」

雄二の召喚獣が美代の召喚獣を殴り倒した

Fクラス 坂本雄二
保健体育 1

Fクラス 吉井美代
保健体育 0

「危ねえ…本当に駄目かと思ったぞ」

雄二は額の汗を拭いながら笑った

「負けちゃいましたか…」

「気にすんなよ。楽しくやれたらそれで十分だ」

鈴村君はそう言って美代に微笑んだ

「はい…。そうですね!」

「へへ…ありがとな二人共!またやろうぜ!」

鈴村君はそう言って会場から出て行った

「Aクラスか…勿体無いな」

雄二はぶつぶつと呟いていた

「美代、鈴村君って…」

「はい…格好いいですよね／＼」

美代は頬を赤くしながら俯いていた

鈴村君ならいいかもしれないかな

そんなことを思いつつ僕は妹を鈴村君を追いかけるように言った所、
美代はテンパっていた

はは…早く進展するといいいね美代

第三十九問：常夏は任せる

「さて、もう逃げられないぜ先輩」

三回戦：俺達の相手は常夏コンビだ

「ちょっと待てや！対戦カードがおかしいんじゃないか！？」

「俺達は決勝まで行くはずだ！」

やっぱりイカサマかよ

「やっぱりあいつらが原因か…」

綾人はギラリと睨みつけた

「ああ…だから昨日のうちに細工させてもらったのさ」

俺達と確実に当たるようにな！

「てめえら反則だぞ！」

「先輩達の方がせこいじゃないですか？なんなら棄権しますか？」

ニヤリと笑いながら殺意たつぷりの綾人を見た

「うるせえ！こんな試合無効だ！」

「無理だな。なんせこのことについては学園長に言ってあんだよ」

常夏コンビは追い詰められたように後ずさる

「さて、そろそろやるつぜ先輩？俺はフィードバックがあるから殴り放題だぜ？」

あえて挑発する。常夏コンビはギリギリと歯を噛み締めていた

「こーなったらズタズタにしてやる！」

「そして次の吉井と霧島も「はい残念」」

俺と綾人の目的はあんた達を潰すことだ！

『対戦科目英語！始め！』

「サモン！」

常夏コンビは息のあった動きで召喚獣を呼び出した

Aクラス 夏川俊平

英語 354

Aクラス 常村勇作

英語 452

「ははは！どうだ！お前らじゃめったに拝めない点数だぞ！」

「ぎゃはは！おめーらにこんな点数取れるか！？ああ！？」

俺達を見下すように笑う常夏コンビ

「なあ…一麻」

「ん？」

綾人はゆっくりと殺意を込めたように喋る

「アリスをやられていらいらしてるんだが」

「そんな俺も同じだ」

「どうした？んん？」

「びびって声も出ねえか！！」

会場はシーンと静まり返っている

そりゃそうだ…あんな屑に誰が歓声するかよ

「それにしてもFクラスは酷かったよな！」

「言えてる言えてる！学園一の馬鹿がいる時点でおかしよな！」

夏川だっけか？お前…

「それに学園一の美女と話してる時点でおかしいっつーの！」

俺達は拳を握りしめた

「綾人」

「わかってる」

静かに腕を掲げる

「お前らに明久を…親友を馬鹿にする権利なんかないんだよ！！
サモン！」

俺達の怒りを現すかのように雷が鳴りフィールドに落ちた

「な、なんだ！？」

雷を払いのけ俺達の召喚獣が姿を現した

Fクラス 千原一麻

英語 700

Fクラス 神薙綾人

英語 690

俺達の召喚獣はヒーローの姿だ

だが雷をまとっている…

「ろ…600!?!?」

「なんだ!この点数は!」

残念だったな常夏コンビ

途端に会場から歓声上がる

みんなは俺達の方を認めてくれてんのさ常夏コンビ

「覚悟しろよ屑共」

「親友を馬鹿にされた怒りは重いぜ」

ギリリと睨みつけ召喚獣を走らせた

「ちよ、調子に乗るんじゃないねえ！」

常夏コンビは召喚獣を突っ込ませてきた

「明久の痛みを受けてみる！『ブレイク！』」

綾人はキーワードを叫び青い腕輪をかざした

「な、なんだ!？」

「痛感の腕輪：相手の召喚獣を攻撃した時、観察処分者と同じフィードバックを与える」

Fクラス 神薙綾人

英語 590

「な、なんだと!」

「ふざけたまねしやがって！」

ふざけたまね？お前の方がふざけてるだろうが

明久と奏の過去を知らないお前らにあいつを馬鹿にする権利なんかないんだよ！

「いくぜ綾人」

「ああ……」

夏川の召喚獣の腕を捕まえギリギリと締める

「ぐああ！腕が……！」

「夏川！畜生が！！」

綾人の召喚獣…ナイトブレイザーは武器を掴み常村の召喚獣を殴る

「あぐあ！！」

わかったか…これがあいつが背負ってる痛みだ！

「これで…」

「最後だ！！」

俺達の召喚獣は雷を帯びた腕を構える

『『怒りの鉄拳!』』

同時に相手の目の前に行き力の限り叩き込む

常夏コンビの召喚獣は雷で痺れ、拳の一撃で対戦相手が表示されているプレートに叩きつけられた

「「みぎゃあああ!」」

常夏コンビは叫びながらぶっ倒れた

『勝者!千原、神薙ペア!』

沸き起こる歓声の中俺達は拳を打ち合い笑いあった

「怒ったら疲れたなあ」

「そうだな…俺達はここで終わりにするか」

ニカツと微笑みながら俺達は会場を出て行った

その後、棄権することを告げてから常夏コンビをもう一回締めて学園長に差し出した

これで一件落着だな！

明久…雄二。勝てよ！

第四十問：決勝戦の始まり…リア充め（前書き）

四十話更新です！今回はちょいと甘めです（笑）

第四十問：決勝戦の始まり…リア充め

四回戦…僕らは姫路さん、美波と当たり…辛くも勝利したんだけど

「何で僕だけこんな目に…」

あの後、姫路さんと美波に話があると言った瞬間…クラスメイトに捕まり…

いつもなら勝てるんだけど…卑怯なことに奴らはスタンガンを持っていて…

『死ね吉井!』

須川君の攻撃で気絶…そして気づいたらこんなにボロボロにされていた

「早く起きろ馬鹿」

「雄二！君には慰めつてもものがないの！？」

雄二は静かに肩に手を置いた

「あるわけないだろ明久」

「殺す！この悪友がああ！」

雄二は無視するかのように話始めた

「明久…決勝は…わかってるよな」

常夏は二人の活躍で成敗された…となると

「わかってる…勿論勝つよ雄二！」

「当たり前だ！」

ガツンと拳をぶつけ合い気合いを入れ直した

その頃Fクラスでは

「ダ～リーン～」

アリスは綾人に甘えるかのように豊満な胸を押し付ける

「なんだアリス？」

綾人は笑いながらアリスを撫でた

「疲れたのだー」

アリスはべったりと綾人にひつつきながら顔を肩にうずめた

「今日は何もしてないだろ？」

「むう…名前を考えたねん」

アリスはいつものふざけ口調で話す

アリスがふざけた口調で話す時は本音を語っているのだ

「わかったわかった。お疲れ様」

綾人はアリスの頬に自分の唇を押し付けた

「……………」

アリスは幸せそうな顔をしながら綾人の頬に自身の唇を押し付ける

「話があるんだが入りづらいな」

「いいなあ……」

里穂は二人の光景を羨ましそうに見ていた

隣には一麻が啞然としながらも里穂を気にかけていた

「…里穂」

「何？—…！？／／」

すっと唇を遠ざける

「甘えたいなら素直に甘えてこいよ。俺だって結構寂しいんだからな」

一麻の言葉に里穂は驚いてはいたが次第に頬を赤く染めコクンと頷いた

「…よし。これで俺も楽になる」

一麻は里穂を引き寄せた

里穂は一麻の首に腕を回す

「ふふ…私って綺麗かな？」

「当たり前のこと言っなよ。」

再び互いの唇が重なり合った

『まもなく決勝戦が始まります。是非とも会場にお越しください』

アナウンスが静かに流れた

明久 s i d e

いよいよだ…思えば今日一日いろいろとあったなあ…

でも今日はあまり…奏と話してない気がする

「はあ…」

「どうした明久？不細工面が余計酷くなってるぞ」

「余計なお世話だよ！どこから見ても美少年じゃないか！」

雄二に詰め寄り反論する。全くいつもいつも…この悪友は

「悪かったから。拳を構えるな明久」

『それでは決勝戦開幕です！』

ちっ命拾いしたな雄二

「いくぞ明久！…」

「ああ！僕らの力見せてやる！」

ガツと階段を踏み込む僕ら…

必ず勝つ！例え相手が…

『皆さん！大きな拍手をお願いします！なんと決勝戦まで勝ち上が

ったのは二年Fクラスの方達です！」

このアナウンスは…アリス！？

『青コーナー！吉井明久！坂本雄二！』

おっと集中！集中！

「「しゃああ！」」

ステージに上がった時大きな拍手が聞こえてきた

凄い…人がこんなに沢山

『赤コーナー！吉井奏！霧島翔子！』

さらに沸き起こる歓声

花びらが舞い二人が登場した

ちなみに僕らは煙だった

「やっぱり…奏達だったね」

「ああ…」

奏は周りを見てから恥ずかしそうに俯く

「大丈夫だよ奏！リラックスリラックス」

「明君…」

か、可愛い…奏はにこりと笑いながら頬を赤くしている

「……雄二……」

「やっぱり上がってきたか翔子…流石だな」

「…雄二程じゃない」

雄二は珍しく顔を赤くしながら頭の後ろをかいた

「明君…行きますよ?」

奏はいまだに頬を赤くしながら微笑んだ

「う、うん！」

危な…危つく鼻血が溢れる所だったよ

『決勝戦…科目日本史！』

え！？日本史はないはずじゃ

雄二を見るとニヤリと笑っていた

「さあ 存分にやるぞ明久」

僕の答えは決まっている

「勿論さ！」

僕らは召喚獣を呼んだ

『『サモン！』』

相変わらずの召喚獣：だけど点数は変わる！

奏や霧島さんは何回見ても可愛いなあ

Fクラス 吉井明久
日本史 421

Fクラス 坂本雄二
日本史 304

Fクラス 霧島翔子
日本史 352

Fクラス 吉井奏
日本史 320

『『才才!!』』

周りからは拍手と声援が…

日本史得意で良かったなあ

「行きますよ明君？」

「……雄……勝負！」

「「受けて立つ！」」

僕らはカッコ良く構えた

けどまさかあんなことになるなんて

決勝戦なのに

奏と霧島さんが召喚獣を動かしてきた

「やるぞ明久！」

「わかってるよ！勝負だ奏！」

奏と戦うなんて初めてだ…きっとかなり強いだろうけど負けないぞ！

『明君』

『奏』

「「ほえ？」」

意志とは関係なく召喚獣は勝手に攻撃をやめた

「ちよっ！っ！っ！」

柔らかい感触が…何これ！

『明君…』

『くすぐつたいよ奏』

喋った！？召喚獣が喋ったんだけどおお

「…可愛い…／／」

奏！？君は何故平気でみてるの！？

召喚獣が勝手に頬ずりしてるんだよ！？

「ぬっわ」

うっ…フィードバックで感触が…ああ

「明久！？何やってんだ！」

「雄二！実は召喚獣が…」

うん？ちょっと待て。なんで雄二の召喚獣は霧島さんの召喚獣に胸を当てられてるのさ…

『おーと！シヨウコリンがユージにあついラブラブ攻撃だあ！』

「ふざけんな！てめ…」

雄二いい！？何やってるのさ…！

霧島さんの召喚獣に口づする雄二の召喚獣

点が減ってる…何で？

「……雄二大胆／＼」

「違うぞ翔子！だんじて違う！」

そんなこと言っている間にも霧島さんの点数が減っていく

「な、なんなんだこれは！？」

会場を見渡すとみんな顔を真っ赤にしていたりにやけてたり

中では異端審問の準備をしてたり

「明君…恥ずかしいです／＼」

「えっ？うわあああああ！」

僕は自分の召喚獣を見ると奏の召喚獣にキスをしていた

奏の点数がみるみる減っていく

「……………／＼／」

フィードバックが…奏の唇が…

「あ、明君！？」

ブシャアアアアと鼻血が噴出して僕と雄二は倒れた

「(ブシャアアアア)」

他にも鼻血を出していた奴がいた…

「明君！大丈夫ですか！？」

「……雄二！」

なんだろう…まるで二人がこっちに走ってくるようだ

Fクラス 吉井奏
日本史 0

Fクラス 霧島翔子
日本史 0

『しよ、勝者は気絶したアッキー！ユージペアアア！』

なんだ？周りから凄い歓声が…

でも今の僕らには関係なく…

僕らは血の海に沈んでいった

「明君！明君！」

「……雄二！」

「誰か輸血パックを！」

「ムツツリーニ君！」

『明君』

『奏』

「召喚獣が消えてないぞ！」

「ちよっ……これ以上はやばいぞ！」

あはは…お花畑が見えるよ

第四十一話…いつだって…甘いのだ

『只今から表彰式を始めます』

皆さんが見守る中、明君と坂本君が表彰を受けていました

さっきの試合はちょっと納得行かない部分もありますが…きゃっ／＼

「……………奏？」

「ひゃうわー！しょ、翔子ちゃん！」

ま、まさか読まれてたのでしょうか…

「……………奏も妄想してた？」

「へっ？まさか翔子ちゃんも…／＼」

さっきのことは本当に恥ずかしいですが…何故か嬉しいです

「雄二は私を愛してくれてるノノ」

翔子ちゃんは本当に一途ですね…素敵です

「違うからな翔子！俺は」

「はいはい。照れなくていいから」

明君は雄二君を捕まえて再び学園長からお祝いの言葉を貰っていました

周りからは沢山の拍手が聞こえて…なんだか私まで誇らしい気分です

「雄二は素直じゃない…」

「ふふ…そうですね…」

明君も雄二君ももっと甘えてきたらいいんですが…

「おめでとう。これは優勝した生徒に送る腕輪さね。坂本は黒金の腕輪、吉井は白金の腕輪だよ。詳しくは説明書を読みな」

「「ありがとうございます」

明君と雄二君は腕輪と賞状を持って帰ってきました

「お疲れ様です」

「二人共お疲れ様」

ちなみにここは会場の出口です。私達は照れながら歩く二人に腕を組みながら会場を後にしました

明久side

僕は教室に戻って昨日の続きでメイド喫茶の仕事をしていた

昨日は一旦は片付けたけど、それはあくまで泊まる為にしたことだ

朝一にみんなが来る前にまた元に戻したから問題なく再開している

『いらっしやいませ！！』

おっとお客さんだ！

さあ 頑張っ て続きを

「明久…。雄二」

「何一麻？」

一麻は何かを渡した後にかっと笑った

「行ってこいよ！」

「え？」

よく見ると須川君や美代に姫路さんや美波と今日、大会に出たメン
バーが集まっていた

「まあみんな頑張ったから…稼いだ金使って楽しんでこいよ」

「そんな…みんなに悪いよ。それに綾人達だって」

「大丈夫だ。俺はもう回ったし。稼いだ金額はかなりだからな。そ
れにアリス達の手伝いしないとならないからな」

そう言った後に二人は頑張れよと言って接客に戻って行った

「どっつする？雄二…」

振り向くと雄二は既に消えていた

「待て翔子！そんなに急がなくていいんだぞ！」

雄二は霧島さんに引つ張られながら教室から出る所だった

「翔子ちゃん！無理やりは駄目ですよ！」

奏はすかさず二人の間に入って何かを言っていた

「…行く。雄二」

「お、おう／＼」

腕組みをして、いかにもお似合いな二人は教室から出て行った

「じゃあ…僕も」

「「明久君！（アキ！）」」

「ぬわあ！」

二人がいきなり詰め寄ってきた…えと…僕何かしたかな？

「話しがあるんですよね？」

「せっかくだから回るついでに」

ああ…そういうことか…二人は僕がなかなか話さないからイライラしてるんだ

長生きする為にも話さないかね

「奏。ちよつと廊下に出るから待ってて」

「えっ？はい…」

僕は二人を連れて廊下に出た

みんなの視線が凄く恐ろしかったよ

『で、話して何よアキ?』

『うん…今から話すよ。それはとても大事な大事な話なんだ。』

『…まさか…』

二人が期待する中、僕は頭を下げた

『ごめんね二人共。二人の気持ちはありがたいけど…僕には奏がいるから』

『え?』

二人は呆気にとられたような顔をしていた

『明久君は私達が明久君のことが好きだったことを…』

『うん。わかってたよ…』

『なんで奏なの？だって私達みんな中学生の頃から』

『違うよ美波。奏は…本当に長い付き合いなんだ。言っちゃ悪いけど…ずっと僕は奏が好きだったんだ』

二人の顔が歪んだ…ごめんね僕なんか恋愛を犠牲にしたんだよね…

『二人に話すよ…僕と奏の出会いを…そして僕が奏が大好きな理由を』

ゆっくりとゆっくりと喋る

二人は驚いた顔をしながらも…わかってくれたようだった

『そうだったんですか…』

『ウチ達…そんなことを知らずに…嫉妬して』

『本当にごめん…けど二人にはちゃんとした恋愛をして欲しいんだ。僕じゃなくて…ちゃんとした人に』

二人は本当に悲しい顔をしていたけど…頷いてくれた

『まったくアキったら早く言ってくれないんだから!』

『え?』

『そうです!早く知っていたら奏ちゃんに複雑な気持ちをさせずにすみましたのに!』

『えええ!?!』

『でもこれですっきりしたわ!アキ!絶対に奏を幸せにしてくださいよ!』

『もし泣かせたら許しませんからね!』

『…ありがとう…美波。姫路さん…二人は本当に魅力的な女の子だからきつといい恋愛ができるよ!』

「あつお疲れ様です明君。」

奏は笑顔で出迎えてくれた

「ほらアキ！ちゃんとエスコートしなさいよ！」

「ちよっ…美波」

美波は僕の腕を奏の腕に絡め、姫路さんは奏の腕を僕の腕に絡めた

「楽しんできてくださいね二人共！」

「ありがとう…瑞希ちゃん」

『吉井…奏様と腕組みだと?』

『許さん…八つ裂きにしてやる!』

『いや、ここはギロチンの刑だ!』

う、うわあ…怖い…みんなからの視線が凄く恐ろしい

「大丈夫よアキ!私達がかいとめるから!ね、瑞希!」

「はい!私達を守ります!」

「二人共…ありがとう」

気づけばお客さんとして来ていた生徒の人達も味方についてくれた

「吉井！いい恋愛しろよ！」

「Dクラスの平賀君！？」

「全く…恋を邪魔しちゃいけないだろ？」

「う、生まれ変わった根本君！？」

「吉井君と吉井さんには指一本触れさせないよ」

「く、久保君まで！」

『な、なんだ貴様ら！』

『邪魔する気が！』

「当たり前だ！俺達は…恋に生きる人間だからな！」

ひ、平賀君…なんて格好良いんだ！

「まっそう言うことだ明久」

「お前らが一番なんだよ」

一麻と綾人が僕らを守るように立ちふさがった

『ひ、怯むな！！相手は少人数だ！』

『八つ裂きにスルヨー！』

『恋に生きる人間だと！？そんな奴ら全員死刑だ！』

『
##%##
』

「少人数だから勝てないと誰が決めたんだ？」

この声は…

「雄二！？」

雄二はすつと腕輪をかざした

『アウェイクン！』

キーワードと同時に召喚フィールドが…！

「そうか…黒金の腕輪は…教師の承認を必要としないのか！」

便利な腕輪を持つてるじゃないか雄二…

「さあ！行くぜ！」

『『サモン！』』

『な、ナニイイ！』

『召喚しやがった！』

『怯むな！！』

「さあ行け明久！」

「うん！本当にありがとう！」

雄二の隣には手を振ってくれている霧島さんがいた

「走るよ奏！」

「へっ？きゃっ」

お姫様抱っこをして教室から出て行く

恥ずかしいけど全力で逃げなきゃ！

『吉井が逃げたぞ！』

「行かせないぜ…須川！」

みんな本当にありがとう…

「でも何でみんな急に」

「……それはこれのせい」

「うわあ！ムツツリーニ！？」

なんでこんな所に

「…護衛役」

「だからといって撮影は…」

ムツツリーニは静かに何かを渡してくれた

「何コレ？」

「…唇流れる『enjoy文月』に出したCD」

「一応聞くけど…」

ムツツリーニは遮って喋った

「…お前が停学の時に流したものの…お前の奏への告白を録画したの

が入っている」

ノアアアアアア！？

「何やって…というよりムッシリーニいたの！？」

凄く恥ずかしい！それでみんな

「…さらに昨日の雰囲気と今日の決勝戦を見て認めたらしい」

「うわああ！最悪じゃあああ！」

昼休みの放送の時、ちょうど奏、美波、姫路さんは急用で休んでたらしい

なんとまあ…奇跡的だよ

「…ちなみに…明奏グッズの売れ行きが凄まじい」

「ちょっと待てムツツリーニ！明奏ってなんだよ！グッズなんか余計に意味がわからないよ！」

ムツツリーニは目を光らせた

嫌な予感

「…公式CP…」

「いつからああ…?」

奏はすやすやと眠っていた…相変わらず可愛いなあ

ムツツリーニは撮影やめい！

『居たぞ吉井だ！！』

「げっ！見つかった…」

ムツツリーニはいつの間にか文具を取り出した

「ここは任せる明久！」

「ムツツリーニ！」

グツと親指を立てるムツツリーニ…

ありがとう…

でも…凄く恥ずかしいよ!!

「明君…大好き…ムニヤ」

きゅっと制服が引っ張られた

奏が可愛い寝息を立てながら眠っている

「／／／…な、なにか食べよう」

清涼祭が終わりをつげ始めている中…僕は…鉄人が作っている人気の焼きそばの屋台へ向かった

第四十二問・清涼祭の終わり…そして（前書き）

次回からは第三期！僕と海水浴とナンパ騒ぎに突入します！

第四十二問・清涼祭の終わり…そして

いろいろな所を周り満喫した僕と奏は教室に帰っていた

鉄人の焼きそばがあんなに美味しいなんて…認めない！

「お客さん居ないね」

ぼそりと呟くと雄二がいつの間にか立っていた

「もうすぐで終わりだからな…片付けをしに行ったんだろっな」

そうか…もう終わりなんだね

どことなく寂しい気持ちもあるけど…楽しかったなあ

この二日…さまざまなことがあって…沢山のことが変わったんだよね

「……写真撮影」

ムツツリーニがカメラを取り出しみんなが一斉に集まった

これもまた良い思い出になったんだね

「……撮影開始」

ムツツリーニがカメラをスタンバイする

僕らは固まって互いの肩に手を乗せた

「…3、2、1」

ムツツリーニはカメラを眺めながらカウントダウンをする

『バカテスト!』』

謎の合い言葉をみんなで喋ってシャッターが自動で切れた

「今日はみんなご苦労だった!」

雄二の言葉と同時に終了のアナウンスが流れた

「みんな打ち上げに行くぞ!」

『オオオー!』』

こうして清涼祭は幕を閉じた。

新たな出会いや…みんなと信頼が深まった…

後でわかったんだけど

ムツツリーニが記念で取った写真なんだけど

僕と雄二が取っ組み合い

一麻と綾人は相変わらずでガールズ達は良い笑顔

何故だか後ろにはFFF団が写っていたらしい

まあ…これも思い出だから大切に飾ろうかな？

如月公園…

そこには僕らFクラス50人が集まっている

空は暗いけど…星が満点で…

大きなシートにみんなが座ってワイワイやっている

とても賑やかで楽しい打ち上げだよ

シートの外では演劇部の二人…秀吉と種山さんが劇をしていた

かなり盛り上がっていて…二人はいかにも楽しそうだ…

「ほら明久…焼けたぞ」

「ありがとう雄二。」

テーブルと椅子を用意して僕らは隅で焼き肉を焼いている

この牛肉…いかにも美味しそうだね

「頂きます!」

ご飯と一緒に口に含む

うーん 濃厚だけど柔らかい牛肉にほかほかのご飯がとても合っていて美味しいよ!

「沢山ありますから…皆さんも食べてくださいね」

『『勿論です！奏様！』』

奏はニコニコとどんどん焼いていく

「……雄二。ピーマン切った」

「おうありがとうな翔子。悪いがちょっと火を強めるの手伝ってくれるか？」

「……全然大丈夫」

相変わらずの二人…やっぱりどこからみても良い夫婦だね

「アリスさんはガツガツ飲むよーん！」

アリスはぐいぐいとオレンジジュースを飲んでいた

凄っ！

「…ふひひ。さあみんなも飲んで飲んで！」

アリスは綾人と一緒にコップにジュースを入れてくれた

「ほら明久…どんどん飲めよ」

綾人はニコニコ笑いながらジュースを渡してきた…なんか違和感が

「うん。ありがとう」

「じゃあ！食べまくるぞ！」

「一麻！？／／」

椅子では甘い空間が展開されていた

「ちよっ…一麻！」

おかしい！なんであの一麻が里穂に積極的に口づけを…

「……／／！？」

わああ！？一麻それ以上は里穂が危ないよ！

『ブシャアアア!』

!?!まさか!

「……………(ボタン)」

「ムツツリーニイイイ!」

「えへへ…ムツツリーニ君たら…相変わらずなんだからあ／＼」

工藤さん!?!君はムツツリーニを殺す気!?!

顔を胸に押し付けられたらムツツリーニは即アウトだよ!?!

「な、何かがおかしい…」

周りを見ると明らかにみんな酔っているみたいだ！

『綾人く。キスしてく／＼』

『甘えん坊だなアリスは…ん』

見てない！何も見てないから！

『秀・吉・君』

『なんじゃ…？…／／！？』

大丈夫！秀吉ならセーフ！

『一麻…は、恥ずかしいよお／＼』

『ヤバい…可愛すぎだ里穂』

アウト…アウトアウト…

『……………雄二い…／＼』

『翔子！…？ふぐあ／＼』

雄二なら当たり前だから大丈夫

『人の邪魔は…』

『駄目れすよ？』

美波と姫路さんは酔って殺意が強化されたFFF団を地に沈めていた

合掌！

「…とうとうより何が原因…あれは…！」

「一つのビンに目がいく…」

過激なオレンジジュース…アウトだあああ！

「お酒だよね…あれ」

「一体誰が…」

「どつしたんですか明兄？」

声が聞こえた方を向くと可愛い妹と鈴村君がいた

「二人共…どうしたのさ？Aクラスの打ち上げに呼ばれたんじゃあ」

鈴村君は頭をかきながら美代を見た

美代は赤くなりながら口を開いた

「優子さんが…その／＼彼氏さんと」

え？どういふこと？

「いやあ…俺も良くわからないけど美代が行かないかって…Fクラスの方が確かに面白いから来てみたんだ」

二人共…なんて運が悪いんだ…

「あつ焼き肉ですか！私手伝いますね」

「ありがとう美代ちゃん」

奏は一人で焼き肉を焼いていた

良かった…奏は飲んでいない

「明久…助け…」

雄二の声は聞こえなかったよね？

「おお！焼き肉か！食べていいか！？」

鈴村君は本当に明るいなだ…いかにも楽しそうな生活を送ってるんだね…きつと

「勿論だよ。沢山食べてね！」

僕は椅子に座り直し焼き肉を堪能した

「おお！美味しいな！お前すげえな！」

「あはは…焼き加減を上手くしているだけだよ」

率直に言われると照れるなあ…鈴村君は本当に良い人そうだ

ちなみに…僕らは少し移動して焼き肉をしている

だって…あんなの見せれる訳ないよ

メンバーは僕、鈴村君、奏、美代だ

「あつジュースいりますか？」

奏はアップルジュースを持っていた

…オレンジジュースじゃなくて良かった

「奏さん。お願いします」

「はい」

コポコポとコップにジュースが注がれ美代は口に含んだ

同様に奏も口に含む

「それにしても…すげえなFクラスは…あんなに賑やかだしな」

「あれは…ちょっと暴走してるだけだよ！」

「はは…余計に面白そうだな!!」

「でもいろいろと大変なんだけどね…」

なんて話していたら不意に制服の裾を掴まれた

「ん？」

「おっ？」

鈴村君も同様に掴まれたようだ

『明…くん』

掴まれた方向を見ると目を潤ませながらも色っぽい声で呼んだ奏だ
った

「か、かなで！？／＼」

ちよっやばいよ…理性が早くも

『直也…君』

「…どうした美代？」

直也君は美代に抱きつかれていた

「いきなりどうしたんだよ？」

「暑い…ですっ」

「なっ！？ちよっえっ！？何脱ぎだしてんだ！」

直也君は何かの危険に気づいたように逃げ出した

『…直也君…』

寂しそうな顔をしている妹…

うん？あれは鈴村君？

「はあ 学園から毛布借りてきた！」

鈴村君は美代に近づいて毛布巻いた

『ふえ…？』

「暑いわかるけど…それなら毛布にくるまっとけよ。じゃなきや裸見られたら恥ずかしいぜ？」

ニカツと笑いながら美代の頭を撫でる鈴村君

危険な発言はあったけど何故だろう…僕と同じものを感じる

と考えていたら不意に頬に柔らかい感触が

「な、何？その夫婦みたいな…やり取りは／／／」

やばい…奏制服の胸元開いてて谷間が…

スカートもはだけて…露出がああ

「ん？おわあ！」

鈴村君が布団の中に飲み込まれたああ！？

「……どうしたんだよ！……！？」

「直・也・君／／」

「…な、なんだ？ 添い寝か！？ なら服着ろ！」

ごめん鈴村君… 助けたいのは山々だけど

「…チューしてください…」

僕も一杯一杯だから

「落ち着くんだ奏！ ここは公園なんだよ！？」

「？ / /」

「つまり人の多…ふぐ」

唇に柔らかい感触が…

「……ん」

足をバタバタさせてみるけど逃げ出せず逆に体力を使っただけだ

それに

「……はっ / /」

奏が可愛すぎて……どっつでもよく……

「明君……」

奏は頬擦りをしながら甘えてくる

ぐ…なんて可愛いんだ畜生！

「ふにゃあん／＼」

「！？／＼／」

聞いたことがない奏の甘い甘い声

全身が暑くなってきたんだけど！

「あはは…奏って猫みたいだね」

「…ふえ？／＼」

ぐ…鼻が鼻が暑いよー！

なんなんだこの可愛さは！新手の新兵器か！？

そしてさっきから見える胸の谷間が…

僕の理性をかき乱すっつ！

「っわあ！ど、どっしたんだよ美代！？」

「直也…君…／＼」

鈴村君に迫る美代…ちよっ肩がはだけてる！

「明君……すう」

奏はいつの間にか静かに眠っていた

僕に抱きつきながら…いやいや…頑張れ僕

こんなところじゃ…と、とにかく家に帰らなきゃ

カオスな状態は21時まで続いた

本当に…いろんな意味で思い出に残ったよ

今は鈴村君と隣を歩いている

僕は奏を背負い鈴村君は美代を背負っている

「ごめんね鈴村君…妹が迷惑かけちゃったね」

「直也でいいぜ。俺は楽しかったけどな?…まあ美代が酔ったらあんなことになるとは思ってなかったけどさ」

直也はクスクスと笑いながら美代を見た

「でも…正直可愛かったな…なんちゃって!」

「あはは…直也なら任せれそうだよ」

「ん?何が?」

問題は鈍感ってことだよね…ん?お前が言うなだって?

…まあいいや

直也って性格いいし、なんか僕と似ているけどイケメンだからモテてそうだな

「おっ 二二でいいのか？」

気づけばマンションに到着していた

「あっ うん。ありがとう直也」

鍵を開けようとしたら…既に開いていた

「え？」

「どうした？」

まさか…いやそのまさかだよね

「なんでもないよ。入って入って」

「おっ悪いな。おじゃましまーす」

玄関からリビングへ向かって行く

ガラリと開けた途端何かがいた

「明君。実の姉に何かとは失礼ですね」

「ね…ねね、姉さん!?!」

なんで!?!え?確か姉さんは海外に…

というより読まれた!?!

「なんですか慌ただしい」

「ん？お前のねーちゃんか？」

直也は疑問な顔をしながら尋ねてくるけど

「あら？お友達ですか。初めまして吉井明久と美代の姉…吉井玲です」

姉さんはにこにここと笑いながら直也君を見ている

「おう！鈴木直也だ！」

直也…君のその性格羨ましいよ

「いつも弟と妹がお世話になって…アキ君…どこへ行く気ですか？」

ば、バレた！玄関へ向かってるのバレたあ！

「姉さん！ち、違っんだ！これは」

「いわなくても結構です」

え？…何か嫌な予感が

「アキ君の言いたいことはわかってます。実の姉が帰ってきて、嬉しさのあまりに襲いたくなるのを抑え逃げたくなったのでしょうか？」

僕は思わず姉さんに詰め寄った

「この状況を見てなんでそうなるのさ！それに直也が居るのになんてこと言っんだ！」

あれ？直也は？

「彼なら帰りましたよ。優しい人ですね…ミヨちゃんをそっとベツドに置いてくれました…」

姉さんはそう言っていると美代を優しく撫でた

こういう所は姉としていい所なんだけどさ…

「それで…アキ君は何故奏ちゃんを背負ったままですか？ああ…可愛すぎて離したくないのですね」

「違うよ姉さん！…何？その期待をしている目は！」

姉さんは頬に手を置いてうっとりとした表情で爆弾発言をした

「姉さんはわかってますよ。この後奏ちゃんを襲い小作りに励むのを」

「全然違う！！そんなことより姉さんは何でこんな所に居るんだよ！」

軽い事情を聞いた後、奏をベッドに下ろした

姉さんが何かを期待していたけど…やるわけないよ

姉さんが帰ってきた理由は…奏との進展と一人暮らしをさせて大丈夫かということだった

母さん…こんな時に…やってくれたな！！

ちなみに…昨日は奏のマンションに泊まりに来たらしい

理由はごくごく簡単…いくら母さんの資格の姉さんでも恋はするんだ

「しかし私も鬼じゃありません…アキ君が合格できた暁には奏ちゃんとの同棲を許可します」

何故かこんな会話になっていた

「本当！？…じゃない！なんでそうなるのさ！」

姉さんは奏を撫でながら僕を睨みつけた

な、何かな

「アキ君がいけないのです。奏ちゃんにエスコートしてもらったのでしょっ…」

「一応聞くけどそれって」

姉さんは真面目な顔をしながら続けた

「エツチなことに決まってるではないですか」

おかしい！なんで変な人ばかりなんだ！僕の身近は！

「そ、そんな訳」

「奏ちゃんはアキ君の彼女なんですよ？」

「わかってるよ…」

「ならあなたも男として奏ちゃんを引つ張らないといけないのですよ？奏ちゃんのことですからアキ君に夢中なはずですから」

なんでこんな恥ずかしいことを淡々とと言えるんだろう

「たまにはアキ君から少し強引にでも押し倒してあげなさい……」

「何げに危ない発言してるよ姉さん」

「姉さんはアキ君の為に言っているのです」

確かに言われてみればそうだ…きっと姉さんは今のままじゃダメだ。
もっと進展しなさいと言ってるんだろう

「ありがとう…姉さん…。僕が奏をエスコートしなきゃ」

「そのいきですアキ君！ところで結婚式は何処にしますか？姉さんも考えてあげましょう」

「早すぎだよ姉さん！」

こうして姉さんの帰宅により僕の生活はガラリと変わるのだった

期末試験は…見事に惨敗したけど姉さんは帰って行った

と思ったら…近くのマンションに住んでいた

奏のお兄さんがいるマンションに

奏のお兄さんと姉さんは同級生だったから大丈夫だろう

いや…朝が大変なことになっていた

「アキ君…早く起きないとお嫁にいけなくなるチューを…」

「明兄…一発抜きますか？」

「起きました！起きましたからああ！」

さらに酷くなった起床…

そんなことを落ち込む暇もなく夏休みはやって来るのだった

第四十三問：僕と君と甘いデートその巻（前書き）

この章が終わったらバカテスにつ！として更新していきます

題名や紹介文などは変化しますが基本的に続きからです

申し訳ありませんがバカテスはこの章で終わりです

次からはバカテスにつ！になります

さほど変化はありませんが（笑）

ですので以前言っていた夏休みはにつ！に入ったら更新します

ちなみに番外編としてバカ恋外伝を更新しようかなと思っています

本編でなかった明久と一麻の出会い

鴨川先生との再会や奏の散髪など

他には玲の帰国後のテスト編

勿論バカテスにつ！にもオリジナルを加えますし本編の野球対決や
バイト、闇鍋もやります

しかし三つなので更新は二つとも遅くなるかもしれませんが是非読
んでいってください！

最後にオリジナルの話でこんなのをやってほしいと言つものがあれ
ば是非教えてください！

第四十三問：僕と君と甘いデートその巻

朝：それは温かい太陽が優しく照らしゆっくりと気持ちのいい一日を始める為の準備…

なのに

「アキ君：起きないと人生を左右するチューをします」

「明兄：起きないと…チューしますよ？」

ガバアと布団をめくって素早くベッドからだしゅつする

「はあ…はあ。ね、姉さん！美代！なんで二人はいつもこうなのさ
！」

朝からいきなりの災難…姉さんにいたっては本当に危険だ

「早く起きないアキ君がいけないのですよ？」

「そ、そうだけど」

姉さんの視線が怖い…こんな時は美代が

「明兄…やっぱり満足してないんですか？」

必ず爆弾発言をするんだ

「美代！？君は何を言ってるんだ！」

僕はキッと姉さんを睨みつけた

「姉さん！美代に変なこと教えないでよ！」

「変なこととはなんですか？」

そんなの決まってるじゃないか

「こんな可愛い妹にあんな行為教えないでよ！美代はまだ幼いんだよ？」

「か、可愛いだなんて／＼」

美代は顔から湯気を出しながら僕を見つけてきた

「？。どうしたの美代？風邪？」

美代はポカーンとしたような表情になり部屋から出て行った

あれ？

「アキ君は本当に鈍いですね」

「ぎょぎょぎょぎょぎょ」

姉さんは呆れたように部屋から出て行った

僕は何が何だかわからず…ただずんでいた

食器を洗いながら僕は今日の献立を考えていた

「奏ちゃんありがとうございます」

「美味しかったです！」

二人は僕の彼女であり、訳あって二日間泊まっていた奏にお礼を言っていた

今日の朝ご飯は奏が作ってくれたんだ

流石は奏…炊事スキルはハンパないよ

「いえいえ…お泊まりさせて頂いたちよっとしたお礼です」

奏は赤くなりながら腕を縦に振っていた

相変わらず可愛いなあ…

「奏ちゃんには本当にアキ君が迷惑をかけていますね…」

グサリと突き刺さる…言い返せないよ…

流石は姉さん…

「いえいえ…明君には本当に助けて貰っています…それに／＼」

奏は頬を赤くしながらポツリと呟いた

「私…明君の側にいないと落ち着けないんです」

やばい…鼻が熱い

頬が真っ赤に…

どうしよう…奏が凄く可愛いんだけど!?

「明兄!泡が!」

「え…どうしようばああ」

泡がああ!何だこりやああ

「明君!?!」

「あらまあ…」

目があああ!痛い痛い

しみるうっ

「明兄！水です！」

ドタドタと美代が近づいてくる

良かった…これで助かった

『バシヤアアア』お湯がかかる

「あちいあああ」

僕は体中が真っ赤になった

全身が熱い

「きゃああー！ごめんなさい！」

『バシャアアア』手が滑って湯がかかる

「ぬあああああああああああああ」

「きゃあああ明君！？」

僕の朝は全身火傷から始まった

第四十四問：僕と君と甘いデートその貳

「今日は天気が良いから散歩にでも行こうかな」

明日学校に出れば夏休み。そう考えると今日は気分がとても楽だ

「あら珍しいですね。てっきりゲームを始めると思っていたのですが」

「あはは…たまには外の空気を感じたいからね」

姉さんは仕事へ行く準備をしている

きつとそれを見計らって僕がゲームをすと思うってたんだろっけど
そんなことはないさ

「そうですね…なら今日は奏ちゃん何処かへお出かけしたらどう
でしょっ？」

「ふえ！？」

奏は驚いているけど美代も頷いている

確かに彼氏らしいことなんか一度もしてないよなあ

「そうだね 折角だし行こうか」

「えっ…あっ…はい」

奏は赤くなりながらも頷いてくれた

なんか変なことしたかな？

「アキ君…くれぐれも奏ちゃんと子供を作らないように。避妊するんですよ」

「姉さん…！何言ってるのさああ…！」

何で彼女がいる前で堂々と言えるんだ…

「ふふ…では行ってきます」

「行ってらっしゃい姉さん」

「行ってらっしゃいませ」

姉さんを見送った後に僕はリビングへ向かった

「さてと…準備しなきゃ…あ、奏は家にあるよね？」

奏の衣類は奏がいるマンションにあるから一度帰らなきゃいけないのか

「大丈夫です…荷物くらいは持って帰れますから」

奏は手を振るけど心配だ…僕も手伝った方がいいんじゃないかな

「それなら部活へ向かうついでに私が運びますよ」

美代が荷物を下げて部屋から出てきた

「そんな…悪いですよ」

「大丈夫ですっ！いいですよね明兄？」

まあ仕方ないか…

「うん。僕も準備するからーそうだと8時までに噴水広場に来てよ」

奏は悩んだあげくにこくりと頷いてくれた

正直…奏とはまだ居一緒に同棲したいけど知られたまずいし僕の命にも関わる

「それでは行ってきます明兄！」

「うん。行ってらっしゃい」

二人に手を振りながら見送る

美代って強力なブラコンパワーがなければ可愛い妹なんだけどなあ

「私生活がだいぶ良くなってきたまにはおしゃれしてみようかな？」

なんて言いながらデートのことを考える

奏とのデートって初めてだよな

う…そうになるとなんか悲しいな

お互い両思いだったのに今まで気づかなかったんだよね

「えっと…とりあえず予算は一万円でいいかな」

めったに見ることができない…一万円札

ちょっと悔しいけど奏とのデートなら大歓迎だ

「他には…」

女の子とのデートかあ

今まで羨ましいと感じてたけど…僕も味わえるんだよね

しかも昔から好きだった彼女と

「ちゃんとエスコートしてあげなきゃ」

勿論姉さんが言ったことは絶対しないぞ

噴水広場は朝早くから賑わっていた

小さな子が家族と遊んだり僕のようにデートの待ち合わせに使っている人もいる

さて…と奏は

「…明君！」

居た居た。手を振っている姿はとても可愛い

奏は赤いミニスカートに合うような服装で髪型がポニーテールにな
っていた

「……っ！お待たせ。またしちゃってごめんね」

今日の奏は一段と可愛く色っぽい

「いえいえ…私もさっき来た所ですよ」

ニコツと微笑み、ちよつとした仕草もとても可愛くつい目をそらし
てしまった

「そうなんだ。あっ…今日何処行くところか？」

ふう…あまり見とれてちゃ変に思われるよね

「じゃあ…映画なんてどうですか？」

「映画か…うん。行こう！」

そうと決めれば映画館に直行だ

はぐれたらまずいし手を繋がなくちゃ

「…！明君？」

奏はびっくりしたようにこっちを見上げてくる

うっ…可愛い

「はぐれたらまずいし…それに、か、カップルって手を繋ぐから」

うわ…やっぱり恥ずかしいなあ

「…そ、そうですね」

奏は顔を赤くしながらも僕に寄り添ってきた

「奏？」

「…明君にくっついていた方が…安心です」

奏はニコツと笑いながらも真っ赤っ赤だった

「あはは…そうだね…僕も奏の体温感じたいしね」

「ふえ！？」

しばらく映画館まで歩いていただけで奏が赤くなっただけでままだべらなくなっただけ

僕…何かしたかな？

そして周りからの視線が暖かいの何故だろう

第四十五問：僕と君と甘いデートその参

『居たぞ吉井だ』

『あの野郎ー吉井さんとデートだと？』

『人類の為にも抹殺するべきだな』

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺』

僕は…何やってるんだ

「えっと…これなんかいいなあ」

ゲームソフトを手にとりニヤニヤと笑う

へ？気持ち悪い？

いいだろ別に！

「あっこれも！」

ついつい手が伸びてしまう…まさかセールだったとは

奏はにこにここと僕を見ていた

「あっ…ごめんね奏。映画まで時間があるから…つい」

「いえいえ…私もちょっと」

奏は顔を赤くしながらこっちを見る

ちよっと？どうしたんだろう

「あの…ゲームに興味が」

「え…?」

急に嬉しさがこみ上げてきた…まさか奏がゲームに興味があったなんて

「本当?」

「は、はい。でも何が何かまだわからなくて」

僕は奏の手を掴むと奥へ入って行った

それなら僕が良さを教えてあげるしかないじゃないか!

数時間して…

「へえ…ゲームって奥深いんですね」

奏がゲームソフトを見ながら呟いた

「うん！ゲームは日本の誇るべき文化さ！！」

胸を張って堂々と試してみせた

奏は目を輝かせながらゲームを眺めた

「凄いです！明君はゲームの神様です！」

はは…神様か…恥ずかしいなあ

でも…やっぱり笑顔の奏はとても可愛いな…

「じゃあ今度家でゲームしようよ」

「いいんですか？」

「うん！僕だって奏と一緒に居たいからね」

ゲームはできて奏と甘い時間が過ごせる

一石二鳥じゃないか！！

「わわ…！いつの間にか時間だ…行こうか奏？」

「はい」

そうやって奏は僕の腕に抱きついた…恥ずかしいな…

馬鹿な僕がこんな理想の美女に抱きつかれてるなんて…とても幸せ
だなあて改めて思う

『吉井の野郎ーデレデレしやがって』

『吉井さん…あんなゲームオタクの何処がいいんだ』

『まだだ。奴が一人になった所を襲うんだ』

『殺殺殺殺殺殺殺殺』

僕は映画館の入り口前で待機していた

ちよつと早く来たものだから時間が

「あと10分か」

まあ、とりあえず何か買うかな

「奏…飲み物買ってくるからそこで待ってて」

え…？何で奏は悲しそうな顔してるんだ

「私も行きます…」

「いやでも…人多いから大変だよ？」

「大丈夫です！」

うーん でも何かあったら怖いなあ

「私は明君の彼女です！だから明君にくっついていなくちゃ駄目な
んですう！」

久しぶりに聞いた奏の大きな声にビビってつい尻餅をついてしまった

「か、奏：公衆の前でそれは」

ハッと我にかつたのか奏はみるみる真っ赤になっていく

何だろう。周りからの視線が痛いような暖かいような

「また馬鹿やってるな明久」

突然、あいつの声が聞こえた

そんな馬鹿な

「ぼ、僕は何も」

「嘘つくな。お前が奏を特別扱いしすぎなんだよ」

振り返ってみればやはり奴がいた

そして霧島さんが幸せそうに抱きついている

「なんだよバカッブルめ…」

「あ？お前らの方がバカッブルだろうが」

僕らは互いに睨み合う

「いや！どうみても雄二達がバカッブルだ！」

「違うな！馬鹿なお前に彼女がいる時点でバカッブルだ！」

それはつまり僕＋彼女＋馬鹿（僕）＝バカッブルか？

「ふざけるなああ

カップルに馬鹿プラスしただけだろ！

どう見てもいいカップルって言ってないだろ！」

なんて話していたら二人に止められた

「…奏に免じて許してやる馬鹿雄二」

「こっちのセリフだ」

この後、雄二と霧島さんが受け付けに向かって行くのを見て奏と仲良く飲み物を買って行った

どうみてもあいつの方が極めてるじゃないか

いや 真のバカップルはアリス達か…

まさか居るわけないよね

受け付けで飲み物や何か買っていた時にふと時計が目に入った

まさか…

「ああ！始まってらうっ！」

あんなやりとりしてたら…そりゃ始まってらよなあ

「明君先に行ってください！」

「え…？でも運ぶの大変そうだし…」

奏はキツと言いつつ放った

「大丈夫ですからああ!!」

うく!耳がああ

「わ、わかったよ…」

奏の荷物だけは持って仕方なく一番ホールに向かった

『おい!移動開始したぞ!』

『確か二番だったな!行くぞ!』

『吉井殺す』

『殺殺殺殺殺殺』

第四十五問：僕と君と甘いデートその参（後書き）

吉井明久の感想『映画館に入る前』

奏が凄く可愛い…。仕草や表情もとても可愛いんだ！

ゲームの知識を教えている時の奏はとても可愛くて…抱きしめたい
と言う欲望と戦っていました

そんな可愛い彼女にPSPを買ってあげたのは姉さんには内緒だ

奏は勉強と両立できる自信があるらし羨ましい

あれ？気づけば奏のことばかりのような

教師のコメント

本当に吉井さんが大好きなんですね。しかし吉井さんがゲームに興味を持っていたのは驚きました
ゲームもいいですが普段の交流も忘れずに

吉井奏のコメント

はう… / / /

坂本雄二のコメント

明久…お前キャラが変わりそうで怖いぞ

第四十六問：バカと恋愛と召喚獣1

『コブラー！カメーワニー！』

『ブラカ〜ワニー！』

僕らは一番ホールの劇場で仮面ライダーオーズの映画を見ている

オーズがあ…なんか僕と関わっているような

あ…別の小説だった

「…!!」

奏を見ると興奮しているのか目をキラキラさせている

はは…僕も仮面ライダーは好きだ。ヒーローって憧れてしまっただよね

『セイヤアアア!』

それにしても3Dは凄いなあ…それとも仮面ライダーが凄いのかな？

さて、ジュースでも飲もうかと思いき手を伸ばした

あれ？ない？

確かに二人分買っただけなのに

まさか!？

「…っ」

隣を見ると奏が何故か僕の飲み物を飲んでた

「〜!???」

いやいやいや!ちょっと待ってよ。何で奏が僕のジュース飲むのさ!

奏はさっきからずっと映画を見ている 飲み物は見ていない 無意識に僕のジュースを掴んでいた

「……………」

やばい…顔が熱い…これってか、間接キスだよな?

「……………」

ようやく奏はこちらを振り向いた

けど首を傾げている

ぐ…抵抗する気力が消えていく

『みんな俺の家族だ!』

劇場からは拍手が巻き起こる

僕も話しは理解していたせいか無意識に拍手した

やっぱりオーズはいいよね…

映画を見なきや

視線を映画に向けて赤くなつた頬をかきながら僕は溜め息をついた

奏 s i d e

きゃああ！来ました！オーズのオールコンボ！

テンションが上がらっぱなしでちょっと恥ずかしいです

明君も食いつくようにじっと見ています

「……………」
「？」

飲み物に手を伸ばした途端違和感を感じました

さっきまで飲んでいた飲み物が全然入っているからです

「……!？」

ま、まさか…私間違えて明君のを…

「……………」

どうでしょう…これだと明君のお腹が満たされないですよね

「!」

その時、ピカッと豆電球が頭に浮かびました

そうですよ！私のと入れ替えればいいじゃないですか

明君が見ている間にひゅっと入れ替えました

これで安心ですね

『セイヤアアア！』

私は満足げに胸を張りながら映画を楽しく観賞しました

「（あれ？ジュースが入ってる…なんで？）」

『なかなか吉井が見つからないな』

『坂本も見つからないであります!』

『奴らめ…一体何処にいるんだ!』

FFF団は二番ホールに入ったことで映画を間違え明久達を発見できなかつた

明久side

「映画良かったね」

「はい 最後までテンションが上がらっぱなしでした」

奏はそう言いながら顔を赤くしながら舌を出した

ぐ…：新手的核兵器か!?

「何だお前らも仮面ライダー見てたのか」

「雄二?」

悪友と霧島さんが一番ホールから出てきた

「まさか雄二も見ていたとはね」

「まあな…なんか見なきゃいけないような気がしてな」

「はは…僕もだよ」

僕と雄二は今後の予定を話しながら二人を見た

「明久…聞いてやれよ」

「え？」

雄二はふっと笑いながら霧島さんの所へ歩いて行った

聞いてあげる？一体何を…

「明君…！」

奏が手を振るのを見て僕は微笑みながら彼女の元へ向かった

第四十六問：バカと恋愛と召喚獣1（後書き）

吉井明久の感想『映画館で』

か、奏との、か、が間接キスがあああああ

教師のコメント

とりあえず落ち着いてください

第四十七問：バカと恋愛と召喚獣2

楽しかった時間はごくごくと過ぎていった

映画館から出てから『ラ・ペディス』でお昼にした

清水さんが居たことはびっくりしたよ…

ちやつかり水族館のチケット貰っちゃったしね

その後は洋服を買いに行ったんだ

その時の奏はとても可愛くて何度も鼻から出血が…

そして僕らは今、デートスポットで有名な場所に訪れていた

『如月夜湖』

姫路さんからの情報で毎日のようにカップルが訪れていて

夜になった時に湖に月が浮かび上がって…一緒にみるとさらにその
カップルは幸せになれるらしい

今日は花火も打ち上げるからちよつどいいや

「人が多いですね…」

「うん…そつだね!」

頷きながら時計を確認した

現在夕方…

月まで時間がある…うーん ん?あれって

「ムッツリーニ!？」

「變子ちゃん!」

湖を眺めているムッツリーニとぐいぐいと寄り添う工藤さんがいた

あつそんなことしたらムッツリーニが

「ブシャアアア!」

「ムッツリーニ君!？」

言わんこつちやない…

ん？あれって

「秀吉？」

「歌穂ちゃんもいますね」

仲良くソフトクリームを食べている秀吉と種山さんが湖にある喫茶店のテーブルに居た

「…今日は知り合いが多いね」

「え、ええ。きっと皆さんも花火を見にきたのではないのでしょうか」

奏は苦笑しながら湖を眺めた

綺麗だよね……あれ？

僕は看板見つめた。へえ 遊覧船かあ…時間もちよつどいいし乗ってみようかな？

「奏。遊覧船に乗って見ない？」

「わあ…いいですね！」

奏は嬉しそうに微笑んだ。よし…そうと決まれば出発する前に乗らなきゃ

「豪華な遊覧船だなあ…」

教室の設備を思い出すような気分になりながら僕と奏は遊覧船に乗り込んだ

「ここから見る景色は絶景なんだろうね」

「……」ちねっ

奏はピツタリと僕にくっついてきた。いい香りがする…

「どうですか？…香水をつけてみたんですが」

「うん…いい香りだよ。けど普段の奏のほづがもっと優しい香りをするけどね」

ニコツと微笑むと奏は赤くなりながら硬直していた

あ、あれ？

『まもなく出航いたします！今日は18時、二階にて夏休み特別企画がありますので楽しみにー！』

特別企画？一体何をやる気なんだろう…また変なことに巻き込まれるのはごめんだよ

『なお、今日は特別コースを用意しています！なんと遊覧船に乗りながら月を見ていただけで、花火を眺めるのにふさわしい場所を回ります！』

へえ…僕らはラッキーな日に乗れたんだ　楽しみだなあ

『では…一日楽しんで行ってください！』

アナウンスが消えると遊覧船…もはや豪華な船が動き出した

第四十八問：バカと恋愛と召喚獣

いつだったんだろ…彼女に惹かれたのは…

いや、年は覚えてるよ？ただ…気づいたら彼女が好きになっていたんだ…

「うわあ…美味しそうだね」

「はい」

僕らは二階に上がってパーティー会場のような場所で今は夕食をとっている

あ！姉さんの夕食どうしよう…うーん…美代に任せるしかないかな

大丈夫だ…きっと骨を折られたりしない…はず

「ご馳走がいっぱいだ！…食べようか奏？」

どこかのアニメの美女と全く似ている僕の彼女…奏はニコツと頷いた
さっきの笑顔だけでご飯三杯いけそうだ

「？。明君…大丈夫ですか？」

奏がじつと覗き込んできた…いかんいかん！ついニヤケてしまった…

「何でもないよ！それよりほら！食べよう食べよう！」

僕はナポリタンを取り奏の方にはシチューを置いた
ここはセルフみたいで…あっちにある料理から好きなのを選んで食
べる方式らしい…言わばバイキングだ

僕らの席は運が良いことに窓側だ…絶景で、食事には持ってこいだ
！勿論料理は無料らしい
まあ乗る前にお金払ったからね

しかし本当にすごいなあ…もう豪華客船じゃないか

「美味しい！」

奏は嬉しそうに顔をほころばす

「このナポリタンも良い味付けしてる……」

シェフは誰だろう？是非とも味付けのコツを教わりたいよ

「それにしても……」

辺りを見渡しながら大きく溜め息をついた

そりゃそうだ…何故なら

「なんでみんながいるんだ」

そう…Fクラスといつものメンバーが居たんだ

おかしいでしょ!？

あっちにアーンをしているアリス達！

向こうには沢山料理を食べている雄二に見とれている霧島さん！

食べながらイチャイチャしている一麻と里穂！

そして久保君と一緒にいる姫路さんや清水さんに追いかけている美波

締めは殺気を放っているFクラスのみんな…何で

「いつもと…同じになっちゃいましたね」

奏は少し残念な顔をしながらブレッドをスープに浸した

僕だって残念だ…せっかくのデートが…
甘くて…ラブラブになるはずのデートが…

いや 残念なのはみんな同じだ

僕を含めて男子達は睨み合っている…

『何故…お前らがいる…』と言いたいような顔だ

それはこっちが聞きたいよ！僕だって君達を引き裂きたくてイライラしているさ！

暴れないのは奏が可愛いからまだストレスが抜けてくれるからね…

それにしても…

「綾人！あぐん」

「おう……」パク

「美味しい？」

「ああ…アリスが食わせてくれる料理はさらに美味しい」

「…えへへ」

「か、一麻…口開けて」

「ん？いいぜ」パク

「美味しい？」

「あーお前が作ってくれた方が美味しい」

「ふえ！？」

甘い

なんて甘いんだ…ついパフェが食べたくなる程だ…何であの二人は
あんなに大胆なんだよ

「……」

料理に向き直ると奏が何かを見ていた

うん…さっきの光景だね…奏も羨ましいのかな？

「あ…明君！」ブスリ

「奏！？どうしたの？ステーキを突き刺して」

奏はそのままフォークを持ち上げた

え？え？

「あ…明君」

プルプルと震えている…ステーキなんか刺すから

「く、口を開けてください!」

「ええ!?!」

いやいや!奏がしようとしていることは分かる

二人の真似をしたいんだろっけど…

「奏!ステーキは無理だよ?せめて切ってくれないと!」

奏は口をぎゅっとむすび目を瞑っている

「あ…あーん」

プルプルと震えながらステーキを差し出す

いやいや!..

「奏！だからステーキは無…ふぐっ」

押し込まれたあ！口が裂けるっっ

「美味しいですか？」

「ふぐ…ふぐ」

く、苦しい！これはやばい！姫路さんの弁当程ではないけどこのサイズを一口なんて無理がありすぎる！僕はトリコじゃない！

「…あ。きゃああ」

奏は我に返り僕がステーキを半分口に入れ暴れているのに気づいて悲鳴をあげた

「い、いめんない！」

「いいよ。もう大丈夫だから」

水を飲み干し空気を出した

一時はどうなるかと思ったけどすぐに助かったから良かった…

「…私が馬鹿なばかりに」

奏は重苦しい顔をしながら俯いていた

何か言わなくちゃいけないのに言葉が出ない…何故か雄二の言葉が引っかかる

映画館で言ったあの言葉

「……………」

黙っていると奏は静かに呟いた…こんなに騒がしいのに…こんなに殺気を感じるのに

この言葉は重く頭に響いた

「私のような女が明君の彼女で本当に良かったのでしょうか…私は皆さんみたいに大胆にもなれませんか…迷惑をかけてばかりで…美波ちゃんのように強くありません…瑞希ちゃんのようにおしとやかじゃありません…アリスちゃんのように大胆でもないですし…里穂ちゃんのようアイドルでもありません…」

この時僕はおかしかったのかもしれない

「なんだよ……………」

「え…?」

「何で僕の気持ちをわかってくれないのさ…!」

ガチャンと倒れるのも気にせず奏に向かって…初めて怒鳴った

「…明君?」

「奏はまるで何もわかってないじゃないか!僕がデートに連れてきた理由も!」

「違います!!私は」

「何が違うんだよ!?何で奏は天然なんだよ!」

「…!!」

後には引き返せない…わかってる

「何で僕を遠ざけてるのさ？」

「明君…」

「明君…明君て僕は友達なの？所詮はそうなんだ」

奏は顔を歪ませた…

「「明久!!!」」

綾人と一麻が僕の肩を掴んだ

「何だよ二人共…っ!？」

バキイと頬に硬いものがぶつかった…そしてそのまま地面へ殴り倒される

僕は初めて二人に殴られたことに気がついた

「いい加減にしろ！！お前何様だ！？奏を知ったように言いやがって！」

「綾人に何が分かるんだ！僕は…！」

殴り返す前に一麻が殴ってきた

「…！」

「ふざけんな…お前こそ奏を彼女として見てたのか？本当に奏が好きだったのか！？答える明久！」

「……がっ」

一麻は容赦なく殴り続ける

「答えろよ明久!？」

「……………」

襟を掴まれ投げ飛ばされた

腫れた頬に加えて体中が痛い

「ぶつ殺す!お前みたいな奴は」

「一麻落ち着け!」

綾人と雄二が一麻を抑えた

「何度も殴る必要はないだろ!？」

「綾人の言う通りだ！冷静になれ！」

僕はゆっくりと起き上がった…みんなが見ている

冷たい視線だ…

一麻は二人を払いのけ僕に再び殴りかかってきた

「この馬鹿野郎がああ！」

衝撃を覚悟していたけど…何故か来なかった

「明君…を殴らないでください」

奏が…僕の前に立っていたからだ

「奏…お前」

「麻君…私の彼氏を傷つけないで」

何で…どうして僕なんか

「お前…あんなこと言われたのに…」

「わかってるよ…でもね私は明久君の彼女だから」

みんなが呆然としている…

「明久君大丈夫？」

「奏…何で」

奏はふふつと微笑むと僕に抱きついた

「だって明久君を守るって約束したじゃない」

「…え？」

奏は悲しい笑みをしながら…すつと離れて行く

「例え明久君が彼女と認めてくれなくても私は明久君を守るから…」

奏はその後何も言わずに部屋から出て行った

約束…僕と奏の

みんなが再び騒ぎ始めた

Fクラスのみんなは雄二やムッツリーニ、綾人達を殺そうとしている

みんな食事をしたりワイワイと騒いでいる…全く少しは静かにしてほしいよ

「本当…静かに」

僕は一人隅のテーブルで途方に暮れていた

イベントは時間が延長したらしい

みんなは僕から離れている…そりゃそうだ…あんな酷いこと…言っただから

何でだろ…僕は…

「奏…何処に行つたんだろっ」

気づけば自然に口に出ていた彼女の名前

万力に締め付けられるように胸が痛む

奏に会いたい…

嘘なんかじゃない…僕の気持ち

僕は奏がまだ僕を認めてくれないのかと思ったんだ

お姫様のように敬語を使って…そして自分を責める奏なんか見たく
なかった

僕は…奏の魅力を沢山…知っている

なのになんであんなことを

「吉井」

テーブルに影が映った…

「霧島さん…」

「…吉井…奏の所へ行つてあげて。そして本当のことを伝えて」

霧島さんは微笑みながら奏の場所を覚えてくれた…

「霧島さん…どうして？」

「…吉井が奏が大好きなのは良く知ってるから。」

大好き…そうだ…何で僕は

「吉井は奏が嫌い？」

霧島さんの質問に首を横に振る

僕は怖かったんだ。奏とあまりにも縮まって行って…

でも僕は単純なことを忘れていた

僕は

「僕は奏の全部が大好きさ！」

「…そう」

霧島さんは微笑みながら去って行った

僕は奏に嫌いなんか言わなかった…あの罵倒した時…僕は大好きな
んか言わなかった

僕は奏を嫌いになることがなかったんだ

僕は僕の瞳で奏の全てを証明したい！

「って…やっぱり変態だあああ！」

でも取り戻せた…大好きと言う気持ちを

「みんな…ごめん。けど…もう大丈夫…」

周りから見たら立ち直り早いとかもつと反省しろとか言っただろう

でも僕は馬鹿だから…

「純粹に奏を抱きしめたい…」

反省の気持ちもいなくなるとなってしまっただ

第四十九問：バカと恋愛と召喚獣4（前書き）

皆様お久しぶりです

次回で予定通りバカ恋は終わりになります

につ！に関してですがある程度日にちが空いてからになります

理由はバカライダーを終わらせる為です

そして新しい小説も投稿いたしますので続きを楽しみにしている皆様には申し訳ありませんがご理解よろしくお願ひします

また明久と奏の出会いなどを描いた外伝に関しては遅めにはなりますが早めに投稿しますのでにつ！が投稿されるまで暇つぶしに読んでくださると嬉しいですよ

第四十九問：バカと恋愛と召喚獣4

「いない…」

霧島さんに教えてもらった場所に行くと彼女は居なかった

きつと移動したんだろう…

「まいったなあ…他に彼女が行きそうな場所ないかな…」

奏は景色を眺めるのが好きだ…だからここに座った眺めているのかなと思っただけど…うっ

「あんなこと言わなければ良かったよ…僕の馬鹿!」

雄二程じゃないけどたまに自分が馬鹿に思えてしまう…そう…たまにだけどね!!

「ここにも居ない…」

一階の僕らの宿泊部屋にも居ない

というより…宿泊部屋まであるって…もう遊覧船でもないよ
これは帰りが明日になりそうだ

『明君 膝枕しますか？』

ふっと奏の仕草や表情がまるで雲のように浮かんでくる

「僕って…こんなにも奏が好きだったんだね」

独り言を呟きながら外を眺める…夕日が綺麗だ…

もうすぐ夜になり月が浮かび上がる

無性に奏が抱きしめたい……そう思ったらさっさきのことが凄く馬鹿馬鹿しい……

「さっぽろ居ない……」

あちこち探し回っても奏は見つからない

広いせいでもあるけど…一番は自分にある

彼女と最初に出会った時…おしとやかで綺麗で頭が良くて……僕な
んかとは全く違っていた

でも彼女の苦悩を知った時…僕は助けたかった

馬鹿でも…こんな馬鹿な僕に接してくれた…唯一の友達だったから

そして僕は彼女が大好きになった…例え届かない存在でも僕は彼女
が大好きだった

「だから…僕は奏を特別扱いしていたのかもしれない」

それが奏を傷つけていたなんて全くわからなかった

大切な人ならみんなと同じように接するのが当たり前だったんだ

「じゅめんね奏…」

溜め息をつきながら再び探そうとした時…足が止まった…心臓がバクバクと鳴る

「奏…」

夕日に照れされながら彼女は走ってくる…

「明君…!」

さっきの彼女とは違う…

髪が肩より少し下までになっていた…そのなんとというか…綺麗だ

「明君！」

「うわっと」

奏は僕の胸に飛びついてきた…ヤバイ…心臓がバクバク鳴るよ

色っぽくなった奏を見てつい目を逸らしてしまう…

顔が凄く熱い！えーい！心臓がうるさい！

「明君…やっぱり私…明君が」

目を潤ませながら奏は見つめてくる

ぐう…ノックアウト寸前だ

「僕の…方こそごめん…」

頑張れ吉井明久！気持ちを伝えるんだ！

「そんなこと…ないですよ」

奏は赤くなりながら俯いている

まずい！理性まで破壊されてしまう！

「あ…奏…！」

僕は思い切って叫んだ…奏はびっくりしたように目をパチパチさせている

「僕は…みんなと同じ仲間として…彼女として大好きなんだ！だからその…」

言葉が出ない…くそ…情けない…

「ふふ…私も明君と同じこと思っていました…」

「え…？」

「私は明君が居ない時は凄く寂しくて…でも会える時もまるで彼氏として見ていないんじゃないかって思ったんです」

奏は苦笑しながら僕を見つめた

「そ…んなこと」

「あるんですよ…だからお互いに」

奏は僕の手をとって頬に寄せた

柔らかい…奏の頬は柔らかくて温かい

「悪いことも全部一緒になくしていけばいいんです…私は明君が大好きです…優しくて頑張れる明君だから…苦悩をしているんだと思います…だから私がそれを癒やしていけたらいいかな…」

そこまで言った瞬間奏はハッと我に返ったように真っ赤になった

それはさっきのステーキと同じことだ…

なんだ…奏がこんな状態になるのは僕の為なんだ…

天然な部分もあるけどだからこそいいんだ

「ははは…確かに僕も奏の側にずっと居たいな…」

「ふえ…？」

「笑いあって…喧嘩して…僕らはそんなことがなかった気がする…
お互いに我慢して…だから僕らはもっと素直になっていいと思うん
だ」

奏は顔を真っ赤にしながら僕を見つめている…こっちまで恥ずかしいよ

「けど…ステーキまるごとほきついよ」

そう言いながら笑い飛ばすと奏はさらに真っ赤になった

「あ、あれはその…」

「まあ…奏はドジっ娘だからね」

「ドジ！？それはあんまりです！」

奏は涙目になりながら怒っているのを僕は笑った

そう…僕らはもっと素直になればいいんだ

「」「ぶ」「」

お互いに笑いあい…励ましあい…雄二や霧島さんのように

「」「あはははー」「」

綾人やアリスのようになれたらいいかなって

「そろそろみんなの所へ帰りましょう明久」

「うん！…え？」

奏は微笑みながら僕に近づいた

「これからはビシバシ行きますよ…明久」

そう言ったと同時に唇に柔らかい感触が…あれ？

「か、奏？」

「そうでした！…私はいつでも準備OKですからね 流石に夜は野生を解放してくださいね」

そう言った後に彼女はステップをしながら展望台から降りて行った

「…え…あ…」

僕は真っ赤になりながら苦笑するしかなかった

僕は…大胆に…そして大人になった彼女にさらに虜にされてしまったようだ

大丈夫…これだけは断言できる…

僕は彼女が嫌いになることなんて絶対にない！

できれば彼女と早く結婚したいなあ…

はは…流石に早くに考えすぎかな…

この後、どう話そうか…それより膝枕をしてもらおうか…

確か…愛してるって英語でI Love Youだったかな

何か変だった？

気のせいだよきっと

「全く…Fクラスの女の子はおかしな人が多いや」

僕は笑いながら展望台から降りて行った

第五十問：バカと恋愛と召喚獣 終わり良ければ全てよし！…なのか？（前書き

これで第二期は終了です

次回の更新は遅くなりますがさらに恋愛要素を追加しますのでお楽しみに！

第五十問：バカと恋愛と召喚獣 終わり良ければ全てよし！…なのか？

「う…ん」

船の揺れに揺さぶられながら僕は目を覚ました

昨日の疲れか頭がクラクラする…

ここは201号室…遊覧船などのレベルじゃない…部屋まであるって
とどんだけ凄いのさ

「明日は鉄人の補習か…考えただけでもゾツとするよ」

僕は期末試験に敗北し…鉄人との暑い暑い補習を受ける羽目になった
った

僕や雄二達はそこそこ成績を出しているから5日間だけになった

それでも鉄人の補習なんて5日間だけでも体が崩壊しそうだ…何か
逃げる策を考えなきゃ

「ん？さっきから違和感が」

シーツを見ると何か盛り上がっている…

「あ…」

僕は自分の体を見た…裸だ…まさ…か

恐る恐るシーツを剥ぐって見ると

「すっ…」

静かに眠っている裸の奏が居た

え！？こゝ、これは…一体

「ハッ！」

そう言えば昨日…みんなとイベントをした後、奏と…

「ぐふああ！」

鼻と口から赤い液体を飛び散らせ僕の意識は途絶えた

「…ん？きやああ！」

鉄人の補習一日目は中止となったと雄二からメールが来た

どうやら急用ができたらしく今日は変わりの先生が来るそうだ

たがら今の僕は機嫌が凄く良い！

「鉄人がいない日か：なんて素晴らしい一日なんだ！この素晴らしい一日を有意義に使わないとね！！」

「もう…西村先生はいなくても補習はありますよ」

僕の可愛く自慢の妹美代は困った顔しながらネクタイを調整してくれている

自分でできるのになあ…

「アキ君…有頂天になりすぎて奏ちゃんを襲ったら駄目ですよ？」

「姉さんは朝から何言ってるのさ！そんなことする訳ないだろ！」

昨日の朝の出来事はバレてないようだ

「そうですか？アキ君が昨日奏ちゃんを襲ったのは知っているのですから」

「ぶふう！」

飲んでいた牛乳を吹き出してしまった

ば、馬鹿なこの人は宇宙人なのか！？

「姉に向かって宇宙人とは何ですか。アキ君はすぐに言葉が顔に現れているですよ」

「…」

朝からいきなりふざけたイベントがあったけど今は危険な存在はいない

「ふう…姉さん本当に僕を信用してくれないよなあ」

「…アキ兄。くじけたら駄目ですよ」

なんて優しい妹なんだ…

「奏さんに会えない日は…私が」

ジュルツとよだれを拭う美代

周りから見たら色っぽいけど鳥肌が止まらないのは何故？

「あつ…僕は奏向かいに行くから美代は先に」

「了解です！」

美代がパタパタと走って行くのを見送りながら別の道へ歩いて行った

奏の実家へ行きチャイムを鳴らした

それにしても奏の実家は豪華だなあ

ガチャリとドアが開かれ奏の兄…当夜さんが現れた

今は家に居るのは奏と当夜さん…そして希美叔母さんだけらしい

叔父さんは海外のようだ

「おはよびございます！当夜さん！」

「おはよう明久君。ちょっと待っててね…」

そう言っつて当夜さんは家へ入って行った

ちなみに姉さんは当夜さんが好きなんだけど…当夜さんは鈍感だから気づいていない

まるで僕と奏みたいだ

え？それはお前だけだと？

きつと違うよ…うん違う

『奏！いい加減起きろ！明久君が迎えに来てるぞ！！』

家からそんな声が響いた

え？奏寝てるの！？

写真に収…げふんげふん…意外だなあ

当夜さんの声が響いた後…

『ひゃああああ！』

二階から悲鳴が聞こえドタドタとでかい音が鳴る…え？ええ！？

「明久君。あと少し待っててくれるかな？」

「は、はい。別に大丈夫ですけど」

しばらく待っているとはあはあと息を乱しながら奏が出てきた

「お、おはようございます明久」

「うんおはよう」

奏はしゅんと落ち込んだように俯いた

「どろしたのさ？」

「え…ええ。まあ…」

疑問に思いながら携帯で時間を確認した

「やばっ！遅刻だあ！」

「え！？」

奏の手を掴み走り出す…後ろでは当夜さんが手を振っていた

うつ…せっかく奏とこれからを話ながら登校しよつと思つたのに…

仕方ない！今は急ごつ！

「ま、間に合つた…」

「はあ…はあ」

僕はギリギリ教室に入った

朝から疲れたけど良い運動にはなつたかな

「」「」「おはよう吉井夫婦」「」「」

何だろ…みんなの目がいやらしい

『『吉井…』』

そして怖い…確実にカッターナイフやらコンパスやら向けられてる…

『異端者審問会を行う!』

『『『YES!』』』

「何がYESだ!だからお前らはモテないんだよ!」

綾人がFFF団に立ち向かって行く

「はあ…俺らも行くぞ」

「明久貸し一だ」

一麻と雄二は骨を鳴らして戦場へと入って行った

朝から本当に賑やかだなあ…

「明久…明久」

トントンと肩をつつかれて後ろを振り向くと申し訳なさそうな顔を
した奏がいた

「どうしたの奏？元気がないよ？」

「明久…ひぐっ」

え、えええ！？奏がいきなり泣き出したんだけど！？

「ちよっどっし」「アキー！」「ぐふああ
「

ぐっ…肩があああ！

「な、何するんだ美波」

僕はゴゴゴと文字が出るくらい怒りに満ちている美波を睨む

「明久君最低です！奏ちゃんを泣かすなんて」

「姫路さんまで！違うんだ！僕だって意味がわからないよ！」

「「言い訳は後で聞くん（きます！）」」

「待って！話を聞いて…ぬぐっああああ」

奏 side

カチューシャが壊れてしまいました

明久から貰った大事な大事な物だったのに…

「…はあ…」

「どづしたの奏？」ぐわあああ！」「」

「優子ちゃん…実は「腕があああ！」なんです」

「そうだったの…それは残念よね」「怯むな！みんな」「」

「はい…」「ドンドン来いよ！」「」

「でも、吉井君のことだからきつと」「美波！腕はそっちに曲がらな…ぐがああ」「よ」「」

明久…本当にそんなことを

『嫌ああああ!』

鴨川先生が教室に入ってきたので騒ぎは収まりました

鴨川先生は相変わらず綺麗です…あの事件後私達の副担任として新しく転勤してきました

嬉しい限りですね 今度みんなで歓迎会を開かなきゃ

「えっと…じゃあ補習を始めますね」

『『イヤァァァ!』』

何でしょうか西村先生の時と鴨川先生の時とじゃあテンションが全然違いますね

「じゃあまずはこの問題から……」

トントントントン

肩をつつかれ振り返ってみると後ろの席にいた明久がこそつと何かを渡してきました

「じゃあこの問題を須川君」

「はい……」

何でしょうか？

そつと包みを開けた時…涙がこぼれました

「明久…」

中身は赤い色にお花がついた綺麗なカチューシャ…でした

そつえば優子ちゃんがこう言っていました…

「吉井君…奏に新しいカチューシャをプレゼントしたいって相談してきたの…」いつも何もできないから…ちょっとしたお礼だって」

涙をこらえ頭のでっぺんを触れてみるとカチューシャは無くなっていました

明久がそつと外したのでしょうか…

ちよつと名残惜しいですが…でも

「須川君…残念だけど外れよ」

「くそお！せつかく正解して告白『異端者審問会を行う！』」

明久…いつもありがとうございます

私は明久の側にいるだけで十分に幸せです

「みんな落ち着いて！」

N O s i d e

「はは。全く…みんなおかしいね奏…」

「はい。本当に」

奏はそう言って明久の膝に座り目を細める

「ちよっ…奏！？何で座ってるのさ！」

「求愛行動です（ポッ）」

「ちよっ動けない！胸が…」

明久はテンパった顔しながらわたたと暴れるも、奏に抱きつかれ動きを封じられた

「明久…目を閉じ」「やらせるかああ!」「あう…!」

奏は明久に口付けするべく首に手を回し近づいてくるが明久は必死に両腕で奏を押ししていた

（このままキスしてしまえば奴らの怒りをかってしまう……そうはいくか!）

「……雄二私達「あぶねえ!」雄二は意地悪」

「全くみんな恥ずかしがり屋さんだよん…!」

「アリス…俺も遠慮しとくな」

「か…ず麻!」

「はいはい。後でな」

「ムツツリーニ」今はいらない「あはは鼻血でてるよ」

そんな感じでイチャイチャしていると奴らは立ち上がった

『『異端者は拷問してから処刑だあああああ!』』

『『YES! let's party!』』

『吉井達が逃げたぞ!』』

『A班！あつちを探せ！』

『居たぞ坂本だ！』

『ムツツリーニを逃がすな！！』

「来たぞみんな！」

「うわあ！危な！」

奏を抱え僕は廊下をバタバタと走る

全ては生き抜く為だ！

「ちつもう来やがったか…みんなここからは別行動だ！」

「了解！」

あんな化け物化したクラスメイト…いくら僕でも倒せない！

「翔子！」

「…工藤！」

「里穂！」

「アリス！」

「姫路さん！」

「美代！」

「奏！」

「「屋上に逃げるぞおお！」」

「つて結局同じ道かよ！！そして久保君と鈴村君までいる！？

「鈴村君には後でOHANASHIだ！」

「「ぬああああ！」」

「屋上まで駆け上がりバアアンと扉を開く

「列をなすようにFFF団も現れた

『観念しろ!』

『えへへ拷問拷問!』

『ラクニハコロサナイヨ』

追い詰めたと思っているようだけど…

「「かかったな!」「」

一麻や綾人、ムツツリーニは雨戸の筒を利用し下へ滑り下り

久保君と鈴村君は隣の校舎へ飛び移る

「「きゃあああ!」「」

当然のごとく女性陣は悲鳴を上げている

『なっ！？』

『逃げやがった！』

『吉井と坂本だけでも』

そうは行かないさ！！

「奏！」

「翔子！」

僕と雄二はダンッと屋上から飛び降りた

「下へ逃げるぞ!」

「きゃあああ」

『何い!?!』

『あいつら死ぬきか!?!』

そんなつもりはない!

何故なら

「「「」」」

無事に柔らかいマットに着地した

「ありがとう秀吉！」

「うむ…明久！あやつらまで飛び降りてきてるぞい！」

ならみんなまとめて

「雄二！」

「おう！」

「くたばれええ！」

マットを遥か彼方へ蹴り飛ばしみんなは着地に失敗しそのまま落ちて行った

「お主ら鬼畜じゃな…」

『吉井…』

『坂…本』

「こいつらまだ生きてやがる！明久！」

「雄二！」

「後は任せた！」

そう言って逃げ出す僕ら…

「雄二！生け贄になってよね！」

「お前こそ英雄になれえ！」

いがみ合っていたらゾンビ達が走ってきた

うわあ！怖！

「くそ！明久！」

「雄二！」

「逃げるぞ！」

僕らとFFF団との鬼ごっこが再び始まった

「す……す」

やっぱり奏は眠ってるよ！

全く…本当可愛いよなあ

これからもよろしくね奏

頼りないかもしれないけど…君を必ず守ってみせるよ

こんな僕でも素敵な恋ができた…馬鹿な僕でも

この学園は馬鹿と恋で満ちている

様々な恋があるけれど…さまざまな馬鹿がいるけど

それがバカと恋愛と召喚獣の物語なんだ

番外編：僕と奏と運命の出来事（前書き）

番外編です。吉井明久は二年生で奏と同じクラスということですからトします

番外編：僕と奏と運命の出来事

…あれはけして忘れられない…いや忘れちゃいけない僕とあの子との初めての出会いだったんだ

『では…この問題を』

何の変わりもない授業…退屈なんて気分ではなく大変だ。これなんて読むの!?

そんなことをお構いなしに先生は指名しようとしていた

神様！僕には来ないで！

『じゃあ…吉井明久君』

『最悪だあああ!』

叫び声は廊下にまで及んだ。無理だよ…こんな解けない!

『次の漢字の読みを答えよ 問題：家（解答欄）』

や?だっけ?...それともか!?駄目だ。わからないよ

(この時の僕は本当に子供だったと思う?...何?今はどうかだっ?
...知らん)

『さっきの答え...いえだったんだ...』

かなり落ち込みたくなる...だって昨日習った問題だったもん

『……どうしたの吉井君？』

その声にはっとし顔を上げると奏がいたんだ。それが僕とあの子との初めての出会いだった

奏はとても成績がよくてスポーツも得意……まさにみんなの憧れだったんだ

でも……彼女には友達がいなかった……僕はその頃沢山いた。馬鹿にされる時もあるけど今でも大事な仲間達だよ

『吉井さん……いや……その』

初めて声を掛けられどう接していいかわからなかった。周りからは羨ましそうな目で見られ余計に恥ずかしい

『……なんでもないよ』

『……そうなんだ』

（奏は少し悲しそうな顔をしていた。当時の僕にはその理由は良くわからなかった）

奏は僕と話しがしたかったんだ。その時の奏は若干頬が赤いのを今頃思い出したんだ）

『吉井さん…やっぱり素敵だなあ』

（机に顔を埋めながら奏のことを僕は意識し始めた…みんなと同じで…ただ可愛いから好きという憧れだったことに過ぎなかったけどでも…何故僕が彼女とこうして…カップルになれたのかは…きつとあの出来事があったからだだったんだ。もしあの時僕が助けていなければ…）

『なあなあ明久！』

『何さ。みんなしてニヤニヤと』

『お前と吉井さんは付き合ってるのか!？』

『ぶっ!そんな訳あるはずないじゃないか!』

『だよな…馬鹿なお前と吉井さんだもんな』

『ちょっと!馬鹿は酷くない!？』

『『あははははは…』』

『そついえば吉井さんのことだけど最近妙な噂聞くんだよな…』

『え…?何?何?』

『一回…百円だ』

『『金取るのかよ!』』

『冗談冗談!でさ 最近吉井さん…こんな噂があるんだよな

』

(友達から聞いた噂…上級生との恋愛疑惑

そのことを聞いた時、何か胸が苦しくなった覚えはある。相手はイケメンの六年生…対する奏はまだ二年生だった)

『そんなはず…ない』

正直信じがたい僕は放課後…六年生が帰る時間帯まで残りイケメンの上原君が学校を出るのを待っていた

『…何で上原君との恋愛疑惑があるのに彼女は友達がないのかな？』

なんて思っていたら六年生達が下校を始めた

吉井さんの姿を探して見るけど見当たらない…

『やっぱり嘘じゃないか…』

くっ…後で百円を返してもらわないと

『あつ！教科書置いてきちゃった！』

明日宿題出さなかったら…うっ…怖い

とにかく教室へ戻って…

『…早く帰らなきゃ姉さんに叱られちゃうよ』

ガラリと教室を開ける。早く教科書を取りたかったのかちよつと勢い良く開けちゃったんだ

『え…』

教室に入る足が自然と止まってしまった

なんで吉井さんが…

はつきりと状況が伝わり僕は顔を歪めた

机には落書き…教科書が破られている

鞆はボロボロ

そしてあざだらけの吉井さんがせっせとボロボロの鞆に教科書を詰めていた

何が何かわからずぼーとしていたら吉井さんが気づいて急いで教室を飛び出ていたんだ

そして教室には僕一人だけになってしまった

番外編：過去と明久と初恋と

それは…突然の出会いでした…

『…やーい！お嬢様のくせに不細工だな！』

『なんだよその黒い髪！』

『可愛くねえな！』

『ぎやははは』

私は転校同時…周りの男の子からからかわれていました。私の父は有名なスポンサー…ですから私は皆さんと違った環境で生まれてたのです…

『……………』

私は人見知りでもあったので…あまり人と関わりませんでした…きつとかかわれば壊れる。そう感じたからです

『……………』

寂しい…独り…そんなことなどは浮かばず…ただ周りの目を気にしないように勉強を頑張っていました

おかげで成績は良くスポーツもできて周りからは憧れの眼差しを受けていたのです

しかしそれは表だけだったのです…

『あの子…吉井さん。六年生の人と付き合ってるんだって』
『うそ〜！私狙ってたのに…』

知らない噂を流され…一部からは非難の目で見られていました…

それでも私は我慢して勉強に励んだのでした。これは母からの教え
でした

そして…ある時…私は運命的な出会いをしたのです

何故でしょう…理由はわからなかったんです…。ただ何故か彼に惹
かれていたのです…

馬鹿で…周りから笑われていた存在だったのに…でも凄く素敵で…

『はあ…』

『（吉井君…落ち込んでる…どうしたのかな？）』

彼が目の前の席になった時…私は行動に移したのでした…。彼と話
したい…何故かそう感じたのです

『どうしたの吉井君？』

『……………吉井さん？』

私は思い切って彼に話しました…しかし吉井君は何でもないと言ってその場から離れて行ったのです

『…（答えわからなかったんだ。でも…なんで吉井君は話してくれなかったのかな？）』

赤くなった頬に触れながらゆっくりと席に戻って行きました…勇気を持って移した行動は無駄だったんだと自分で納得していました

結局…私は誰とも打ち解けることすらできなかつたんです

そして…放課後…例のあの人達がやって来たのです

『さて…今日はどんなことしてやるのかな』

『へへ…とりあえず教科書破こうぜ！』

彼らは六年生で…私の存在を気に入らない方達でした。理由は簡単で私の成績が気に入くないだけだったので

彼らは読書感想文で…毎年賞を貰っていたんです。しかし私が賞を取ったことで彼らは妬み、私を苛めるようになりました

『……………つじ』

私は反抗できないように暴行を受け…足を怪我しました

『さあ！早くやっちまおう！』

『じゃあ俺は落書きで』

『いいね！俺は教科書破こつかな！』

なんでこんなことになったんですか…私はただみんなと仲良くして…楽しく勉強して…楽しく学校に行きたいだけなのに

…どうして

『うわあッ！忘れ物したあ！』

『やべえ！誰か来るぞ！』

『よし逃げるぞ！おい！明日は無事だと思つなよ！』

彼らはそう言つて急いで逃げて行きました。

『…やっといなくなつてくれました』

静かに破れた教科書を入れてみると

『吉井さん？』

彼が教室に入ってきたのでした…

『（吉井君）』

何故か彼に助けて欲しかった…でも

『……………！』

私はすぐに教室から出て急いで走っていきました…
涙を見られなくなかった…相談するのが怖かった…

そして

大好きな人に嫌われなくなかったのです…

番外編：悩みと怒りと叫びと

「…はあ」

「どうしたのですかアキ君？」

溜め息をつきながらキッチンに向かってしていると後ろからお姉ちゃん
の声が響いた。いつもなら相手にしたくないけど…

「お姉ちゃん…実は今日…クラスで苛められた子にあっただんだ」

「…苛めですか」

お姉ちゃんは六年生だ…だから何か知ってるはずだよ…

「うん。吉井奏さんって言う子なんだ」

「……吉井奏…」

お姉ちゃんは少し考える仕草をした後にくるりと僕の方を向いた

「アキ君。吉井奏ちゃんはお父さんの妹さんの娘なのは知っていますか？」

「ええええ！？そうなの！？」

つまり…吉井さん…は僕の幼なじみポジション的存在…なんだ

「違いますよアキ君」

お姉ちゃんは溜め息をつきながら少し頭を押さえてからまた僕を向き直った。あれ？何か変なこと言ったかな僕？

「…そう言えば最近…私達とは違う六年D組が下級生を苛めてると聞きましたね」

「本当!？」

「はい。しかし…そうだとしたら奏ちゃんは危ないですね」

「え？」

お姉ちゃんはじっと僕を見ながら口を開く

「…D組の男子は汚い手を使うからです。…そうですね…経験した方は刃物を向けられたと言っていました」

お姉ちゃん言葉は幼い僕には重すぎたかもしれない…

「…吉井さん大丈夫かな」

隣で吉井さんは真面目に授業に取り組んでいた…隣と言っても空白があるけど…

「ねえ…吉井君」

普通そうな顔してるけど…心配だなあ…

「吉井君」

思い切って話してみようかな…このままじゃ…

『バカン!』

「あいたあつ！」

鋭い音が聞こえたかと思うと次に鈍い音が響き…頭に激痛が走った…痛い！誰だあ！

「……………あ」

「ようやくかな吉井君」

「…鴨川先生」

僕を叩いた犯人は10年代で教師になってなおかつスタイル抜群で美人の担任…鴨川先生だ

「…どうしたのかな？さつきから指名しているのに無視するなんて」

「……………あ…」

鴨川先生はニコニコとしているのに汗が止まらない…うつ…まずい…

「はあ…仕方ないなあ。じゃあ吉井さん」

鴨川先生は必死になっている僕に呆れたのか溜め息をついた後、隣

の吉井さんを指名した

「…はい」

「えっとじゃあここ読んでくれるかな？」

「はい。…あ」

吉井さんが急に慌て始めみんながざわつき始めた…普段ならすぐに行動する吉井さんが慌てながら何かを考えていた

「吉井さん？大丈夫？」

「はい…え、えと」

(…？一体どうしたのかな)

「…あの…先生」

「うん？どうしたの？」

「教科書を忘れてしまって…」

恥ずかしいのか真っ赤になりながら吉井さんは俯いている…忘れた？あの吉井さんが？

『え？嘘！』

『あの吉井さんが』

周りがガヤガヤと騒ぎ始めるのは鴨川先生はすぐに止めた

「皆さん静かにしてね。じゃあ吉井君！」

「え？僕？」

「吉井さんに教科書を見せてあげてね」

「!？」

えええ！？ちよっいきなり何を言い出すの鴨川先生！僕が…吉井さんのと、と、と、隣！？

まさか…これは神様が与えてくれたチャンスなのかな！？これを気に吉井さんと仲良く…

「ごめんね吉井君」

「…う、ううん」

机をくつつけて僕は中央に教科書を置いた…うつドキドキする

「…うん！じゃあ変わりに大垣君」

吉井さん…近くで見るとますます綺麗だなあ…黒い髪がサラサラして…うつ頬が熱い

「あ、あの…大丈夫？／／」

「ふえ！？／／」

呆けてたら駄目だと思い小声で吉井さんに声をかけたら小声で驚かれた…話し方がまずかったかな？…

「…あ。ごめんね」

「へ？はい…？／／」

ぐぬつ！駄目だ…このままじゃ聞き出せない！ん？…何あれ

「教科書…」

「!?!」

思わず出てしまった言葉に吉井さんは反応しこっちを凝視した

「……………てくださいよ」

「…え?」

「どうして……………どうして苛められなくちゃ……………いけないの」

『ガタツ!』

「吉井さん?どうしたの?」

「……………!」

「「吉井さん!?!」」

吉井さんは教室から逃げるように出て行った……………僕は思わず先生と八
もってしまったが……………そんなのはどうでもいいんだ

「吉井さん……………」

僕は立ちすくみながらポンドでくっつけられている教科書に目を移
した

「……………!?!」

静かな怒りが沸き起こる…吉井さんはずっと独りで…

それなのに僕は…僕は…！

「先生が探すからみんなは静かに自習…吉井君！？」

「ふざけるなああああああ！」

気づけば僕は教室を抜け出し…六年D組へと向かっていた

『どうして…私はただみんなと一緒に…私は居たら駄目なの？どうしてこんなことにならなくちゃいけないの？どうして乱暴されなくちゃいけないの？どうして学んだら駄目なの？どうして…』

ねえ…教えてよ…誰か…

助けてよ…助けて…

私…死にだぐなんか…ひぐっ…!!…助けて!!」

はみ出し編・ポツキとゲームと正確に言えば2日前だけど(前書き)

気づいたら書いていました。明久と奏の甘さが上手く出なかったO

RZ…

はみ出し編：ポッキーとゲームと正確に言えば2日前だけど

ある昼下がりに… 僕らは相変わらず鉄人の補習を喰らっていた… 正直
申しあげますとー

「「「きついんじゃないやああ！」「」」

僕だけでなく他のみんなも叫ぶ… 同士達よ！！わかってくれるんだ
ね！

Fクラスと言っても今は環境が良く充実してるけど担任が鉄人じゃ
暑くて仕方ない… よし！ここは脱走を

(明久…)

これは雄二からの緊急メッセージ！？

(なんだい雄二？)

(逃亡する気だろ？)

(うん。雄二も？)

(ああ…)

(じゃあ… 鉄人があつちを向いたら…)

(一斉に逃げる！)

コクンと頷き合い今は鉄人の授業に集中する… 下手したら捕まるか
らね

「で、こうなる訳だ」

鉄人はそう言ってから後ろを向いた！今だ！！

『『！』』

いや僕らだけじゃない…周りのみんなも逃げようとしてる！

「む！貴様ら！逃げる気か！？」

「もう遅いよ鉄…ぐえ！」

「ハッ！誰があんたの授…ぐふ！」

僕らは首根っこを掴まれ引き寄せられた…誰だ！僕らの脱走を邪魔した奴は…！

「…明久。脱走なんて駄目ですよ」

「…あ…奏」

「…雄二…逃げちゃ駄目」

「翔子！」

僕を捕まえたのは彼女であり才色兼備の…あれから伸ばし綺麗な桃色のサラサラとした長い髪にまるで鏡の国のヒロインな吉井奏…とこれまた才色兼備で美しい黒髪に綺麗な瞳で雄二の彼女霧島翔子さ
んだ

ニコニコとしているけど…なんか怖い

「すまんな吉井に霧島」

「いえいえ。先生は他の皆さんをお願いしますね？」

「ああ…わかつてる」

鉄人はさつきとまるで別人のように鬼となりみんなを追いかけ行ってた

「全く…明久はいつも逃げ出すんですから…」

「う…」

「雄二も反省して」

「…く…」

僕らは鉄人が帰ってくるまでみっちり説教をさせられるのだった

鉄人の補習が終わってから僕らはいつものように集まった。

今日は優子さんに美代、姫路さんと美波は不在である…

「ゲーム？」

「そう！ゲームアリススペシャル！」

「ちよっと待て！スペシャルってなんだよ！スペシャルって！」

「一麻突っ込む所違う違う！」

青く透き通った髪をしたアリスはポッキーを何箱か取り出した…

「ま、まさかゲームって…」

「アッキービンゴ。ポッキーゲームだよ」

「…「な、何いいい!?!?!」」

その言葉に奏以外のみんなが驚いた…ポッキーゲームって…あの…限界までいく…あれ!?!?

「ポッキー…(ブシャアアア)！」

「ムツツリーニ!?!?」

ぐ!なんてことだ!名前だけでムツツリーニがやられてしまった…くそ!

「あの…ポッキーゲームってなんですか?」

「ええとね ポッキーゲームって言うのは…」

『死ぬなムツツリーニ!?!!』

『生きてアガルタを撮るんじゃないのかああ!?!?』

「…ということなの」

「へ…へえ/」

「おろ？カナナン真つ赤だよ？」
「！？／／」

『明久！電気ショックだ！』
『了解だよ綾人！』

「…ふふん？まさかアッキーのこと考えちゃったかなん？」
「ふえ！？ち、違うよアリスちゃん！／／」
「……ほほう！でもこの胸は正直だね！」
「ひゃあ！ちよつ…アリスちゃん！？／／」

『ぐふああ！！』

ああ…アガルタが見え……た

「…ということポッキーゲームを始めます！」
「オオー！」

アリスの合図で僕らはやる気を出した。流石ムードメーカー！一言で体中にパワーが湧いてきた

「みんなやる気満々だね？それじゃあルール説明！アッキーよろしく」

「OK！ポッキーゲームとは一本のポッキーを互いに加えて始めます！」

勝敗は簡単お互いに食べていき…先に離れた方の負けとなります！」

「ちなみに負けた人には罰ゲームもあるぜ！」

「…何！？」「…」

なおさら負けられないな。恥を捨てろってことか…

メンバーは

僕、奏、雄二、霧島さん、工藤さん、ムッツリーニ、秀吉と種山さんは部活で不在…一麻と里穂…綾人とアリスか…

「じゃあ女子対男子でいくよー！」

「…！？」「…」

なるほど…アリス…君は百合を見せない気なんだね…

「同性はカナナンとリホリンに止められちった」

「ああ…なるほど」

対戦相手は以下の通り

1：ムッツリーニ対工藤さん

2：綾人对アリス

3：雄二对霧島さん

4：一麻对里穗

最：僕对奏

「それじゃあ！第一戦目！スタート！」

「……この勝負…先にポツキーを加えたもんがちだな」
「え？」

綾人は腕を組みながらじつと様子を見ている…

「あ！ムッツリーニが動いたよ！」
「よし！」

「…勝負は貰ったぞ工藤！」

ムッツリーニは素早くポツキーを口に加えるが工藤さんは動揺しない…

「！？ムッツリーニ！気をつける！奴の狙いは」

一麻が叫ぶが工藤さんはゆっくりとムッツリーニに近寄った…まさか

「ムッツリーニ君。…」
「ういつの興味あるかな？」
「……………!?!」

「…これは!?!? 舐めるようにポッキーに舌をふれ徐々に加えていく…」

「!?!? (ブシャアアア!)」

勿論ムッツリーニに耐えられるわけない…

「……………アガルタが見え…」

「ムッツリーニイイ!」・ムッツリーニout…

く…まずは一勝目…取られたか…綾人と雄二も若干苦い顔をしている

「ムッツリーニ。犠牲は無駄にしない」

すっと目を開き綾人がポッキーがある所まで歩いた…その目は…本
気だ!

「ダーリン!二勝目も貰うね!」

「残念だが次は勝つ」

『二回戦目スタート!』

決着は一瞬というべきか…綾人が加えて高速で食べていく…アリスは驚きながらも口に加えたが拍子にポキンと折れてしまった
綾人が一気に食べたからアリスが加えた部分はもう少ししかなかったのか…流石だよ綾人！

・アリスout

これで一対一だけど次が不安だなあ…雄二勝てよ…

『三回戦スタート！』

「…絶対負けない」

「…させるかあ！」

ポツキーを掴もうとする霧島さんより早く雄二が掴みにかかった！
そうか！さっきと同じことをすれば

「…雄二！」

「…うわあああ！」

雄二out

え？

「えええ!?!」

「雄二何やって…」

「雄二　　!?!」

雄二は顔中に大量のキスマークがあった…早すぎて何が何だかわからない…でも羨ましい…かな

「はあ…まあ俺が勝ってなんとかお前につなげるぜ!」

「一麻…」

「頼んだぞ」

「任せろ!」

ずんずんと一麻は進み里穂も胸を張りながらポッキーの前に立つ…この二人って結構似てるよね

「やめとけよ…お前じゃ俺には勝てない」

「(´・`・´) 勝てるもん!絶対勝てるもん!」

『四回戦目…スタート!』

アリスは完全に楽しんでるのかニヤニヤとしていた

「はむ！」

「あつ！里穂が先に加えたよ！」

「よつと……」

ポツキーゲームアリススペシャルルールは一人しか加えなくても最終的に二人加えるので反則になりません。更には食べることも可能……まさに弱肉強肉

「……」

「／／／！？」

一麻はポツキーを加えじつと里穂を見つめる。里穂は真っ赤になり硬直してしまふ……結果

「あつ……」

里穂は口から離してしまい……決着が簡単についた

里穂out

「凄いよ一麻！まさか見つめるだけで勝っちゃうなんてな」
「ははっ……まあな」

これで二対二。次でラストか…次は僕の番…

「明久…勝てよ」

「必ずみんなでアガルタを見よう」

「うん！」

力強く頷きポツキーがある机まで歩く…同様に奏も静かに歩いてきた。奏には悪いけど必ず勝たせてもらう！

『ファイル！レディー！ゴー！』

「もらったあ！」

『ヒュバ！』

見えない早さで奏はポツキーを手にとる。い、いつの間…いや。それよりなんて早さなんだ…

「はむ…」

「なっ…」

くう完全に先制された…けど勝負はこれからだ！

「……ふむ？」

「！？／／」

奏は口に加えながらじっと見つめる…か、可愛い！なんて破壊力な

んだ！！奏は食べないのというように首を傾げてじっと覗きこんでくる

「！？」

奏は近寄りながら霧島さんと同じように抱きついてきた…アリススペシャルルールによりボディタッチはありとされている…胸が当たってるんだけど！！

「……にゆう／／」

「…上目使いだと！？」

ぐぬ！理性までもが削られるうっ！奏は赤くなりながらこっちをじっと見つめる…

く！やってやる！

「はむ！！」

「！？／／」

ポッキーを口に加えてカリカリと食べていく…距離が少しずつ縮まっ
つていき…奏は真っ赤になった
その顔があまりにも可愛くて…気づけば…

「…ん！？／／／」

「……っ／／」

奏の唇ごと加えてしまった…奏は真っ赤になりながらワタワタと手

を振っている
奏の唇柔らかいなあ…

「ふあ／＼」
「……ハッ！」

甘い声が聞こえ我に帰る。馬鹿やろう！何やってるんだ僕は！！

「…明久？」
「……奏。違うんだよ！！これはその…」
「……続きは／＼その……」
「……え？／＼」

一旦、間をおいてからゆっくりとみんなの方を振り向く…

「……あ…ああ／＼」

「（ニヤニヤ…）」

「……明久お前以外とやるなあ」

雄二の言葉で何かプツンと切れた…み、見られた

「そんなのってありいいいい!?!?」

変わらぬドタバタな毎日…そんな毎日だから楽しいんだ…

番外編：明久と奏と永遠の約束

『当夜君ありがとうございます……』

『うっん。たいしたことないさ……それより明久君が刃物で刺されなくて良かったよ』

『……あの子は……妹さんの為に殴りかかったんだと思います』

『……奏の為……か』

『はい……アキ君は彼女をずっと気にしていました。……助けてあげたいと部屋で静かに泣いていましたし』

『……そうなんだ。明久君が奏の為に……そう言えば最近奏が妙に考えふけてたなあ』

『くす……きつとそれは……』

「う………」

まだ目の前が見えない……覚醒しきってないからだろう……明久はしばらく目を開けていた

「痛っ……！」

重そうに体をあげようとしたが体中が痛む……彼は怪我をしていたのだ

怒った明久は鬼神のように六年生の教室へと入っていった。幸いにも自習だったので周りの生徒達が驚くだけだ

明久は奏をいじめている生徒達の元へ行き睨みつける……無論相手

はそれを冷ややかに見る

『…どうしてだよ。どうして成績で負けたくらいで苛めるんだよ！
どうして乱暴するんだっ！』

明久はそう言つて一人に掴みかかった…相手は「はあ？」と言いな
がら明久を睨む

『吉井奏さんに謝れ！！今までのこと全部謝つてよ！』

拳を握りしめ明久は怒りをぶつける…拳は一人の生徒の顔面へと
衝突し、そのまま殴り飛ばした

だが結果は見えていた

『うぐ！がは！』

明久はまだ二年生…もし一人に勝てたとしても相手は複数で上級生。
この後明久はずっと殴られ蹴られボロボロにされた…しかし明久は
歯を食いしばり必死に耐える。周りはただ驚いているだけで誰も助
けない

悔しい

奏を守れなかったことが悔しい。早く気づけなかったことに悔しい。
自分が弱いことに悔しい

明久は涙を耐え、痛みを耐え…それでも殴られ、蹴られ続けた

『…!!お前ら何やってるんだ!』

隣のクラスが騒ぎに気づき押し込むように入ってくる…奏の兄であ
る吉井当夜と明久の姉である吉井玲だ

『アキ君!…!』

姉の悲鳴を最後に明久は意識を失った

『う……うわああああああああん！』

明久は保健室のベッドで静かに涙をこぼした。自分がいかに無力だったのかを思い知らされたのだから

（僕は……馬鹿だ。結局何もできない）

明久は歯をギリギリさせながら俯く……涙がボタボタとこぼれるが気にしない。

（僕が馬鹿だから……弱いから……情けないから）

弱い　これは今後の明久にとってこれから蝕んでいくことになるであろう言葉であった……

「……ん？」

明久は涙を拭いながら、枕元に置いてある一つの紙に気づいた。

「僕宛て？」

それはまさしく手紙と言うべきで

『吉井明久君へ』

つ書いたあった。綺麗な達筆からして女子であることを理解するのに時間はかからない

「誰……だろっ」

まだ涙を流したせいで目が赤いが、視界がはっきりとしている中、

明久はゆっくりと手紙を開いた

「……………！」

『バサッ！』

掛け布団をまくり明久はベッドから抜け出した

「……はあ……はあ」

屋上へと繋がっている階段を痛む体で必死に上る。少し荒い呼吸ではあるが明久の体に悪い影響は何もない

「……………！」

両手で扉を押し開ける…強い風が吹き髪が乱れるが気にせず屋上へと入っていく

空はオレンジ色に染まりつつある中、一人の少女が静かに目を見開いていた

黒い髪に緑色の瞳をした吉井奏であった

「あ…吉井君」

奏は驚いていたが静かに呟いた。明久は黙って静かに彼女の元へと歩いて行く…

『ギユツ…』

「……………え？」

奏はしばらくまばたきをした後、みるみる顔を赤くさせていった。

それもそのはずなぜなら明久は奏を静かに抱きしめていたからだ
「ごめんなさい……」

「……吉井君？」

「守ってあげられなくてごめんなさい……」

奏は明久が謝りながら体が震えていることに気づいた

（吉井君のせいじゃないのに……私が黙ってたから）

震えている明久を静かに奏は抱きしめた。明久は一瞬驚いたが奏が
何をしてきているのかに気づき彼女の肩に顔をうずめた

「吉井君は優しいね……でもね……優しいだけじゃ駄目。吉井君は人の
為に怒れて……人の為に勇敢になれて……馬鹿だけど……カッコいい……だ
から」

明久は何も言わず彼女の言葉を静かに聞く。

（こんなに誉められてかっこいいと言われたのは初めてだよ……）

「だから私は吉井君が好きになっただんたと思う……」

「……！」

静かに風が吹き渡り一瞬静まり返る……

二人は既に結ばれていたのかもしれない……わずか小学生二年生にし
て二人は難しいことをやっていたのだ

「……うん。僕も吉井さん……ううん奏が大好き」

「……明久君」

明久は満面の笑みで彼女に思いを告げた。奏は頬を赤くしながらゆ
っくりと笑った……

そして静かに口を開く

「……明久君……大きくなったら……私、明久君のお嫁さんになるね」

「うん。じゃあ僕は奏のお婿さんになる！」

二人は静かに手を繋ぐ…そして明久が口を開いた

「約束だよ？」

「うん。永遠の約束」

しかし…これはまだ幼い約束したことで…この約束は後に忘れさられ…二人はお互いの気持ちすら忘れてしまった
だが…八年後の春…再び二人は結ばれ…はれて恋人同士になったのだ
永遠の約束が…二人を結びつけ…二人の気持ちが再び直結したのだ
った

「明久！補習遅刻しちゃいますよ？」

綺麗なサラサラとした桃色の髪をなびかせながら吉井奏は笑顔で大
事で僕を呼んだ

「はは…待ってよ奏！」

全く…昔も十分に魅力的だったのに今なんてもっと素敵だなあ奏
は…

「…必ず守るから。永遠の約束…」

昔交わした約束…僕は君をずっと守っていくから…

君が大好きだから…

「明久ー！遅刻したら膝枕ですからね！」

「僕としては有り難いことなんだけど…」

でも…補習を遅刻したら鉄人にこっぴどく怒られそうだ…悔しいけど

「ひゃ！」

「よし！文月学園まで突っ走ろう！」

奏をお姫様だつこで我慢しよう…うう膝枕…名残惜しいけど…今はそんな場合じゃない！

「行くぞおお！！」

「明久！恥ずかしいですう！／＼」

僕は真つ赤になる奏をだつこしながら文月学園へとダッシュした

「くす…ありがとう 明久」

『吉井明久君へ』

全て玲さんとお兄ちゃんから聞きました…ありがとうございました…ありがとうございます吉井君…私の為に体を張ってくれて…怒ってくれて…こんなに暖かい気持ち初めてです…。苛めてた人達が謝ってくれました…吉井君には本当に感謝しています…

私の全てを捧げていくくらいに』

「一つ思ったんだけど奏は文面を書くとき大胆になるんだなあ……」

「い……言わないでっ！！！！／＼」

第一問：髪って大事なんです！！（前書き）

ようやく再開です！今回はちょっととした話からスタートします！

第一問：髪って大事なんです！！

物語の始まりは…合宿前だった…文月学園は夏休み前に合宿があったんだけど…ババアのせいで延長…夏休みの四日間を潰して行われる羽目に…

まあ…僕としては補習が潰れていいんだけど…

「うっん…」

カツカツと音を立てながら私はウロウロと歩きます…あっ！皆様お久しぶりです！バカ恋の主演ヒロインの吉井奏です！連載がようやく再開されとても喜ばしいんですけど…

「うっ…明後日どんな髪型で行きましょう…」

私は今、とても窮地に陥ってます…と言うのは…二日前の補習の時、髪が腰まで伸びたので切ろうかなと思いついて…恋人の吉井明久に相談しました

『明久…』

『何？奏』

『髪を切るうと思うのですが…』

『……………』

『あれ？明久？』

『いいんじゃないの』

「…だけだったんですよね…もうちょっと何か言ってくれても……………」

明久ってどんな髪型が好みなんだろう…ショート？セミロング？

はたまた…ポニーテール？うう…玲さんに相談してみなきゃ…

「もし…間違ってしまったら…」

『奏…ごめん。僕その髪型あまり好きじゃないんだ』

ってことになってしまいます…うう…嫌だなあ…

「ここは慎重に考えなきゃ！」

じゃなきゃ明久に嫌われちゃいますからね！

「…っ」

パラパラと雑誌をめくりながら全部に目を通します。ううん…やっぱりこの髪型でしょうか

あっ、そう言えば前に明久はショートはあまりなあって言っていました！

「じゃあ…セミロングでしょうか？」

最近セミロングにする人を見かけるんですね…ここはセミロングで

「あ…確か明久の家へ前に訪れた時…」

大人の保健体育の教科書が…そう言えば最近…明久と…

「はわあああ！！／／／／」

何を考えているんですか私は…！うう顔が熱い…

そ、そうじゃ…なくて表紙からしてポニーテールの子が多かったんですよね／／

「と言うことはポニーテールでしょう…か」

いえ…ちょっと待ってください…それじゃあ私に変態になってしま
うんじゃ…あの本を見てしまったからポニーテールは変態に繋がっ
ちやいますよね？

『へえ…奏ってそういう趣味なんだね』

「駄目駄目駄目駄目駄目！」

本を胸に当て…必死に私は目をつぶりました…このままじゃ…私、
明久に嫌われちゃう

「奏？」

突然横から声があったのでゆっくり振り返ってみると…大切な親友が
いました

「翔子!？」

私の親友霧島翔子はAクラスの代表にして才色兼備…Fクラス代表にして友人の雄二君の彼女です

「…そんな顔してどうしたの?私でよければ悩みを聞いてあげる」

「…翔子…!!」

持つものは友達ですね!私は翔子に駆け寄り本を買ってお店から出ました

「…奏も苦勞してんだ」

「まさか…翔子も髪型を?」

「うん」

お昼下がり…私と翔子は近くの飲食店に行き話しあっていました

「…雄二がどんな髪型が好みなのかわからない…」

「私もです…明久に相談しても軽く流されちゃって」

『お待たせしました。ハンバーグセットお二人様です』

「ありがとうございます」

静かに置かれ料理を見つつ、私は翔子と一緒に雑誌を眺めました

「…私の勝手な予想だけ…」

「うん…」

「吉井は奏に髪を切って欲しくないんだと思う」

「……あ……」

そう言えば明久…切るって言ったら笑っていなかった…むしろ複雑な表情でした

「……雄二も同じ。二人は似ているから……きっとありのままがいいんだと思う」

「翔子……」

「だから……明日は笑顔で振る舞おう?」

「うん」

そうですね……ありのままが一番いいですよね……

「ありがとう翔子」

「……いつものお礼だから」

「くす……私がいつ翔子に借りを作っただんですか?」

「ふふ……雄二との仲直り」

「ああ……そう言えばそんなことがあったね」

「……そんなことって……奏は酷い」

「くす……」

「食べましょう翔子。冷めちゃいますよ?」

「……うん」

私達は二人のことを話しながら料理をお腹一杯食べました

明日は明久に思い切り甘えるとしましょうか

『明久あ!!! てめ俺のハンバーグ食ってんだ!』

『雄二こそ! 僕のエビフライ食べたじゃないか!』

『ハンバーグ食われなかっただけましたろ!!!』

『マシとは何だ! エビフライもハンバーグと同等の価値だろ!』

『ああ!? やんのかてめ!』

『上等だよ! 今日ストッパーがないし本気でやってやる!』

『ストッパーって私のことですか？』

二人はその言葉に固まりギチリとこちらを向いてきます

「か、奏？」

「明久：駄目じゃないですか…飲食店で暴れたら
な、なんのことやら」

「…雄二もみんなに迷惑をかけたら駄目
翔子！？」

二人はお互いの顔を見てから汗を流していました…いつもは我慢してたんですがこういう時は素直に怒るのが普通ですよ？

「ぼ、ぼ、僕達普通に明後日のこと話してただけだよ？ね、雄二
！」

「お、おう！そうだよな明久！」

「「そう」

「は…はは」

「だからそんな暗い顔するなよ二人共…」

「明久」

「雄二」

「「は、はいい！」

「「外へ出ましょうか？」

「いやあああああ!」

第二問：それは突然のことだった…って題名とは言えないよね

夏休みから…二日たった…。僕は補習なんだけど明日は合宿の為に今日は普通の授業だ…久しぶりだからなんか嬉しいな

「そして…早く来ちゃったよ」

苦笑しながら下駄箱を開く…よくあるシチュエーションで…ラブレターなんかがあるよなあこういつ時ってさ

「…まつ。必要ないんだけどね……………ん？」

靴の上に何か置いてあり、それを手に取る…これは？手紙？

周りに人がいないか確認しながら僕は屋上でまじまじと手紙を見た…これって…まさかラブレターなのかな？

「……………開くべきなのだろうか…いやいや僕には奏がいるし」
奏以上の魅力がある人なんている訳ない！

『パラ…』

でも結局開けてしまった…あ、あれだよ！！一応内容が気になって…もし本当なら断りいれなきゃ

あなたの秘密を握っています

「最悪じゃああああああああああ!!」

奏side

朝からの悲鳴はまさか明久？

ちよつと不安になりつつ秀吉君達と話をしているとガチャリと扉を開けて誰かが入ってきました…あの人はまさか

「おはようじゃ明久。一体何があったのじゃ？」

ああ…やっぱり明久でしたか…うかない顔していますがどうしたんでしょう

「おはよう秀吉。べ、別になんでもないよ。あははっ」

どうみても凄く元気がなさそうです…ここは彼女として元気づけな
くては…

「明久」

「うわっと！おはよう奏」

「おはようです。どうしたんですか？元気がとれないようですが
…」

明久に抱きかかえられたまま、じっと見つめました…あつ目を逸ら
されました

「や、やだなあ奏。僕は全然元気だし何も隠してなんか」

「私…元気以外尋ねてませんよ？」

「……………」

図星ですか…さっきからバクバクと心臓が鳴ってますよ？

「まさかラブレターを貰ったなんて言わないわよね？」

「み、美波…おはよう。それと、言葉に気をつけるんだ。ラブレタ
ーという単語に反応して皆が僕に向かってカッターを構えている」

「皆さん…私の彼氏に手を出したら…わかってますよね？」

「「も、もちろんです！姫様！」」

ほえ？なんで皆さん鼻血を…

「おはようアキ。というか、どう考えてもアキがラブレターなんてもらえるわけないでしょう？隠しているのは別の物に決まっているわ」

美波ちゃん。私だってそうであって欲しいんですけどその言い方はあんまりだとおもいますが。

「ふふん！そのままかさ！今朝僕の靴箱にラブレターが」

ドスツ！（カッターが畳に刺さる音）

「美波ちゃん！！」

「だって…アキが奏に浮気しそうで…」

「なんか心の底からごめんなさい…」

私が美波ちゃんを叱っている時、明久は私を降ろして土下座をしていました

「ええつと、僕が隠していたのは、きよ、きよ、きよ………」

「『きよ』、何よ？」

「きよ、競泳用水着愛好会の勧誘文！」

「ふええええ！？」

『『奏様最高！（ブシャアアア！）』』

ええと、昨日水泳競技がテレビで放送されてたのできつとそこから取ったんですよ？。

明久…そんな愛好会普通はないですよ？

「ほ、本当なの、アキ？」

「勿論本当さっ！」

美波ちゃん騙されてますよ！秀吉君何かフォローを…

『歌穂…今日の講演会はどうするのじゃ？』

『勿論。あたしは秀吉君が出るなら必ず見に行くよ！』

『ありがとうなのじゃ / /』

邪魔したら悪いですね…ああ…こうしてる間にも話しが更に酷く…

「そ、それにしても捨てる素振りがなかったけど……。もしかして、入会する気なの？」

「ま、まあね！前から興味があつたからね！」

明久。これはもう引き返せない所まで来てませんか…？

「そ、そうだったの。初耳だわ……。でも、よりによって普通の水着じゃなくて競泳用だなんて……。一体どのへんに興味を持ったの？」

でも…もし、明久が競泳用水着について興味が本当にあるなら…水泳始めようかな？

「そ、それは……」

「うん」

「密着具合」

「シユルツ」

「え……？……………わあああああああああ！？か、奏な、な何脱ごうとしてるのさ！／／」

「だって明久…が密着具合が好きって…」

「違う！違うから奏！！だから＼シャツ脱ごうとしないで！！…っ
てみんな見るな！！見たら一人残らず全ての記憶消すぞ！！」

「はあ…何やつてるんだ朝から。島田…今の話全部嘘だからな？明
久はそんな趣味は全くないからな」

「あつ！綾人！ええっ！？凄いいリアルな嘘だったから危つく騙され
るところだったじゃない！」

「傷ついた！今の一言で僕は毎晩枕を涙で濡らすほどに傷ついた！
…っつてやめて奏！お願いだからスカートにも手をかけないで！／
／」

「明久……………やるならみんながいけない所がいいぞ」

「綾人！？や、やるって前提で進めないで！…あつ！奏！本当にス
トップ！」

「……………ふえ？」

「ふえ？じゃない！そんな顔で見られてもドウジナイガラネ」

「明久…鼻血が出てるぞ」

「チガウンダアヤト！ゴレバガナデガイロツボイガラトガカワイイ

ドガジャナインダ！」

「…わかったからとりあえず鼻血止める」

「脅迫状う…？」

「うん…」

「で、内容はどんなことが書いてあったんだ？」

「これには『あなたの傍にいる異性にこれ以上近付かないこと』って書いてあるんだ」

そう言うと綾人は顎に手を当て考え始めた。こういう時って綾人は本当に頼りになる…

「なるほど。内容からすると、差出人は明久の近くにいる異性に対して強い気持ちを抱いてるな。嫉妬って奴か？更には…明久に出したってことで奏に興味がある奴ってことがわかる」

「私にです…か」

「まさか！？こいつ知らないのか？…明久と奏がカップルなのは学

園の新聞にまで掲示されてるぞ」

「え！？」

いつの間にそんなことが…これじゃうかつに廊下を奏と歩けない…それと綾人はわざとらしく意外だみたいな顔しないでよ！！それじやまるで知られてるのは当たり前だつて言ってるようなものじゃないかあ！

「ところで何をネタに脅迫されてるの？」

「あ、そういえばまだ知らないや。なにに、『この忠告を聞き入れない場合、同封されている写真を公表します』か。写真って、こちの封筒に入ってるやつかな？」

封筒から3枚の写真を取り出し中身を確認する

一枚目に写っていたのは　メイド服姿の僕……………

「この前の学園祭の写真じゃな」

「い、いつのまに撮影なんて……………」

ドタバタしてたから撮られている事に気付かなかったよ…というか…凄く悲しいんだけど

「でも、可愛く取れてますよ」

「うむ。改めて見るとやはり似合っておるしのう」

「それ、全然嬉しくないよ……………」

秀吉ならまだしも奏まで…見せれない！奏には絶対見せれない！これ以上恐ろしいのなんてないよな…？二枚目は…

「……………な！？」「明久？どうしたんですか？」

「……………トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだから……………」

「明久！？自我が崩壊するほどのものが写ってたのか！？」

「もういやあああつっ！」

「な、何！？何が写つてたの明久君！？」

「見ないで！こんなに汚れた僕の写真を見ないでえっ！」

「よ、よくわからんが落ち着け！皆が注目してるぞ！」

爆弾でも投下されたようだった…体中が震えてるよ…

「はあ、はあ、はあ……。恐ろしい威力だった……。これは僕を死に追い詰める為の卑劣な計画と言っても過言じゃない……」

「考えすぎではないかのう。メイド服くらい、人間一度は着るものじゃ」

「いや秀吉…それはないと思うが…」

「おはようございます皆さん！」

「おっはよ うー！」

姫路さんとアリスがガチャリと開けて笑顔で入ってきた…

『『おはようございます！！天使様！！』』

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路とアリスに証明してもらおうとしようかの。姫路、アリス少々良いか？」

「はい、なんでしようか？」

「何かな？歌穂と上手くいつてない？」

「違う！そうではなく…」

「はは〜ん。さてはビデオンもついに大人の階段に…」

「何故そうなるのじゃ!？」

秀吉が…遊ばれている……………あ…種山さんの顔が尋常なくらい赤く…

「はあ…………アリス。秀吉をからかうのはやめろ」

「むっ綾人!!」

「何だその『出たな怪人!』のような言い方は!!」

「私を置いてさっさと行っちゃ綾人なんか怪人だよ!」

「お前：お前が先に俺を置いて行っただろうが!追いかけてみれば…既に姿消してたし…それにメールだつて送っただろ?」

「…んむー電源は切ってるのだ!」

「それが一番悪いだろ!」

綾人はフォローしに行くかと思えば夫婦喧嘩だよ…相変わらずイヤイヤしてるよなあ

「…今のうちじゃな。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があつたらどう思うかのう?」

「明久君のメイド服姿ですか!うん、そうですね…………」

姫路さんは少し考えてから、
「もしそんな写真があつたら　とりあえず、スキヤナーを買います」

…はい?スキヤナー?Y h y?

「へ？スキヤナー？なんでですか？」

「だって、その……」問われた姫路さんは少し恥ずかしそうに頬を染めてから……

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないじゃないですか……」

「あっ！ウチも思うー！」

爆弾を投下した

「明久落ち着いてください！飛び降りなんて早まったりしないでください！」

「離して奏！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

「何言ってるんですかあ！そんなことになったら私はどこにお嫁に行けばいいのですか!？」

「あ………」

飛び降りには中止だ…奏に慰めてもらおう…

「よしよし……明久は格好いいですよ？…少し可愛いですけど」

「奏…余計な言葉混ざってなかった？」

「な、何を言ってるんですか？」

そう言っつて奏は腕に胸を押し付ける…嘘だね…だって…胸が揺れて…カンジヨクガ…

「そ、そうじゃ！ムツツリーニじゃ！ムツツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して」

「……ムツツリーニに笑われる？」

久しぶりすぎる胸の感触に鼻血を垂らしながら秀吉の提案に首を傾ける……

「違う！事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ！」

「おおっ！なるほど！流石は秀吉！ナイスアイデアだ！」

『吉井…ぶち殺す』』

『綾人！今日の帰りはガンバライドだよ！』

『ふ。後悔するなよ？…』』

『明久君にこの衣装なんてどうですか？』

『いいわね！これも合いそうよ！』』

『秀吉君。今日お弁当作ってきたんだよ？』

『かたじけないの歌穂ノ！』』

『明久：久しぶりに膝枕してあげますね』』

『ブファ（鼻血乱射）！』』

一麻、里穂「なにこれ」

第三問：明日は合宿だ！その前にやることがあるけど

「ムツツリーニ話しがあるんだけど」

教室の隅っこでムツツリーニはコーヒーを飲みながら何かやっていた。声をかけたら誰かに遮られた…

「後にしろ。今は俺が先約だ。」

「あれ？ 雄二？ムツツリーニ、何の話？」

「…………… 雄二の結婚式が近いらしい。」

ムツツリーニにが言った言葉に少々目を丸くした

「雄二と霧島さんの結婚式？ そんな既に決まってることより、僕が校内のみんなに女装趣味の変態として認識されそうってことのほうが重要だよ！」

雄二は霧島さんloveだろ？なら嫌がる必要ないじゃないか

「なんだと…？ お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れ妻帯者！ 人生の墓場へ還れ！」「うるさいこの女装狂！」

とつととメイド喫茶に出勤しろ！ 勤務時間に間に合わなくなるぞ

「！」

「黙れ馬鹿！霧島さんとイチヤイチャしゃがって！」

「お前も奏とイチヤイチャしてんだらうが！」

奏とイチヤイチャだって？いつそんなことしてるんだよ！できるならやりたいさ！

「……………」

「……………傷つくくらいならやれなければいい」

話しが進まなくなるので僕らは涙を拭い雄二から聞くことにした…

「実は翔子の奴がMP3プレイヤーを持っていてな。そこで怪しく思っただけで没収してみたら、そこには俺の捏造されたプロポーズが録音されていたんだ。」

「……………」
「な、なんと言うか…」「そ、そうだよな！霧島さんってば、可愛いねっ！そんな台詞を記念にとっておきたいだなんて」

「いや、婚約の証拠として父親に聞かせようとしていたんだ。」
冗談じゃ済まされないよ…………

「で、でも、まだ結婚ぐらいの話でよかったじゃない！僕はもう、あのペースだともう子供ができてもおかしくないと思っただよ。」
「……………明久。笑えない冗談はよしてくれ……………」

マジですか？笑えないの？まさかもう結婚まで秒読み段階？

「まあ、プレイヤーは没収したが、中身はきつとコピーだ。オリジナルを消さないことには……………」
「そういいながら雄二はプレイヤーを取り出した。」

それはどう見ても再生専用のプレイヤーだよな…………。

「そんなわけで、ムツツリー二にはそれを録音した犯人を突き止めて欲しい。翔子は機械オンチだから、きつと実行犯が別にいる。きつと盗聴術が長けた人間の筈だ。…翔子にはちゃんと大人になってからと言っただ。だが…こんなもので翔子の心を利用した奴が許

せねえ」

「雄二……」

君は本当はいい奴なんだね…霧島さんの為か…しかも結婚の約束してるし

「…明久は一体何があつた？」

「あ、簡単に言うとなね。僕のメイド服パンチラ写真が全世界にWEB配信されそうなんだよ！」

「……………??？」

「ゴメン、端折りすぎたね。要するに

事

情説明中 そんなわけで、その写真を撮った脅迫犯を突き止めて欲しいってわけなんだ。」

「なんだ。明久も俺と同じような目に合ってたのか。」

「……………脅迫の被害者同士。」

「こんなことで仲間ができてもなあ……………」

本音を言えば奏と離れたくないんだよね……

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ。」

鉄じ……………西村先生が入ってきた。

手にはしおりが入っていると思われる箱を抱えている。

「……………とにかく、調べておく。」

「すまない。報酬は今度お前の気に入るような本を持ってこよう。」
「ごめんね…僕も最近手に入れた秘蔵のコレクションその二を持ってくるよ。」

「……………必ず調べ上げておく。」

ムツツリーニはグツとサムズアップをしながら席へと移動する…工藤さんに絡まれたけど…

僕らは最近鉄人先生にお世話になってるから迅速に動かなきゃいけない

「楽しみですね明久！」

「うん。学力上げるチャンスだしね」

周りでは姫路さん達が会話していたり、一麻があくびしてたり、クラスのみんなが賑やかだったりする

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認を怠らないように。まあ旅行に行く訳ではないので、勉強道具と着替えさえ持っていけば問題ないはずだがな。」

軽くしおりをめくる…Aクラス設備ではあるがしおりは全共通だろう。更に僕らはFクラスだ…

合宿内容は四泊五日の時間をフルに使って勉強に集中するという文月学園独特の合宿だ…うーん重点的に日本史を鍛えるかな…。

「集合の時間だけはくれぐれも間違えないように。間違えた場合は

置いていかれることになるからな。」

「くす。確かにみんなでお泊りなんて楽しいイベントに一人だけ置いてけぼりだなんて悲しすぎますよね…」奏の言葉に笑いつつさらに捲って集合時間と場所を確認する。

「いいか、他のクラスと集合場所を間違えるなよ。Fクラスのお前たちの集合場所は」

Aクラスとかはリムジンバスとかの超豪華設備で行くらしい。僕たちはFクラスだし、マイクロバス…の補助席…いや荷台だったりして…

「現地集合だからな。」

『『『『『案内すらないのかよ!!』』』』』

あまりの格差社会に僕は涙を流した…これがFクラス…

軽く背伸びをしながら僕らは溜め息をついた

「まさか現地集合だとはな……」

綾人はカードを見ながらつぶやく

「うん…本当に扱いがなあ…ネオスで攻撃」

「甘いな明久。俺の伏せたモンスターは『ビッグシールドガードナ

ー』守備力は2600」

「うげ！ネオスは攻撃力が2500…100のダメージか」

そして遊戯王をやっている

「……………通行手段なら大丈夫」

「本当霧島さん!？」

「……………うん。私と奏のお父さんに連絡してリムジンバスを貸してもらえるから」

それは願ってもないことだ…流石二人だね

「すまないね二人共」

「迷惑かけるわね……」

工藤さんと優子さんの言葉に二人はニコリと笑った

「本当にありがとう奏」

「いえいえ…全然大丈夫です」

僕と奏はジャンケンに負けてジュースを買いに行くことになった…
今頃姫路さんのお弁当を堪能してるだろう

「そっだ!」

「うわ!?!いきなりどうしたの奏」

「……合宿所って温泉ありますよね?」

「うん」

奏は頬を赤くしながらこっちをじっと見つめてきた…な、何?

「一緒に入りませんか?」

「ぶふああ!」

奏の爆弾発言により口から赤い液体が噴射したのだった

番外編：今日はいいふーふの日なので…（一応危ないかも）

「明久起きてください」

「あ…あれ？奏？」

爽やかな朝…いるはずのない彼女がいた…そう奏だ

「玲さんから合い鍵を頂いて来ちゃいました」

「そうなんだ…」

奏は満面の笑みを浮かべていた。よっぽど僕を起こすことができず嬉しかったんだろっ…

「…！ごめん！早く準備するね…」

「…大丈夫ですよ」

奏は笑っているけど…多分今は軽く朝の8時だろっ…迷惑かけちゃったなあ

「だって…今は5時なんですもの」

いや…心配する必要がなかった…

「だから明久はゆっくり準備してくださいね…」

「う…うん」

なんでこんな早い時間からと聞こえろっと思っただけ…あんなに「コ」コされてちゃ聞けないや

「くす…明久。おでこ出してください」

「え…？こっつ？」

言われるまま髪をちょっとあげておでこを出す…

「……おはようございます明久…」

そして柔らかい何かを押し付けられた…まさか!?

「……………え…/ / /」

おでこに口付け…されたのか…

「ふふ…着替え置いておきますね?」

奏は慣れた手付きで衣類をすつと置きそのまま部屋から出て行った

「……………ああ」

僕はしばらく顔を赤くしながら何が何かわからないようにぼーとなっていた

ガチャリと開けるといい匂いが部屋中に広がる……………

「…」

奏が髪をポニーテールにし、赤いエプロンを付けて朝食の準備をしていた…何というか…がとても綺麗だ

「あつ…明久。朝食の準備できましたよ?」

「……………つと。ごめんね奏。朝食までやらせちゃって」

「いえ…私としてはむしろ大歓迎です」

なんていい彼女なんだろう…いつもこうだったら幸せなんだろうな……………っ!

(ちょっと待てよ…朝の起こし方といい…朝食といい…これは夫婦

なんじゃないか？)

「明久？どうかしましたか？」

「！ー！うん！大丈夫！！」

「くす…沢山食べてくださいね」

「う、うん」

けど…相変わらず天然だなあ…はは。こんなに沢山食べられかな？

「いただきます！」

僕は朝から豪華な朝食を食べることになった。カロリーは十分だろう

「い…ごちそうさま！」

なんとか完食…ふう美味しかったなあ…

「はい お粗末様です」

奏は手早く食器を片付け始める

「あつ食器くらいは手伝うよ？」

「そうですね？じゃあお願いしますね」

軽く笑い奏から食器を受け取る。任せてばかりじゃ駄目だし、これくらいはやっておかないとね

「…よし。完璧だ」

食器を綺麗にふきながら洗面所の方を見る…奏が洗った洗濯物を乾

乾燥機に入れている

『え…と』

可愛い声が聞こえてくる…きっと悩んでいるんだろうな…乾燥機は初めてなのかな？

『えい！』

『ガガガガガガガ！！』

「！？」

何？この凄くヤバいような音！？

『きゃああ！』

奏の悲鳴が聞こえ素早く洗面所へ向かう…っとおお！！

「がふうあ！」

ツルンと滑っておもいきり顔面を強打した

「痛あああ！！！」

ヒリヒリどころじゃない痛さだ！というかこれは一体何なの！？

『ベチヨ』

足の裏には粘液のようなものが張り付いている…これって

「洗剤？」

滑らないように気をつけて奥へ行くと…

「ひゃう…」

乾燥機から出た洗濯物と水が混ざった洗剤をかぶり奏が目を回しながら倒れていた

そして今日…奏の苦手なこともわかった気がした

「…ふう。なんとか間に合いそうだ」
奏の制服を洗剤した後に乾燥機にかける…早く起きて本当に良かったよ

『ごめんなさい…』

風呂場の方から奏のシヨボンとした声が聞こえてきた…

「大丈夫だよ。それより無理なら言ってくれば良かったのに」

『それは!…!』

少し大きな声が聞こえてちよつとびっくりした…どうしたんだろう

『それは…今日は…11月22日ですから…』「え…?…どういふこと?」

誰かの誕生日?それとも人類の滅亡!?

『明久…相変わらず鈍感なんですな』

「え…?…何?」

奏の元気の無い声が浴室から聞こえた…本当にどうしたんだろう…

「ガチャ！」

「だから！今日はいいふーふの日ってことなの！！！」

「奏！？ちよっ！いきなり浴室出ないでしょ！？／／／」

「口で言ってるわからないなら……」

「何！？本当にどうしたのさ奏！！／／／」

「明久！お風呂に入ろう！？まだ時間は沢山あるから！！／／」

「ななな何を言ってるんだ君は！！／／」

「大丈夫！！今日は私が」

「だから何を言ってるんだよ！？それにちよつと危ない展開だよね！？／／」

奏は無視するかのようには僕のYシャツに手をかけ始めた……！？

「！体隠してよ奏！！」

「大丈夫……久しぶりだけど大丈夫だよ明久」

「聞いてないよね！？このままだと理性が危ういんだけど！？」

「理性なんて壊れればいいんです……／／」

「out！！君は読者様の前で何を言ってるんだああ！」

「駄目？／／」

「……………」

ああ……駄目だ。奏のこのおねだりには勝てないや……皆様ごめんなさい……僕は……エデンへ行つてきます……

「今日は少し荒くても大丈夫ですからね？／／」

「ダイジョウブだよヤサシクするから」

皆様…妻は大事にね！（明久）

第四問：出発！奏p l a nと心理テストじゃああ！

強化合宿当日：私と霧島さんのお父さんが手配してくれた二台のりムジンバスに乗って私達Fクラスは卯月高原へ向かっています

一台目にはo r zのポーズをとっていた皆さんが乗り、二台目にはいつものメンバーが乗ることになりました
そう言えば美代ちゃんが…

『鈴村君が居ないから嫌です！』とダダをこねていました…明久の説得でどうにか乗ってくれたんですが…
鈴村君に美代ちゃんは告白しないのかなあ……

「すまないな二人共。本当に助かった」
「いえ…これくらい大丈夫ですから」
坂本君に返事をしながら書く手を早めます…今書いているものは…
合宿の時の計画です

題名 奏p l a n：明久をとりこにする為に

「えっと…まず到着してから……」
そうですね……いきなりキスは駄目ですから明久を誘って周りを見て回ってから…あつ手を繋いで歩きましょうか

「はにゃ……／＼」
「どっしたの奏？」

「ひゃああああ!?!?」
後ろにの座席に座っていた明久がひよいと覗いてきました…あわ

わ！早く隠さないと

「ん？それ…ぐふ！」

「ななな何でもないです！」

素早く明久の顔に胸を押し付けなんとか阻止できました

「はっ…相変わらずだな明ひ…ぐふう！」

「……雄二はこっち」

「まにしやがふ！（何しやがる）／／」

「綾人もらったぜ！」

「なっ！ハイパークロックアップは卑怯だろ！？」

「問答無用！クライマックスヒーローズフォーゼでRXを選んだことを呪うんだな！」

「くそ！ならバイオリダーにチェンジだ！」

「頑張れ一麻！」

「綾人！ファイト！」

「鈴村君…グスン」

「ムツツリーニ君寝ちゃってる」

「秀吉君もだ…可愛い」

バスの中は賑やかで良かったんですが…何故か隣のバスから黒いオ
ーラが見えました…

「暇だ…」

「そうだね…やる事が無いよ」

私の隣にいる明久は目の前でため息をついている坂本君を見ながら頷いていました

「あと一時間はありますね…」

反対側にいる瑞希ちゃんが携帯を閉じて窓をじっと見えています。一時間ですか…

「何か面白いこと無い雄二？」

「そうだな。とりあえず奏に膝枕でもされてる」

「へっ？／＼何を言ってるんだよ雄二」

「暇なん…うお！」

翔子が坂本君に膝枕をしました…意外と大胆ですね翔子／＼

「……雄二が膝枕をされればいい」

「おい！」

流石に恥ずかしいのか坂本君は顔を赤くしながら翔子に訴えています。くす…仲がいいですね…

『酔った…』

『ゲームはバスでやるもんじゃないね』

『グルグルパーだよん…』

「……続きはどうなるのかしら」

「優子ちゃん何読んでるんですか？」

「瑞希！？こ、これはあれよ！／＼」

明久は苦笑しながら見渡し何かを読んでいる美波ちゃんに声をかけました

「あれ？美波何読んでるの？」

「ん、これ？ これは心理テストの本。100円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの」

「へえ〜。面白そうだね。美波、僕にその問題出してよ」

「うん。いいわよ」

美波ちゃんはアキくんにそう答え、適当にページを捲ります。どんな問題が出るのでしょうか

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい。緑 オレンジ 青 桃』それぞれ似合うと思う人の名前を言ってもらえる？」

誰が何色なのか、気になります…でも周りの異性多いですよ？難しいんじゃないでしょうか

明久はしばらく唸ってから…

「えーっと っ、美波これって同じ色に何回当てはめていいの？」

「ええ。でも必ず全部の色に当てはめなきゃ駄目よ？」

「ん〜……順番に、『緑 美波、姫路さん、木下さん、工藤さん、種山さん オレンジ 霧島さん、アリス、里穂 青 美代 桃 奏』

って感じかな」

ビリッ!

美波ちゃんの手元から凄いい音がしました。

「美波ちゃん!? どうしたんですか?」

「アキ… あんた奏がいるのに……… 何考えてるのよ」

「美波!? どうしたのさ!?!」

「問答無用よ!?!」

「にぎゃ あああ!」

明久が美波ちゃんに首を締め付けられました… た、助けないと! ……

「美波ちゃん! 落ち着いてください!」

「この天然たらし!」

「美波: ギブ: ギブウウ!」

「美波ちゃん! 明久が死んじゃいますからあ!」

「そして実の妹に何考えてるのよ!」

妹? 美代ちゃんがどうしたんでしょう?

「けほけほ… み、美波。君が何を言ってるのかわからない…」

「明久大丈夫ですか?」

「うん… ありがとう奏」

明久はそう言っつて私の頭を撫でてきました… もう、幼女じゃないのに。でも明久の手… 優しいです…

「…ふあ / /」

「奏！？どうしたの？顔が真っ赤だよ！！」

青……愛人
桃……妻

『明兄……なんであんなに甘いのにまだ童貞なんですよ……』

第五問：あくんってのは男の憧れ！なんだけどそれ以上に憧れるのは…

「…酷い酷いよ美波」

腫れた頬をさすりつつため息をする…真剣に答えただけなのに…

「アキがシスコンだから悪いのよ！」

「何を言ってるのかわからないんだけど…」

シスコン？どういうことだろう…シスコンと心理テストに何の関係があるのか気になる所だがその前に

「美代どうしたの？」

さつきからじつと眺めてきている妹の方へ顔を向ける。何か困ったことがあったのかな？

「な、なんでもないよお兄ちゃん」

「美代。今から病院へ行こう」

「へ！？なんで!？」 あきらかにおかしい…しゃべり方といい、呼び方といい…何故いきなり変わったのだろうか…答えは簡単

何か精神的な病気にかかったんだ

「明久…それいくらなんでもむちゃくちゃだと思えますが」

「いや！きつと美代はFクラスに毒されたんだ！」

「明久!?! 一体どうしちゃったんですか!?!」

奏がオロオロとしているのを見て密かに鼻を押さえたのは秘密だ…

「お兄ちゃん…が駄目なら明久お兄ちゃんはどうかな？」

「……やっぱり毒されてる!?!」

ガチャッ！！

「明久！？窓なんて開けてどうした？」

「隣のバスを葬るのさ！」

「ははは！待ってるクラスメイト達よ！一人残らず葬ってくれる！！

「駄目です明久！」

「うぐっ！離すんだ奏！僕は今からあいつらに刑…はふ！」

奏に抱きしめられて力が抜けていった…うっ…なんで邪魔をするんだ

「落ち着きましたか？」

すっと奏が離れたので座席に座る。うむ何というか

「ますます刑…はふう…」

「明久は着くまで私の膝で寝てください…」

「……おやすみ吉井」

おのれ！奏も霧島さんもなんで邪魔ばかり…あっ気持ち良いや…

奏の太股

「あっ……そう言えばお昼の時間ですね…」

「…そうだね…」

眠たい僕には関係ないや…変わりに奏の太股でも…

「カプッ…」

「ひゃあ！」

奏がぴくんと動いたので体が揺れた…でもそれは余計に眠くなってくるようなものだ

「あ、明久…恥ずかしいですから…甘噛みしないでください」

「1じめ…ん」

「…眠たいんですか？」
「う…ん」

凄く眠たいな…きつと遅くまでゲームをしていたからかな？それにしても…柔らかいなあ

「……………はにゆう」

「！？／／（明久…可愛い）」

もう駄目…

僕は目蓋をゆっくりと閉じていき…意識を手放した

明久が眠っている中…バスでは大変なことになっていた

…そう。姫路の弁当の脅威と戦っていたのだ…ある者は他人に押し付けある者は震えてばかり…ある者は戦争を繰り広げ……またある者達は隣のバスから飛び移り

姫路の弁当により多数の犠牲者と意識不明者が出たのであった

そしてそんな戦争に生き残ったのは…

「あ…相変わらず恐ろしいな姫路の弁当は…」

クラス代表そして馬鹿の雄二

「……………意識が亡くなりかけた」

代表のつ「ふざけんな!!」まである坂本翔子

「…何回死にかけてたことやら…」

天性の仮面ライダーブラックと言われている綾人

「…ぐ、ゲツタリだよん」

苦笑いをしながら起き上がるクラスのムードメーカーのアリス

「みんなそんな顔したら駄目だよ?」

姫路の弁当を食べても平気だった歌の女王こと里穂

「……………う」

目を白くしながらも立ち上がった馬鹿…一麻である

N O c c o u n t

・演劇と吹奏のホープ組

「秀吉君!美味しい?」

「最高じゃ歌穂よ!」

「良かったあ…」

・最強の馬鹿と最高の美少女

「……………くう」

「……………明久くすぐったいねすノ……………むにゃ」

そんな中、二台のバスは卯月高原へと到着しようとしていた

第六問：神様…できるならば僕はずっと奏といたいです！何？甘えるな？…だよ

「う……ん……」

ゆっくりと瞼を開くと広い天井が見えた…しばらく眺めた後、目をこすりながら体を起こす

「おう…起きたか明久」

「むう…？雄二？」

横には尖った赤毛と引き締まった体が特徴のクラス代表にして悪友であり親友の坂本雄二が携帯を片手に持ちながら笑っている

「ここは何処？」

「目的地の卯月高原じゃ。お主は気持ち良さそうに眠っておったから」

緑色の目で見つめてきながら木下秀吉は少しため息をついていた

「ああ…引つ張るの大変だったからな」

引つ張る？どういうこと？確か奏の膝で寝てたよね？

「目的地に到着した時…降りようとしたら…お前と奏がくつついてな」

綾人は苦笑しながら窓を見ていた。綾人の言葉で頬が若干赤くなる

「離そうとすると奏が凄く抵抗して…返り討ちにあったのさ」

「…それはそれは」

「拳げ句の果てに鉄人が来てなんとかなって…今に至るって訳だ」
うあ……鉄人にまで見られてたんだ…

「さて、お前が起きたことだし…ムツツリ「明久」」

雄二の声が遮れるように聞こえてくる愛しの彼女の声…

「明久……お前なんかしたか？」

「え？いや…別に何も」

「嘘つくな。奏が遠くの部屋からここまで来たんだ。異常だろ？」

「う…」

綾人の言葉で少し考える…何か約束してたかな？着いたら……え
ーと

「あっ」

「思い出したか？」

「うん。思い出したって言うか……たぶん奏の寂しさが再発したんだと思う」

その言葉にみんなが顔をしかめた…あ、あれ？

「再発って…てことはしばらく離れることが許さないあれか」

「うんそうだよ綾人」

「何故じゃ？最近お主ら離れておったではないか」

秀吉の言う通り確かに僕らは最近はお互い離れて自分のことをやってたりするんだけど…

「綾人達が言ってたことが正しければ…奏って無理やり離されると」

ドバアアン！

「…！？」

「明久　　！」

ぎゅむ　僕を抱きしめた音

がしっ　そのまま僕を掴む

つかつか　部屋から連れ出す

「明久借りますね？」

「お、おう」
ボタン 扉が閉まる

『なるほど…いきなりのことでテンパって寂しさを覚えたってことか』

『奏は恥ずかしがり屋なんだけど明久のことになると凄いな』

『…異常なまでの行動』

「明久こつちです」

「はは…了解」

奏の手に引つ張られ旅館を歩く…こういう無邪気な時な奏は本当に可愛い

「くすくす」

「くす…本当に可愛いな」

「?どうかしましたか明久?」

「何でもないよ」

奏は首を軽く傾げた後、僕の隣に来て自身の指を僕の指に絡めてくる
いわゆる手をつなぐを強化した感じかな

「…今から行く所…とても綺麗なんです。勿論西村先生の許可を得ています」

「へえ…楽しみだね」

旅館から出ると夕日が照らしている光景に思わず口を開く

「綺麗だね…」

「はい…とても綺麗です」

近くにある海…でも夕日に照らされてクリアブルーでキラキラ光って…凄く綺麗だ。こんな美しい光景初めてだよ

「卯月高原には沢山の綺麗なスポットがあるらしんです…そして一
つ目がこの夕日に照らされた海辺です」

「……………」

奏の方を見た瞬間胸の鼓動が早くなった…夕日に照らされているせ
いか桃色の髪は薄い橙色に変わり瞳もとてもいつもより綺麗だった

「明久？」

「っ！う、うん奏綺麗だよとも」

あれ？

「ふえ！？」

「あ！ええと！」

「……………」

「……………」

しばらく無言状態になってしまっ…う…顔が熱い…僕はこっ言った
ことは苦手だから…どう説明すればいいのか

「……………」
「ありがとう明久」

「……………」
「うん」

そつと奏が寄り添ってきたのを受け静かに海辺に座る…まだ頬が赤いけど…とても安らかな気分だった願わくば…ずっとこうしていたいな

「奏『prrrr』」

電話に妨害された…せつかく…勇気を振り絞って久しぶりに口付けしようかと言おうかと思つたのに

「もしもし…何だよ里穂」

『…大変だよ明久！みんなが…女子の人達に拷問されてるの！』

「え？」

『それでもししたら他の人達が明久を探してるかもしれない』

「どづいっ…」

ガキン！！

「だっ！？」

「明久！？」

何が起きてるのかわからず僕は後ろから放たれた衝撃で沈んでいった…

第七問…ふっ…やっぱり奏のように清らかで清楚かつ可愛く天然だけど恥ずか

「う…うう」

「気がついたか明久！」

「雄二？」

うう…ん。えつと確かさつきまで奏と話していて後ろから襲撃を受
けたんだよね？

「気がついたようね…」

「え？」

そこですよやく今の状況に気づいた…僕は雄二達と一緒に女子に囲
まれていることに…しかも凄く殺気立ってるし

「雄二？これはどういうこと」

「知るか！いきなりなだれ込んで来られたからな」

「そうなんだ…」

「何コソコソ話してるのよ」

声が出た方を見るとCクラスの小山さんとEクラスの中林さんが凄
いオーラを出しながら睨みつけてるではないか…

「小山さん！これは一体どういうこと？」

「とぼけないでよ吉井明久」

「え？」

「あなたが主犯でしょ？」

え？え？本当に何を言ってるんだ小山さんは…僕らは何かをした覚
えはない！

「知ってるわよ。あなたと吉井さんの関係」

「!?!？」

小山さんは表情を変えずに冷ややかな態度のまま口を開いた

「最低ね…嫌がる吉井さんを犯すなんて」

「はあっ!?!」

なんだよそれ……僕が奏に嫌がらせ?するわけないじゃないか!!

「そんな噂嘘だ!」

「嘘じゃないわ。脱衣場にこれがあつたのよ」

そう言つて小山さんは手のひらを広げた…そこに会つたのは

「……………小型カメラ…」

ムツツリーニが静かに口を開いた。小型カメラ?それが理由になる訳

「あなたででしょ?最低ね。彼女がいるのに覗きなんて」

グシヤリと握りつぶす小山さんは今にも襲いかかりそうな目をして
いる……

「ふざけるな。明久がそんなことする訳ないだろうが。だいいち本人が知らないと言つてるだろうが」

「そうじゃ!嘘も大概にするのじゃ!」

「綾人…秀吉…」

「黙りなさい!!いつも事件の原因はFクラスなのよ?それにこのカメラは吉井明久のだつてみんなが言つてるわ!」

「…な…」

圧力をかけられたように力が抜ける…何を言つてるんだよ本当に…

『最低!』

『浮気者!』

『屑!』

『やっぱりFクラスね!』

『吉井さんに謝りなさいよ!』

周りは罵倒の嵐だ…なんで…誰がそんなことを

「アキ！最低よ！奏が大好きじゃなかったの!？」

「美波…！なんで」

「明久君！信じていましたのに…」

「姫路さんまで…」

どうして…どうしてこんなことに………

「姫路…島田…お前ら…」

綾人が拳を握りしめていたことに気づいた…なんとかしなくちゃ

「そうだよ。僕がやったんだ」

「明久!？」

「ようやく認めたわね…」

「だけど…僕だけだ！周りの奴らは違う！関係ないんだ！」

「明久何…だから…他のみんなを解放して！」

これしかない…今できることはこれしかないんだ…

「いいわよ…みんな。吉井だけを部屋に残すのよ」

中林さんの言葉で女子達が動く…はは…なんだよみんな…そんな顔

しないでよ

「うわあ!」「」

他のみんなは女子達によって廊下へ追い出された……そして静かにドアが閉まる……

「アキ…信じてたのに…!」

「明久君…酷いです。奏ちゃんが可哀相です!」

「信じてたなら普通は拷問器具なんて持っていないよね?」

二人は殺気立ってるのかうっすらと笑っている…冗談にならないほど怖いんだけど……

「吉井君。いえ吉井」

「な、何かな小山さん?」

「覚悟はできているんでしょうね?」

「…はは。何を言ってるんだ…あつ根本君最近彼女…ぐわあ!」

鳩尾に鋭い蹴りが炸裂する…あ、あれ?確かここって普通は石垣を置いていくんじゃない

「あんな奴のこと話さないで。虫が走るわ」

「…あんな奴つて!根本君は生まれ変わったんだよ!げふあ!」

またしても鳩尾に今度は鋭い拳が…

「アキ!覚悟しなさい!」

「明久君じっくりとお話ししましょうね?」

「美波?…うがあ!姫路さん!?その関節はそっちに曲がらな…う

ぐあ!」

バキリバキリと嫌な音が響き…両腕の関節を曲げられた…悲しみ暇なく女子達から蹴られたり殴られたり…首を絞められたり

「げほ……！」

今まで一番きつい拷問だった…ただ反撃はできる…でもそんなことをしたら…

「ぐふっ！」

『この！』

『くたばりなさい観察処分者！』

『変態！』

この人達は間違いなく…怪我をするだろう……そんなことはしたくない

『歯を食いしばりなさいアキー！』

「！？………がっ」

美波の鉄拳を顔に受け口から赤い液体が飛び散ったのを最後に僕はその場に倒れた

第八問：彼の名前は寺門雅俊（てらかどまさとし）

「明久：！大丈夫明久！？」

「吉井さん！離れて！」

明久を抱き起こそうとすると一人の女子の子が私を引き離すようにひっぱりました

「っ…何するの？」

「吉井さん！こいつに近づいたら駄目よ！」

「駄目？」

何故駄目なのか全くわからず首を傾げていると一人の女子が明久に指を指して口を開きました

「吉井さんはこいつに騙されてたんです！」

「騙され…た？」

「そうです！こいつは女子風呂を覗いたんです！」

え…明久が？

「ふふっ…冗談はやめてくださいよ。明久がそんなことするはずないじゃないですかあ」

「それがしたのよ…」

「小山さん？」

鋭い視線で明久を見ながらCクラス代表の小山さんは手の中を広げました

これは小型カメラ…ですよね？

「これでこの馬鹿は風呂を覗いたのよ」

「へ？ちよつ、ちよつと待っててください！」

明久を連れて行こうとしている小山さん達の前に割って入りました。小山さんは首を傾げていますが…おかしいです

「それが明久の物ってどうしてわかるんですか!？」

「みんなが言ってるの。これは吉井君の物だって…」

「……………それだけですか？」

「え…?」

ぐぐと拳を握りしめ小山さん達を睨みつけました…その様子に小山さん達は訳がわからないように驚いています

「それだけで明久を疑ってるんですか!？他の理由はないんですか!？それにみんなが言ったからって明久の私物になるんですか!？」

「…吉井さん？」

「……………どうして…どうしてみんな明久を馬鹿にするの?どうしてFクラスを馬鹿にするの?あんなにあんなに楽しいクラスなのにぐぐぐと拳を強く握りしめて…私は明久の方へ走り出しました

「きゃ!」

「吉井さん!？」

そして女子のみんなを引き離し…覆つようにかぶさる…

「吉井さん何やってるの!？」

「嫌です」

「え？」

「明久は渡さないです」

「何言ってるの吉井さん!離れて!」

「そつよ!危ないわ!」

「危ない？そんなわけない！！」

「「！？」」

明久は……絶対人を裏切らない……人を信じるとても優しい人……そんな人が覗きなんてする訳ない！

「……………私は明久を信じます」

「吉井さん！？」

「だって私は明久の彼女です。だから……愛しい人のことを疑うことなんてしません！」

「「！！！」」

周りの人達は目を見開きながら後ろへ下がっていきました……

『可哀想な吉井さん。裏切られても信じるなんてさ』

「え……？誰……………あうっ！……」

私の意識はそこでなくなっていきました。……………明久

N O s i d e

「ん？なんだあれ？」

鈴村直也は許可を得て散歩をしている途中に海辺の方で人が群がっているのを不思議に感じた

「……………あれって明久と……奏か？なんで倒れてんだ？」

直也は少し早く歩き、近づいていく……耳をすましてみると会話が聞こえてきたのだった

『雅俊君!?!』

『何やってるのよ!』

『ごめん…でもこうするしか手はなかったんだ。吉井さんは僕に任
してみんなはこの変態を頼む』

『助かったわ雅俊君。みんな行くわよ!』

『はい!』

「なんだあれ…変態?どういうことだ?って待て待て。なんで明久
は連れてかれてんだ…!?!」
直也が首を傾げているのもつかの間、次に起きたことに直也は凝視
した…

『ふふつやつとだ。やっと二人きりになれたね吉井さん』

女子達が言っていた美少年…雅俊は愛おしいように奏を抱き起こした

「…………!?!おいおい…確か奏は明久の彼女だったよな?」直也は何
かに焦ったのか足を踏み出そうとしたが急に止まった。もし…今行
けばなにかがわからなくなりそうだったからだ

『吉井さん…なんであんな奴が好きなんだ。僕はこんなにも君が大
好きなのに』

雅俊は髪を撫でながら悲しい眼差しをしていた

『君には僕がふさわしいんだ。僕みたいな優等生で優しく顔もス
マイルもいい…それに僕の家は君と同じでお金持ちだ……………』

雅俊はゆっくりと奏の顎を掴む

「んん……………」

奏は寝ぼけながらゆっくりと顔を動かした

「!？」

雅俊はそれに驚き思わず目を見開いた…奏は目を開けずに再び静かに眠った…

桃色の髪が垂れて雅俊の腕にかかった

「!？」

雅俊は頬を赤くさせながらゆっくりと撫でる。そして微笑む奏を見てニヤリと笑う

(……………なんだあいつ…。くっ…我慢だ)

直也は気持ち悪さのあまり拳を握りしめるがまだ何かがつかめると思い動くのを止める

『……………吉井さん…。僕は…』

ふいに奏が寝ぼけながら口を開く。雅俊は眼鏡をニミリ上げてゴクリと唾を飲み込んだ

『明久……………今日はカレー作ってきました…ふふ』

奏が口にしたのは明久の名前とおそらくお弁当のことだった

『…吉井だと?やっぱり吉井さんはいつを見るんだね』

雅俊はゆっくりと眼鏡を上げた後に奏の顎を掴む

そして奏の綺麗な桃色の唇を己の唇へと……………「おい!!お前何やるうとしてんだよ!」奏の唇は直也によって守られたのだった

「……………!く…まさかの鈴村だと!」

雅俊は逃げ出すようにすぐに走り出した…直也は奏の側を来た後、すぐに携帯電話を開いた

「……………俺だ!明久は……………何?女子達に拷問されてる!?!?…わ

「かつたすぐ行くぜ！」

直也は奏を背負い真剣な眼差しで旅館へと帰って行くのだった

そして…同時刻男子部屋では傷だらけで唇から血が流れている
吉井明久がいたのだった

明久 side

「……………頭が重いし体中が痛い…立ち上がれそうにないや…」
女子達からの拷問の後……………真っ暗な部屋で僕は壁にもたれかかって
いた

「みんなが来ない……………一体どうしたんだろ」
まさか女子達に……………いやそれはないか……………
ぼんやりと夕闇に染まりつつある外を眺めていると静かにドアが開
いた

誰……………だろっ？

電気をつけることなく静かに上がってくる……………

「……………明久……………」

「……………奏……………」

声からしてわかる……………彼女だ……………

「……………明久……………」

一瞬だけ光が照らし出され顔が見えた。

「ひぐっ……………」

奏の顔は既に涙でぐしゃぐしゃになっていた……僕はしゃがみながら泣いてる奏を微笑みながら静かに抱きしめた

「ありがとう……………」

「……………明久あ……………」

奏がなんでここへ来たのかわかった気がした……………そして同時にそのことに対して酷く胸が痛んだ

「明久…明久」

「…大丈夫。大丈夫だから」

優しく奏を撫でて静かに落ち着かせる…奏は首に両腕を回して密着する

「……………キスして明久」

「……………うん」

受け入れるまま…自然のまま静かに互いの唇を合わせゆっくりと瞼を閉じた……………

『……………吉井君は吉井さんのことを本当に』

小山は少し開いていたドアを静かに閉じて同時に自分への怒りに拳を握りしめた

第九問：食堂と男子部屋

「くそ。あいつら」

俺達は食堂で夕飯を食べていた。さっきのこともありみんな暗い。特に綾人に関しては箸をギギギと握っていた

「あんなのおかしいよ」

里穂は不機嫌な顔をしながらご飯をかきこむ

「そうじゃの。このままでは明久が犯人として疑われてしまうのじや」

「そんな。明久君はわざと自分だって言ったんでしょ？」

秀吉がつぶやいたことに種山は不安な顔になっていた

「とにかく。暗くなってもしょうがねえ」

「……今は犯人を見つけ出すことと吉井の疑いを解くことが大事」

雄二は辺りを見回しながら背伸びをして霧島は静かに言う

だが、霧島の目は鋭く怖かった。雄二もそれに気づいてるだろう

「だが下手に動けば余計に立場が悪くなるぞ？」

俺はそう言っただけでエビフライを口に含む

「おい一麻。ずっと気になってたんだがお前何処へ行ってたんだよ？」

ああ。そう言えば言うの忘れてたな……

「ああ。ムツツリー二とちょっと捜査しに行ってたんだよ」

「……だいたい情報は掴めた」

「本当！？」

「ああ……」

みんなを近くに寄らせて俺とムツツリー二は小声で喋った

「……後で里穂達の部屋に集合だ。今話すと聞こえてしまうかもしれないからな」

「わかった」

「ムツツリー二君…僕の下着見たい？」

「…今はそんな気分じゃない（ポタポタ）これはご飯のせい」
ムツツリー二…それはいくらなんでも無茶あるぞ…

だが、ムツツリー二と工藤のおかげで固くなっていた表情はだいぶやわらいでいた

そんな時、数人の生徒が俺達が座っている場所に手を振って近づいて来る

「ん…？アリスと奏達じゃないか」

「直也と美代も一緒じゃの」

その言葉に綾人がピクリと動き顔を上げた

「よーよー。みんな暗い顔しちゃってー。こういう時こそ明るくだぜいー！」

アリスは相変わらずおちゃらけているがごもつともだ

「…奏？どうしたの」

「……………翔子…ひぐつ！」

奏は目に涙をためながら霧島に抱きついた…

『なにいい！？』

その光景を見た周りの馬鹿達が鼻血を吹き出していた

「おいコラ。写真撮るんじゃないやねえ」

『グシヤ』

一人の生徒からカメラを取り上げ綾人に渡す。綾人は普通の顔をしたらま握りつぶした。相当きてるな…綾人

「…奏何があつたの？」

「翔子…！翔子！」

「…落ち着いて奏」

流石の霧島も焦っていた。それほどよからぬことがあったんだろうな

「奏？一体どうしたんだ？」

「…綾人君！」

「うおっ…と」

奏はぐしゃぐしゃになりながら綾人に抱きついた…ふむ…これは本
当にヤバいな

『『異端者は死刑だ！！』』

こいつらが尋常じゃない程やべえ…後

「…明久の親友でありながら…親友の妻に抱きつくとは…許せませ
んわこの豚野郎！」

「それでもアキちゃ…吉井君の妻なの綾人君！？」
いつの間にか隣にいたこいつらもヤバい…

「落ち着け！清水！悲しい時に泣きつくのはよくあるだろ！？玉野
おお！お前は何言ってるんだああ！」

綾人は素早くFFF団をなぎ倒し…俺は二人の暴走を止めた…。奏
は綾人の変わりにアリスに抱きついていてアリスは優しく撫でていた
おかしい…玉野が特におかしいぜ

「本当か鈴村？」

「ああ…危ない所だったぜ。だがもう少し早ければ良かったかな」
遊戯王の十代に似ている鈴村直也は溜め息をついてエビフライを食べていた

その横では7、5巻のアキちゃんを可愛くした明久の妹である美代が慰めていた

なんとというか新鮮だ

「寺門だっけか？…終わったなあいつ。」

「ああ…全ての明久と奏ファンを敵に回したからな」

綾人と雄二は落ち着いてお茶を飲む

「……許せない！」

「僕もそういう人は苦手かな」

「呆れてものが言えないわ」

流石女子だな…霧島に関してはいまだに泣いている奏を慰めながら拳を握りしめていた

「じゃあ今回の犯人は寺門か？」

「いや…確信できないぜ」

「どういうことじゃ直也」直也はポンポンと美代の頭を叩きながらそう言った。だが普通なら寺門を犯人と見て間違いないだろう。事実を聞いた奏のこの表情と言い、奴の行動と言い、明久が犯人扱いされたことにつながる

「ああ。俺の勝手な予想なんだけどな…犯人は一人じゃないってことさ…」

「……………!？」

その言葉にみんなが顔をしかめた…まじかよ

「……………ところでアッキーは？」

「あ…」

そう言えば……………もう拷問は終わってるから入れるはずだ…

「……………くそ…。中林に小山の奴」

綾人は再び箸をギギギと握りへし折った

「……………私が…呼んできません」

「奏？お前夕飯食べてないだろ？」

「大丈夫です……………」

奏は涙を拭いながら笑った後、すぐに食堂から出て行った

「そっだよな…一番つらいのはあいつだよな」

「……………奏」

……………ん？あれは小山か……………？奏の後について行きやがった…

「小山…!」

綾人はガタンと立ち上がって食堂を出て行った。小山を追いかけたか

「私が行くね!」

「ああ頼む」

アリスはガタンと立ち上がり追うように食堂を後にした

『神薙綾人か……………ふふ。これで吉井君をさらに追い込む材料が手に入ったわ』

『……………今夜実行だな』

明久 side

「……………は」

ゆっくりと奏を離すと銀色の糸が出来上がっていた

奏は目がとろんとなりながら銀色の糸を切る…互いに頬が赤い…

「奏と口づけしたのって…二週間ぶりかな？」

「うん……………」

奏は僕の足の間に座りゆっくり頷いた…まだ涙がたまっているけど
だいぶ落ち着いてきていた

「……………奏」

「うん……………」

そっと彼女の震えている手を優しく絡め頭を撫でる

奏は顔を歪めた後、僕の名前を呼んだ。

そして…何があつたのか淡々と語ってくれたのだった

「今日…一緒に寝る？」

「……………無理だよ明久。それは禁止事項でしょ？」

「うん…だからさ…ちよつと規則破つてみないかなつて」

「……………くす。うん…いいかもしれないね」

奏はくるりと方向転換すると再び抱きついてきた。ゆっくりと腕を腰に回して受け入れる

「大丈夫だよ奏…。必ず守るから。その寺門つて奴からもね」

「うん…ねえ明久」

「ん？」

「もし…もしも明久が明久じゃなくなる事になつても私は一生明久を愛してるからね」

「うん…僕もだよ」

互いに笑いあい…もう一度口づけをする…それはさっきよりも甘くて深かった

第九問：人は叩かれて成長するが、意味が無い奴もいる（前書き）

この合宿編は内容が本編とだいぶ違いブレイクしています！

果たして犯人は誰なのか…

第九問：人は叩かれて成長するが、意味が無い奴もいる

「……私は……」

ギギギと拳を握りしめる小山……。彼女は二人を見て後悔をしていた
あんなに結ばれてる二人があんなことをするはずがないと……自分
分は……二人を見ていなかった……それ以前に人を見下していたと

「そうさ小山。お前は明久達を追い詰めたんだ」

「!?!?」

小山は反射的に振り返ると睨みつけながら仁王立ちをしている綾人がいた

「……反省してるわ」

「反省してるとか関係ないんだよ。お前は明久を傷つけたんだぞ？」
その言葉に小山はハツとなる。綾人は溜め息をつけてから再び口を開いた

「その時点で全然わかってないな。明久が今どんな状況か部屋を見たからわかるだろ？」

「……っ!?!?あなた目撃してたの!?!?」

「目撃も何も……覗いてた奴に言われたくないけどな」
「……!?!?」

小山は俯き拳を再び握る。そしてポロポロと涙をこぼし始める……

「……わかってたわ。本当は……吉井君じゃないって……でもあなた達
がいつも問題ばかり起こすから疑うしかなかったのよ!?!?」

「ふざけんな!?!?そんな言い訳聞きたくねえよ!?!?問題ばかり?お前
にFクラスの何がわかるんだ!?!?あいつらが馬鹿やるのはいつも……
馬鹿正直に突き通してみんなの為に恐れず進んでんだ!?!?それに明久
を何故疑った?俺や雄二、一麻もいただろ?!!」

「………う………う………」

小山は綾人の怒りを受け体を震えさせ…涙をポタポタとこぼす

「泣いてる暇があるなら行動で示せ……………」

綾人はぐぐぐと拳を握る…そしてギリギリと歯を食いしばる…本当は怒りたくて仕方ない

だが…怒りだけでは何も解決しない

「お前が本当に後悔してるなら行動で示せ！！俺はもう言わない。

だが、再び明久と奏を傷つけたら俺はお前を絶対に許さない」

綾人は吐き捨てるように言って小山の元から去って行く

小山は涙を流しながら床をじっと見つめていたのだった

アリスはさっきと違い緩い表情になっていた綾人の元へ静かに歩いていく

「お疲れ様…久しぶりに見たなあ。綾人の説教」

「…本当はまだまだ足りないが今は明久達をなんとかしてやらないといけないからな」

「うん…」

綾人が怒ったことがあるのはこれで三回目になる…綾人に説教を受けた人は軽いショックを受け中には倒れた人までいたくらいだ

だが、綾人の説教は常に正しい方へと導いていく。小山も答え次第では変われるのだ

「帰ったら…仮面ライダーブラック見ないとな」

「くす…綾人。相変わらず好きだね」

「当たり前だ。一日必ず見るからな…仮面ライダーブラックは俺のエネルギー源だ」

「あはは！相変わらずクールだね私のダーリンは」

綾人は静かにアリスの頭を撫でる。アリスは気持ちよさそうに目をつぶっていた

「…必ず…犯人を見つけ出さないとな」

「うん…」

「二人の為にもな…」

「カナナン達なら今頃寝ちゃってるよ？」

「だろうな。だが入浴があるし起こしてやらないとな」

互いに苦笑しながら廊下を歩く…そして二人は後ろから感じる気配に気づいていた

「…さてと…そろそろ出てきたらどうだ？須川、新田」

「…！？」

綾人は二人の後ろに回っており素早く腕を掴んだ

二人は驚きながらジタバタするが無意味だった

「さて……聞かせてもらおうぞ」

「ぐふ！」

綾人は二人の鳩尾を打ち気絶させた。アリスは二人の顔をつねってぶーぶーとふてくされていた

「まさかFクラスの人が敵だったなんてさ〜」

「いや、こいつらは利用されただけだ…となると…犯人はFクラスも関係しているのか…？」

綾人は気絶した二人を担ぎ、アリスは綾人の腕に自身の腕を回して寄り添いながら明久達の所へ向かったのだった

場所は変わって明久達の部屋では…

「……ムニヤ」

眠っている奏に掛け布団を掛け明久はその寝顔を満足げに見ていた。さっきまで開いていた携帯をパタンと閉じて溜め息をする

「……はあ。今夜は骨が折れそうだ」

ぐっぐと背伸びをした後、もう一度奏の寝顔を覗き込む

「しばらく…会えないかな……………」

愛しさ…そして寂しさを堪えながらゆっくと奏の桃色の唇にそっ
と自身の唇を触れ、ゆっくと離れた

「…じゃあね奏」

窓を開けると涼しい風が吹き渡る…空は漆黒にそまりつつあるがまだ明るい

スウと息を吸い込みゆっくりと目をつぶった

「……………よし」

そしてゆっくりと目を開けて制服の姿で窓から飛び降りたのだった

第十問：たいがいの事件に犯人は複数いるよなあ（前書き）

更新が遅くなりました…今日は犯人が少しわかります

第十問：たいがいの事件に犯人は複数いるよなあ

女子部屋：そこは近づいてはならぬ魅惑の聖地……

今俺達バカテスメンバーはそんな夢の場所に集まっていた

「……………で、なんで奏達の部屋なんだ」

雄二が呆れるように腕を組んでいた…ふっだから馬鹿嫌なのだよ。

俺が単に下心だけだと思っただか？残念だがナンセンスだ

「…わからないのか？男子部屋だと男子達が押し込んでくる可能性が高いだろ？」

「ぐ…確かに」

雄二は悔しそうな顔をしている…苦しめ苦しめ…

「ねえ…綾人君」

「なんだ里穂」

「あれは何？」

里穂が指を指した場所には縄でグルグルにされ気絶をしている男子達がいた

「気にするな」

「気になるよ！」

「…はあ」

俺はため息をつきながら里穂の頭をガシガシと撫でる。里穂はすぐに真っ赤になり振り返るが気にせず彼女の耳元まで行き眩く

「…夜を安心して眠りたくないのか？」

「なな！？何言ってるの！」

そつと顔を離して笑うと更に真っ赤になった里穂に突き飛ばされてしまった

痛てて…全く。これは夜は覚悟してもらおうか

「よっ」

ゲシッ！

「きゃあ！一麻君何やってるの!？」

「ああ…こいつら裏切ったからちよつとしたお仕置きだよ」
「まあいつもの借りもかねてだがな…」

「駄目だよ！そりゃ…気持ちわかるけど」

ゲシッ×4

バキッ

「ええええ!？」

あつ…バキッは綾人な…。まあ後できつちりと須川達にはOHAN
ASHIしなきやな

「さて本題に入るぞ」

「ようやくか…」

俺達は須川達を外に追い出してからメインに入る。さあてみんなの情報をまとめるか

とその前に

「ひぐつ！…明久ああ！どこに行っただんですかあ！」

「……落ち着いて奏」

「大丈夫。大丈夫だから」

泣きじゃくる奏を必死に慰める霧島と木下…お疲れ様だな…

というか明久…また勝手しやがって…後で殴る…

「……さて話を戻すぞ」

雄二が頭を抱えながら言う…みんな頷き奏は地味なオーラを出して一人隅に座っている。まあ仕方ないっちゃ仕方ないよな

「はあ…ムツリーニ」

「……（コクン）」

ムツリーニはガサガサと鞆をあさりノートパソコンを取り出した

「……調べた結果二つのことが判明した」

「二つ？」

「へえ…どんなことだ？」

「………これを見て欲しい」

ムッツリーニは器用にカタカタと打ち込み保存してあるファイルから映像を出す

「俺が撮影したんだが……危うく気づかれるところだったぜ」

ムッツリーニは頷きながらその動画画面を押す…すると拡大化して動画が再生された

「「!？」」

画面に映し出し出されていたのは…何かを話している例の寺門と…

……

「こいつ…誰だ？」

「……Aクラスの伊能カノン……噂ではFクラスに復讐しようと考えているらしい……」

「伊能カノン……」

霧島が少し手を顎に当てた後、ハツとしたように口を開いた

「……この人…知ってる」

「うん。確か吉井君のことを話していた人だよな」

「あっ…私、あの寺門君と伊能さんが付き合ってるって聞いた」

元Aクラスのメンバー達は次々と思い出したように話している

「じゃあ…犯人はこの二人で決定か？」

「いや…そうでもないんだ」

綾人の質問に首を振る。ムッツリーニはカタカタと操作して音量を出す

「ここからは怪しい話しがあったから音量タイプにしたのさ」

「…よくビデオカメラ持ってたわね」

木下の質問に目を逸らし口笛を吹く。男にはやらないといけないこ

とがあるのさ

雅俊：本当にやる気なの？

聞こえてきたのは伊能の声だ…画面では影でコソコソと話しているのが映っている

当たり前さ。だって奏さんの裸だよ？見ないともったいないじゃないか

そうは言ってもバレたら危ないわよ？

大丈夫だ。その為のFクラスだからね。まずはAからFクラスのメンバー達を味方につけて…吉井明久に攻撃対象を向ける

吉井君ね…でもあのFクラスがそう簡単に乗るかしら？

問題ないさ。あいつらは馬鹿と屑の集まりなんだ。簡単に利用できるさ

ふん。でも吉井君を倒すのは難しいんじゃない？

いや簡単だよ。実は協力してくれるメンバーの一人から小型力メラを貰うんだ。そしてそれを利用して吉井明久を精神的に追い詰める。まあさしずめ奴は女の子に手を出せないからな

あなた…酷いわね

ふん。嫉妬で一杯なんだよ…見せびらかしやがって…カノン。君だって吉井奏さんが欲しいだろ？

違うと言ったら嘘になるわね…

決まりだね。さて他のメンバー達と合流して更に作戦を…

「ここで映像は終わりだ」

ムツツリー二が静かに閉じるとみんなから怒りのオーラを感じた…
まあそうだよな

「根本が生まれ変わってスッキリしたと思えば……」
「……うざい奴の登場じゃの」

雄二は軽く溜め息を秀吉は頭を抱えていた。はあ……俺まで気分悪いな

「……吉井だけに背負わせたりしない」

霧島の言葉にみんなが頷き奏もいつの間にか混ざっていた

「お前大丈夫か？」

「はい。明久がそんなことになってるなんて……許せないです」

「決まりだな。寺門は明久に嫉妬、伊能はレズだから犯人とは言えない。犯人はおそらく小型カメラを持ってる奴だ」

綾人は怪訝そうに外をみる。伊能、寺門は復讐、となると……だな

「実はそれも調べてある」

「「本当か!？」」

「ああ……ムツツリーニ」

「……犯人はBクラスで、女子……そして胸に赤い傷がある」

「女子か……見つけるのは大変だな……というより胸は無理だぞ？」

みんなが唸っていると奏がピシリと手を上げた

「どうした奏？」

「思い出したんですけど……もうお風呂の時間です」

「……あ。そうか……風呂で確認して貰えば……」

「そういうことね……」

「だが……どうやって調べるんだ……BクラスはAクラスと入浴するはずだ」

「あの……Aクラスに知り合いがいるのでその人に頼みましょうか？」

「……確かにあの人ならやってくれそう」

奏と霧島の表情からすると……二人の知り合いか

「今はそれしかないな」

「よし … 決まりだな」

俺達はすくつと立ち上がってお互いに頷きあった

四日も犯人探しなんて冗談じゃねえ。絶対今日中に見つけてやらあ

第十一問：馬鹿なあいつはやっぱり馬鹿（前書き）

連続更新です。今回は…あいつが

第十一問：馬鹿なあいつはやっぱり馬鹿

「失礼しますババア！」

ドアを開けてババア：もとい妖怪がいる部屋に入る

ババアは相変わらず不機嫌な顔をしている……むっ！失礼な

「…あんたは相変わらず馬鹿さね」

「余計なお世話ですよ！」

くそ！妖怪め…相変わらず見下しやがって…おっといけないいけない

「で、なんの用さね」

「…はい。実は…」

少し言葉が詰まりババア長が眉をひそめた。やっぱり…危ないよね

「なんだい？またよからぬことを考えてるんじゃないさね？」

「違います！いくらババア長でも失礼ですよ？僕はただ覗きの許可を得にきただけです！」

胸を張って誇らしげに…どうだババア長！これでも僕を馬鹿にするか？

「やっぱり馬鹿さね」

「言いやがったああ！必死に頑張ったのにさらにと馬鹿と言ったよこの人！！」

「覗き？馬鹿じゃないかアンタは。許可しないよ」

「なっ！！困ります！」

「何が困まるさね？」

学園長はキツと睨みつけてくる……くそ……

「そりゃ覗きなんて僕だつて嫌だとわかってる」

「……じゃあ諦めな。覗きなんてしてる暇があったら……少しは学」で
も……こうしなきゃ駄目なんだ！！」

「……こうしなきゃみんなに迷惑をかける……これは僕がやらなきゃ駄
目だ。僕自身に関わる問題なんだ」

学園長を真っ直ぐ見つめて拳を握る。学園長は少し驚いた顔をしな
がら僕を見る

みんなに奏に迷惑をかけたくない……奏は僕のせいで泣いてるんだ

「……だから……守りたいんです。ダークヒーローになっても変態と言
われても……」

「……吉井アンタ何を考えてるさね」

「……僕は純粹に奏を……未来の妻を守りたいだけです。」

真っ直ぐ見つめたまま軽く笑う。わかってる。今、僕がどんな状況
におかれてるのかわかってるさ

「……ふん。ようやくアンタの言いたいことがわかったよ」

「……え」

「ダークヒーロー？笑わせるねえ……。ダークヒーローってのは影で
守る者なのさ。けど吉井アンタは真っ正面からぶつかっていく」

「……」

学園長はふつと笑うとニヤリと笑った

「アンタはあの娘のお馬鹿なヒーローさね」

「ババア長……」

ババア長のこんな顔を見たのは初めてだ……なんか気持ち悪いなあ

覚悟はできてるさね？

ババア長はゆつくりと顔を上げてじつと見つめてくる。覚悟？そんなの昔から決まってるさ！そう…どんなことがあっても守る…

「学園長が僕に与えた観察処分者のレッテルが貼られてるののおかげで覚悟どころじゃないですよ」

「くく…そうかい。なら最初から腹をくくるしかないさね」
腹をくくるなんて簡単だ。例えば綾人達を敵に回しても僕はやらないといけない……主人公というのは最終的には一人でラスボスと戦うんだからね

「じゃあ特別に許可するよ。アンタがやりたいことをやればいいさ。しかし吉井、アンタは生徒と教師を相手しなくちゃいけないさね？」
そうだ…必ず教師達は今日、防衛している。だが、生徒はいないと考えれば……いやいる。雄二や綾人達だ…それにみんなの性格からすれば…おそらく対策を打ってくるはずだ
けどあいつらはそんなことを一日目じゃ思いつかない
なら…僕がやるべきことは簡単だ

「わかっています。例えどんなことになっても…どんなに責任がとわれようとも必ずやります！」

「いい返事さね。ならこれを持っていきな」

学園長はポイツと何かを投げしてきた。落とさないように手のひらでキャッチする

良かった…ババア長が馬鹿で良かった…

「失礼しました」

ガチャリと閉めて息をはく…ふうなんとかなったね。これで後戻りは出来ない…失敗すれば…なんて考えてる暇ないか

「明久…」

脳裏に浮かんだのは大切な彼女だった…

「うっ…自分で言うておいてなんだけど…会いたいよ奏」

今頃泣いてるよね…はあ…奏を抱きしめたいなあ…うっ…奏

「……………吉井君」

「ひゃあ!？」

妄想と悲しみにふけてたらいきなり後ろから声をかけられて思わず飛び上がった…うわあ!最悪だ!情けない所見られちゃっ…たよ

「うっ…恥ずか…あれ小山さん？」

頭を抱えて見上げると元気の無い顔をした小山さんが立っていたのだった

第十二問：僕らの覗き日より一日目！

『いよいよ…だいいよいよだああ！』

『ふひひひ…女子の裸あ』

『にふふ…』

『裸！裸！』

『百合！』

みんなそれぞれの目的がある中今夜…Fクラスの協力により覗き作戦が実行される…

大丈夫だ。罪は全て学園一の馬鹿が背負うんだからな

『みんな！アガルタに目指して直行だあ！！』

『おう！！！！』

馬鹿な奴ら…利用されてるとも知らずに…寺門なんて荒い息しやが
つて…よっぽど吉井奏の裸を見たいんだな

だが…寺門…アガルタを見るのはお前じゃない…この出川晋太郎でがわしんたろう様
だ！！

さて…そろそろFクラスの入浴時間か…たくつあの馬鹿は何処に行つたんだ

「雄二…」

「なんだ？綾人」

綾人はのぼせてるのか少し顔が赤い…かく言う俺もだいぶきてるんだがな…

「俺達まで入って大丈夫か？」

確かに…今回の事件が寺門が関わってるなら確実に危ないだろうな…それにあの馬鹿達も協力と言うことは奴らの狙いはおそらく覗きだろうな。となると美女が集まつてるFクラスは危ない…だが…

「ああ…問題ないだろ…なんせ

『ぎゃああああ!!』

『教師だとおお!?!』

『貴様ら覗きとはいいい度胸だな』

『『鉄人!?!ぎゃあああああああああ!!』』

『長谷川!死ぬなあああ!』

『撤退だ!あああ!』

『くそ!教師達め!なんて酷い奴らだ!』

『覗きくらいさせる馬鹿教師!』

『『試獣召喚!!!』』

『高橋先生!?!』

『な、700うう!?!』

『嫌だあ！まだ帰りたくないよお！』

『貴様…人間じゃなあああ！』

『無理無理無理無理無理無理！』

『須川あああ！』

教師達が居るだろうからな

「ああ…なるほど」

「……………哀れ」

「当然の報いじゃな」

「まっ。今日はゆっくりしよつぜ」

「ああ……………」

こうして俺達は心ゆくまで温泉を堪能したのだった……………

「だが……………」

「けど……………」

「問題は明日だね」

「問題は明日だな」

ん？さつき馬鹿と台詞がかぶった気がしたような……………

明久side

「……………さつきの馬鹿と台詞がかぶった気がしたような」
まあいいか……………とりあえず僕は別室に居る……………理由は簡単だ

みんなの部屋に戻って来たらず何があつたか問われる…そんな訳には行かないから僕だけババア長に頼んで一階の別室と風呂を使わせてもらっているんだ

まあ…隠れるのに丁度いいし…明日の自習の時はみんなと一緒にいるその時間われたら上手く隠せばいい…

「よし…今日はゆっくりと寝るかなあ…『ガチャリ』ゑ？」

え…誰？ババア長？鉄人？それともこの部屋の住人？いやいや、ここは一人部屋だし…ババア長や鉄人は今頃覗きの対策を立ててるはずだ

ちなみに鉄人達は僕が覗きをすることを知らない

「…ふう。いいお湯でし……………た」

「……………え…？」

入って来た人に目を疑う…ちょっと待てちょっと待つんだ吉井明久。これは何かの偶然か？いや、でも…目の前には少し浴衣から谷間を覗かせて…違う違う！何を考えてるんだよ！

「…明久？」

「奏…どうしてここに」

僕は奏が何故来たのかを最初に尋ねてしまった…普通ならここは

「奏！」

「明久！」

お互いに駆け寄り…静かに抱きしめる…こんなシチュエーションだよね？

「…明久…」

奏は呆然としたまま体をフルフルと震わせていた…おかげで奏のWメロンがゆさゆさと揺れて…鼻血が…

「明久あああ!!」

ダンツと跳躍し奏はそのままダイブしてくる…僕はいきなりのこと
で対応が遅れ…結果

「かな…ぐえふ!」

奏の下敷きになってしまった……うつ…凄く良い匂いが鼻をくす
ぐる…

「明久…!明久!」

「ちよっ…むぎゃ」

奏は僕をかき抱くように抱きしめ胸を押し付けてぎゅうと力を入れ
る…奏のたわわが顔に当たり…そしてこすれる…こんなことされち
や理性なんてなくなってしまっよう!!

「ん…!?!」

口の中に奏の舌が入り…過激な音になっていく…奏は頬を赤くさせ
ながら僕の顔を掴み離れないようにする…

「……………んん!」

正直理性がなくなってしまうそうだ…離れないといけないのに…舌
を絡めている自分がある…

「……………ふあ……………」

奏の舌を逆に絡めとりゆっくりと押し倒す…奏は少しビクリとした
がすぐに腕を首に回して来る…過激な音は更に大きくなり奏が少し
身をよじった

「明久……………んん…恥ずか…しい…よお…んちゅ」

「……………んちゅ…勝手に…いなくなつた…罪滅ぼしを…ん……………」

「…ふ…あ。そんな……………んちゅ…別に気にしてない…の…ひゃう」

奏の唇と口からゆっくりと自身の唇と舌を抜くと銀色の糸が出来上

がっていた

奏はそれを見て真っ赤になり僕は鼻の辺りが熱くなった…

一日目は…平和に終わったのだった

そしてこの後、我に戻った奏に自問自答されるのだった

第十三問：〜朝ご飯〜イタズラから出た甘さ？（前書き）

遅くなりました！続き更新です！

第十三問：朝ご飯〜イタズラから出た甘さ？

強化合宿二日目スタートした……

昨日覗きの事件があったらしく女子のみんなが朝から騒がしい……
…そんな中、食堂で僕は箸を持ったままぼーとしていた

「明久君？どうしたの？」

「……うん……ちょっといろいろあってさ」

種山さんが心配そうに覗き込んできたので軽く笑う。疲れてるとい
うよ眠たいが正当だ。奏を抱いたからかな？うーん……

「朝から惚けてるぞ明久」

「……っ！。……綾人」

我に返り見上げると綾人が笑っていながら料理が置いてある盆を持
っていた……

「隣座つていいか？」

「あ……うん。勿論さ」

「悪いな」綾人は盆を置き椅子をガタツと引き静かに座った……。ち
なみに反対側では奏が前に座ってる種山さんと話している

「……いただきます」

綾人は箸と茶碗を持ちご飯を口に入れていく。綾人は美味いと言う
顔をしながら次々と食べ進んでいく。奏達は相変わらず話しに夢中
になっていた

なんか静かすぎないかな？

いや、別にいつものことなんだけどさ……普通僕が勝手にいなくなっ

た理由聞くよね？何か違うことを考えてるのかな？もしかしたら忘れてるとか

「なあ明久」

「な、何？」

黙々と食べていると綾人が急に手を止めてじつと水が入ったコップを眺めていた

その行動に少し緊張したから水を飲んでから再び綾人を見た

「奏をあまり泣かすなよ？」

「そんなことわかって」

言葉が詰まった…綾人は相変わらずコップを眺めているけど…何故かそこからは静かな怒りを感じた

心配…奏を泣かしたことに對する後悔が胸をえぐったように痛む

それほど今の綾人の言葉は鋭く…そして固い

「みんな明久を心配してたんだぞ？」

「……………うん」

心配してた…みんな僕が居ないことを気にしていたのか

なら…僕が一人行動することを知ったらみんなはどんな反応をするんだろう

奏にも話していない…誰にも話して……………いない

「……………で、明久。お前まさか昨日、奏と」

『ぶふうっ！！！！』

綾人は鋭い目つきで爆弾発言をし、僕は盛大に吹き出してしまった。な、なんて気づくのが早いんだ！

「そ、そんな訳ないだろ！？だって僕は奏とは別の部屋で……………」
バタバタと手を振っている奏がこつちを見て首を傾げた

「え……………。昨日……………ふぐ！」奏が爆弾を落としかけたので慌てて口を塞いだ。なんて天然なんだ……………奏は本当におっとりしていて優しいけど凄く天然なんだよなあ……………ん？それはお前もだろって？

……そんなことないさ

奏の耳にギリギリまで近寄り呟く

「奏……！それは言ったら駄目だから！ね？」

「言ったら駄目？なんでです……は……」

奏はわかったかのように顔を真っ赤にして俯いた……相変わらず可愛いなあ……つといかんいかん

「……明久！あれはつい……その……」

「……うん。柔らかかったね」

「ふえ……？」

「……！！！！違う！無し！今の無し！」

「……わ、わかってまひゅ」

「あ、あれ？舌嚙んだよね？……だ、大丈夫奏？」

「大丈夫れす！明久に胸を揉まれたことは知らないですから……！」

「わああああ！！さっきのこと全然わかってない！」

いくら真っ赤になっても無意味だよ奏！やっぱり奏は超天然だよ！というよりさっきの思い切り爆弾発言じゃないか！

「……うるさいぞ明久」

「……え！僕？」

綾人はそう言った後黙々と食べ始めた……よく見れば周りのみんなも騒がしい……誰一人聞こえていなかったのだろうか？

「……でもなんか釈然としないなあ………まあいいか。奏……あゝん」

奏の方へ向き卵焼きを奏へと近づける。奏は頬がまだ赤いけど嬉しそうに口を開けた

につこりと笑いながら奏の口へ卵焼きをひよいっと入れる………

辛し付きの卵焼きをね

「ひゃあああつ！か、辛いですう！」

奏は目を潤ませながら叫んだ。鼻を両手で抑えバタバタと暴れる。これはさっきの爆弾発言へのちよつとした仕返しだ

「あ、明久あ！この卵焼き辛いですう！」

それもそのはずだ…なんせ辛しをたっぷりと付けたんだからね…辛いものに慣れてない奏には少しきついだらう。奏は涙を拭い僕の卵焼きをじつと見つめた

「どうしたの奏？」

「そつちの卵焼きもください…」

奏は強い眼差しでじつと見つめている

ちよつ…！なんで？

まさか…辛しを付けたのがバレたのかな…ということは仕返しができるのか

「ください明久。明久が苦しまずにすむなら私平気ですから！」

奏はそう言つてずいっと寄ってくる…まさか奏…この卵焼きに辛しが付けられていて、僕がそれに困っていたと思つて……

「大丈夫だよ奏！」

「大丈夫じゃないです！明久が泣く姿なんて見たくないです！」

「いや本当に平気だから！」

「何が平気ですか！？こんなにも辛いんですよ？」

う…僕はなんて酷い奴だ…こんなにも優しい彼女に…あんなイタズラを…僕の馬鹿！大馬鹿野郎！！奏が天然なのも魅力の一つだろ！？抜けたことを話す奏は凄く可愛いじゃないか！

そつだよ！昨日だつて覗きについてバレそつだったというのに奏は気づかなくて…あまりにも仕草が可愛いから…つて駄目だ僕！何考

えているんだ！

「とにかくください！」

「駄目ったら駄目！」

奏が皿を取ろうとしてきたのを見てすぐに皿をこっち側へ寄せる。
胸が当たってる？ええい！気にしてられるか！！

「ふん！」

「きゃっ！」

思い切りたぐりよせ辛しを見えないように特盛りにつける

「いただきます！！」

「ああ！？」

バクンと口に入れて味わう…ふむ甘さがちょうどよくダシも効いて
…何よりこの辛さと頭に響くきつさが何ともマッチして…

「ごふああ！」

盛大に倒れた…

この後、雄二達が来る前に食べ終え、急いで部屋に戻った
まあ自習の為の準備をする為だ…

その時奏が凄く甘えたさそうに目で見ていたのでゆっくりと抱きし
めた

案の定奏は真っ赤になりながら口づけを欲してきたので少しばかり
早い休憩を取ったのだった

そして最近、奏は僕と二人きりの時は妙に積極的だと言ったことが理
解できた：

はあ…奏が余計に愛おしくなってきたなあ

第十四問：自習だというのに何だこれ！

「直也君。一緒に勉強できて嬉しいです！」

「気持ちはあるがたいけど…膝に乗るのはやめてくれないか？」

二日目はAクラスとの合同自習だ…先生達は馬鹿やらないか監視をしている人もいれば生徒の質問に答えている人もいた

そんな中、向こうでは上機嫌の明久の妹である美代がこれまた遊戯王の十代に瓜二つの鈴村直也の膝に乗ろうとしている

直也の方は恥ずかしいのか、照れるのか…必死に押しのけている
見てて飽きない光景だな

「鈴村：許「貴様ら…刃物なんか持ってどうした？」鉄人
！」」

あつちではそんな直也を抹殺しようとしていたFFF団が鉄人にアイアンクロウ…!!を決められていた
なんと…!!というか別の意味で見てて飽きないな

そして何より飽きない光景が…向こうで行われていた

「綾人君は私と勉強するの！」

「何言ってるんだい！！綾人君は僕と勉強するんだ！」

「違うわ！綾人様は私と勉強するの！」

「黙りなさい！綾人様はあたしの人よ！」

「…いやお前らの気持ちは嬉しいんだが…俺にはアリスがい」綾人は私のダーリンだよん ていつ」

沢山の女子達が綾人を賭けて争いを起こす…見てて恐ろしいとしか言えないが…まあアリスが豊満なたわわを顔に押し付けた瞬間、みんながorzのポーズをとっていた。つええなアリス…

「千原君！」

突然声が聞こえ勉強する手を止めて振り返ってみるとAクラスの女子の人が数人教科書を持って立っていた

「ん、何？」

「千原君って成績が良いんだよね？」

「ああ…文系は一番得意だぜ」

「あの…よかったら教えてください！」

女子の人達はぺこりと頭を下げる…あんまし気を遣わなくていいのになあ…俺Fクラスだしさ

「ああ勿論俺で良かったら…」

「ありがとうございます！」

人に教えるのは嫌いじゃねえし…里穂も居るんだ。大丈夫だろう

「なんで自習なの？ 授業はやらないのかな？」

ふとAクラスの女子に勉強を教えていた明久がぼつりと呟いた

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

雄二は欠伸をしながら霧島と数学を勉強しているようだ。相変わらず仲が良いなあいつら

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差はないよ」

まあどうせ馬鹿だからどちらも理解できないからだろう。

「……威張って言うことでもないぞ明久」

「この合宿の趣旨は、モチベーションの向上、だ。分かりやすく言うと、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

「へえ…」

明久は納得したように頷いているがその目は違う所を見ていた

『吉井さん！是非教えてください！』

『俺は保健体育がいいです！』

『俺はあなたがいいで…ぎゃあああ』

「明久はもう少し奏のメンタルを強化すべきだよな」

「ああ…全くだ…。自重して欲しいぜ」

「「吉井君格好いいなあ」」

さっきまで教えてもらっていた女子達はうつとりとしているが理由が全くわからないんだが！？

「てか、明久の野郎なんであんなにモテるんだよ」

「……大方吉井奏と彼氏だから憧れの目で見られている」

ああ…なるほど…畜生。俺もアイドルの彼氏なのに…っとそれより教えないと…ってあれ？さっきいた人達がいなくなつて

「吉井夫婦！私達にも教えてください！」

ああ畜生なんか…泣けてきちまうなあ

第十五問：録音機が招いた誤解！

Aクラスの皆さんと勉強をした後、私達はしばらく個人で勉強をしていました

「なあ美代…そろそろ休憩しないか？」

「駄目ですよ…あっここ間違えてます」

「うっ…俺筆記は本当に苦手なんだよなあ…」

「大丈夫ですよ直也君！…私がその手取り足取り…」

「どうかしたか美代？」

「…なんでもないです」

鈴村君つてやつぱり明久に似てますね…鈍感な所とか…優しい所とか

ムニユン…

柔らかい音が響き渡りました…一体何…んっ…

「あ、明久？」

「かなでえー！」

音の原因は明久が凄く悲しい顔をしながら私の胸に抱きついた音でし…んっ…くすぐりたいです

「どうしたですか明久？」

「奏つてやつぱり頭が良い人が好きなの！？」

「え…？」

頭が良い人？憧れてはいますが私は明久以外眼中に無いですよ…

「何言ってるんですか？私は明久以外好きになる訳ないじゃないですか」

ゆっくりと明久の頭を撫でながらぎゅっと抱きしめると明久はうずめてきました…くすっ…可愛い

「だって工藤さんとムツツリー二があ
「愛子ちゃんと康太君ですか？」

明久は顔を離すとまだほんのり赤い顔でこくと頷きました……は
う…可愛いです。なんというか母性本能が…

「二人は何を言ったんです」

「奏が頭が良くて成績が優秀でなおかつイケメンな人が好きだって」

おかしいですね…私そんなこと一度も言ってますのに…明久が泣
くことは地球が滅びてしまいうくらい珍しいのに…お二人は本当に明
久をからかうのが好きですね…軽いくらいなら構いませんがこうい
うことになると本格的に駄目ですね

いくら友人と言っても許せることと許せないことがあります…あつ、
女子の皆さん写真はやめてください！いくら明久が可愛いのがわか
るといっても嫉妬しちゃいますから！

「奏…」

「何ですか？」

「僕ってやっぱり不釣り合いかな」

「…はあ。何を言ってるんですか？明久だから良いんですよ。明久
以外好きになることなんて有り得ないですし、明久はとても素敵で
すよ？」

「………ありがとう奏」

「当然です」

全く…明久に変な誤解をされたらどうしてくれるんですか…

「愛子ちゃん達は何処にいますか？」

「…雄二達の所」

「わかりました…明久ちょっとこっちに来てください…」

「……………ん？…ふえ？」

明久をゆっくりと引き寄せ耳たぶに口づけを落としました…勿論皆さんにはバレないようにです 明久はみるみる真っ赤になっていました……なんて思っていると急に体が引き寄せられ…あっ…

「奏 ……」

「ひゃう…！明久！力が抜け…」

明久に思いきり抱きしめられて私は顔中が真っ赤になりました…はわわ！恥ずかしいのもありますが私…明久に抱きしめられると力が抜けるパターンがあるんです

それは…明久が背中から手を回して自分の方へ引き寄せて…うなじに口づけされた時です…はへ気持ち良すぎて力が…ぬけまじゅう…これは明久と私との愛を確かめあってるというか…はにゅ…どうでもいいか。周りのカップル達も甘い空間を展開してるし…

「明久…大好き」

その後、私は二人にOHANASHIをしました

原因である録音機は壊して二人は残酷な顔をしていましたが仕方ないですよ

第十六問：ピンチには必ず誰かが来る！

自習が終わって解散となった時は夕方だった…ゆっくり背伸びをしながら窓から夕日を眺める

「んつと…今日はかなり勉強できたなあ…」

Aクラスの人達の教え方はとてもわかりやすい…逆に日本史を教え
た僕はちゃんとわかりやすいようにできたのだろうかと思ったりする
自習中憧れというか…なんか熱のような視線をしてくる女子と裏原
にしてとても冷たい視線が突き刺さっていた

誰かはわかってる…だって僕は覗きの主犯になっているのだから…
勿論

『止まりなさい吉井明久！』

彼女達だ…

「何かな中林さん？」

ウエーブのかかった茶髪に強きな表情…Eクラス代表の中林さん…
と美波や姫路さん達は腕を組んで目の前に立ちふさがる

「何かなじゃないわ！あなたがこれ以上馬鹿できないように来たの
よ！」

「アキ…どうして奏の側にいないの？そんなに彼女が嫌いなのか？」
美波の鋭い言葉に一瞬拳を握りしめかけた…駄目だ。我慢しろ僕

「だいたい坂本達と一緒にじゃないのもおかしいわ！」

「…そうですね！いつもべつたりくつついてるじゃないですか」

「姫路さん！言葉がおかしいよ！」

これじゃあまるで僕が雄二達とカップルと言ってるようなもんだよ

！…おえ…考えるだけで気分が悪くなりそうだ

「はあ…僕が一人でいたら悪いの？」

「何よその言い方…まるでいかにも覗きますよって態度じゃない！…じゃあそれでいいよ」

踵を返して逆方向へ進むことにした。結局は部屋にたどり着けるしでも早く帰らないと奏が寂しがってそうだなあ

「ちょっと！何逃げようとしてるの」

「逃げるもなにも僕、中林さん達と争う気なんてないから」

「そう言って覗きの準備をするんでしょ！」

「そうよ！どこまで最低なの！」

周りの女子達もブーブーと言い始めていよいよ頭が痛くなってくる

……奏…これじゃあ部屋に行けないよお…

「用はそれだけ？」

「え…？」

「正直言わせてもらっけどさ本当に君達と話していると頭が痛くなってくるんだよね」

「……！？」

「特に美波と姫路さんにはがっかりしたかな…親友だと思ってたのに」

「え…？」

みんなが呆然とする中、そのままみんなを通り抜けて階段の方向へ向かって行くわけにも行かずかささ美波に腕を握られた

「美波？…っが！」

ギシギシと握られ骨が軋むような音が鳴る…何だこの怪力は！？痛だだだだ！！

「よ…」

「え…?」

「最低だわアキ!!ウチがなんであんたに失望されなきゃいけないのよ?私達はいつも親友でしょ?」

「そうです!私達は明久君を心配しています!だって覗きなんてバシたら停学なんですよ!?」

知らないよ…だって二人は僕を信じてないじゃないか…僕を覗きの主犯としてみてるじゃないか

「だっ!うっ」

力が更に増して腕の骨が今にも折れそうだ…

「アキ!!絶対許さないんだから!」

「そっよ!みんなもやっておしまい!」

女子のみんなは一斉に僕に飛びかかってきた…勿論殴ることができないからやられるしかない

はは…弱いなあ僕って…

「この!この!」

「反省しなさいよ変態!」

「Fクラスの癖に!」

「二度と覗きなんて馬鹿な真似をできないようにしてあげるわ!」

「どうせ昨日あった出来事もあなたの仕業でしょ!」

「痛っ!ぐふ!…まっ!その関節はそっちに曲がらな…ぐぎゃああ
あ!」

くそ！このままじゃ昨日と同じことになってしまつよ！奏に迷惑はかけられないし…どうしたら

「…く」

美波が大きく振りかぶり殴る姿勢に入る…覚悟を決めて目を瞑るとヒュンツと音が響くくるっ！！

『やめないあなた達！！』

突然拳が止まり目をゆっくり開くとみんなは声がしていた方を向いていた

その人物を見た途端…つい笑みがこぼれてしまった

「小山…さん」

第十七問：新しい仲間がCクラス代表！

「小山さん？」

Cクラス代表にして前と違って吊り目でない小山さんは美波達の方へ静かに近づいて行く

その顔は…優しい雰囲気では無く力強い眼差しをした顔だった

「離して島田さん」

「小山さん！？」

ガツと僕の腕を握りつぶそうとしていた美波の手首を掴み小山さんは思い切りはらった

美波は驚いた表情を隠せなく…他のみんなもそうだった

「何のつもり小山さん？」

「…見てわからないのかしら？中林さん」

小山さんはふんつと顔をそっぽ向いた後、手を伸ばしてきた

それはとても温かい雰囲気以前の冷たい小山さんとは全然…全く違った

「立てる？明久君」

立てるかだつて？確かにだいぶやられて体中痛いけど…全然平気さ！

「勿論！」

ガシッと小山さんの手を掴みゆっくりと起き上がった。隣では小山さんがにっこりと笑っている

そうだよ…彼女にはあんな冷たい雰囲気より温かい雰囲気がお似合いだ。だってとても笑顔が似合ってるから

「小山さん？あなた裏切りつもり！？」

「だって…明久君…奏さんをあんなに愛してたんだから」

「…ちよつと照れるな」

小山さんは僕と奏がキスをしているのを目撃してしまったんだ…正直凄く恥ずかしいけど…小山さんは謝ってきた

自分は勘違いをしていた。あんな所を目撃して吉井君が覗きの主犯じゃない…そして学園長に提案したことも聞いてたんだ

「どこに確信があるのよ!？」

「そうよ!あなたが怖くなって勝手に作った話しじゃないの?」

「それとも脅されたんでしょ?」

みんなは信じないように次々と文句を言っていく。信じられないのも当然か…

僕はみんなから見たら完全に奏を嫌ってるように見えるらしいしね

「そう…。やっぱりあなた達は明久君を疑うのね」

小山さんは俯きながらため息まじりに喋る。すると中林さんが強い眼差しでじつとを僕を睨んだ

「当たり前よ!…小山さん。まさかあなたがこの馬鹿の味方になると思ってもみなかつたわ…あなたも敵よ!」

「そう…ならもう話すことはないわね。私は何があっても明久君を守るから…覚悟しなさい」

小山さんは中林さん達を睨みつけてから僕の手を引っ張り女子達がいる道をスイスイと通り抜けた

思わず朱を散らしてしまうほど今の小山さんは綺麗というか凜々しかった

「ごめんなさい明久君」

「…え…？」

「私もつと早くわかっていたら」

確かにそうかもしれない…今、小山さんが加わった所で何も変わらない…もしかしたら余計に酷くなったかもしれないでも後悔なんて全然してないさ

「大丈夫だよ小山さん…必ず小山さんにも迷惑をかけないで犯人を見つけて出すからさ」

にっこりと笑いながら小山さんを見ても小山さんは俯きがちにこくんと頷いた…

わかってる…今回のやり方はとても危険なことくらいだから…今日で見つけ出すしかない！

第十八問：結束！チーム明久…って違う！

「あ、お帰りなさい」

部屋に入るとはっと気づいたように奏が嬉しそうに向かって来る。ベッドには本というか小説があったからさっきまで読んでいたんだろ

「うん。ただいま」

奏がいるとやっぱり落ち着くなあ…こうやって笑顔を向けてくれることにとても喜びを感じてしまっよ

「…？どうかしましたか？」

奏は首を傾げながら尋ねてくる。可愛いっ！と率直に思わずにはいられない表情だ！

「うん……………奏が可愛くてつい見とれちゃったよ」

「ふえ…？」

奏は恥ずかしいのかみるみると頬が紅に染まっていく
かくいう僕もちよっと緊張してる

「…えと…ありがとうございます」

「う、うん」

お互いに見やった後、ゆっくりと抱きしめた。奏は満足そうに目を細めながらにっこり笑った

「……………いよいよだ」

軽く唾を飲み込みじつとドアを眺める…みんなは今頃夕食を食べているはずだ。そしてその次にやることは入浴
昨日のように安心はできない。教師を警戒しておそらくあいつらは強化しているはずだ

それに女子達も教師に協力しているから突破は難しい。下手をすれば綾人達との激突も避けられない

「失敗したら全てが駄目になってしまう……………」

もうすぐやって来る小山さんと根本君、根本君の彼女の稲嶺真穂いなみまほさんとも打ち合わせをする。うーん…他に協力者を増やした方がいいかな？

奏は……………駄目だよね 彼女には今回関わってほしくないし

コンコン

響いた音の方に顔を向けると根本君達が入って来た。相変わらず優しい雰囲気してるなあ

「今で大丈夫か吉井？」

「こんばんは吉井君」

「うん。こんばんは稲嶺さん…奏が寝ちゃってるけど大丈夫だよ」

奏はすうすうと静かに僕を背にして眠っている。みんなはそれを微笑ましく見ていてなんだか照れるなあ…

「今さらなんだけど…本当にいいの？失敗したら君達まで迷惑がかかってしまうんだよ？」

「何を言ってるんだ吉井。よくなかったらここにいないだろ？」

「大丈夫！絶対成功できるわ！」

「ええ…明久君の無実を証明するわ」

「みんな…ありがとう」

みんな…僕の為に…自分から濡れ衣かぶって…ありがとう…絶対みんなには迷惑はかけないから

「で、リーダー…吉井さんはどうするのかしら？」

小山さんは強きの笑みで作戦の内容について喋り始める。リーダー…
つて…そんな立場じゃないんだけどなあ…

「奏は…僕に任せてくれたら大丈夫。問題は…どうやってたどり着くかだよな」

根本君は苦虫を噛んだように広げられた旅館のマップを見ていた

「ああ…確かに昨日はここに教師がいた。なら今日は三ヶ所に別れてるだろうな」

「昨日の教師は西村先生に、大島、布施、高橋先生だったね」「となると…ここは一階だから…出たら鉄人がいるね」

「…一階からは無理そうね。おそらく霧島さんや姫路さんもいるわうーん…一階からは無理か…なら…この道しかないよなあ」

「あのお…ここはどうかな？」

「…ここって…裏口じゃない？」

そう…女子風呂への道は一つじゃない…僕が指を指した場所は西方面から出る場所旅館の裏口だ

けどこの道は危ない。結構周りから見えやすいし、出ると同時に鉄人がいる場所へと出る

だから…下手をして気づかれたら終わりだ

けどメリットはある。それは…いきなり女子風呂前に行けるから守っている生徒と当たりにくいんだ

「どの道突破することになるなら…」

「生徒が少ない方から出た方がまだ大丈夫ね」

犯人達はおそらく仲間を増やして真っ正面から来る…僕らはそれを利用するんだ

「待て吉井」

「何根本君？」

「…坂本達が話しているところ偶然聞いたんだが」

「 そうなんだ」
「 どうするの吉井君？」

そうだった以上は仕方がない…覚悟を決めてやるしかない！

「 みんな…僕についてきてくれる？」

「 当たり前だろ？」

「 「勿論よ」「」

「 ありがとう…みんな」

「 さて…意見もまとまったことだし…」

「 ええ、最後の仲間に連絡しましょう」

僕はみんなの言葉に頷き携帯を取り出しメールを打つ。この作戦…
必ずあいつがいなきゃ難しい
だから…頼むよ

綾人、アリス！

第十九問：災いは突然に…（前書き）

今回は急展開です

明久が可哀相な展開になるかもしれません

第十九問：災いは突然に…

『今日が恐らくラストチャンスだな…』

『だが相手はFクラスの坂本雄二だぞ？どうするんだ』

『…確かにあいつの考えなら…女子はおるか教師達までもが守備についてるだろうな』

『…そうになると…余計厳しいんじゃない？』

『ああ…だが…俺に任せれば全てが上手くいく』

『……どういうことだ？』

『お前達に言っておくか。試験召喚システムは…』

やがて進化するのさ。あんなチビじゃ面白くもないからな』

出川でもなく寺門でもない…最もFクラスでもない…真犯人はニヤリと笑った

そしてこの事件は今後大きく何かが変わることを意味していた

雄二side

俺達は女子達と一緒に持ち場についていた。ムツツリー二によれば奴らはやっぱりAクラスをも味方にしやがった…そうなった以上は守ることは難しくなってくる

ちなみに俺達は1Fで待機している…言わば俺らは切り札的存在だからな

「はあっ…面倒なことになっちまったな」

直也はポリポリとうなじをかきながらため息をつく。だが内心そうは見えない…むしろワクワクしているかのように見えるんだが…

「明久はやっぱりいないか」

「うん…相当叩かれてたからね」

「協力できぬ状態じゃな」

みんなが明久の言葉が出ると落ち込んでいた。あいつはワイルドカードだ…だが今回相当叩かれていくら馬鹿なあいつでも折れちまっている

たくっ…なんか釈然としねえな…

「明兄は…弱い人じゃないです。いくら叩かれても馬鹿にされても必ず立ち上がる…それが明兄ですから」

「ああ…」

そうだ…あの馬鹿は…必ず来る！じゃねえと許さねえ…そうだと奏？

「おしゃべりはいいが集中しろよお前ら？」

「わかつてるさ鉄人」

「大丈夫だつての西っさん」

綾人と一麻はニヤリと笑つと後、素早く戦闘体制に入った…相変わらずだなおい

「鉄人と呼べ馬鹿者！！特に坂本！」

「なにい！？なんで俺が出るんだよ！」

「代表であるお前はどんどんクラスを悪くしてるじゃないか…よつて貴様らには再教育が必要のようだ！」

「ええい！逃げるぞ二人共！」

「当たり前だ！」

「む！逃がさんぞ！」

俺達は女子達が風呂に入るまで鉄人とリアル鬼ごっこを繰り広げた

奏 side

「んん……?」

ゆつくりと体を起こすと目の前には明久がいました…明久はにっこりと笑いながら「おはよう」と言ってきました

「おはようございます…ここは何処ですか?」

「ああ…ここは」

あれ?…なんだろう?…胸が熱くなって…

「ん?奏どうしたの?」

「へ?あ、いえ…」

明久の顔を見たときに頬が蒸気しました…あれ?なんで…

「どうしたの奏?」

「…あ…う」

何…だろうこの気持ち。苦しくてとても胸が痛む…それに明久の顔がまともに見れないです

「うわっ!奏…額が熱いよ?」

「へ?…あ…」

明久が私の額に手を当て驚いた顔になっていました…あ…ああ

「いやー!」

ドンッ

「うわっ！」

明久を突き飛ばし…とっさに体を隠すようにしながら震える
明久は何が起きたかわからないような顔をしています

「　　ないで」

「え…？」

どうしたんだろう？何か大切な何かがなくなっていくような…ああ…
…頭が痛いです。

……そう言えば私さっきこの人から…あれ？私この人をどう呼んでたのでしょうか……うう確か

彼を軽く困ったような瞳で見つめながら口を開きました

「触らないでください…明久君」

「　　え？」

第二十問：拒絶と危機

突然すぎる出来事に啞然とするしかなかった

ポカーンとしてると奏は顔を赤くしながら俯いている…まるで昔のようだ…昔の奏のようだった

…突き飛ばされたことなんかよりずっとずっと…

呼び捨てで呼ばなかったことが胸がえぐり取られたような感じがした

奏 side

明久君はポカーンとしながら私を見つめていました
正直とても恥ずかしくて…顔を逸らしてしまいます

(嫌いじゃないのにどうして?でも好きでもない…)
胸がとても苦しく…明久君に見つめられていると顔がだんだんと赤くなるのがわかります

「あの…奏」

「見つめないで!」

ふいに口を開いた明久君に返した言葉はきつく明久君もびくりとしています

「あつ…ごめんなさい…私とても恥ずかしがりやで…その…あまり見られたくないんです」

「……………そう」
明久君は俯いた後、軽く笑って外へ出て行くこうとしています……………何故でしょう。何故か安心してしまいました
……………そう言えば……………女子の皆さんが明久君は覗きをしてるとか言っていたような

「あ……………あの明久君！」

「……………何かな？」

「何処へ行くつもりですか？」

「……………ああ。ちよつと用事があつてね……………男のロマンかな？」

「やっぱりですか……………明久君は優しくとても信頼していたのに……………」

「明久君……………明久君は覗きをしに行くつもりですか？」

「え……………？」

「駄目ですよ明久君。確かに覗きたいのはわかりますが……………そんなことをしたら信頼をなくしちゃいますよ？」
少し強気で明久君を見つめながら話した後、明久君を見た時……………私は胸を打たれたような気分になりました

「………………………………………ごめん。そうだよね」

「……………！？」

とてもとても悲しい顔をしていました……………泣きそうではなく暗く静かに笑って……………まるで何か大切な何かを失ったような顔でした

（……………え……………）

私はその表情に驚くしかありませんでした……………ただ笑っている明久君の表情に……………」

明久 side

「……………」

ただ…笑うしかなかった…勝手な推測だけど奏は僕との関係をす
っかり無くしている
初めだ…奏から疑われたのは…こんなにも悲しくて苦しくて泣きた
い気分になったのは…

彼女には僕という記憶がほとんどない…
どうしてだ？何故なんだ？奏の身に一体何が起きたんだ？

『触らないで！』

『見つめないで！』

奏の叫び声が頭の中でリピートされる…聞きたくもないし…思い出
したくもない
どうして…どうしてなんだ！なら僕は何のために立ち上がった
んだよ！

「誰か教えてよ！」

叫んだ声は波の音でかき消された…部屋から出た後、何故かまっさ
きにここへ来てしまったんだ
風が…涼しいのに…海は冷たい

「うわあああああああああああ！！」

体中から声を出し海に向かって走って行く。嘘だ！嘘だああ！

「奏　　！！」

愛しかった彼女は…僕の存在を忘れたいかのように遠ざけていた嘘であつてほしかった…夢であつてほしかった…なのに…波は痛い

「嘘だ！嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だああああ！！」

声がかかるくらい叫び…大量の冷たい粒が目から流れ落ちる…

「　　…！！」

いきなり波が上からかぶさるようになり落ち、そのまま荒波に飲み込まれてしまった

（　　） どうしてなんだ！なんでだよ！誰か…誰…か

時同じくして旅館では事件が起こっていた…

「きゃあああ！！」

「ぬあ！！」

秀吉と歌穂は風圧により壁に叩きつけられた…体中はボロボロで息づかいも荒い

「戦死だなっ！！」

ニヤリと笑いながら次々と女子達を倒して行く…そして後ろにいるAからFクラスの男子に合図をした

「…三階は制圧した！！二階へ行くぞ！！」

「オオオオ！！」

秀吉は去って行く男達を睨みつけながら口を開いた

「早く…みんなに知らせねば」
しかし体中から力が抜けるように秀吉はパタリと倒れてしまったの
だった

第二十問：拒絶と危機（後書き）

ということでも二十問でした！いきなりの出来事に困惑する明久…果たして波に飲まれた彼の運命は！？そして奏は…秀吉は…
次回はさらなる危機が…果たして雄二達はとうするのか！？

第二十一問：たとえ馬鹿でもあいつは必ず立ち上がる（前書き）

ま、間に合った！今回はずっと明久のターンです！そして奏が！

第二十一問：たとえ馬鹿でもあいつは必ず立ち上がる

「けほっ！」

…荒波に飲まれたけどなんとか浜辺までたどり着いて少しばかり息を整える

（何やってんだよ僕は…）

つくづく自分が雄二ほどではないが馬鹿だと実感する。とにかく今は落ち込んでる場合じゃないのは事実だ

「おかげで目が覚めたよ。僕がこんなじゃ奏を守ることとはできない」

落ち着いて冷静に考えるんだ…まず、奏は突然おかしくなってしまった…これは認めるしかない

最近、綾人や里穂から精神術を習った…冷静にして、さらに深く考えず…そうすれば頭の回転が早くなる

「…」

ゆっくり目をつぶって…波の音や周りの風の音…自然の音だけを感じる

そしてゆっくりと瞳を開けた時…全てが繋がった

「わかった気がする…真犯人と奏の原因が」

奏はただ忘れたとかじゃない。おそらく誰かが奏に何かをしたんだ…寺門でもなく他の誰かが

「そっか！」

素早く携帯を取り出す（…良かった。濡れてなかったんだ）

受信ボックスにある一通のメールを押す…これはムツツリー二が立ち上げたサイトから送られたメールだ…内容は恥ずかしいから聞かないでほしい

「えっと…確かこれにアクセスすれば…」
画面にはムツツリーニ商会の秘密のパスワードが表示された。よし
ビンゴだ！このパスワードはムツツリーニに工藤さんの秘密を教え
たら教えてもらったものだ
なんというかムツツリーニらしいというか

「…………えっと…」
操作をしながら静かにその辺にあった石に座る。行かなくちゃなら
ないのはわかってるけど今は冷静に対処すべきだ

「あつたあつた」

ムツツリーニが最近掴んだ情報によると真犯人は何かを発明し
ていたらしい

寺門と出川などそいつには沢山の仲間がいる
寺門は特に僕を狙っていて、出川は雄二だった

「…………ん？…………何だこれ！？」
操作していた手が止まってしまった……………まさかこんなことが…
！）

携帯を閉じ素早く石から立ち上がりそのまま旅館へ走り出した…

『吉井！？』

『吉井明久だ！』

旅館へ入り一階を走る…すると周りの女子達が僕に気づき叫び声を
あげた……………
ちよつと酷くない！？

「来たわね吉井……………先生召喚許可を」

「承認します」

「中林さん！？」

一階の廊下を目指す前にEクラス代表が立ちはだかる…それだけじゃない

「私も！」

「吉井覚悟しなさい！」

次から次へと女子達が僕の方へ向かってくる……………

「「試験召喚！」」

次から試験召喚獣が現れる…けど今はそんなことをしてる場合じゃない！

邪魔をするなあ！

「試験召喚！」

吉井明久 Fクラス

日本史 195

相変わらず貧弱な装備だけど点数はまあまあだ…日本史は本音を言わせてもらえば…調子が悪かった

理由は…受ける前に奏に膝枕をしてもらったからだ

正直……幸せすぎて頭が真っ白だった

「何よあの点数!？」

「本当にFクラス？」

驚いている所悪いけど…

「てやああ！」

一瞬にして周りの女子達の首を切り落とす…女子達はポカーンとしているがすぐさま今の状態に気づき叫ぶ

「えい！」

「この！」

「よっ！ほいっ」と

次から放たれる攻撃を避け腕や足を切り落としていく…そして背後から来た召喚獣に木刀を突き刺し投げ飛ばした

相島美幸 Dクラス

日本史 0

中川律 Bクラス

日本史 0

須藤美穂 Eクラス

日本史 0

「隙あり！！！」

「ぐっ！！！」

突然肩を射抜かれ激痛が走った…これは矢か…一体誰が素早く振り返ると走っている横に中川さんがいた

「……くっ…忘れてた」

「逃がさないわ！大林先生召喚許可を取り消してください！竹内先生！召喚許可を！」

「承認します」

ちっ！科目が変わる…！なら腕輪の出番だ！！

「Eクラス代表の中林が吉井明久に現国で勝負！！」

「受けて立つよ！」

「「試獣召喚！」」

吉井明久 Fクラス

現国 101

うつ…あんまし良い結果じゃないなあ…中林さんは代表だけあって
100くらいだ

「覚悟！」

「つと！」

中林さんの召喚獣が放った攻撃を避けて素早く腕をかかげると赤い
腕輪が光った

『(武装!)』

守護の腕輪はフィードバックを何倍もする代わりに点数を消費して
自分が望む武器を召喚する！

吉井明久 Fクラス

現国 1

「僕が望む武器は…双剣!!」

腕輪が赤く輝きポンつと音を立て双剣が武装される…そして召喚獣
を走らせ中林さんの召喚獣にめがけ乱舞を放つ

「これでどうだああ!!」

名付けてその名も『鬼神乱舞撃!!』うん！我ながら良い必殺技だ！

「きゃああ!!」

中林さんの召喚獣は消え去り何処から無く現れた鉄人に捕まった

後ろからは悲鳴が聞こえたが…聞こえないフリをする

『待ちなさい吉井!!』』

後ろからは女子達が迫ってくる

「…くっ。まだ居るのか…」

流石にきつい状況になって来た…このままだとみんなが…奏が危ないのに!!

明久君何処へ行く気ですか？

何しようとしてるのかしらアキ？

「…!？」

ぞわりと悪寒がし恐る恐る前を見ると…

二人の鬼神がアラワレタ

「美波…姫路さん…!？」

「また覗きなんて懲りないわねアキ？」

「ソナニ奏ちゃんが嫌いナンデスカ？」

「ぐっ…」二人は僕を殺そうとしているかごとく「ゴゴ…」と「くぐぐ」の殺気をぶつけている…

「二人とも通して!じゃなきゃみんなが危ないんだ!」

「駄目よ(です)」

即却下!?!少しくらいは信じてくれても…!!

「どうせそんなこと言っただけに覗きに行くんでしょ?」

ぴきっと何か音が響いた…気づいたら拳を握りしめている

「そうです!私だって本当は…!絶対覗かせません!」

「いい加減にしるよ!!」

「ひっ!?!」

前からずつと我慢してたけど限界だ…どうして二人は僕をこんなにも疑うんだ!!

「な、何よ!やる気!?!」

「…明久君!?!」

「うっん…やるのは僕じゃない」

そのままゆつくりと前へと歩き出す。二人は素早く防ぐように掴みかかるが無駄だよ…

「後は頼んだよ…綾人」

「ああ…きつちりOHANAASHIしてやるぞ」

僕がやらなくてもいい…何故なら阿修羅のごとく怒ってる親友がいるから…

本当は僕だってやりたくてたまらないけど…綾人が僕の方までやってくれるだろうから

その後…後ろから叫び声が響いたのは言うまでもないだろう…

全力で走り、今度は邪魔をされずに部屋に到着した。恐らく女子達は綾人が抑えてくれてるんだろう

「明久君!?!」

「ただいま…」

さっきまで泣いていたのか奏の目は赤く…本人はびくりと跳ねた

「あっ!すみません…ちょっと泣いちゃって」

「…どうして?」

「わからないんです。ただ…何故か」
奏は僕の方へ向き静かに歩いてくる…そしてキュツと体操着を掴むように抱きついた

トクンツ

「何故か明久君が…愛おしくて…」

「奏…」

「ごめんなさい…私明久君を拒絶していました…でも、どうしてもわからないんです。本当にごめんな…っ！」

奏を優しく抱きしめ頭を撫でる…奏はさっきと違い抵抗せずただ真っ赤になっていた

そしてゆっくりと唇を奏の唇につけ舌を入れる…奏は甘い声を漏らしながら離さまいと僕の舌に絡める。そしてゆっくりと唇を離して奏を見つめる

「……大丈夫。大丈夫だから」

「………明久…」

「うん…大丈夫だよ奏」

強気だった目はとろんとなり表情も元に戻っていた。僕はとても愛おしく感じ優しく撫でて静かに口づけを落とした

奏の異変の原因は…薬だった

奏の話しによるとある一人の男に自習が終わってから呼び出され飲まさたらしい

症状は…記憶喪失…それも僕に対してのだ…。治すには…深い愛らしい…そんなことならもつと早く実行すれば良かったよ…

犯人についてだけでもまず有り得ない…こんな細かいことができるな

んて…そして同時に、奏にそんなことをした奴を絶対に許さない！

「奏…力を貸してくれるかな？」

遠回りに考えすぎていた…奏を巻き込まないと考えてたのに結局巻き込んでしまった

最初から…最初から…一緒に行動すれば良かったんだ！

奏はにつこり微笑んで手のひらで僕の手を包み込む

「勿論です…だって私達はカップルじゃないですか」

と言った後奏はしばし真っ赤になりながらじっと見つめてきた

「勿論で…勿論だよ。だって私達カップルじゃな…カップルだから」

「奏…？」

「…そろそろ敬語をやめた方がいいかと思って」

奏は恥ずかしそうに指をツンツンしながら呟いた…その仕草に胸がまたトクンと鳴り響く

お…おかしいなあ？何故か…奏の仕草だけで顔が熱い…

「か、奏はありのままが素敵だと思うよ？」

敬語がよそよそしいなんか思っていない…むしろそっちの方が萌える…って何を考えてるんだ僕はああ！

「…そうですね」

につこりと奏は微笑む…その表情にまた胸がトクンと鳴り響く。

「明久…」

「うん…？」

「膝枕させてください…」

「え？」

「膝枕させてください」

「あ…えっと」

「膝枕！させてください！」

「はい…」

朱を散らしながらゆっくり頷くと奏はまた微笑み…静かにベッドに座ってポンポンと膝を叩いた
コクンと頷きゆっくりと奏の膝へ寝そべる

「くす…ありがとうございます明久」

「ふえ？」

だんだんと眠くなってきてこくりこくりと目蓋が閉じていく
久しぶりの膝枕は…柔らかくてとても気持ち良かった

あれ？何か忘れてるような…？

第二十二問：真犯人は黒騎士？

強化合宿二日目の夜：昨日と打って変わり大波乱が起きていた
事の事件は真犯人によるものだった：名は大竹和人：二年Aクラス
にしてクラス一卑劣な男である

「さあ！祭りを始めようかあ！」

大竹はニヤリと笑い腕を掲げる：大竹には支配力があり、仲間達が
次々というほどだが：大竹は人間は利用価値しないと見ている

「させないわ！」

「あんた達に負けるものですか！」

二階を守っていた女子達が大竹達の前に立ちふさがり睨みつける
が：大竹は怯むことなく笑ったままだ

「おいおい：主犯は吉井明久なんだぜ？俺達を攻撃してて大丈夫か
あ？」

挑発的な言葉であるが一部の女子達は動かない：何故なら主犯は明
久だと思っている人が多いからだ
大竹は口の端を上げて素早く叫ぶ

「ば か！嘘に決まってるんだろ！」

「え！？」

「今更遅いんだよ馬鹿共が！！」

大竹は捕まえた教師に無理やり承認させ腕を掲げるとキーワードを
叫ぶ

女子達も慌ててキーワードを叫びお互いの召喚獣が魔法陣から出現
した

大竹の装備はまるでガンダムのように分厚い装甲で覆われて、さら

には赤と黒の悪魔型のマスクを装着している

大竹和人 Aクラス

古典 321

V S

女子達 平均200×8

大竹の方が点数は高いが女子達も負けてはいない。もし大竹に何もなければ勝つことができただろう

「はっ！そんな貧弱で勝つつもりか？」

大竹は余裕の笑みを浮かべゆつくりと指を天へ指す
彼の指には白い指輪が着いていた

「見ろ！これが新しい試験召喚戦争だ！『試獣召喚！』」

大竹が再びキーワードを発すると指輪が眩い光を放ちながらフィールドと操縦者を覆い隠した

「う…何？」

「…え？」

光が消えた時は異変は起こっていた。大竹の頭上には点数が表示され…召喚獣と同じ姿をしていた
すなわち…

「ええ！？召喚獣と一体化した！？」

彼はモンスターとなったのだった…しかし召喚獣と言っても小さくはない…大竹と同じ背丈に大きな武器…つまり召喚獣の力を取り込んだと言える

「はっ！驚いたか！？これが新しい試験召喚戦争だ！」
剣をゆつくりと持ち上げ大竹は仮面の中で笑っていた
女子のみんなはそれに驚きを隠せず動けない者までいた

「余所見してていいのか？」
「え」

気づくと大竹は彼女達の後ろにいて、剣をかついだ…何が起きたんだというかのように女子達はキョロキョロと辺りを見回し、大竹の方へ振り向いた

「ふざけてるの？」

女子の一人の召喚獣が銃を構えるが大竹はそのまま歩き出す

「おし！二階も制圧完了っつと」

その言葉の意味を現したのはすぐだ

「きゃあああ！」

「うあ！」

次々と女子達が倒れていく…そして召喚獣達の頭上には0と表示されている

「はは！悪いな。実はこの戦争さ…本当に人を切れるんだよね。まあ見逃してフィードバック程度にしてるけどな」

大竹はニヤリと笑うと寺門と出川に合図をした後、一階に向かって走り出した

今の戦争は遊びじゃないんだよ

大竹が倒れた女子達に吐き捨てた台詞であった

雄二 side

「…何っ？二階の連中までやられただど？」

ムツリーニの情報によれば奴らはここへ向かって来ている…二階、二階の陣営は破壊され壊滅状態らしい…まさか秀吉達もか！？」

「まさか…あいつらは何か隠してるのか」

「どういうことだ直也」

「ああ…どうもおかしいんだよ。俺のクラスでは有名だが出川と寺門って奴がいるんだ」

「…寺門は変態ストーカーだったか」

「だがあいつらには得意なことがある…寺門は女子を引きつける魅力、出川は力…」

「つまりあいつらに何か策があるということか？」

「確かにあの正確なら酷いことが思いつくだろうな…出川なんかは昔『夜の番人』と言われてたしな」

「…いや…違うんだ」

直也はそれを否定しそのまま続ける

「あいつらには支配力がないんだ。つまり代表のような力が…」

「あっ！ということは第三者がいるってことですか？」

「たぶんな。ん……………待てよ…そうか！」

「いきなりどうした!？」

「わかったんだよ。真犯人は出川でも寺門でもない…支配力を持った奴…」

直也はゆっくりと廊下の方へ視線を向ける。俺達もそれにつられて廊下の方を見ると

…なるほどな。そういうことが

「よう!馬鹿なFクラス!」

第三者: 天才的な知能とは裏に人を駒のように操るカス…がいた

「やっぱりお前かよ。大竹和人!!」

「え!?!和人君が」

「嘘!?!」

直也はギリツと睨み付け木下や工藤達は驚いていた。無理もない…ずっと騙されてたんだからな

「よう直也!まだAクラスに居たのか!てっきりお前のことだから覗きをしたと思っただがな」

「貴様…」

「我らにエデンの道を!!!!」

ちつ…AからFまでズラリといやがって…これは派手なラストになりそうだな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1719u/>

バカと恋愛と召喚獣

2011年12月16日23時55分発行